(4)　佐内屋敷遺跡

目　　次

Ⅰ．遺跡の位置と環境……293
Ⅱ．調査の方法と経過……298
Ⅲ．発見された遺構と出土土器……301
　１．竪穴住居跡と出土土器……301
　２．土壙 ……419
　３．埋甕を伴う遺構 ……423
　４．鍛冶遺構 ……425
　５．溝と出土土器 ……425
Ⅳ．調査南区の堆積層と縄文土器……426
　１．堆積層の状況 ……426
　２．縄文土器の特徴と分類……428
　３．縄文土器の編年的位置……439
Ⅴ．その他の出土遺物……440
　　弥生土器 ……440
　　土　　錘 ……441
　　木　　器 ……442
　　石　　器 ……442
　　砥　　石 ……448
　　鉄 製 品 ……451
Ⅵ．出土土器の検討……456
　１．出土土器の特徴と分類……456
　２．出土土器の共伴関係と組み合わせ……465
　３．出土土器の年代と問題点……471
Ⅶ．遺構の検討……491
Ⅷ．まとめ……495

調 査 要 項

遺跡所在地: 宮城県栗原郡築館町萩沢字佐内屋敷
遺 跡 記 号 : ＢＨ（宮城県遺跡地名表登載番号：41037）
調 査 期 間 : 昭和 52 年５月６日～昭和 52 年９月 24 日
調 査 面 積 : 16,500 ㎡
発 掘 面 積 : 16,500 ㎡
調査担当者: 宮城県教育庁文化財保護課
後藤勝彦、高橋多吉、後藤彪、小井川和夫、高橋守克、斉藤吉弘、佐藤好一、遊佐五郎、千葉宗久、一条孝夫、阿部恵、真山悟、阿部博志、手塚均、中島直
調査協力機関 : 築館町教育委員会
調査協力員: 金野正（宮城県築館女子高等学校教諭）
鈴木惣之助（多賀城市立多賀城小学校教諭）
土岐山　武（仙台市立北六番丁小学校教諭）
森　貢喜　（河南町立前谷地小学校教諭）
小野寺祥一郎（石巻市立蛇田小学校教諭）

（調査担当者、職員名及び調査協力者の所属は調査当時のものである）

Ⅰ．遺跡の位置と環境

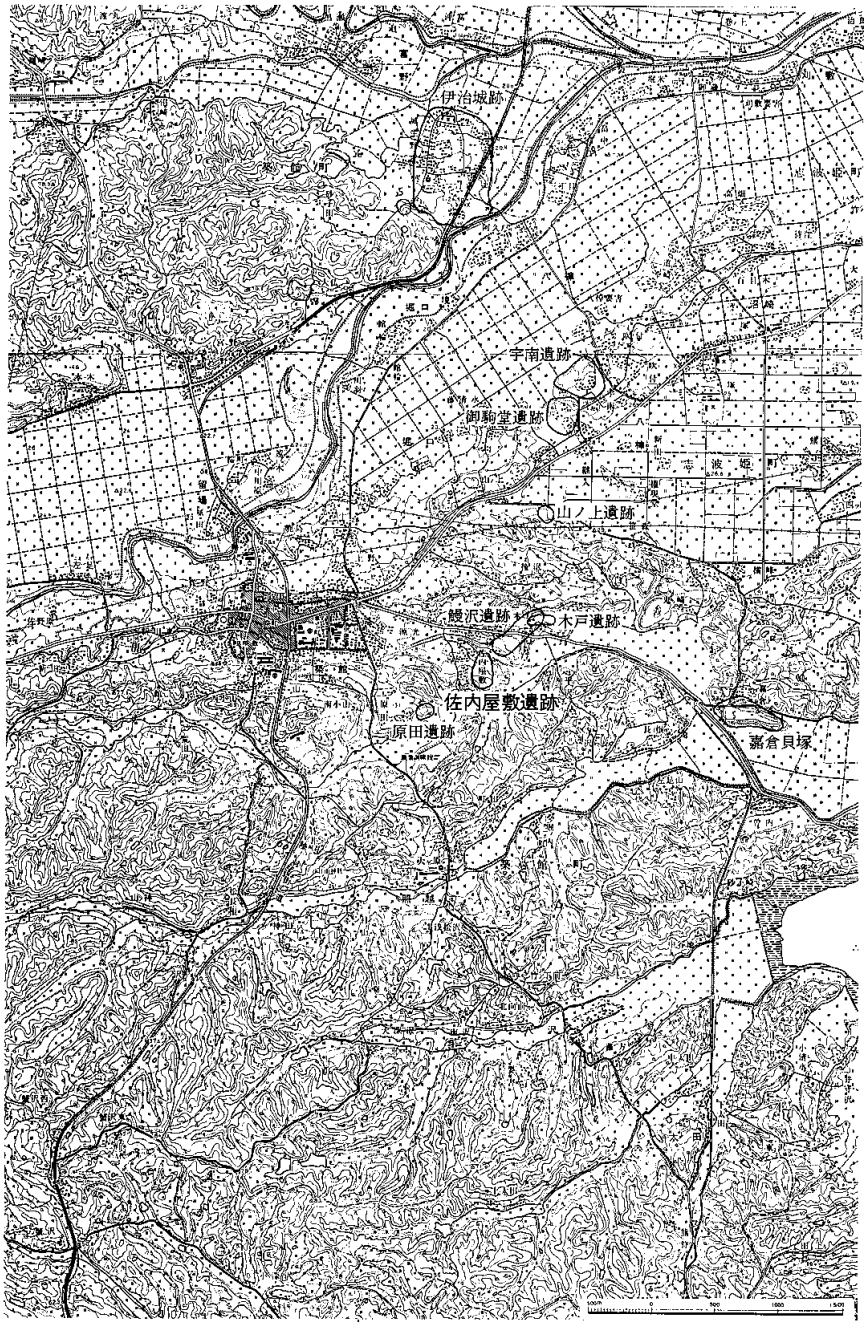
佐内屋敷遺跡は栗原郡築館町萩沢字佐内屋敷に所在する。遺跡が所在する築館町は宮城県の北東部にあり、大きくみて南側一帯は丘陵地、北側は沖積地からなり、南北に長い区画を示すが、北側一帯は南に比して東西に広くなっている。南の丘陵地は奥羽山脈から東へ延びる築館丘陵の一部であり、北の沖積地は奥羽山脈に源を発し、東流する迫川の支流である一迫川および二迫川によって形成された沖積地である。また、南東部には伊豆沼等の湖沼地帯が広がっている。

さらに、南側の丘陵地帯は東側の湖沼地帯に向かって次第に高度を減じながら樹枝状に延び、各丘陵間には小河川が流れ、付近は開析された沢状になっている。遺跡はこの樹枝状に延びた丘陵の中で北側の沖積地に一番近い丘陵上に位置している。この丘陵の北側は緩やかに傾斜し、沖積地と接するが、南側では急峻な斜面で張り出し沢状の低地と接する。南側の沢状の低地には伊豆沼に注ぐ萩沢川が東流している。

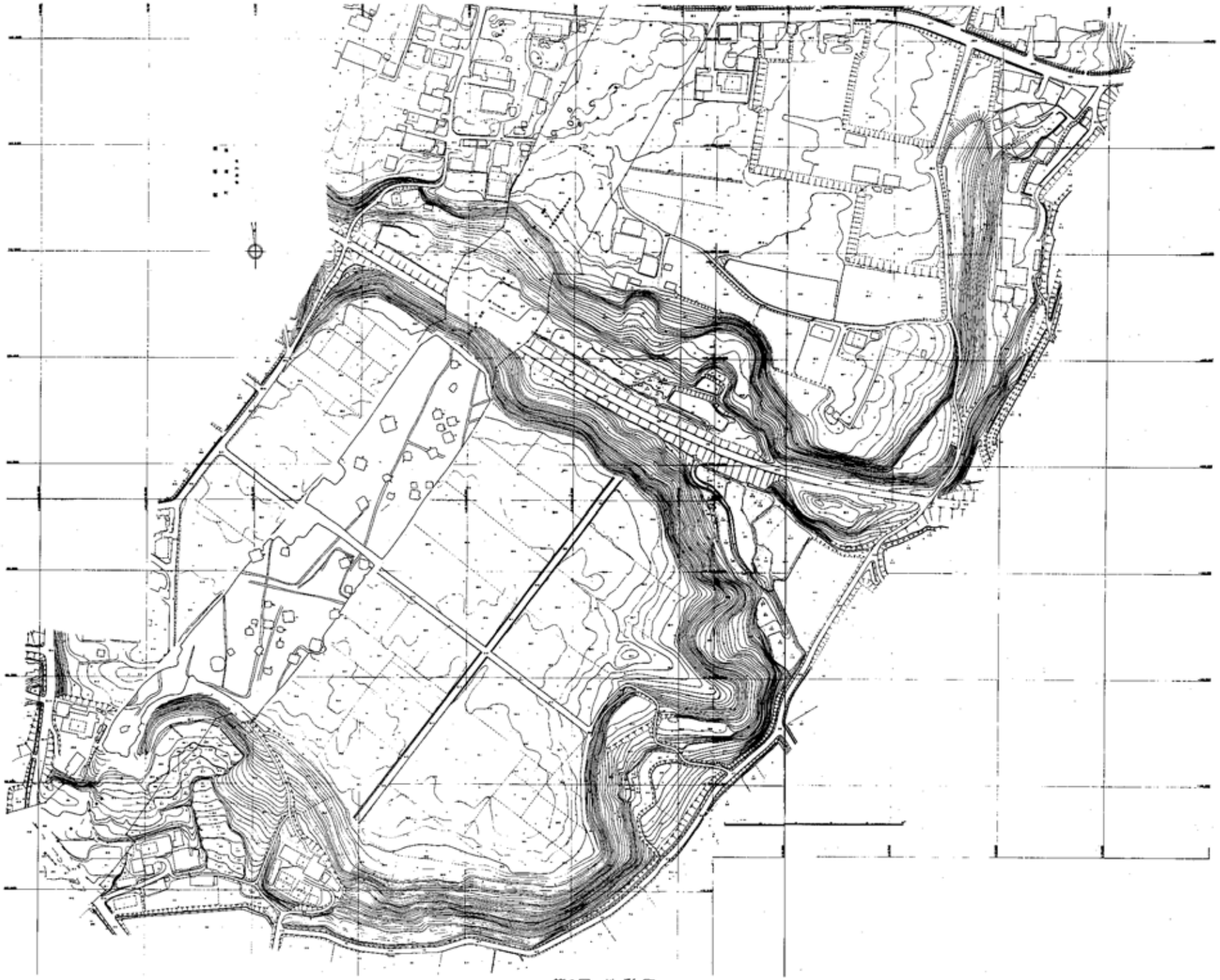
遺跡はこの丘陵の頂部、標高約 31mの所に立地している。頂部はほぼ平坦であるが、やや南側に向かって緩やかに傾斜している。また、北東部には狭い沢が入り込み、周辺の丘陵と分断され、独立した丘陵のような様相を呈している。周辺の低地との比高差は約 22mである。遺跡の範囲についてみると西側は現在、宅地化が進み、平坦地の西への延びは明確でない。しかし、北から南側は急斜面で周辺の丘陵、または低地と区切られており、東西約 300m、南北 300mの範囲の平坦地が遺跡と考えられる。東北自動車道路線は遺跡が立地している丘陵の東端に近い所を南西から北東に走っている。

周囲には多くの遺跡が立地している。その大半は本遺跡と同様、丘陵上、斜面または台地上に立地している。その中で本遺跡とほぼ同様な年代と考えられるもので発掘調査がなされ、その内容がある程度明らかな遺跡についてみていきたい。後述するが、本遺跡の調査南区斜面の堆積土中から縄文時代中期大木 8a 式期の土器と縄文時代の住居跡２軒（時期は不明）が発見されている。同時期の縄文土器がまとまって出土している遺跡は周辺で現在あまり知られていない。その中で原田遺跡において本遺跡出土の大木 8a 式期土器の文様に近似する縄文土器がわずかにみられるにすぎない（阿部：1980）。しかし、他の時期についてみると本遺跡から西へ約 1.5 ㎞の所に位置する嘉倉貝塚では大木 7a 式の土器が出土されている（佐藤：1973）。また、北東へ 0.7 ㎞の所にある鰻沢遺跡からは竪穴住居跡が検出され、その内１軒は縄文時代中期後葉大木 10 式期の住居跡であることが確認された（宮教委：1975）。さらに、本遺跡と近接した丘陵上に立地する木戸遺跡では縄文時代中期中葉大木 8b 式期の住居跡１軒が検出されている（森：1980）。

このように、縄文時代でも他の時期の土器は比較的多く知られており、しかも、立地条件を



第１図　遺跡の位置と主な周辺の遺跡(築館・金成　1/25,000)



第2図　地形図

みると湖沼地帯周辺に形成された貝塚と丘陵上に立地する遺跡とがあり、本遺跡は後者の方に入るものと考えられる。さらに、付近の調査が進めば大木 8a 式期周辺の遺跡の様相も明らかになるだろう。次に、本遺跡の主体を占める奈良・平安時代の遺跡についてみる。奈良時代の遺跡の中で調査が実施され、内容が明らかな周辺の遺跡として御駒堂遺跡、山ノ上遺跡の集落遺跡と古代城柵のひとつである伊治城跡がある。御駒堂遺跡では竪穴住居跡 41 軒が検出され、その中で奈良時代に属する住居跡は 28 軒確認され、出土土器の特徴から年代的に４段階にわけられており、第１・２段階の住居跡内からは関東地方の真間式土器に酷似した土器が出土しており、関東地方との強い関連性が考えられている（小井川・小川：1982）。また、山ノ上遺跡（手塚：1980）からは竪穴住居跡３軒が検出され、その内２軒の住居からは先述した御駒堂遺跡の第２段階における真間式土器に近似した土器が出土しており、同様なことが考えられている。このように両遺跡、特に御駒堂遺跡の第１・２段階（７世紀末、８世紀初頭から前半）では関東地方と何らかの形で関係があったものと推定される。しかし、本遺跡の出土土器には真間式土器に近似した土器は全くなく様相を異にしている。つまり、奈良時代、少なくとも前半頃まで本遺跡周辺では異なった構成員が形成した集落がほぼ同時に存在していたことが想定され、複雑な様相を呈していたと理解される。そして、神護景雲元（767）年には伊治城が設置され、この地域にも次第に政治的影響が及んでいき、次の平安時代に移行していったものと推定される。

平安時代の遺跡は奈良時代と同様多くみられる。その中で、調査がなされている主な遺跡は先述した御駒堂遺跡、宇南遺跡等がある。御駒堂遺跡では４軒の竪穴住居跡が発見されている。

また、宇南遺跡では計８軒の竪穴住居跡が発見されている（斉藤:1979、遊佐:1980）。特に御駒堂遺跡と宇南遺跡の中で圃場整備事業に伴う調査時の５軒の住居跡は平安時代でも古い段階のものである。後述するが本遺跡の住居跡の中で両遺跡の段階と同様な年代のものはなく、平安時代の集落遺跡でもその存続期間に差があったものと考えられる。

以上、本遺跡と関係する時代の遺跡についてみてきた。まとめてみると、縄文時代、特に大木 8a 式期の様相は周辺では不明な点が多い。奈良時代、平安時代では関連する遺跡は多く存在するが、本格的な調査が実施されたものはそう多くはない。奈良時代、特に前半頃までは関東地方との関連が考えられる集落遺跡とそうでない遺跡が存在するようである。しかも８世紀後半頃には国家的機構として伊治城が設置され政治的影響がさらに強化していったものと考えられる。平安時代の集落遺跡でもこういった影響力が基盤にあったと思われるが、平安時代全般に亘り営まれた遺跡は現在わかっていない。大半はその存続期間は極めて限定されるため、全体の集落変遷は明確でない。

Ⅱ．調査方法と経過

佐内屋敷遺跡は前章で述べたように西から東側に張り出す丘陵の平坦地に立地している。この丘陵は南、北側が沢によって区切られるため部分的には独立丘陵のような地形を示している。東北自動車道の路線はこの丘陵の東端に近い所を緩やかにカーブしながら南北に縦走する。調査対象は東西に約 55m、南北は両側の沢までの約 300mで総面積は約 16,500 ㎡になる。

対象地区内の微地形はほぼ平坦であるが、南東方向に向かってやや緩やかに傾斜している。そして、路線敷を含めた広い範囲の平坦地は大半が現状では畑地として利用されている。また対象地のほぼ中央部には調査区を二分するかのように生活道路が横断している。

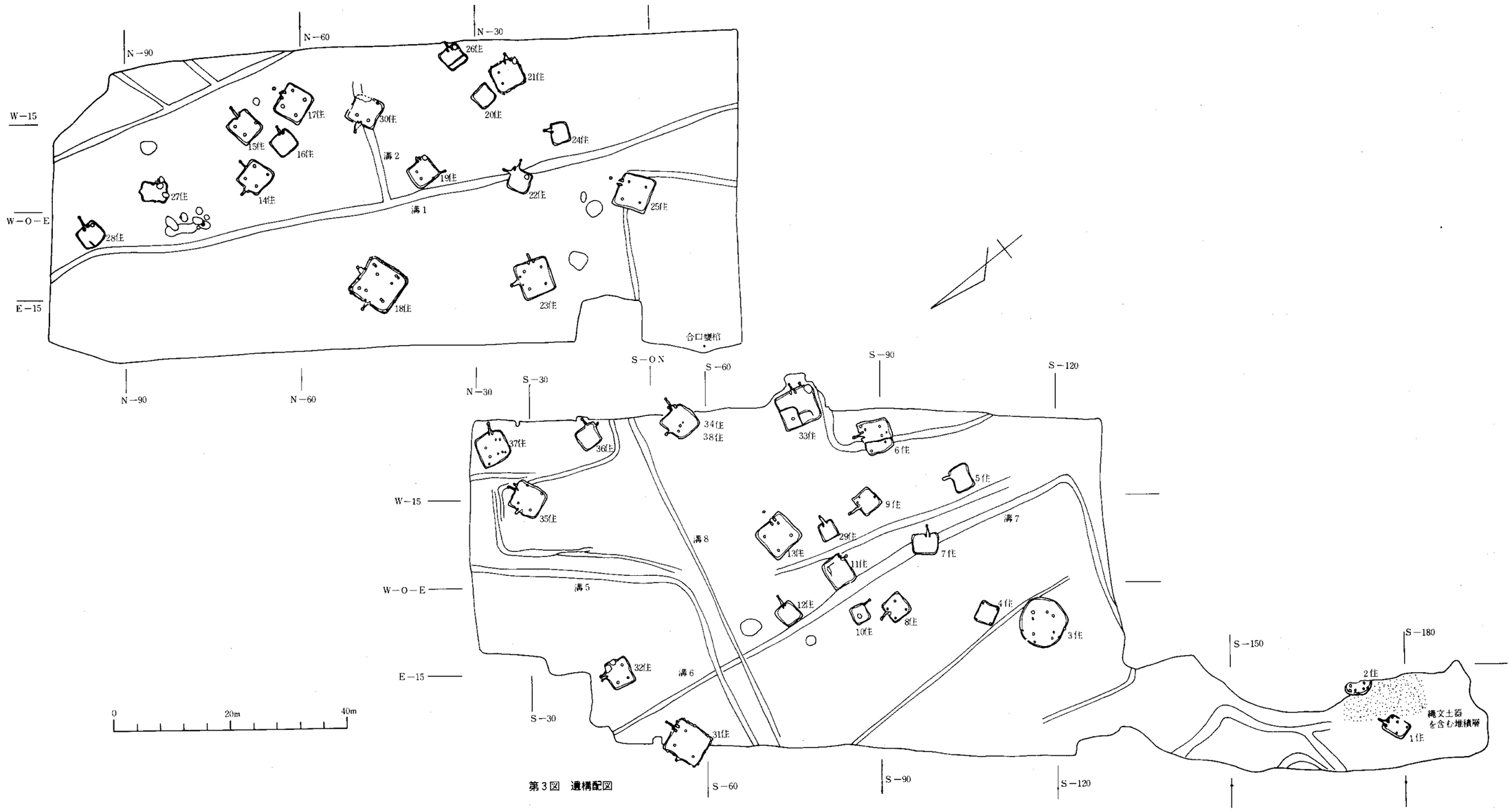
調査区の設定は東北自動車道の中心杭ＳＴＡ478＋20 とＳＴＡ478＋60 を選び､両者を結ぶ線を基準線とした。さらに、ＳＴＡ478＋60 を原点とし、これに直交する３ｍ単位の方眼を調査区全域に亘るように組んだ。グリッド名は南北方向をアルファベット、東西方向をアラビア数字で表示した。そして、先述した調査区中央部を東西に横断する生活道路を境に調査区を南北に大きく分けて調査を進めた。

最初に遺跡の微地形、層の状況、遺構の有無等を把握する目的で複数のグリッドからなるトレンチを調査区全域を網羅するように南北、東西方向に設定した。

その結果、表土から約 20㎝ 前後で地山に達し、住居跡等の遺構が調査区全域に分布していることが判明したため、最終的には全域の表土を除去した。

調査は昭和 52 年５月６日から始められた。調査北区から表土の除去を開始し、終了と同時に確認された住居跡等の遺構の精査が実施された。検出された遺構は住居跡 38 軒、その他の遺構として土壙、埋甕遺構、溝、鍛冶遺構がある。また、調査区の南端の傾斜地には縄文土器を含む堆積層が確認された。縄文土器は主にⅡ・Ⅲ層から出土している。この層は堆積の状況から一時的なものであり、何らかの営力によって形成され、プライマリーな層とは考えられないという結論に達した。各遺構の最終確認面は地山面であり、現状が畑地であるためか大半の遺構の保存状況は良好である。住居跡等の精査、及び一切の記録が終了したのは９月 24 日である。なお、７月 30 日には地元の方々を対象とした現地説明会を開催した。発掘調査面積は対象面積と同様、約 16,500 ㎡に及んだ。

発掘調査時の遺構等の実測図は平面図、断面図とも遣り方測量による 1/20 図である。また、遺跡周辺の地形図は航空測量による 1/400 図を作成した。


N−90
N−60
N−30
W−15
W−O−E
E−15
26住
21住
20住
17住
30住
15住
16住
24住
溝2
19住
22住
27住
14住
溝1
25住
28住
18住
23住
合口甕棺
S−ON
S−60
S−90
S−120
S−30
37住
36住
34住
38住
33住
6住
5住
9住
35住
溝8
29住
13住
溝7
7住
11住
溝5
12住
10住
8住
4住
3住
S−150
S−180
2住
縄文土器
を含む堆積層
1住
32住
溝6
31住
0
20m
40m

第3図　遺構配図

Ⅲ．発見された遺構と出土土器

発見された遺構には竪穴住居跡 38 軒、土壙 13 基、埋甕を伴う遺構、鍛冶遺構が各１基、溝がある。これら遺構の大半の確認面は地山である。今回の調査で出土した土器の中で主体を占める土師器、須恵器等の大半は竪穴住居跡から出土している。以下、各遺構毎に説明していく。

１．竪穴住居跡と出土土器

第１号住居跡

〔残存･規模･平面形〕　東壁の一部は残存しないが､4.0×３mの隅丸の長方形を呈する。

〔壁〕　地山を壁としている。住居は西側から東側に向かう急傾斜地に構築されているため、残存する壁高は西壁で高く、約 60㎝ あり、東壁にいくにしたがって低くなり約５～10㎝ 前後になる。

〔床面〕　住居東側に一部掘り方がみられ、その埋土上面を床としている。その他の部分は地山をそのまま床としている。面はほぼ平坦である。そして、床面上には約５㎝ の厚さで生活層がある。また、住居はほぼ中央部の床面上には炭化材・焼石がみられる。さらに床面上に３個のピットがあるが、柱穴とは考えられない。周溝も認められない。

〔カマド〕　住居北壁の西寄りの所に付設されている。残存する燃焼部側壁は粘土を積み上げて造られている。底面はほぼ平坦で側壁内面と伴に火熱を受け赤変している。煙道部との境には切石が置かれている。煙道部は地山を掘り込んで造られ、先端部は浅いピット状になっている。

〔堆積土〕　４層認められる。Ⅰ層は一部のみで、第Ⅱ層は住居ほぼ全域に堆積している。第Ⅲ層は床面上に堆積している。第Ⅳ層は壁沿いに堆積している。自然流入土である。

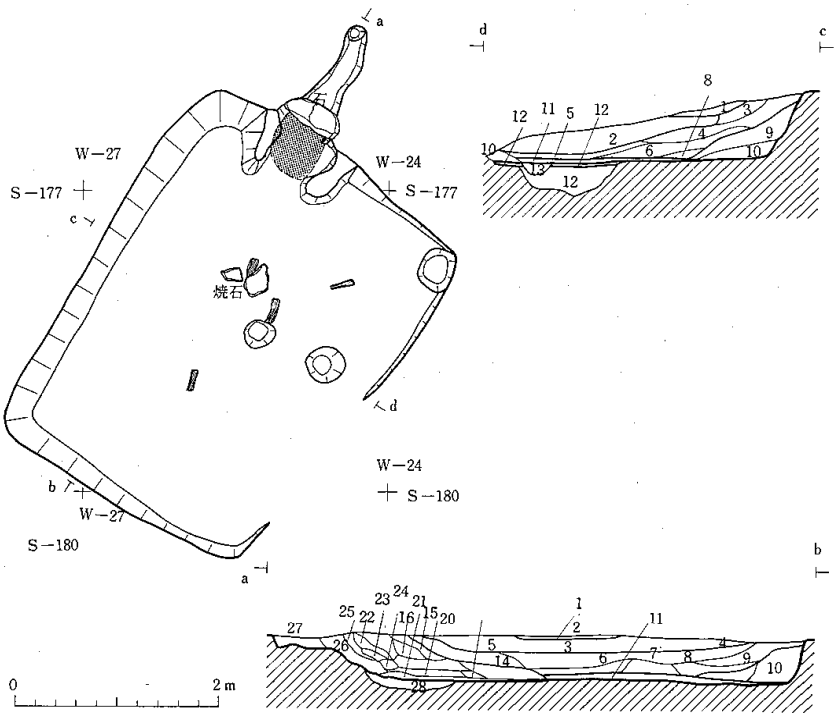
〔出土土器〕　図示できるものはない。全て破片で量も少ない。床面（生活層中）から土師器坏の破片（ロクロ使用、内面ヘラミガキ・黒色処理）が出土している。また、カマド内からは土師器甕の破片が出土しているにすぎない。

その他、堆積土中から土師器坏・土師器甕・須恵器甕の破片が出土している。

第２号住居跡

〔確認・残存・規模・平面形〕　遺物包含層第Ⅲ層を掘り込んでつくられている。東側半分位は削平のため残存しない。南、北壁を結んだ長さから径 4.8mの円形を呈するものと推定される。

〔壁〕　地山を壁としている。残存壁高は西側から東側に向かう急傾斜地に住居が存するため西壁は約 90㎝ と高く次第に低くなり最低 10㎝ 前後の壁となっている。床面からの立ち上がりは



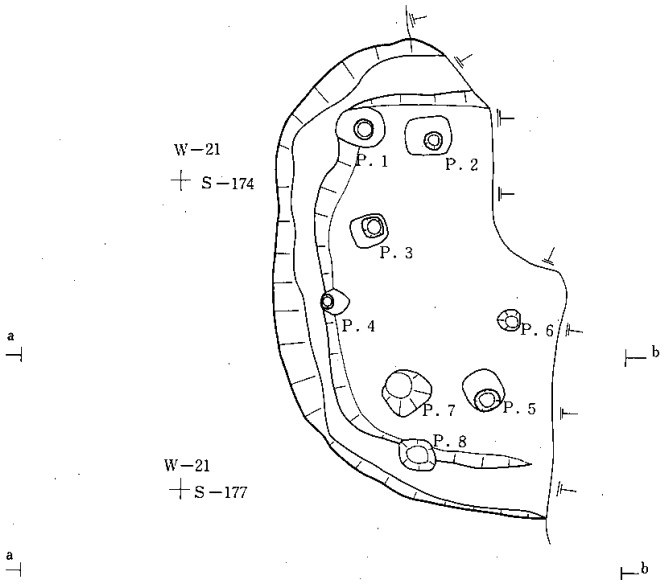
層位	層No.	土色	土性	備考	遺物取り上げ層位
Ⅰ	1	暗褐色（7.5YR 3/4）	シルト		1層
Ⅱ	2	灰白色（7.5YR 8/2）	火山灰		2層
Ⅲ	3	暗褐色（7.5YR 3/3）	シルト	灰白火山灰含む	3層
	4	褐色（7.5YR 4/3）	シルト		〃
	5	暗褐色（7.5YR 3/3）	シルト	火山灰少し含む	〃
	6	極暗褐色（7.5YR 2/3）	シルト		4層
	7	褐色（7.5YR 4/4）	シルト	地山多く含む	〃
	8	極暗褐色（7.5YR 2/3）	砂		〃
Ⅳ	9	暗褐色（7.5YR 3/4）	シルト	炭化物含む	5層
	10	褐色（7.5YR 4/4）	シルト	地山多く含む	6層
生活層	11	極暗褐色（7.5YR 2/3）	シルト	炭化物含む	7層
掘り方	12	極暗赤褐色（5YR 2/3）	シルト	明褐色土ブロック多く含む	
Pit	13	暗褐色（7.5YR 3/4）	シルト	地山粒子含む	
カマド内	14	極暗褐色（7.5YR 2/3）	シルト		
	15	褐色（7.5YR 4/6）	シルト		
	16	褐色（7.5YR 4/4）	シルト		
	17	にぶい褐色（7.5YR 5/3）	シルト		
	18	暗赤褐色（2.5YR 3/3）	シルト		
	19	極暗赤褐色（2.5YR 2/3）	シルト		
	20	極暗褐色（2.5YR 2/2）	シルト		
	21	赤褐色（5YR 4/6）	シルト	木炭含む	
	22	赤褐色（5YR 4/6）	シルト	木炭含む	
	23	赤褐色（2.5YR 4/4）	シルト	焼土	
	24	赤褐色（2.5YR 4/6）	シルト		
	25	褐色（7.5YR 3/4）	シルト		
	26	赤褐色（5YR 4/6）	シルト	焼土含む	
	27	暗赤褐色（5YR 3/4	シルト		
カマド掘り方	28	赤褐色（5YR 4/6	シルト	焼土、木炭含む	

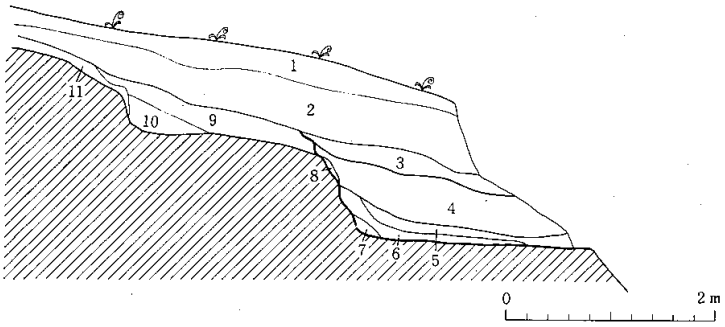
第4図　第1号住居跡

途中約 10cm の段が形成されているが緩やかである。
〔床面〕　地山をそのまま床としている。残存する床面の面はほぼ平坦である。床面上から８個のピットが検出されたが、そのピットが柱穴になるか不明である。また、炉、周溝などの施設の痕跡は床面上では認められない。
〔堆積土〕　残存する堆積土は２層認められる。第Ⅰ・Ⅱ層とも残存する全域に堆積している。自然流入土である。
〔出土土器〕　堆積土中から縄文土器が出土しているが、全て破片である。量も少なく平箱半分弱である。大半は胴部破片で地文の縄文のみが施文されている。その中で文様が比較的明確なものは第６図の土器である。１、２、５は深鉢形土器の口縁部資料である。１、２とも口唇部に縦位の連続した押圧縄文（ＬＲ）が施文されている。１の口縁部は外反し、口縁端部に粘土紐を波状に貼付し、その上に連続した細い刻目が施文されている。２、５の口縁部は外傾するもので、５の口縁端部には横位の押圧縄文（ＬＲ）が施文されている。４は浅鉢形土器の口縁部資料である。口縁部は外傾する。４の口唇部には隆線による突起があり隆線によって区画された中には縦位の連続した押圧縄文（撚りは不明）が施文されている。８の口唇部には横位に粘土紐が貼付され、さらに連続する押圧文が施文されている。胴部は地文の縄文（ＬＲ）のみが施文される。３、６、７は胴部資料である。６、７は地分の縄文（ＬＲ）に沈線分が直線的、曲線的に施文される。３は粘土紐を貼付しその上に押圧縄文が施文されるものである。
　以上、これらの縄文土器は全て破片で、全体の器形的特徴、文様構成等、正確に判らないが文様表現法の特徴により、縄文時代中期中葉大木 8a 式期の土器と考えられる。特に１～４の土器の連続する押圧縄文は大木 8a 式でも古い段階のものと考えられる。しかし、これらの土器は全て堆積土中出土のものであり、しかも遺物包含層中の土器の流入も考えられ、住居に伴うものか否か判断するには困難を要する。

第３号住居跡

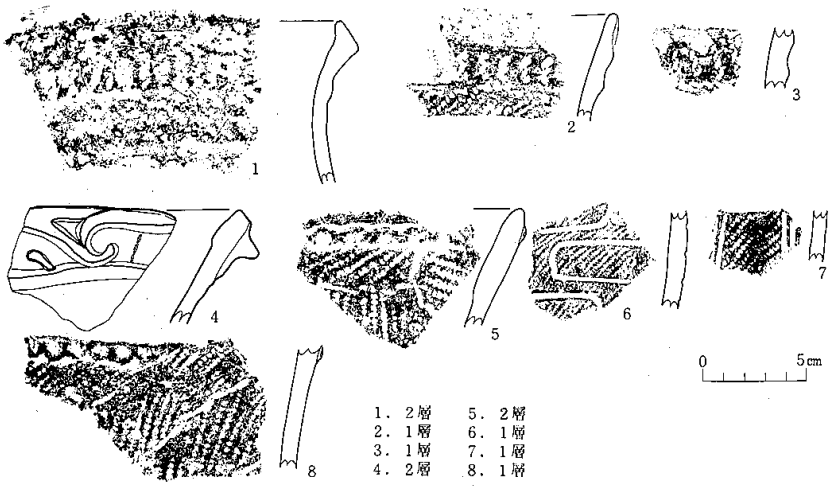
〔重複・平面形・規模〕　住居東側で焼土遺構と重複している。この焼土遺構は住居の堆積土を掘り込んでおり住居の方が古い。平面形は略円形を呈する。規模は東西 8.7m、南北 8.2m である。
〔壁〕　地山を壁としている。残存壁高は約 15～20cm である。床面からの立ち上がりはやや急である。
〔床面〕　地山をそのまま床としている。面は中央部にいくにしたがって次第に低くなっている。床面上では炉の痕跡は認められない。また、炭化材が住居東から南側にかけての床面上に中央部に向かうよう(放射状)に散在している。
〔柱穴〕　床面上から 22 個のピットが検出された。その内、Ｐ１・２・４・６・11・17・19 が





層　位	層 No.	土　色	土　性	備　考	遺物取り上げ層位
包含層 I 層	1	褐色（10YR 4/4）	砂質シルト		
	2	暗褐色（7.5YR 3/3）	シルト		
包含層 II 層	3	黒褐色（10YR 3/2）	〃		
I	4	黒褐色（7.7YR 3/2）	〃		1 層
II	5	黒褐色（10YR 3/2）	〃		2 層
	6	黒褐色（10YR 3/2）	砂質シルト		〃
	7	暗褐色（7.5YR 3/3）	〃	地山含む	〃
	8	褐色（10YR 4/4）	〃		〃
包含層 III 層	9	暗褐色（10YR 3/3）	〃		
	10	極暗褐色（7.5YR 2/3）	シルト		
	11	暗褐色（10YR 3/4）	砂質シルト		

第5図　第2号住居跡



第６図　第２号住居跡出土土器

主柱穴と考えられる。これらのピットは大きさ、床面からの深さはほぼ一定であり、特にＰ17 以外、掘り方と柱痕跡の区別があり、さらにＰ２・４・11 には柱痕の一部が残存している。

〔周溝〕　住居北から東にかけての壁沿いに一部であるが巡る。幅は約 10cm、床面からの深さは約３～５cm である。

〔堆積土〕　４層認められる。第Ⅰ層は住居中央部に、第Ⅱ・Ⅳ層は住居全域に、第Ⅲ層は壁沿いに各々堆積している。自然流入土である。

〔出土土器〕　堆積土中から縄文土器が出土している。量は少なく全て破片である。しかも大半は、地文の縄文のみ施文されているものである。その中で、文様がわずかにみられる土器片が第８図である。１は口縁部資料である。口縁部は内弯する。口唇部には粘土紐が貼付されている。２・３は胴部破片である。２は円形の刺突文が施文されている。３は隆線が施文されている。以上の土器片の中で、文様表現技法から１は縄文時代中期中葉大木 8a 式、２・３は中期後葉大木 10 式期のものと考えられる。

第４号住居跡

〔残存・規模・平面形〕　住居東・南壁には攪乱のため一部残存しない部分がある。3.5×3.0ｍの隅の丸い方形を呈する。

〔壁〕　地山を壁としている。残存する壁高は 17～22cm である。床面からの立ち上がりは緩やかである。

〔床面〕　ほぼ全域に掘り方がみられ、その埋土上面を床としている。面は平坦である。中央

部は固くしまっているが、周縁部にいくにしたがって幾分軟質になってくる。中央部付近には1.3m×0.9mの範囲に焼面がみられる。また、生活層が厚さ約３cmでみられる。床面上では周溝、カマドは検出されなかった。

〔柱穴〕　床面上で９個のピットが検出された。その内、P1～P4の４個のピットが柱穴と考えられる。各柱穴は住居各隅の近くに位置し、結んだ線は四角形を呈し住居平面形に相似する。

〔堆積土〕　２層認められる。第Ⅰ層は住居全域に、第Ⅱ層は壁沿いに堆積している。自然流入土である。

〔出土土器〕

第５号住居跡

〔残存・規模・平面形〕　東壁の一部は攪乱により原形を留めていない部分がある。4.1m×3.2mの長方形を呈する。

〔壁〕　地山を壁としている。残存壁高は約18～30cmであり、床面からの立ち上がりはやや急である。

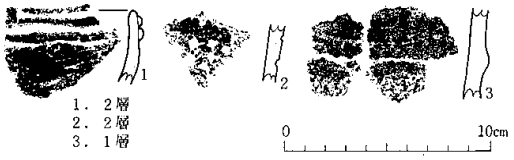
〔床面〕　ほぼ全域に掘り方がみられ、その埋土上面を床としている。掘り方は住居周辺部では深く掘り込まれている。また、住居東側周辺には掘り方の後厚さ約５cmの貼り床がされている。面は東側にいくにしたがってやや高くなるがほぼ平坦である。床面上には３ヵ所に焼面がみられる。柱穴、周溝は床面上では認められない。

〔カマド〕　住居北辺の東寄りの所に付設されている。燃焼部はすでに残っておらず煙道部のみが残存しているにすぎない。このため、このカマドは使用されなくなったものと考えられる。底面は先端部にいくにしたがってやや上がっていき、先端部はピット状になっている。また、東辺のやや北寄りの所に焼面がみられ、再度カマドを構築したと考えられるが攪乱のため詳細は不明である。

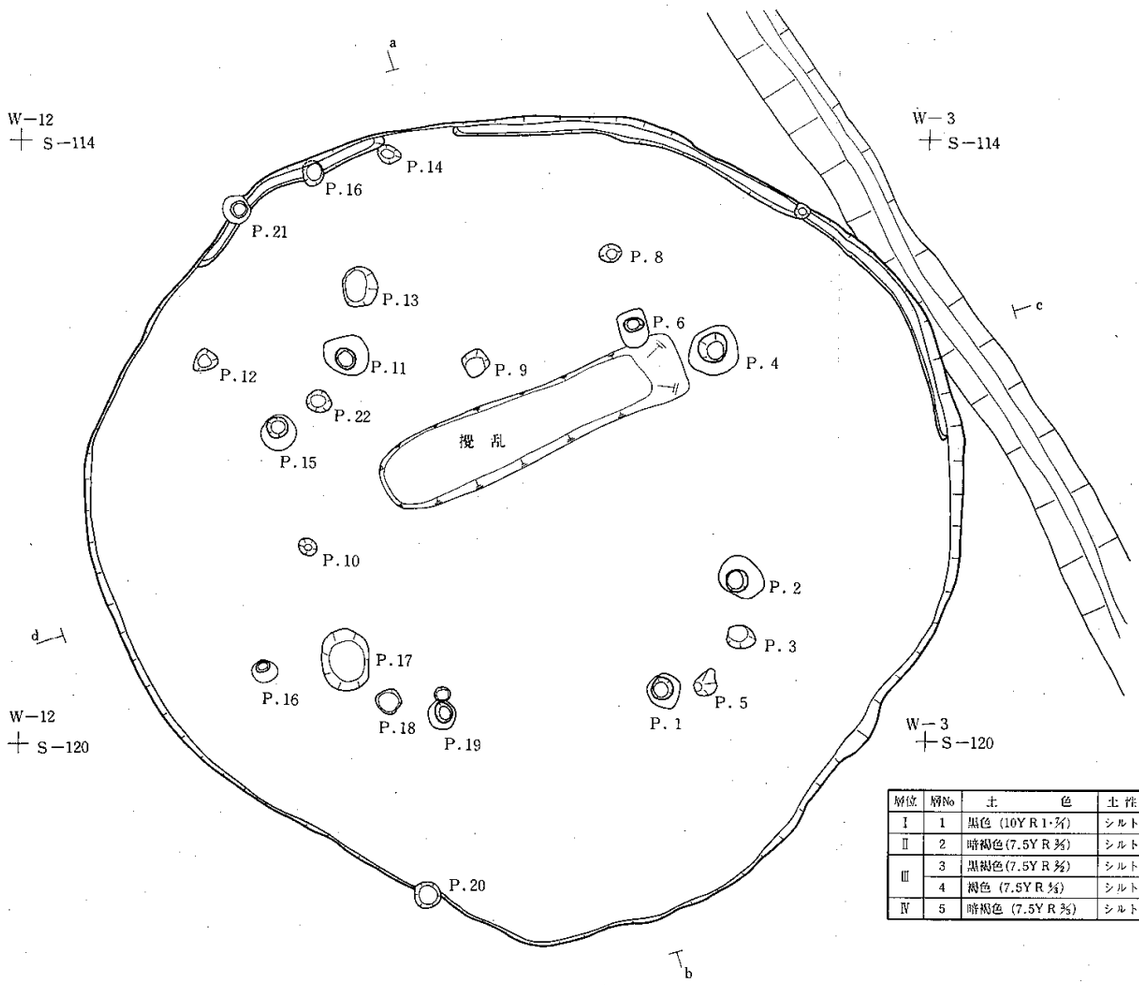
〔その他の施設〕　住居南東隅の床面上で径80cmの円形ピット（P1）を検出した。床面からの深さは約25cmあり貯蔵穴状ピットと考えられる。このピットは住居内での位置からみて２回目のカマド時に使用されたものと推定される。

〔堆積土〕　３層認められる。第Ⅰ層は住居全域に堆積している。第Ⅱ層は住居の中央部を中心に床面上にまで堆積している。第Ⅲ層は壁沿いに堆積している。自然流入土である。

〔出土土器〕　図示した土器は８点である。床面上から土師器坏４点、鉢が１点、貯蔵穴状ピット内から土



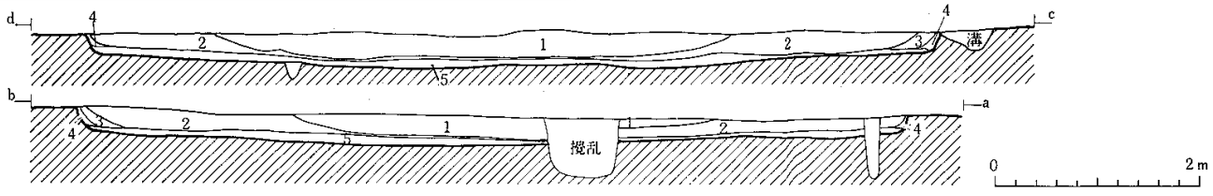
第８図　第３号住居跡出土土器



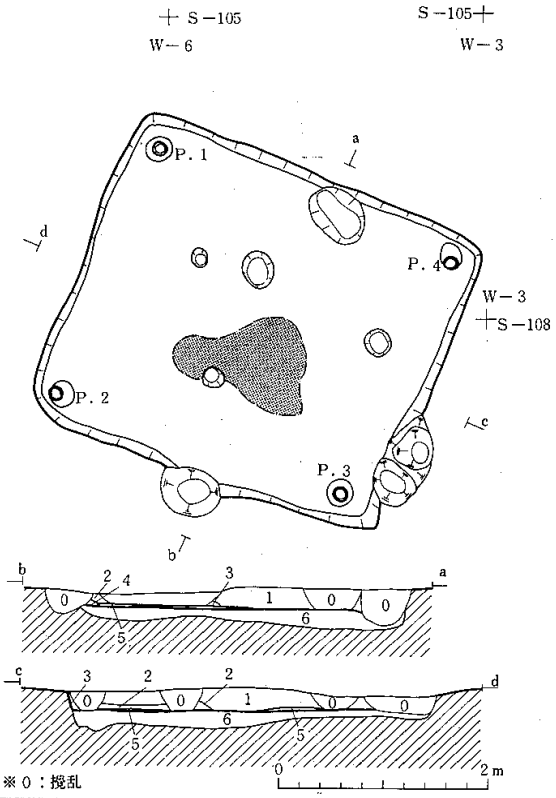
層位	層No	土色	土性	備考	遺物取り上げ層位
Ⅰ	1	黒色（10YR1・7/1）	シルト	木炭混入	1 層
Ⅱ	2	暗褐色(7.5YR 3/3)	シルト	木炭多く混入、焼土混入	2 層
Ⅲ	3	黒褐色(7.5YR 3/2)	シルト		
	4	褐色（7.5YR 4/4）	シルト	地山ブロック多く混入	
Ⅳ	5	暗褐色（7.5YR 3/3）	シルト	木炭少し混入	

ピット	P.1	P.2	P.3	P.4	P.5	P.6	P.7	P.8	P.9	P.6	P.7	P.8	P.9	P.10	P.11	P.12	P.13	P.14	P.15	P.16	P.17	P.18	P.19	P.20	P.21	P.22
深さ	20	15	30	25	27	15	17	19	21	22	25	26	18	17	15	25	30	31	35	18	16	14	12	25	30	29

(cm)



第7図　第3号住居跡



層位	層No.	土色	土性	備考	遺物取り上げ層位
Ⅰ	1	黒褐色（7.5YR 3/2）	シルト		
	2	〃（　〃）	シルト	地山粒混入	
Ⅱ	3	極暗褐色（7.5YR 3/3）	シルト		
	4	褐色（10YR 4/6）	シルト	地山粒多く混入	
生活層	5	黒褐色（7.5YR 3/2）	シルト	地山粒、炭化粒含む	
掘り方埋土	6				

第９図　第４号住居跡

師器坏１点、Ｐ2 から土師器高台付坏、赤焼土器皿が各１点出土しており、その他堆積土中から土師器坏１点が出土している。これらの土器は住居内で共伴するものと考えられる。出土した土師器坏はロクロ使用のもので内面へラミガキ、黒色処理されている。

第６号住居跡

〔重複・規模・平面形〕　溝９と重複している。北から南壁にかけて床面は溝によって切られている。5.35ｍ×4.8ｍの長方形を呈する。

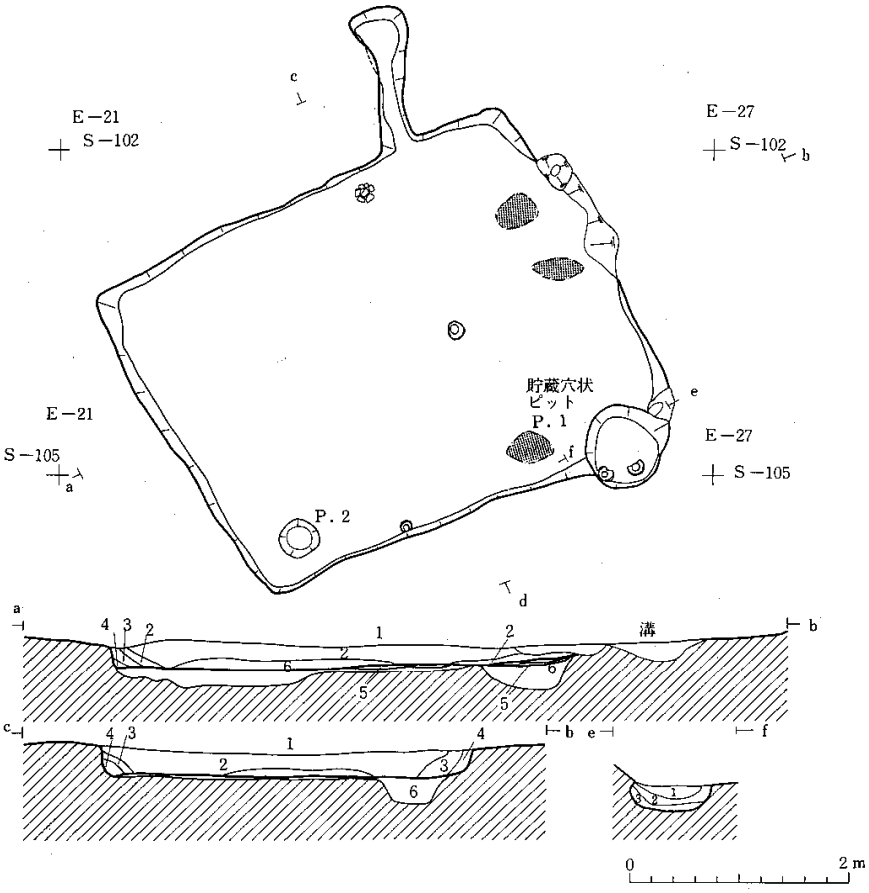
〔壁〕　地山を壁としている。残存する壁高は約 40～50cm である。床面からの立ち上がりは急である。

〔床面〕　住居のほぼ東半分北西・南西隅には掘り方がみられ、その埋土上面を床としている。その他の部分は地山をそのまま床としている。

〔柱穴〕　床面上で８個のピットを検出した。その内、Ｐ3～Ｐ6 は柱痕跡と掘り方の区別があり規模、配置にも規則性がみられ柱穴と考えられる。これらのピットは住居平面形のほぼ対角線線上にあり、結んだ線は住居平面形と相似する。

〔周溝〕　カマド付設部分を除いて住居壁沿いに全周する。幅は約 10～15cm で深さは 10cm 前後である。

〔カマド〕　住居北辺の東寄りの所に付設されている。残存する燃焼部側壁は白色粘土を積み上げてつくられ、右側壁内面には凝灰岩の切石が密着して残存している。側壁の芯として使用されたものである。底面中央部は火熱を受け赤変しており奥壁まで灰状のものが溜っている。また、底面中央部の左側壁に接して土師器坏がみられ、器の内面には白色粘土が入っており、



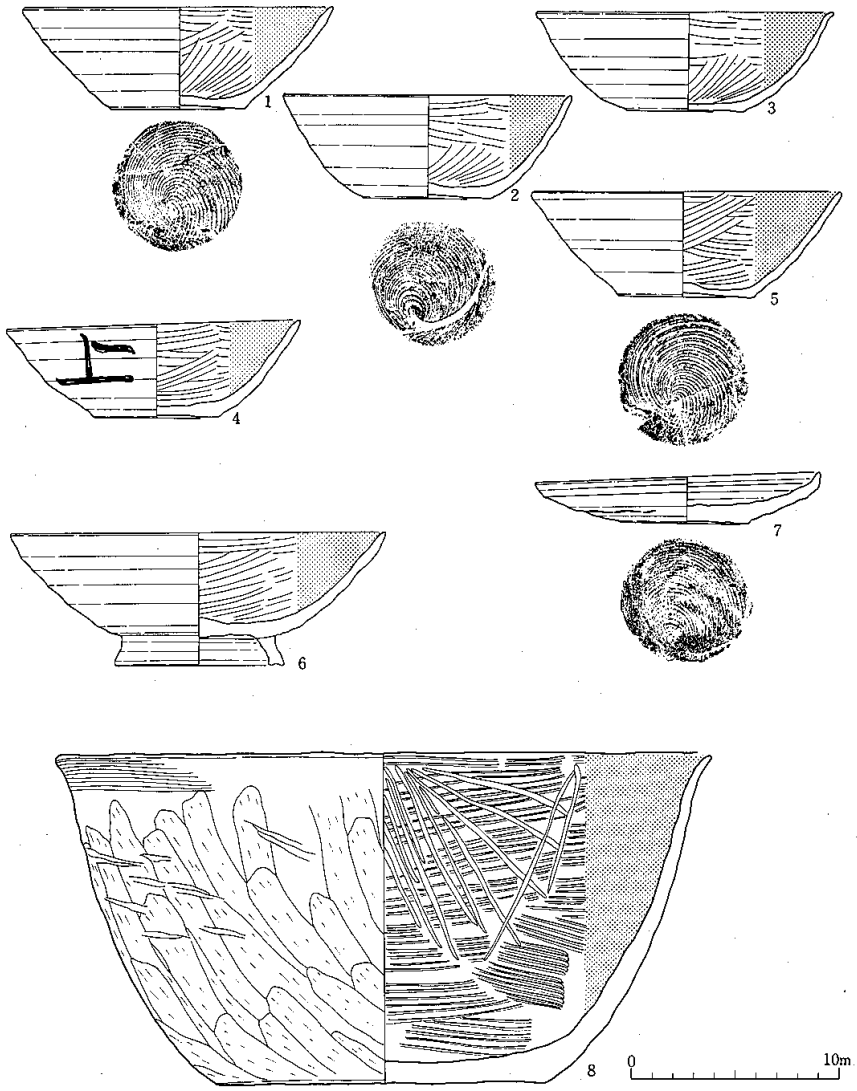
層　　位	層No.	土　　色	土　　性	備　　考	遺物取り上げ層位
Ⅰ	1	黒色（7.5YR ½）	粘土質シルト	灰白色土がブロック状に混入	1層
Ⅱ	2	黒褐色（7.5YR ½）	〃		2層
Ⅲ	3	黒色（7.5YR ½）	〃		3層
	4	明褐色（7.5YR ⅝）	〃	地山ブロック混入	〃
貼　り　床	5				
掘り方埋土	6	黄褐色（7.5YR ⅝）	粘土	黒褐色土混入	

第10図　第５号住居跡

カマド支脚に使用された可能性は強い。煙道部は地山をほぼ水平に掘り抜いてつくられており先端部はピット状になっている。

〔その他の施設〕　住居北東隅、カマドの東側に貯蔵穴状ピット（P_2）がある。径70cmの円形を呈し、床面からの深さは40cmである。

〔堆積土〕　３層認められる。第Ⅰ層は住居中央部を中心に堆積している。第Ⅱ層は住居全域



番号	層位	種類・器形	分類	特徴	登録	残存
1	床	土師器・坏	BⅢ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ヘラミガキ(横・斜放射状)黒色処理 口径14.9cm、底径6.6cm、器高4.9cm	5住－1	⅔
2	3 層	土師器・坏	BⅠ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ヘラミガキ(横・斜・放射状)黒色処理 口径14.0cm、底径6.4cm、器高5.0cm	5住－5	½
3	床	土師器・坏	BⅠ	外面：口～胴部ロクロナデ、底割回転糸切り 内面：ヘラミガキ(横・放射状)黒色処理 口径14.4cm、底径5.6cm、器高4.9cm	5住－3	⅔
4	床	土師器・坏	BⅠ	外面：口～胴部ロクロナデ「上」の墨書、底部回転糸切り 内面：ヘラミガキ(横・斜・放射状)黒色処理 口径14.2cm、底径6.0cm、器高4.7cm	5住－2	⅔
5	床	土師器・坏	BⅢ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ヘラミガキ(横・斜)黒色処理 口径15.0cm、底径6.6cm、器高5.2cm	5住－4	¾
6	P．2	土師器高台付坏	BⅢ	外面：口～台部ロクロナデ、底部ロクロナデ 内面：坏部(横・斜)黒色処理、台部ロクロナデ 口径18.0cm	5住－8	½
7	P．2	赤焼皿		外面：口～胴部ロクロナデ、横み上げ痕、底部回転糸切り 内面：ロクロナデ 口径13.8cm、底径6.4cm、器高2.6cm	5住－10	⅓
8	床	土師器・鉢	AⅡ	外面：口縁部ヨコナデ、胴～底部ヘラケズリヘラミガキ 内面：刷毛目、ヘラミガキ、黒色処理 口径31.6cm、底径15.9cm、器高16cm	5住－9	½

第11図　第５号住居跡出土土器

南側では床面上にまで堆積している。第Ⅲ層は壁沿い北側から中央部まで床面上に堆積している。自然流入土である。

〔出土土器〕　図示したものは15点である。床面上から土師器坏１点、須恵器坏２点が出土している。カマド底面から〔カマド〕で述べた土師器坏１点が出土している。また、貯蔵穴状ピット内から土師器坏１点が出土している。これらの土器は住居内で共伴するものと考えられる。土師器坏は全て、ロクロ不使用で器外面に段がつくものである。その他、堆積土中から土師器坏３点、鉢２点、甕１点、高台付坏（ロクロ使用）１点、須恵器坏３点が出土している。

第７号住居跡

〔重複・規模・平面形〕　溝６と重複している。北から南壁にかけての床面上は溝６によって切られている。4.5×3.4mの長方形を呈する。

〔壁〕　地山を壁としている。残存する壁高は約16～20cmである。床面からの立ち上がりはやや急である。

〔床面〕　住居中央部は溝によって切られ原形を留めていない。残存する床は、一部地山をそのまま床としている部分もあるが、ほぼ全域に掘り方がみられ、その埋土上面を床としている。面は溝以外の部分で平坦である。部分的ではあるが、厚さ約３cmの生活層がみられる。また、床面上では柱穴は不明である。

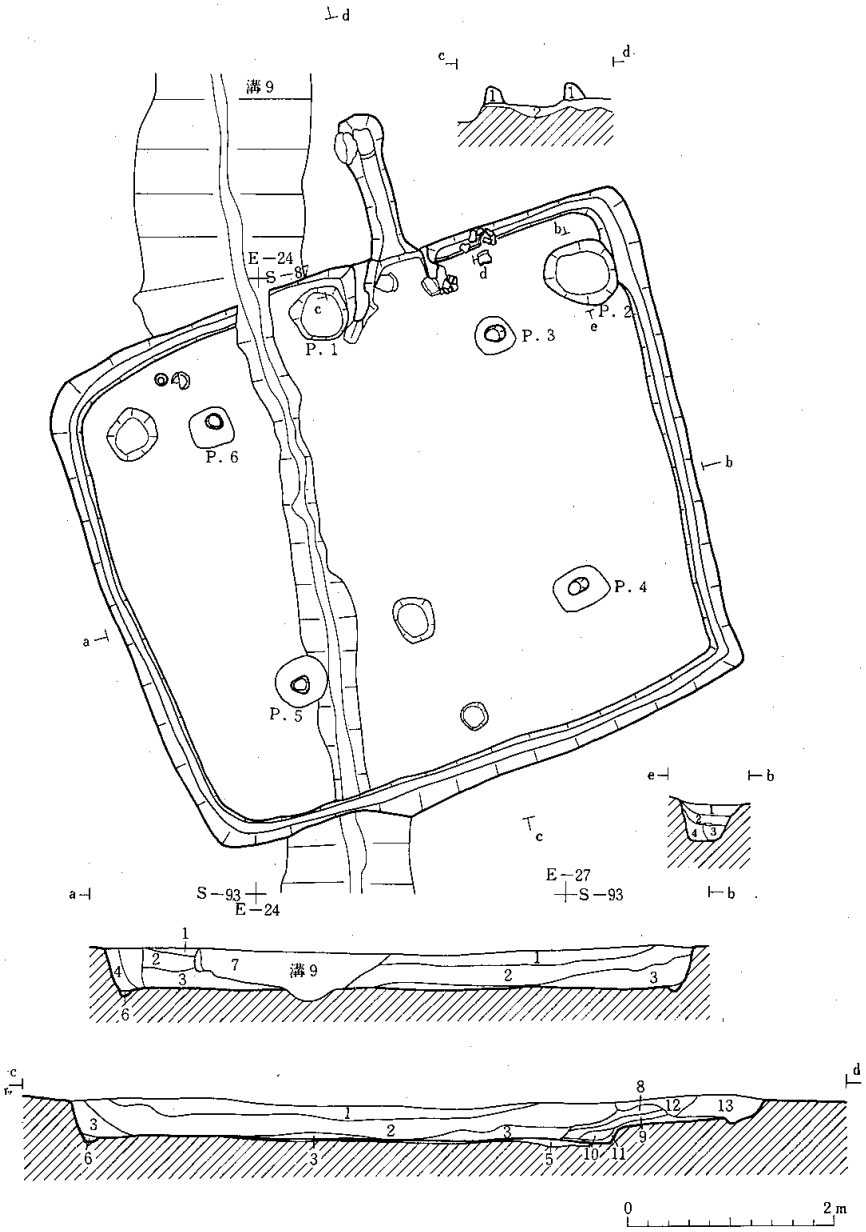
〔周溝〕　カマド付設部分、溝によって切られている部分を除いた住居壁沿いに巡る。幅は10cm前後、床面からの深さは約10cmである。

〔カマド〕　住居東辺の南寄りの所に付設されている。残存する燃焼部側壁は粘土積み上げによってつくられている。底面はほぼ平坦で火熱を受け赤変している部分がみられる。また、中央部には径20cm、高さ約８cmの地山削り出しの高まりがあり支脚痕と考えられる。煙道部との境には顕著な変化はなく直接通じている。煙道部は地山を先端にいくにしたがって高くなるように掘り抜かれてつくられているが、攪乱が激しく原形を留めていない部分が多い。

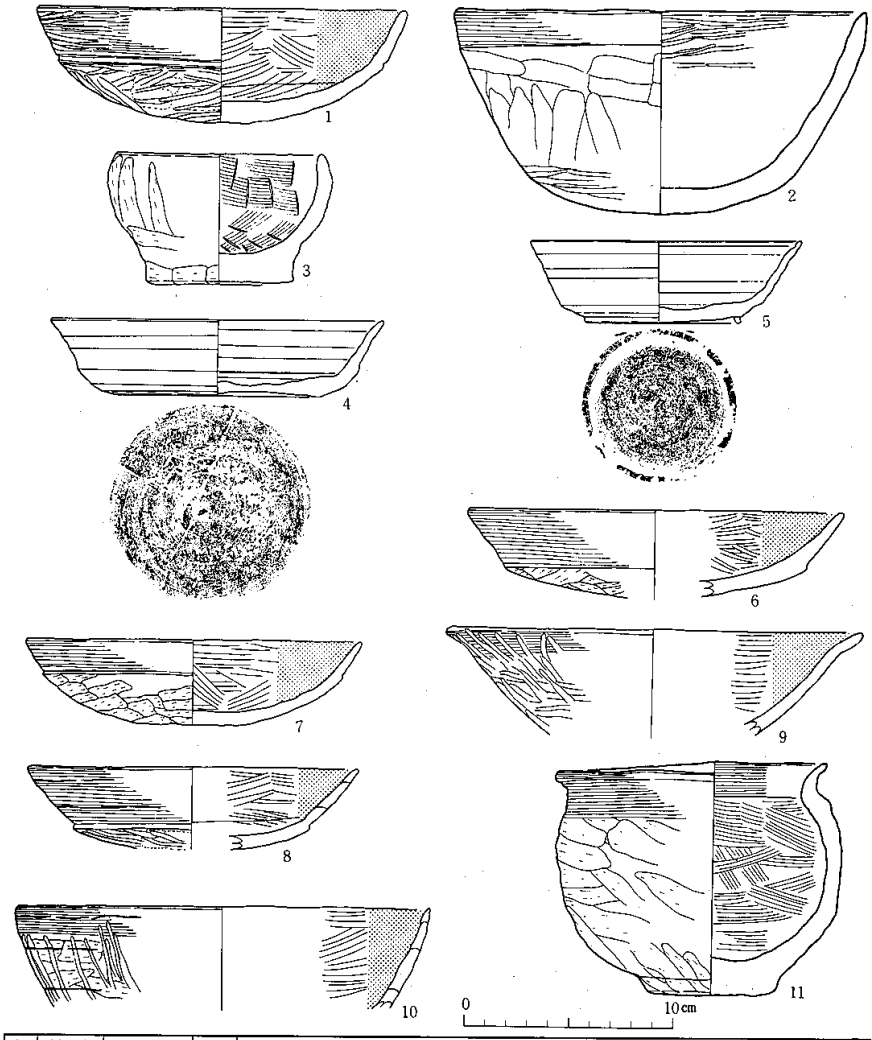
〔堆積土〕　溝６、攪乱により残存している部分は少ないが２層認められる。第Ⅰ層は住居壁

第６号住居跡堆積土

層位	層No	土色	土性	備考	遺物取り上げ層位
Ⅰ	1	黒色（7.5Y R 3/1）	シルト	木炭混入	1層
Ⅱ	2	黒色（7.5Y R 3/1）	〃	黄色土粒少し混入	2層
Ⅲ	3	暗褐色（7.5Y R 3/3）	〃	木炭少し混入	3層
	4	暗褐色（7.5Y R 3/3）	〃	地山粒混入	〃
掘り方埋土	5				
周溝	6	黒色（7.5Y R 1・7/1）	シルト		
溝 9	7	暗褐色（7.5Y R 3/3）	〃		
カマド	8	明黄褐色（10Y R 6/6）	粘土	側壁、天井部崩壊土	
	9	褐色（7.5Y R 4/4）	シルト		
	10	明褐色（7.5Y R 5/6）	〃		
	11	褐色（7.5Y R 4/4）	〃	灰土	
	12	暗褐色（7.5Y R 3/3）	〃		
	13	暗褐色（7.5Y R 3/4）	〃	木炭混入	



第12図　第6号住居跡



番号	層位	種類・器形	分類	特徴	登録	残存
1	床	土師器・坏	AⅠla	外面：口縁部ヨコナデ、ヘラミガキ、胴～底部ヘラケズリ、ヘラミガキ　沈線あり 内面：ヘラミガキ（横・斜）、黒色処理、段あり、　口径17.7cm　器高 5.5cm	6住－1	⅓
2	カマド底面	土師器・鉢	AⅠ	外面：口縁部ヨコナデ、胴～底部ヘラケズリ、ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ（横）黒色処理？　口径19.7cm　器高 9.8cm	6住－8	⅓
3	P.2	土師器？		外面：口～胴部ヘラケズリ、底部木葉痕　内面：ヘラナデ　口径 9.9cm　底径 7.1cm　器高 6.8cm	6住－10	⅓
4	床	須恵器坏	AⅠ	外面：口～胴部ロクロナデ、胴下部～底部回転ヘラケズリ、底部ヘラ切り？ 内面：ロクロナデ　口径16.0cm　底径 9.8cm　器高 3.7cm	6住－14	¼
5	床	須恵器高台付坏	A	外面：口～台部ロクロナデ、底部回転ヘラ切り？ 内面：ロクロナデ　口径13.0cm　器高 4.0cm	6住－13	¼
6	カマド付近	土師器・坏	AⅠlb	外面：口縁部ヨコナデ、胴～底部ヘラケズリ、段あり 内面：ヘラミガキ（横・斜）黒色処理　口径18.0cm	6住－6	⅓
7	1層	土師器・坏	AⅠlb	外面：口縁部ヨコナデ、胴～底部ヘラケズリ、段あり 内面：ヘラミガキ（横・斜）黒色処理　口径16.1　器高 4.1cm	6住－2	⅓
8	1層	土師器・坏	AⅠla	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ　ヘラミガキ、段あり 内面：ヘラミガキ（横・斜）黒色処理、段あり　口径16.0cm	6住－4	¼
9	2層	土師器・鉢	AⅠ？	外面：口縁部ヨコナデ、ヘラミガキ、胴部ヘラケズリ、ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ（横）黒色処理　口径20.0	6住－11	¼
10	2層	土師器・鉢	AⅠ？	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ、ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ（横・斜）黒色処理　口径20.3cm	6住－12	¼
11	3層	土師器・甕	AⅡlb	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ、底部木葉痕 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ナデ　口径13.0cm　底径 6.2cm　器高11.2cm	6住－9	⅓

第13図　第６号住居跡出土土器(1)

沿い以外に堆積している。第Ⅱ層は壁沿いに堆積している。自然流入土である。

〔出土土器〕　図示したものは６点である。床面又は床面直上から土師器坏１点、須恵器坏蓋４点、カマド内から土師器甕１点出土している。これらの土器は住居内で共伴すると考えられる。須恵器蓋の中で内面にカエリのあるものが１点含まれている。

第８号住居跡

〔残存・規模・平面形〕　住居内には大規模な攪乱による掘り込みがあり、この攪乱は床面まで及び大半の堆積土は消失している。一辺 3.5cm の隅丸正方形を呈する。

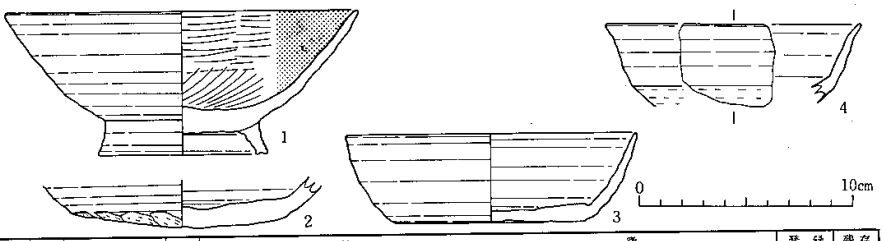
〔壁〕　地山を壁としている。残存する壁高は約 30～35cm である。床面からの立ち上がりは急である。

〔床面〕　地山をそのまま床としているが大半は残存しない。残存する部分は地山をそのまま床としている。床面から若干浮いた状態で住居壁沿いに炭化材が散在しており、東壁沿いには炭化したカヤ、竹（？）の敷物と思われるものが検出されている。また、床面からは周溝は認められない。

〔柱穴〕　床面上から 14 個のピットが検出された。その内Ｐ１～Ｐ４の４個のピットは柱痕跡と掘り方の区別があり、また、規模、配置等に規則性があり、柱穴と考えられる。これらのピットは住居平面形の対角線上に位置し、結んだ線は住居平面形に相似する。

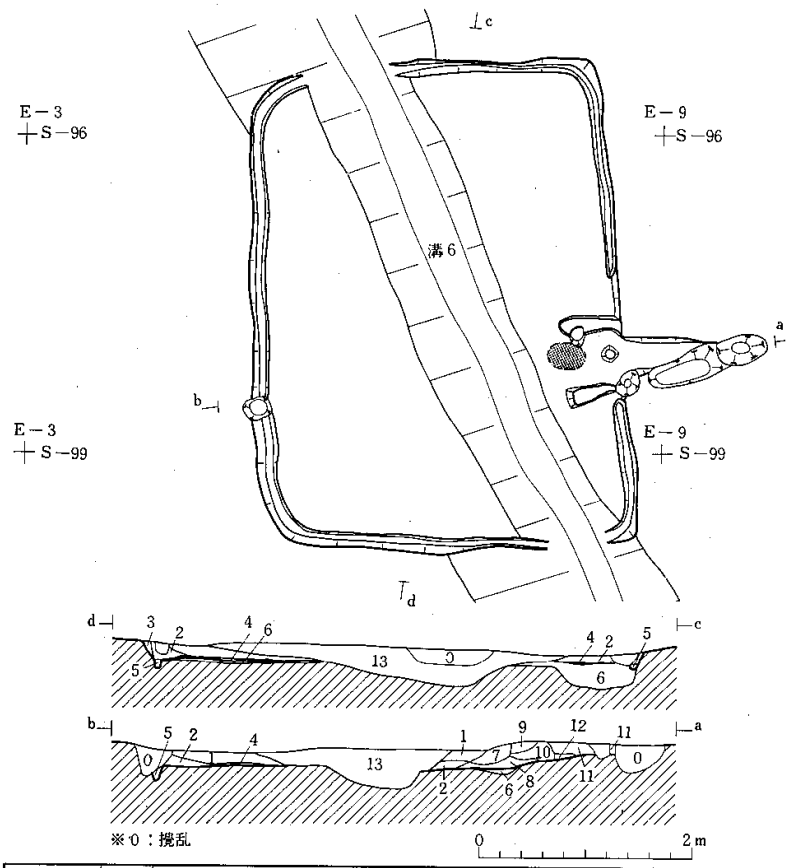
〔カマド〕　住居北辺のほぼ中央部に付設されている。残存する燃焼部側壁は地山削り出しによってつくられている。底面は床面より約５cm 低く舟底状にくぼんでいる。中央部には火熱を受け赤変している部分がある。煙道部との境にはわずかの段を形成し区別している。煙道部は地山をほぼ水平に掘り抜いてつくられている。先端部には径約 45cm の円形ピットがある。ピットの掘り込みは垂直である。なお、このピットの中から土師器甕が置かれているように出土している。

〔堆積土〕　先述したように攪乱のため堆積土の大半は残存せず、わずかに住居壁沿いに２層認められるにすぎない。



番号	層位	種類・器形	分類	特徴	登録	残存
1	2層	土師器・高台付坏	B Ⅲ	外面：口～台部ロクロナデ、底部ロクロナデ、内面：坏部ヘラミガキ（横・斜）黒色処理、台部ロクロナデ、口径16.5cm	6住－7	3/4
2	1層	須恵器・坏	A Ⅱ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部ヘラ切り、内面：ロクロナデ　口径13.7cm　底径 9.0cm　器高 4.2cm	6住－15	3/4
3	3層	須恵器・坏		外面：胴部ロクロナデ、底部手持ちヘラケズリ、内面：ロクロナデ	6住－16	一部
4	1層	須恵器・坏		外面：口～胴部ロクロナデ、胴下部回転ヘラケズリ、内面：ロクロナデ	6住－17	一部

第14図　第６号住居跡出土土器(2)



層位	層No	土色	土性	備考	遺物取り上げ層位
Ⅰ	1	黒褐色（7.5YR 2/2）	シルト	地山粒混入	1層
Ⅱ	2	極暗褐色（7.5YR 2/3）	〃		2層
	3	褐色（7.5YR 4/4）	〃	地山多く混入	〃
生活層	4	黒褐色（10YR 3/2）	〃	固い	〃
周溝内	5	褐色（7.5YR 4/4）	〃	地山多く混入	〃
掘り方埋土	6	明褐色（7.5YR 5/6）	粘土	暗褐色（7.5YR 3/3）土粒混入	
カマド内	7	にぶい褐色（7.5YR 5/4）	シルト		
	8	暗赤褐色（2.5YR 3/4）	〃	灰土	
	9	褐色（7.5YR 4/4）	〃	焼土多く混入	
	10	褐色（7.5YR 4/4）	〃	焼土混入	
	11	褐色（7.5YR 4/3）	〃		
	12	褐色（7.0YR 4/4）	〃		
溝6	13	極暗褐色（7.5YR 2/3）	〃	地山、炭化物混入	

第15図　第７号住居跡

〔出土土器〕　図示したものは９点である。その内、床面上から土師器坏４点、小形壺（？）１点、カマド内からは土師器甕１点、堆積土中から土師器坏３点が出土している。床面上出土土器は住居内で共伴すると考えられる。また、堆積土中の土師器坏も床面上出土のそれと同じ特徴を示すため一括して扱うことが可能である。土師器坏はいずれもロクロ不使用のもので、外

面に変化のあるものとないものの二者がある。

第９号住居跡

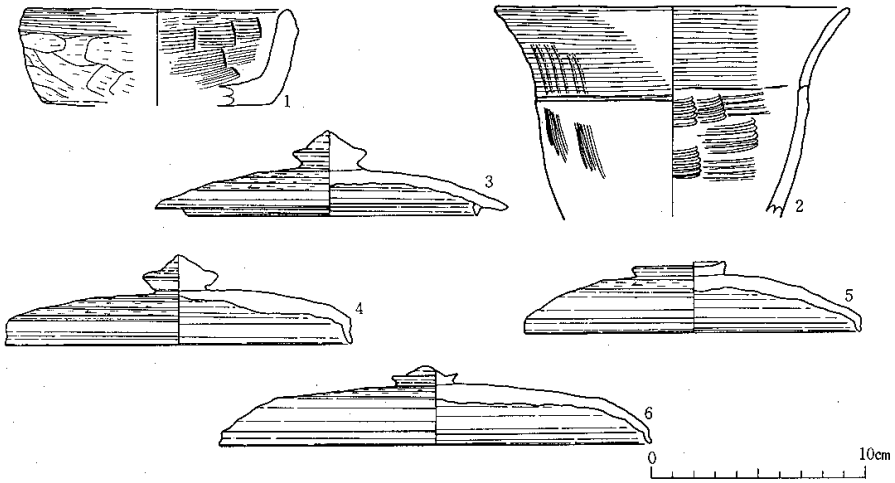
〔平面形・規模〕　ほぼ方形を呈するが南北3.5m、東西3.7mとやや東西方向に長い。

〔壁〕　地山を壁としている。残存する壁高は30～40cmである。床面からの立ち上がりは急である。

〔床面〕　全域に掘り方がみられ、その埋土上面を床としている。住居周辺部の掘り方は中央部に比して深い。面はほぼ平坦である。床面上には多量の炭化物が検出された。特に住居壁沿いに炭化した板材・角材が壁に沿うように散在しており、また、カヤ(？)の敷物と思われるものも検出されている。床面上では柱穴、周溝は不明である。

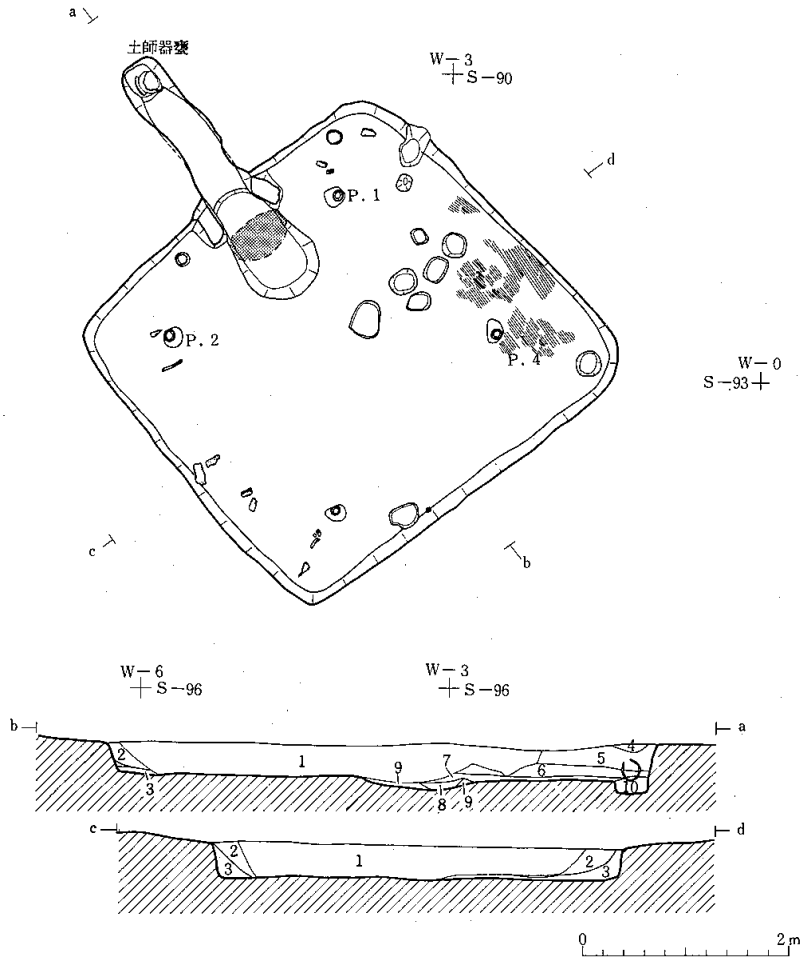
〔カマド〕　住居周辺の中央部に付設されている。残存する燃焼部側壁は粘土積み上げによってつくられている。左側壁の先端部には土師器甕がオサエとして置かれている。床面はほぼ平坦で側壁内面と伴に火熱を受け赤変している。煙道部との境には軽い段が形成され区別している。煙道部は地山を先端部に向かって傾斜させながらトンネル状に掘り込まれている。先端部には径35cmのピットがある。ピットの掘り込みはほぼ垂直である。

〔堆積土〕　３層認められる。第Ⅰ層は住居中央部から周壁近くまで堆積している。第Ⅱ層は全域に、第Ⅲ層は壁沿いから床面上に堆積している。自然流入土である。



番号	層位	種類・器形	分類	特徴	登録	残存
1	床	土師器？		外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ、内面：ヘラナデ	7住－1	½
2	カマド内	土師器・甕	A Ⅰ1bi	外面：口縁部刷毛目、ヨコナデ、胴部刷毛目、沈線あり、内面：口縁部ヨコナデ、胴部刷毛目、沈線あり　口径16.6cm	7住－6	一部
3	床	須恵器・蓋	A	外面：天井部、回転ヘラケズリ、宝珠ツマミあり、口縁部ロクロナデ、内面：ロクロナデ、カエリあり	7住－4	½
4	床	須恵器・蓋	B	外面：天井部回転ヘラケズリ、宝珠ツマミあり、口縁部ロクロナデ、内面：ロクロナデ	7住－2	½
5	床	須恵器・蓋	C	外面：天井部回転ヘラケズリ、リング状ツマミあり、口縁部ロクロナデ、内面：ロクロナデ	7住－3	½
6	床	須恵器・蓋	C	外面：天井部回転ヘラケズリ、宝珠ツマミあり、口縁部ロクロナデ、内面：ロクロナデ	7住－5	½

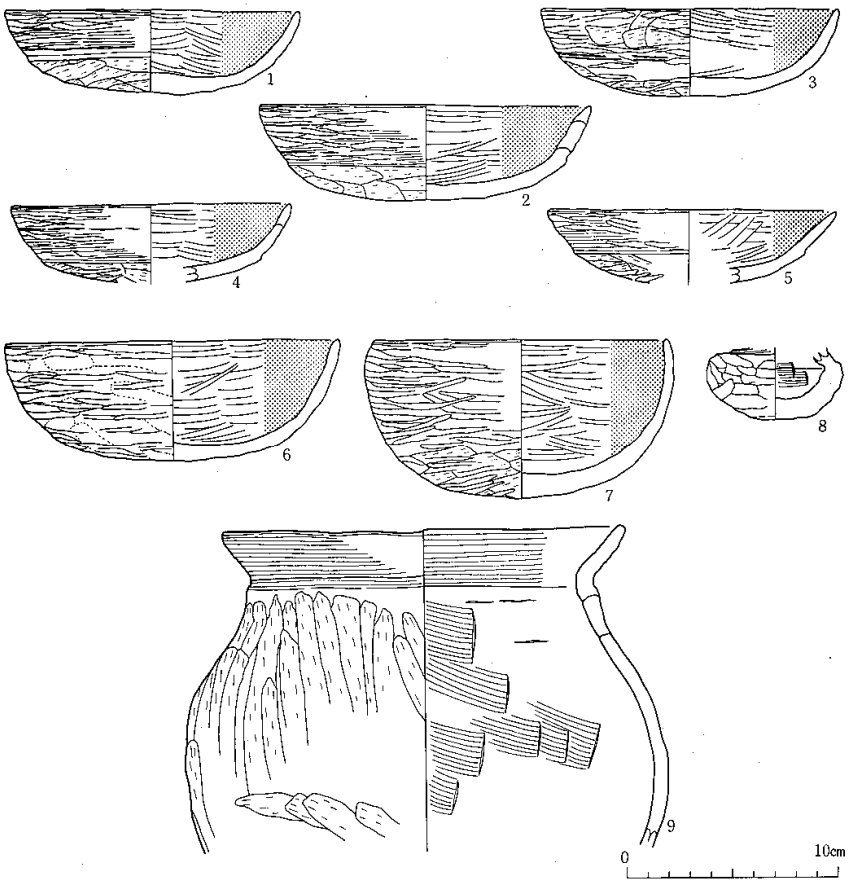
第16図　第７号住居跡出土土器



層位	層No	土色	土性	備考	遺物取り上げ層位
Ⅰ	1	褐色（10YR 4/4）	シルト	地山含む	1層
Ⅱ	2	黄褐色（10YR 5/6）	シルト	地山崩壊土	2層
	3	褐色（10YR 4/4）	シルト	地山、焼土混入	3層
カマド内	4	褐色（7.5YR 4/4）	シルト	地山粒多く混入	
	5	暗褐色（10YR 3/4）	シルト	地山粒混入	
	6	褐色（10YR 4/6）	シルト	地山崩壊土	
	7	黄褐色（10YR 5/8）	シルト	天井崩壊土	
	8	暗赤褐色（5YR 3/6）	シルト	焼土層	
	9	黒色（10YR 2/1）	シルト		
	10	褐色（7.5YR 4/6）	シルト		

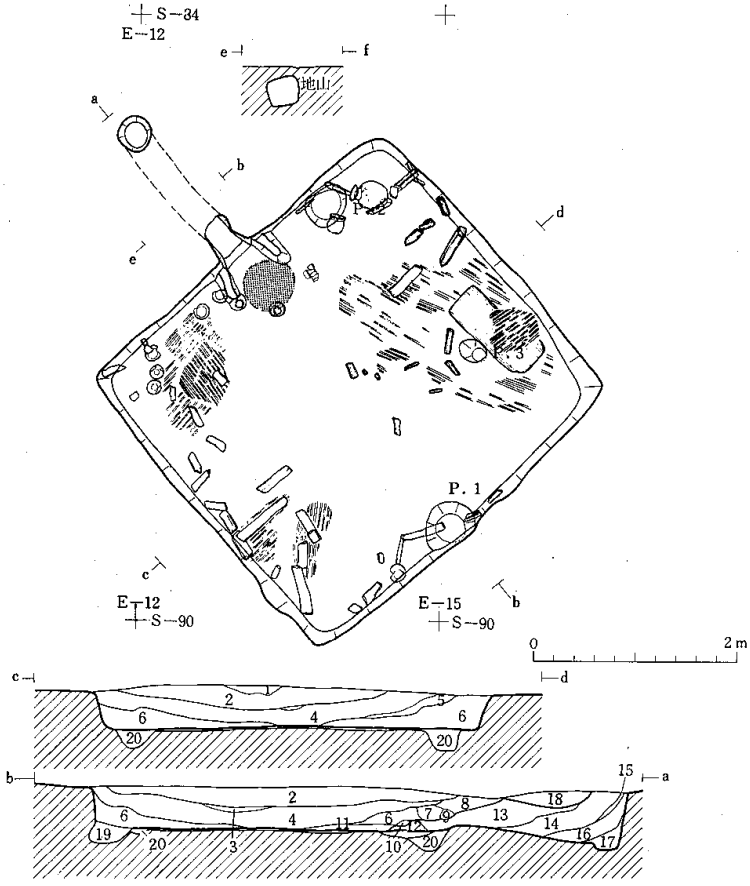
第17図　第8号住居跡

〔出土土器〕　図示したものは22点である。その内、床面上から土師器坏３点、台付埦１点、甕３点、甑１点、須恵器坏３点、甕２点（内１点は底部付近のみ残存）出土している。カマド内から土師器坏、甕各１点、ピット１内から土師器甕１点出土している。これらの土器は住居内で共伴すると考えられる。その他、堆積土中から土師器甕２点、須恵器坏３点、長頸壺１点出土している。住居内で共伴する土師器坏はロクロ不使用で、他の住居跡出土のロクロ不使用



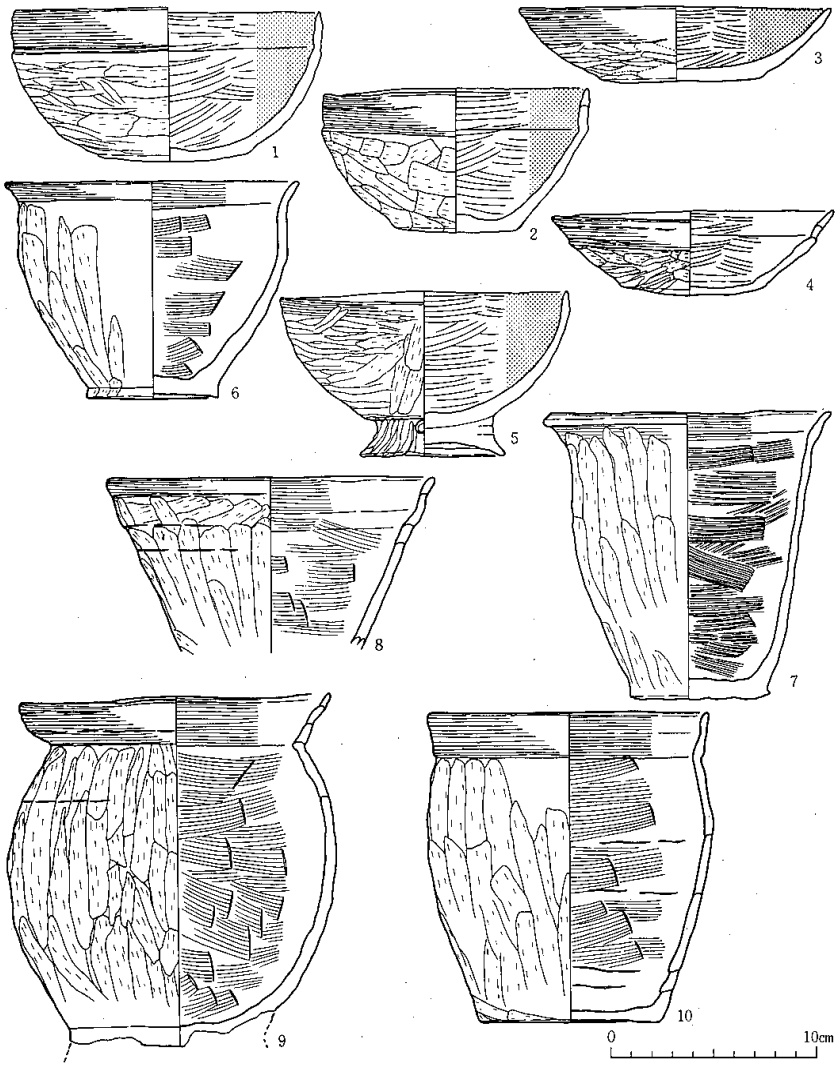
番号	層位	種類・器形	分類	特徴		登録	残存
1	床	土師器・坏	ＡⅠ２ｂ	外面：口縁部ヨコナデ、ヘラミガキ、胴～底部ヘラケズリ、段あり 内面：ヘラミガキ（横、斜）黒色処理	口径13.9cm、器高4.0cm	8住－1	½
2	床	土師器・坏	ＡⅠ２ｂ	外面：口縁部ヨコナデ、ヘラミガキ、胴～底部ヘラケズリ、段あり 内面：ヘラミガキ（横、斜）黒色処理	口径15.7cm、器高4.6cm	8住－3	⅔
3	2 層	土師器・坏	ＡⅡ	外面：口縁部ヨコナデ、ヘラミガキ、胴～底部ヘラケズリ、ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ（横、斜）黒色処理	口径14.1cm、器高4.2cm	8住－6	⅔
4	床	土師器・坏	ＡⅠ２ｂ	外面：口縁部ヨコナデ、ヘラミガキ、胴部ヘラケズリ、段あり 内面：ヘラミガキ（横、斜）黒色処理	口径13.3cm	8住－5	⅔
5	2 層	土師器・坏	ＡⅠ１ｂ	外面：口縁部ヨコナデ、ヘラミガキ、胴部ヘラケズリ、ヘラミガキ、段あり 内面：ヘラミガキ（横、斜）黒色処理	口径13.6cm	8住－7	½
6	3 層	土師器・坏	ＡⅡ	外面：口～底部ヘラケズリ、ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ（横、斜）黒色処理	口径15.8cm、器高5.7cm	8住－4	⅔
7	床	土師器・坏	ＡⅡ	外面：口～底部ヘラケズリ、ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ（横、斜）黒色処理	口径14.0cm、器高7.6cm	8住－2	½
8	床	土師器・？		外面：ヨコナデ、ヘラケズリ（指頭痕） 内面：ヘラナデ		8住－9	⅔
9	カマド内	土師器・甕	ＡⅡ１ａｉ	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	口径19.2cm	8住－10	½

第18図　第８号住居跡出土土器



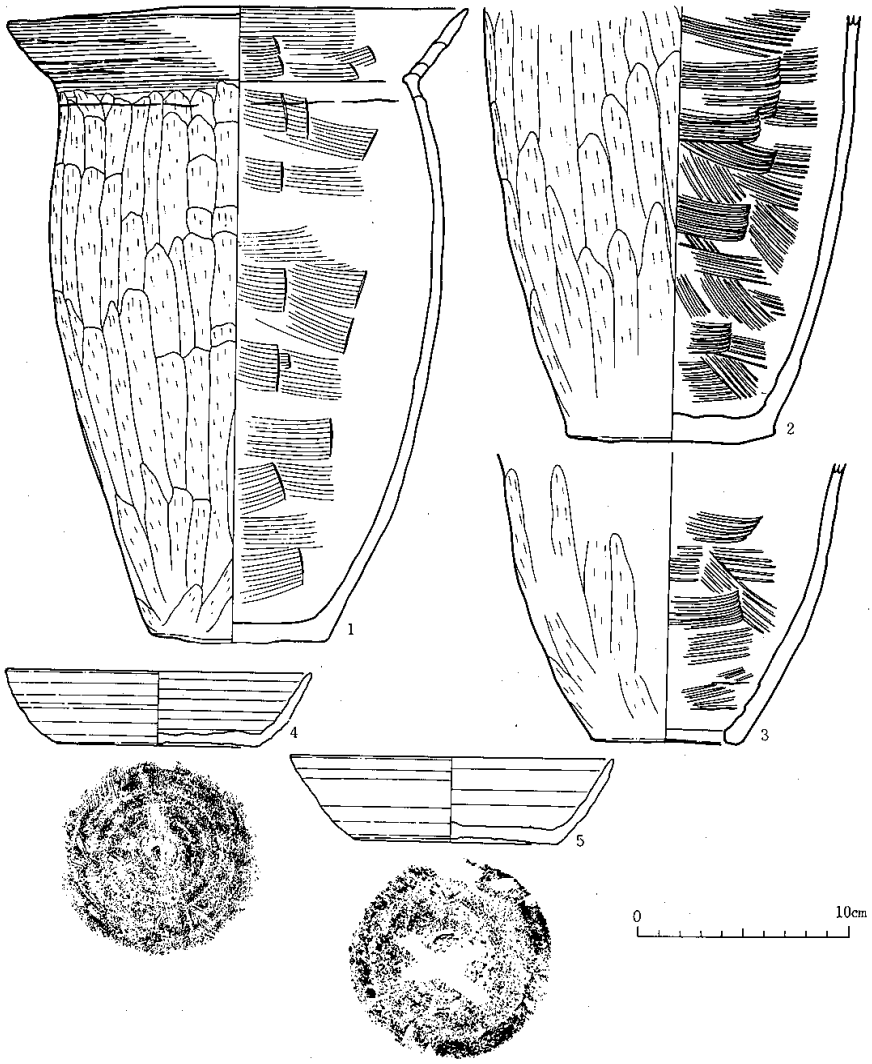
層位	層No	土色	土性	備考	遺物取り上げ層位
Ⅰ	1	にぶい橙色（5YR6/4）	シルト		1 層
	2	極暗褐色（7.5YR2/3）	〃		〃
Ⅱ	3	暗褐色（7.5YR3/3）	〃	地山小粒混入	2 層
	4	黒褐色（7.5YR3/2）	〃	炭化物、焼土小粒混入	〃
	5	暗褐色（7.5YR3/3）	〃		〃
Ⅲ	6	明褐色（7.5YR5/6）	〃	地山多く混入	3 層
	7	黒褐色（7.5YR3/2）	〃		〃
	8	黒褐色（7.5YR3/2）	〃	焼土混入	〃
	9	にぶい褐色（7.5YR5/4）	〃	地山ブロック混入	〃
	10	にぶい褐色（7.5YR5/3）	粘土		〃
	11	黒褐色（7.5YR3/2）	シルト	焼土炭化物の小粒多く混入	〃
カマド内	12	暗赤褐色（2.5YR3/4）	〃	焼土ブロック多く混入	カマド内1層
	13	黒褐色（10YR3/2）	〃	焼土ブロック少し混入	〃
	14	極暗褐色（7.5YR2/3）	〃	〃	
	15	赤褐色（2.5YR4/6）	〃		
	16	褐色（7.5YR4/3）	〃		焼道内1層
	17	黒色（7.5YR3/1）	〃		〃
	18	地山			
ピット1	19	褐色（7.5YR3/4）	シルト	焼土混入	
掘り方埋土	20	黄褐色（10YR5/6）	粘土	黒褐色土混入	

第19図　第9号住居跡



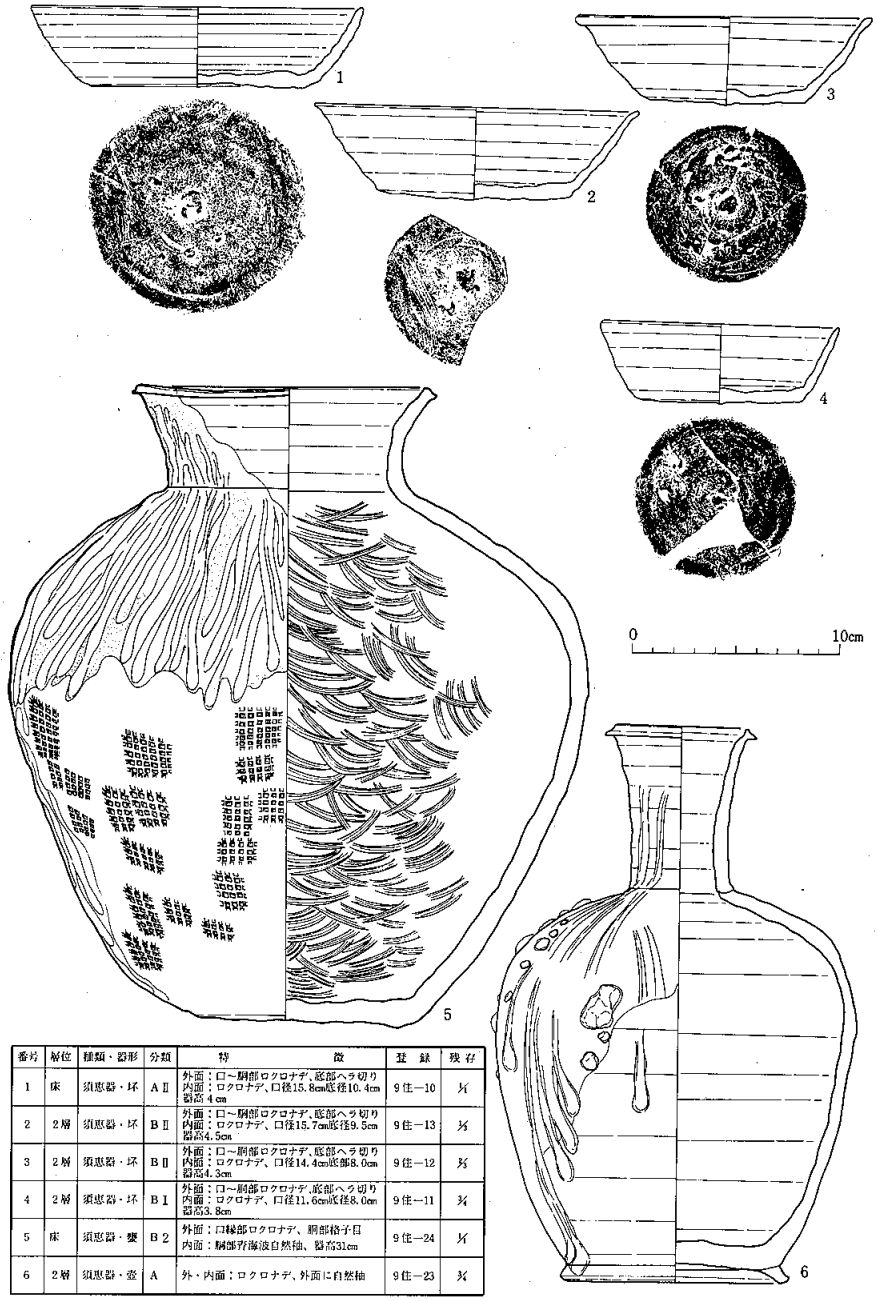
番号	層位	種類・器形	分類	特徴	登録	残存
1	床	土師器・坏	AⅢ2	外面：口縁部ヨコナデ、胴～底部ヘラケズリ、ヘラミガキ、段あり、内面：ヘラミガキ(横・斜)黒色処理、段あり　口径14.9cm、底径7.2cm、器高7.5cm	9住－1	¾
2	床	土師器・坏	AⅢ2	外面：口縁部ヨコナデ、ヘラミガキ、胴～底部ヘラケズリ、ヘラミガキ、段あり、内面：ヘラミガキ（横・斜）黒色処理段あり　口径13.0cm、底径6.0器高7.0cm	9住－2	¼
3	床	土師器・坏	AⅠ4	外面：口縁部ヨコナデ、胴～底部ヘラケズリ、ヘラミガキ、内面：ヘラミガキ（横・斜）黒色処理　口径15.2cm、底径7.8cm、器高3.7cm	9住－3	½
4	カマド内	土師器・坏	AⅢ3	外面：口縁部ヨコナデ、胴～底部ヘラケズリ、ヘラミガキ、段あり、内面：ヘラミガキ（横・斜）黒色処理、段あり　口径13.7cm、底径7.0cm、器高4.1cm	9住－4	½
5	床	土師器高台付坏	A	外面：口縁部ヨコナデ、ヘラミガキ、胴～内部ヘラケズリ、ヘラミガキ、内面：ヘラミガキ（横・斜）黒色処理、台部穿孔２ケあり　口径14.2cm	9住－5	¾
6	2層	土師器・甕	AⅠ,bii	外面：口縁部ヨコナデ、胴～底部ヘラケズリ、内面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ　口径14.3cm、底径6.4cm、器高10.5cm	9住－21	½
7	床	土師器・甕	AⅠ,bii	外面：口縁部ヨコナデ、胴～底部ヘラケズリ、内面：口縁部ヨコナデ、胴部刷毛目　口径14.0cm、底径6.8cm、器高15.9cm	9住－14	¾
8	カマド内	土師器・甕	AⅠ4	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ、内面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	9住－19	¾
9	床	土師器台付甕		外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ、内面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	9住－15	¾
10	P.1	土師器・甕	AⅠ3	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ、底部木葉痕、内面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ　口径13.7cm、底径8.9cm、器高15.0cm	9住－18	¾

第20図　第９号住居跡出土土器(1)



番号	層位	種類・器形	分類	特徴	登録	残存
1	2層	土師器・甕	A I₁aii	外面：口縁部ヨコナデ、胴～底部ヘラケズリ、内面：口縁部ヨコナデ、ヘラナデ、胴部ヘラナデ 口径21.9cm、底径8.5cm、器高30.8cm	9住−17	3/4
2	床	土師器・甕		外面：胴部ヘラケズリ、内面：胴部刷毛目	9住−20	1/3
3	床	土師器・甑		外面：胴部ヘラケズリ、内面：胴部刷毛目　単孔式	9住−16	1/3
4	床	須恵器・坏	A II	外面：口～胴部ロクロナデ、底部ヘラ切り、内面：ロクロナデ　口径14.6cm、底径9.7cm、器高3.6cm	9住−8	3/4
5	床	須恵器・坏	A II	外面：口～胴部ロクロナデ、底部ヘラ切り、内面：ロクロナデ　口径15.4cm、底径10.0cm、器高4.3cm	9住−9	3/4

第21図　第9号住居跡出土土器(2)



番号	層位	種類・器形	分類	特徴	登録	残存
1	床	須恵器・坏	A Ⅱ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部ヘラ切り 内面：ロクロナデ、口径15.8cm底径10.4cm 器高4cm	9住—10	½
2	2層	須恵器・坏	B Ⅱ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部ヘラ切り 内面：ロクロナデ、口径15.7cm底径9.5cm 器高4.5cm	9住—13	½
3	2層	須恵器・坏	B Ⅱ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部ヘラ切り 内面：ロクロナデ、口径14.4cm底部8.0cm 器高4.3cm	9住—12	½
4	2層	須恵器・坏	B Ⅰ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部ヘラ切り 内面：ロクロナデ、口径11.6cm底径8.0cm 器高3.8cm	9住—11	¾
5	床	須恵器・甕	B 2	外面：口縁部ロクロナデ、胴部格子目 内面：胴部背海波自然釉、器高31cm	9住—24	½
6	2層	須恵器・壺	A	外・内面：ロクロナデ、外面に自然釉	9住—23	¾

第22図　第９号住居跡出土土器(3)

の土師器坏と比して、形態上特徴的である。すなわち、口縁部が屈曲して直立する器形のものである。

第10号住居跡

〔残存・規模・平面形〕　住居東壁の一部は攪乱のため原形を留めていないが、3×2.6mの長方形を呈する。各隅はやや丸味をもっている。

〔壁〕　地山を壁としている。残存する壁高は約15〜25cmである。床面からの立ち上がりは緩やかである。

〔床面〕　地山をそのまま床としている。多少の凹凸はあるが面はほぼ平坦である。床面上では柱穴は不明である。

〔周溝〕　住居東、西側の一部で途切れるが壁沿いに全周する。幅は20cm前後、床面からの深さは10cm前後である。

〔カマド〕　住居南辺の東寄りの所、南東隅の近くに付設されている。燃焼部底面の一部と煙道部のみ残存している。燃焼部底面は浅い皿状を呈し、焼土が溜っている。煙道部との境には約20cmの段を形成し煙道部と区別している。煙道部は地山を掘り抜いてつくられており、先端部には径約40cmのピットがある。ピットの掘り込みはやや外方に傾斜している。

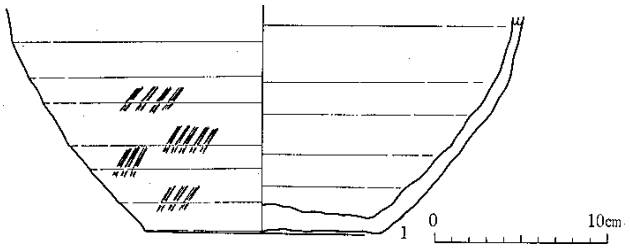
〔その他の施設〕　床面中央部に径80cmのピットがあり溝によって周溝と接続している。

〔堆積土〕　3層認められる。第Ⅰ層は住居中央部に堆積している。第Ⅱ層は中央部から壁近くまで分布し、中央部では床面上に至っている。第Ⅲ層は壁沿いに堆積している。

〔出土土器〕　図示できたものは堆積土中出土の須恵器坏、コップ形(?)土器各1点である。

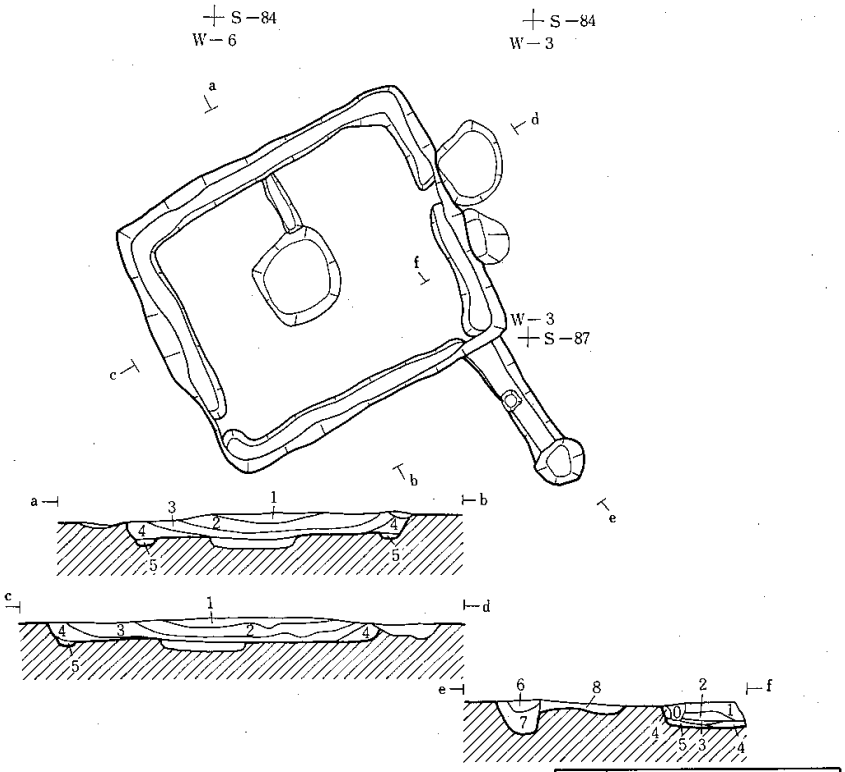
第11号住居跡

〔重複・規模・平面形〕　溝6と重複している。住居西壁は溝6によって切られ原形を留めていない。5.0×3.8mの長方形を呈する。



番号	層位	種類器形	分類	特徴	登録	残存
1	床	須恵器甕		外面：平行タタキ、ロクロナデ、内面：ロクロナデ	9住−22	−部

第23図　第9号住居跡出土土器(4)



※0：撹乱

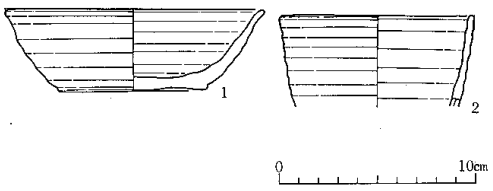
層位	層No	土色	土性	備考	遺物取り上げ層位
Ⅰ	1	灰白色(7.5YR 8/2)	火山灰		
Ⅱ	2	黒褐色(10YR 3/2)	シルト	灰白色火山灰ブロック混入	
	3	暗褐色 (10YR 3/3)	〃	灰白色火山灰、木炭多く混入	
Ⅲ	4	黒褐色(10YR 3/3)	〃	地山ブロック混入	
周溝内	5	黒褐色(10YR 3/3)	〃	地山多く混入	

1	住居Ⅲ層
2	明赤褐色 (7.5YR 3/2) シルト
3	赤褐色 (5YR 4/6) シルト
4	黒褐色 (7.5YR 3/2) シルト
5	黒色 (7.5YR 2/1) シルト
6	明褐色 (7.5YR 5/8) シルト
7	黒褐色 (7.5YR 3/1) シルト
8	黒褐色 (7.5YR 3/1) シルト

第24図　第10号住居跡

〔壁〕　地山を壁としている。残存する壁高は10〜20cmである。床面から立ち上がりは緩やかである。

〔床面〕　住居全域に掘り方がみられ、その埋土上面を床としている。壁沿いの掘り方は深く掘られている。面はほぼ平坦であるが、住居北東隅



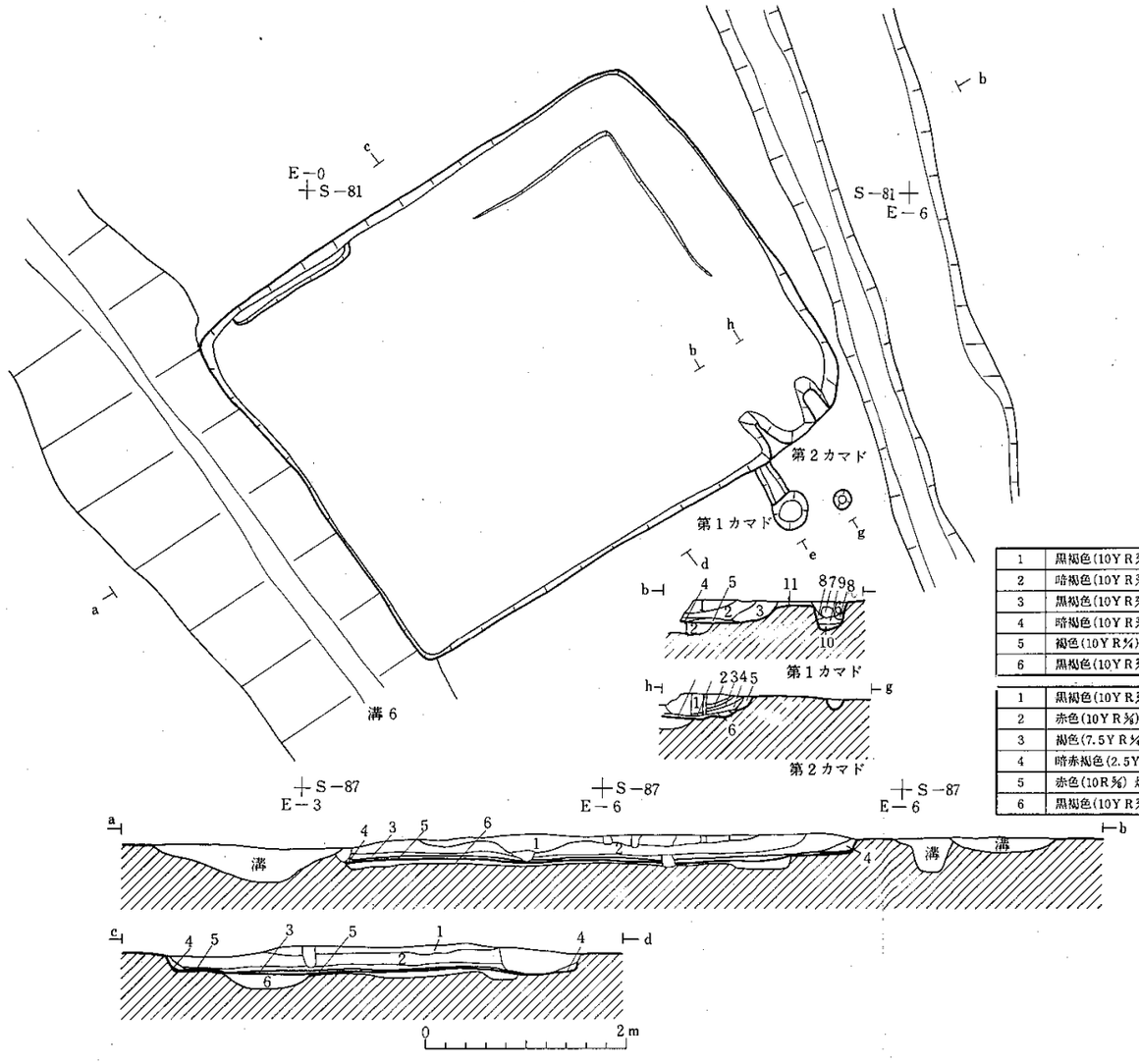
1．須恵器坏1層 内・外面：ロクロナデ、底部、回転糸切り、残½
2．須恵器、コップ形(？)、1層　内・外面：ロクロナデ

第25図　第10号住居跡出土土器

から南・西側に延びる幅約 50cm、高さ５～６cm のベット状の高まりがある。床面の全域に厚さ５cm の生活層がみられる。また、床面上では柱穴は不明である。
〔周溝〕　住居北壁沿いの一部に幅 15cm、深さ２～３cm のものがみられるにすぎない。
〔カマド〕　住居南辺の東寄り、南東隅近くに２基付設されている。煙道部のみ残存しているもの（第１カマド）、燃焼部側壁と煙出しピットが残存しているもの（第２カマド）とがある。前者の煙道部は地山をほぼ水平に掘り込んでつくられており、先端部には径約 30cm、深さ 30cm のピットがある。掘り込みは垂直である。後者の燃焼部側壁は粘土積み上げによってつくられている。底面には灰土が溜まり、しかも、底面の下には旧生活面があり、第１カマドより新しい段階のものと推定される。煙道部は確認されなかったが、奥壁から 70cm の所に径 20cm の煙出し状のピットがある。以上のようにカマドは２回つくり替えられている。
〔堆積土〕　３層認められる。第Ⅰ層は住居中央部に堆積している。第Ⅱ層は住居のほぼ全域に堆積している。第Ⅲ層は壁沿いに堆積している。
〔出土土器〕　図示できるものはない。全て破片でしかも量も少ない。その中には土師器甕の体部破片、須恵器甕の体部破片があり、土師器甕はロクロ使用のものである。

第 12 号住居跡

〔重複・規模・平面形〕　溝６と重複している。住居西壁の一部はこの溝によって切られている。3.7×3.3mの長方形を呈する。
〔壁〕　地山を壁としている。残存壁高は25～30cm である。床面からの立ち上がりは急である。
〔床面〕　住居のほぼ全域が５cm 前後の貼り床がされている。面は平坦であるが東側はやや高くなっている。床面上には２～３cm の生活層が住居全域にみられる。また、床面上から４個のピットが検出されたが柱穴は不明である。
〔周溝〕　カマド付設部分、北東・南西隅、南側の一部で途切れるが壁沿いに巡る。幅約 10～20cm、床面からの深さは約 10cm である。断面形は「U」字形を呈する。
〔カマド〕　住居東辺やや南寄りの所に付設されている。燃焼部は住居壁を外方にやや掘り込んでつくられており、残存する側壁は白色粘土を積み上げて構築され、内面は火熱を受け赤変している。底面は中央部がややくぼみ側壁と同様赤変している。煙道部とは約５cm の段を形成し区別している。煙道部は地山を掘り抜いてつくられ、底面は先端部に向かってやや傾斜している。先端部には径 45cm、深さ 60cm のピットがある。ピットの掘り込みは垂直である。
〔その他の施設〕　住居北東隅、カマドの左側に貯蔵穴状ピットがある。径約 50cm の円形を呈し床面からの深さは約 20cm ある。
〔堆積土〕　５層認められる。第Ⅰ層は部分的にみられる。第Ⅱ層は灰白色火山灰で住居中央部に堆積している。第Ⅲ・Ⅳ層は住居のほぼ全域に堆積している。第Ⅴ層は壁沿いに堆積して



第１カマド堆積土

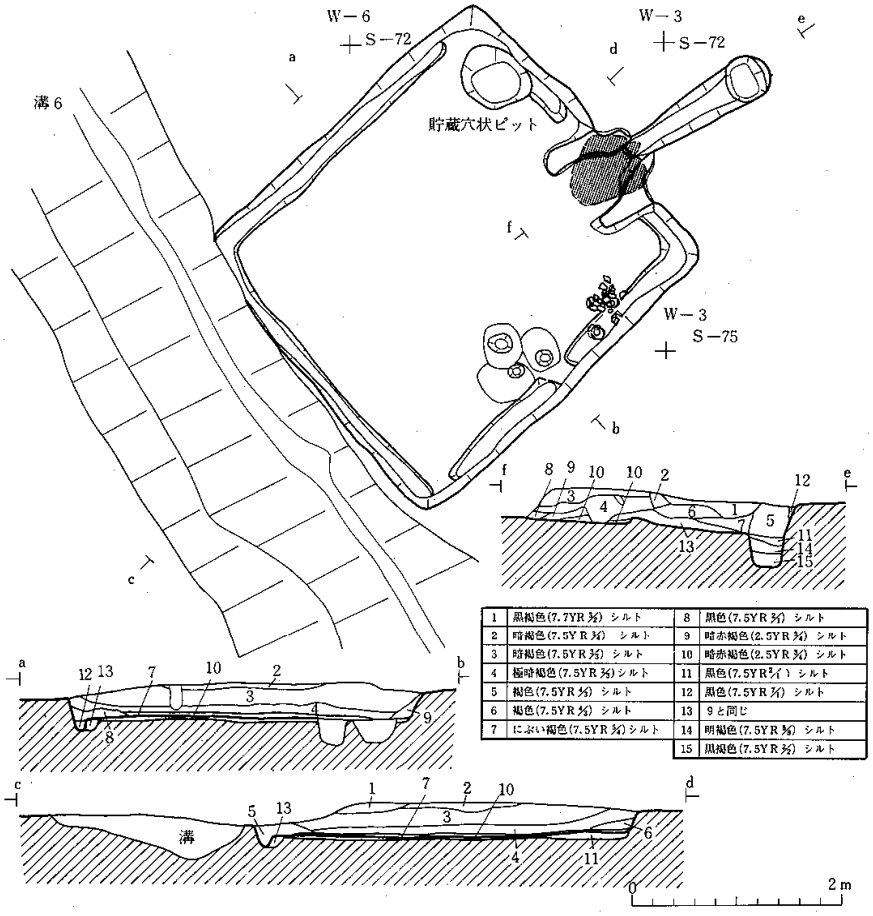
1	黒褐色(10Y R 3/2) シルト 住居ⅠP１	7	明黄褐色(2.5Y 7/6) 粘土
2	暗褐色(10Y R 3/3) シルト 〃 ⅡP１	8	黒褐色(10Y R 3/2) シルト
3	黒褐色(10Y R 3/2) シルト 〃 〃	9	暗褐色(7.5Y R 3/3)シルト 焼土
4	暗褐色(10Y R 3/3) シルト	10	黒褐色(10Y R 3/2) シルト
5	褐色(10Y R 4/4) シルト	11	暗褐色(10Y R 3/3) シルト
6	黒褐色(10Y R 3/2) シルト	12	黒褐色(10Y R 3/2) シルト

第２カマド堆積土

1	黒褐色(10Y R 3/2) シルト住ⅠR
2	赤色(10Y R 4/6) シルト 焼土
3	褐色(7.5Y R 4/4) シルト
4	暗赤褐色(2.5Y R 3/4) 灰土
5	赤色(10R 5/6) 焼土
6	黒褐色(10Y R 3/2) シルト

層位	層No.	土色	土性	備考	遺物取り上げ層位
Ⅰ	1	灰白色(7.5Y R 8/2)	火山灰		1層
Ⅱ	2	黒褐色(10Y R 3/2)	シルト	地山ブロック、木炭混入	2層
	3	暗褐色(10Y R 3/3)	〃	地山粒混入	〃
Ⅲ	4	黒褐色(10Y R 3/2)	〃	地山多く混入	4層
生活層	5	褐色(10Y R 4/4)	〃	地山粒混入	床面
掘り方埋土	6				

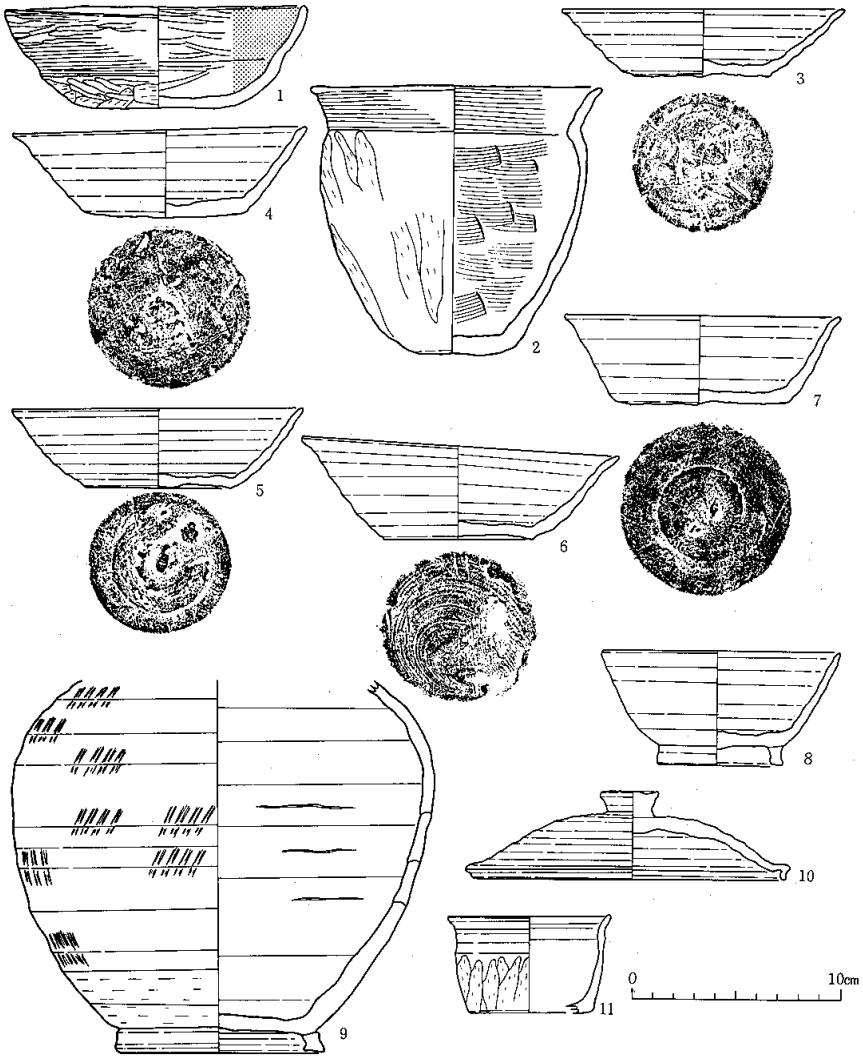
第26図　第11号住居跡



1	黒褐色(7.7YR 3/2) シルト	8	黒色(7.5YR 2/1) シルト
2	暗褐色(7.5YR 3/4) シルト	9	暗赤褐色(2.5YR 3/4) シルト
3	暗褐色(7.5YR 3/3) シルト	10	暗赤褐色(2.5YR 3/4) シルト
4	極暗褐色(7.5YR 2/3) シルト	11	黒色(7.5YR 2/1) シルト
5	褐色(7.5YR 4/3) シルト	12	黒色(7.5YR 2/1) シルト
6	褐色(7.5YR 4/4) シルト	13	9と同じ
7	にぶい褐色(7.5YR 5/4) シルト	14	明褐色(7.5YR 5/6) シルト
		15	黒褐色(7.5YR 2/2) シルト

層位	層No.	土色	土性	備考	遺物取り上げ層位
Ⅰ	1	暗褐色 (10YR 3/4)	シルト		
Ⅱ	2	灰白色 (7.5YR 8/2)	火山灰		1 層
Ⅲ	3	暗褐色 (7.5YR 3/4)	シルト		2 層
Ⅳ	4	黒色 (7.5YR 2/1)	〃	木炭、焼土混入	3 層
Ⅴ	5	黒褐色 (10YR 3/2)	〃	〃	
	6	黒褐色 (10YR 3/2)	〃	木炭混入	
生活層	7	黒色 (7.5YR 2/1)	〃	明褐色土粒子混入	4 層
Ⅴ	8	黒褐色 (7.5YR 3/2)	〃	明褐色土、木炭混入	
	9	褐色 (7.5YR 4/3)	〃	木炭少し混入	
貼り床	10	暗赤褐色 (5YR 3/4)	〃		
	11	暗褐色 (7.5YR 3/4)	〃		
周溝内	12	暗褐色 (7.5YR 3/4)	〃		
周溝掘り方	13	極暗褐色 (7.5YR 2/3)	〃	焼土、炭化物含む	

第27図　第12号住居跡



番号	層位	種類・器形	分類	特徴	登録	残存
1	床	土師器・坏	AⅢ1	外面：口縁部ヨコナデ、ヘラミガキ、胴部ヘラケズリ、ヘラミガキ、稜あり 内面：ヘラミガキ（横・斜）黒色処理、稜あり　口径14.5cm　器高 4.9cm	12住－1	¾
2	床	土師器・甕	AⅠ1bi	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ、底部木葉痕 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ　口径14.1cm　底径 4.0cm　器高13.0cm	12住－3	¾
3	床	須恵器・坏	AⅢ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部ヘラ切り 内面：ロクロナデ　口径13.6cm　底径 6.5cm　器高 3.3cm	12住－5	¾
4	床	須恵器・坏	BⅡ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部ヘラ切り 内面：ロクロナデ　口径14.2cm　底径 8cm　器高 4.2cm	12住－6	¾
5	床	須恵器・坏	AⅢ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ロクロナデ　口径15.4cm　底径 7.3cm　器高 4.5cm	12住－7	¾
6	カマド内	須恵器・坏	BⅡ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部ヘラ切り 内面：ロクロナデ　口径13.3cm　底径 8.5cm　器高 4.3cm	12住－8	¾
7	床	須恵器・坏	BⅠ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部ヘラ切り 内面：ロクロナデ　口径13.3cm　底径 8.5cm　器高 4.3cm	12住－4	¾
8	カマド内	須恵器高台付坏	B	外面：ロクロナデ、底部ヘラ切り？　内面：ロクロナデ　口径11.5cm	12住－9	¾
9	3層	須恵器・壺	A?	外面：平行タタキ、ロクロナデ、回転ヘラケズリ　内面：ロクロナデ	12住－11	口縁部欠
10	床	須恵器・蓋	D	外面：ロクロナデ、天井部ツマミあり　内面：ロクロナデ	12住－10	¾
11	2層	土師器？		外面：口～胴部ロクロナデ、胴下半部：手持ちヘラケズリ 内面：ロクロナデ　口径 8cm　器高 4.7cm	12住－2	½

第28図　第12号住居跡出土土器(1)

いる。自然流入土である。

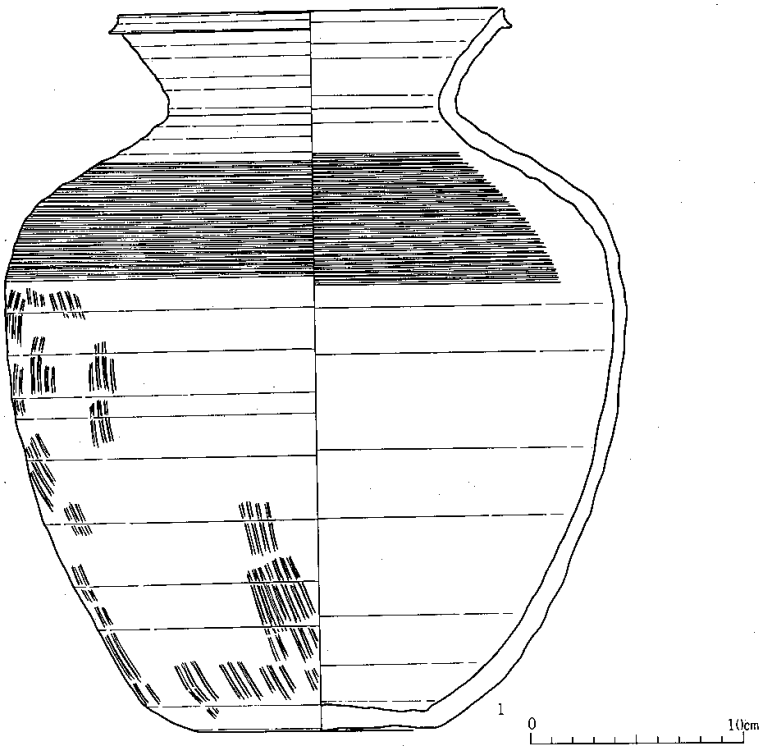
〔出土土器〕　図示したものは 12 点である。その内、床面上から土師器坏、甕各１点、須恵器坏４点、蓋、甕各１点出土している。また、カマド内からは須恵器坏、高台付坏が各１点出土している。これらの土器は住居内で共伴するものと考えられる。床面上出土の土師器坏はロクロ不使用のものである。その他、堆積土中から土師器坏１点、須恵器壺１点が出土している。

第 13 号住居跡

〔規模・平面形〕　6.0×5.9ｍの隅丸方形を呈す。各隅は丸味をもつ。削平、重複等はなく、保存状態は良好である。

〔壁〕　地山を壁としている。残存壁高は20～40cm である。床面からの立ち上がりは急である。

〔床面〕　大半は地山をそのまま床としているが、住居周壁沿いの幅約 40cm～1.2mの範囲に



番号	層位	種類・器形	分類	特徴	登録	残存
1	床	須恵器・甕	B 2	外面：口縁部ロクロナデ、胴部、回転刷毛目、平行タタキ、ロクロナデ、内面：ロクロナデ、回転刷毛目　器高34.2cm	12住―12	¾

第29図　第12号住居跡出土土器(2)

は掘り方がみられ、その埋土上面を床としている。面はほぼ平坦である。掘り方埋土上面の部分は地山に比してやや軟質である。

〔柱穴〕　床面を除去した段階で４個のピットを検出した。全てのピットには柱痕と掘り方の区別があり、規模・配置等に規則性がみられ柱穴と考えられる。これらのピットは住居の対角線上に位置し、結んだ線は住居平面形に相似する。

〔周溝〕　カマド付設部分、北壁の一部を除いた壁沿いに巡る。幅は約 15cm、床面からの深さは約５cm である。

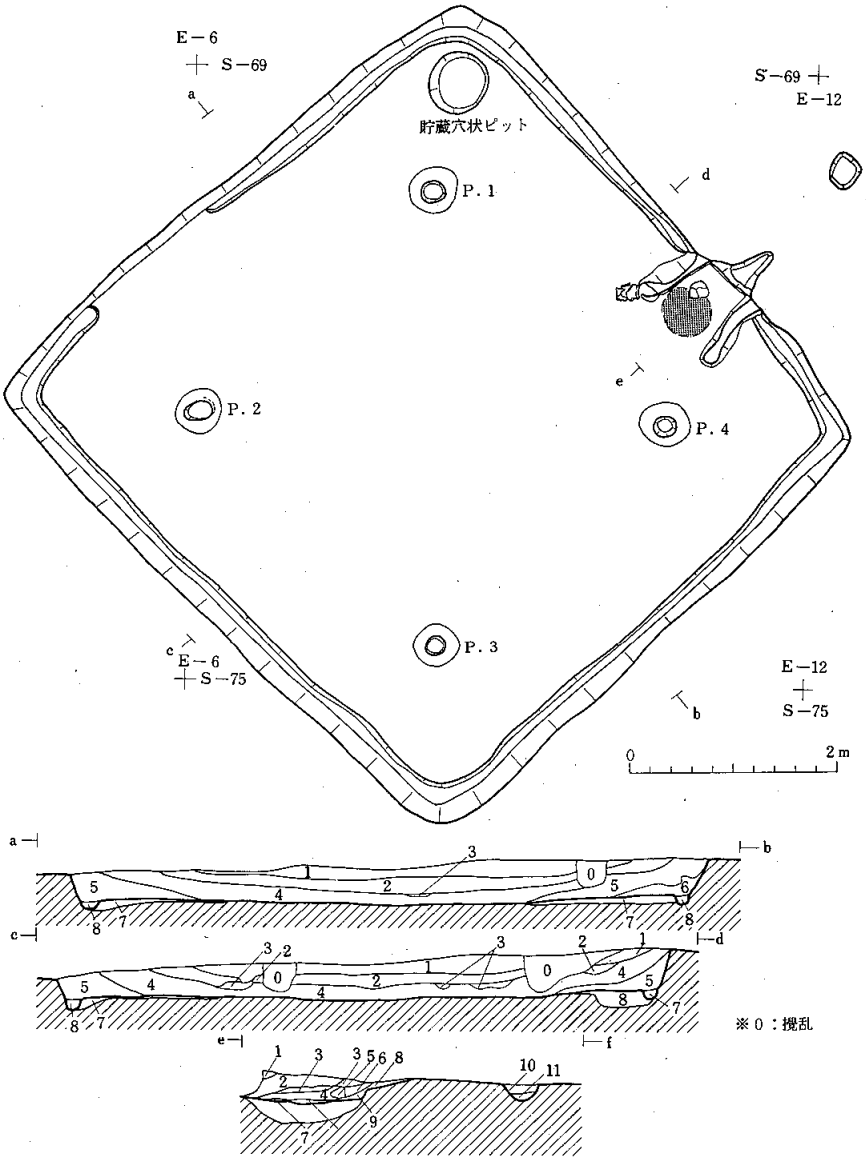
〔カマド〕　住居東辺のやや南寄りの所に付設されている。残存する燃焼部側壁は粘土積み上げによってつくられており、左側壁の先端部に土師器甕の破片が補強のためか置かれている。底面は床面より若干くぼみ舟底状を呈する。底面中央部及び側壁内面は火熱を受け赤変している。底面上には灰土、炭化物が多量に溜まっている。煙道部とは約 10cm の段を形成し区別している。煙道部は段から 50cm 外方に掘り込みがみられるがその他の部分にはみられない。また、

層　位	層 No.	土　色	土　性	備　考	遺物取り上げ層位
Ⅰ	1	黒色（7.5Y R 2/1）	シルト		1 層
Ⅱ	2	灰白色（7.5Y R 8/2）	火山灰		2 層
Ⅲ	3	明褐色（7.5Y R 5/6）	粘　土		3 層
	4	暗褐色（7.5Y R 3/4）	シルト		〃
Ⅳ	5	暗褐色（7.5Y R 3/4）	〃	地山粒子多く混入	〃
	6	赤褐色（2.5Y R 5/6）	〃	焼　土	4 層
掘り方埋土	7	黒褐色（7.7Y R 3/2）	〃	地山ブロック多く混入	
周　溝	8	暗褐色（7.5Y R 3/4）	〃	地山入る	

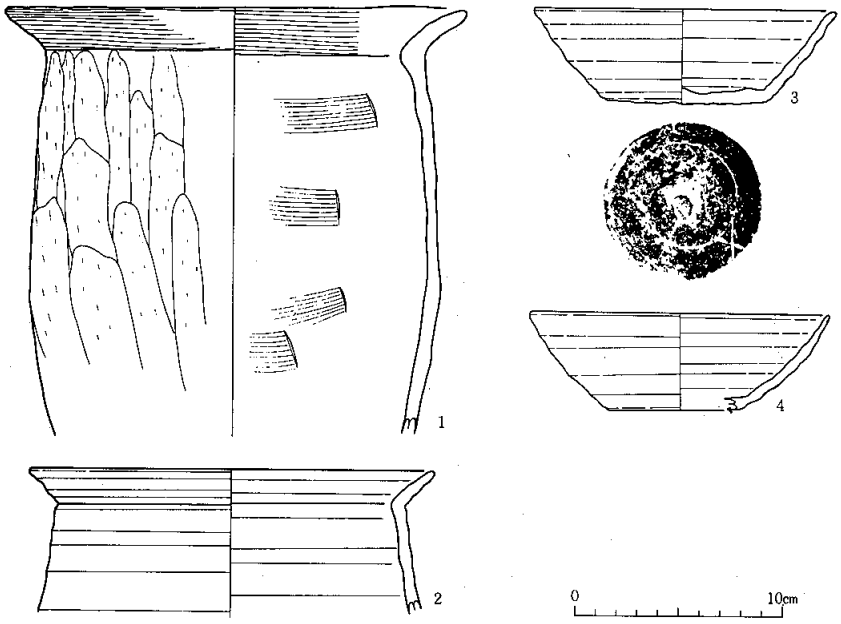
第13号住居跡堆積土

1	住居Ⅰ層	6	明褐色（7.5Y R 5/6）シルト
2	住居Ⅱ層	7	黒褐色（10Y R 1/3）シルト
3	にぶい橙色（7.5Y R 7/3）粘土	8	黒褐色（10Y R 2/1）シルト、焼土含む
4	にぶい褐色（7.5Y R 5/4）シルト	9	褐色（7.5Y R 4/4）シルト
5	赤色（10R 5/8）焼土塊	10	赤色（10R 4/8）焼土
		11	黒褐色（7.5Y R 2/3）シルト

第13号住居跡カマド内堆積土



第30図　第13号住居跡



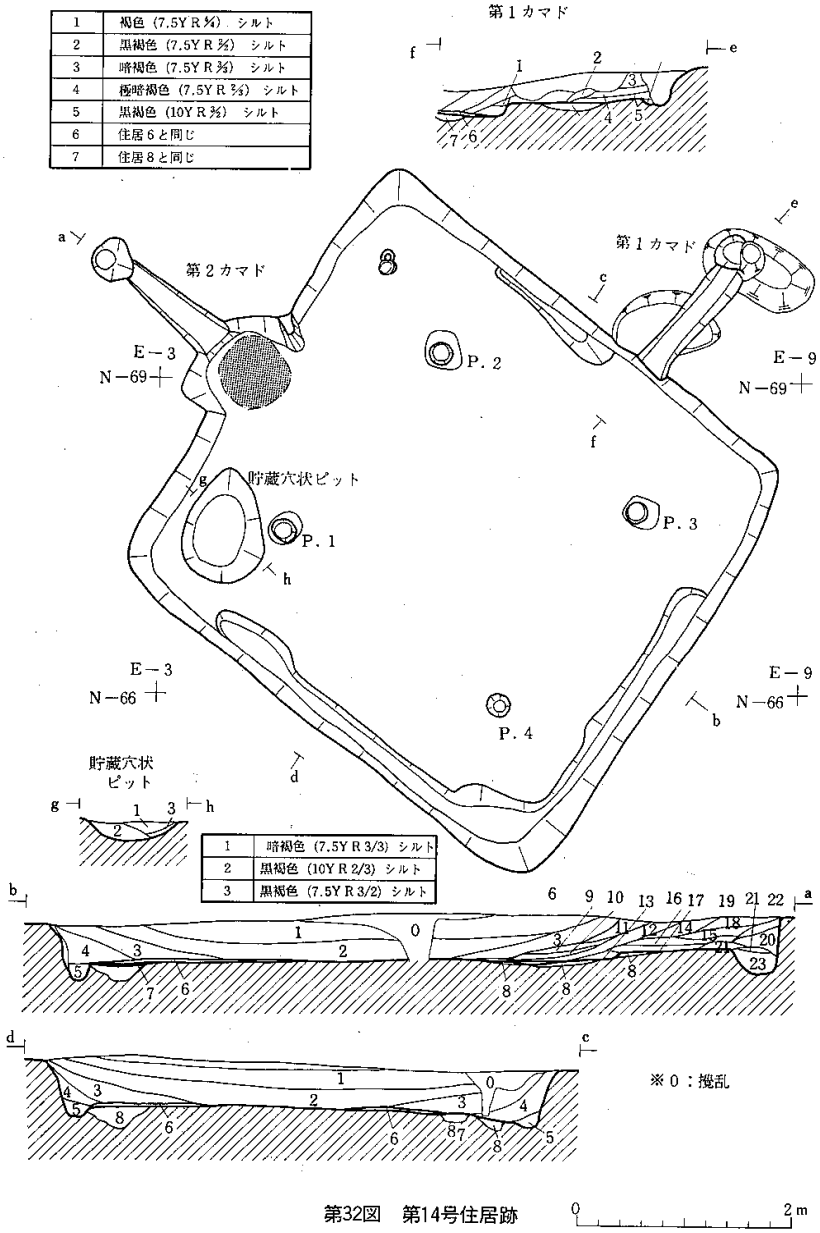
番号	層位	種類・器形	分類	特徴	登録	残存
1	カマド内	土師器・甕	A I 2	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ、内面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	13住－4	1/4
2	3 層	土師器・甕	B II 1？	外・内面：ロクロナデ	13住－5	一部
3	3 層	須恵器・坏	B II	外面：口～胴部ロクロナデ、底部ヘラ切り、内面：ロクロナデ　口径14.4cm、底径8.0cm、器高4.5cm	13住－1	1/4
4	3 層	須恵器・坏	B II？	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り？　内面：ロクロナデ	13住－2	1/4

第31図　第13号住居跡出土土器

段から 1.3m外方に径 35cm のピットがあり、煙出し状ピットと推定される。
〔その他の施設〕　住居北東隅に貯蔵穴状ピットがある。径 65cm の円形を呈し、床面からの深さは約 20cm である。
〔堆積土〕　４層認められる。第Ⅰ・Ⅱ層は住居ほぼ中央部に堆積している。第Ⅱ層は灰白色火山灰である。第Ⅲ層は住居全域、床面上まで堆積している。第Ⅳ層は住居南・西壁沿いに一部堆積しているにすぎない。自然流入土である。
〔出土土器〕　図示したものは４点である。その内、カマド側壁補強の土師器甕は住居に伴うものと思われる。その他、堆積土中から土師器甕１点、須恵器坏２点が出土している。

第 14 号住居跡

〔規模・平面形〕　4.8×4.5mの隅丸方形を呈する。カマド部分に若干の攪乱がみられるが、保存状態は良好である。
〔壁〕　地山を壁としている。残存する壁高は 35～40cm である。床面からの立ち上がりは急である。
〔床面〕　大半は地山をそのまま床としているが、住居壁沿いには掘り方がみられ、その埋土上面を床としている。しかも、東壁付近には厚さ約５cm の貼り床がされている。また、住居中央部を除いた部分には生活層がみられる。
〔柱穴〕　床面上から後述する貯蔵穴状ピットを除くと４個のピットが検出された。全てのピットには柱痕跡と掘り方の区別があり、規模、配置等に規則性がみられ、柱穴と考えられる。これらのピットは住居の対角線上に位置し、結んだ線は住居平面形に相似する。
〔周溝〕　住居南から西壁と東壁沿いの一部にみられる。全周はしない。幅約 20cm、床面からの深さは７～15cm で、断面形は「U」字状を呈する。
〔カマド〕　住居東辺南寄りの所と北辺中央部に２基付設されている。前者は第１カマド、後者を第２カマドとする。残存状況、カマド内堆積状況から第１カマドの方が第２カマドより古い段階のものである。第１カマド：燃焼部はわずかに掘り方のみが床面を除去した段階で確認されたにすぎず、また、周辺には使用時の焼土等はなく住居内堆積土が堆積している。煙道部との境には約 15cm の段が形成され区切りにしている。煙道部は地山をほぼ水平に掘り抜き、先端部にはピットがあるが攪乱のため規模等は不明である。煙道部の底面には薄く灰土が堆積している。第２カマド：燃焼部は住居壁より外方に約 30cm 掘り込んであるが残存する側壁は粘土積み上げによってつくられており、右側壁の一部のみ残存しているにすぎない。底面は住居床面よりやや低くなり、ほぼ全面が火熱を受け赤変している。煙道部とは約 10cm の段を形成し、区切っている。煙道部は地山を先端部に向かってやや上がるように掘り抜かれている。先端部には径約 40cm、深さ約 50cm の煙出し状ピットがある。



1	褐色（7.5Y R 4/4） シルト
2	黒褐色（7.5Y R 3/2） シルト
3	暗褐色（7.5Y R 3/3） シルト
4	極暗褐色（7.5Y R 2/3） シルト
5	黒褐色（10Y R 3/2） シルト
6	住居6と同じ
7	住居8と同じ

1	暗褐色（7.5Y R 3/3） シルト
2	黒褐色（10Y R 2/3） シルト
3	黒褐色（7.5Y R 3/2） シルト

第32図　第14号住居跡　0　2m

〔その他の施設〕　住居北西隅、第２カマドの左側に貯蔵穴状ピットがある。径約80cm の円形を基調とし床面からの深さは約 20cm である。

〔堆積土〕　４層認められる。第Ⅰ、Ⅱ層は住居全域に堆積している。第Ⅱ層は住居中央部で床面上まで堆積している。第Ⅲ、Ⅳ層は住居壁沿いに堆積している。自然流入土である。

〔出土土器〕　図示したのは５点である。その内、床面上からは土師器甕、須恵器坏、蓋各１点出土している。また、カマド内から土師器甕が出土している。これらの土器は、住居内で共伴すると考えられる。その他、堆積土中から須恵器坏１点が出土している。

第 15 号住居跡

〔残存・規模・平面形〕　住居北東隅が攪乱のため一部残らない。4.6×4.5cm のほぼ方形を呈するが東西にやや長い。

〔壁〕　地山を壁としている。残存する壁高は約 20～25cm である。床面からの立ち上がりは東壁以外急である。

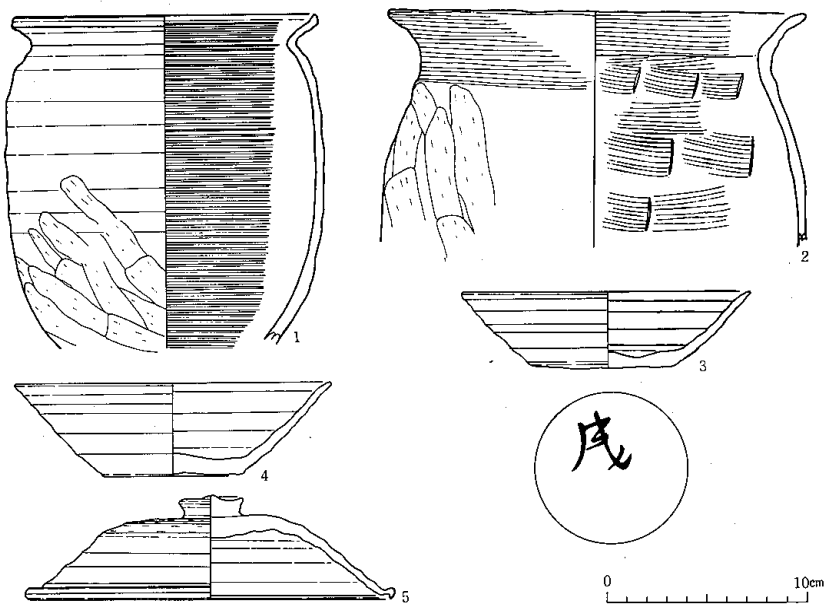
〔床面〕　大半は地山をそのまま床としているが、住居周辺には掘り方がみられ、その埋土上面を床としている。全体的には住居南、西側に若干傾斜している。

〔柱穴〕　床面上から合計６個のピットが検出された。その内、Ｐ．１～Ｐ．４は形態・規模・配置等から柱穴と考えられる。これらピットを結んだ線は四角形を呈し、住居平面形に相似するが住居内でやや南寄りである。

〔周溝〕　カマドが付設されている部分、攪乱のある部分を除いて住居壁沿いに巡る。幅は東壁沿いのものは約 25cm と広く、他は 10cm 前後である。床面からの深さは約 10～15cm であり、断面形は「U」字状を呈する。

第14号住居跡堆積土

層位	層No	土色	土性	備考	遺物取り上げ層位
Ⅰ	1	黒褐色（10Y R 3/2）	シルト	暗褐色土ブロック状に含む	1層
Ⅱ	2	黒褐色（7.5Y R 3/2）	シルト	明褐色土粒子含む	2層
Ⅲ	3	黒褐色（10Y R 3/2）	シルト		3層
Ⅳ	4	黒褐色（7.5Y R 3/2）	シルト		4層
周溝内	5	明褐色（7.5Y R 3/2）	シルト		
生活層	6	黒褐色（7.5Y R 3/2）	シルト		
貼り床	7	黒褐色（10Y R 3/2）	シルト	粘性あり、しまっている	
掘り方	8	暗褐色（7.5Y R 3/2）	シルト	地山ブロック入る	
カマド内	9	褐褐色（7.5Y R 5/2）	シルト	天井部崩壊土	4層
	10	黒色（10Y R 3/2）	シルト		
	11	褐色（10Y R 5/4）	シルト	天井部崩壊土	
	12	暗褐色（10Y R 3/3）	シルト		
	13	暗褐色（7.7.5Y R 3/3）	シルト		
	14	黒色（7.5Y R 3/1）	シルト	焼土ブロック含む	
	15	暗褐色（7.5Y R 3/3）	シルト	焼土粒子含む	
	16	赤褐色（5Y R 5/6）	シルト		
	17	暗褐色（7.5Y R 3/4）	シルト		
	18	黒褐色（7.5Y R 3/2）	シルト		
	19	明赤褐色（5Y R 5/6）	シルト		
	20	暗褐色（10Y R 3/3）	シルト	地山ブロック状に入る	
	21	極暗褐色（7.5Y R 3/3）	シルト	焼土ブロック含む	
	22	黒色（10Y R 3/1）	シルト		
	23	暗褐色（7.5Y R 3/3）	シルト		



番号	層位	種類・器形	分類	特徴	登録	残存
1	床	土師器・甕	ＢⅠ２	外面：口～胴部ロクロナデ、胴下半部ヘラケズリ、内面：口～胴部回転刷毛目	14住－１	底部欠
2	カマド内	土師器・甕	ＡⅠ１ａｉｉ	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ、内面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	14住－２	一部
3	床	須恵器・坏	ＡⅢ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部手持ちヘラケズリ、「戊」の墨書、内面：ロクロナデ 口径14.5cm、底径7.3cm、器高3.5cm	14住－６	½
4	２層	須恵器・坏	ＢⅡ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部ヘラ切り、内面：ロクロナデ 口径15.9cm、底径7.1cm、器高4.8cm	14住－４	½
5	床	須恵器・蓋	Ｄ	外面：天井部回転ヘラケズリ、宝珠状ツマミあり、口縁部ロクロナデ、内面：ロクロナデ	14住－５	½

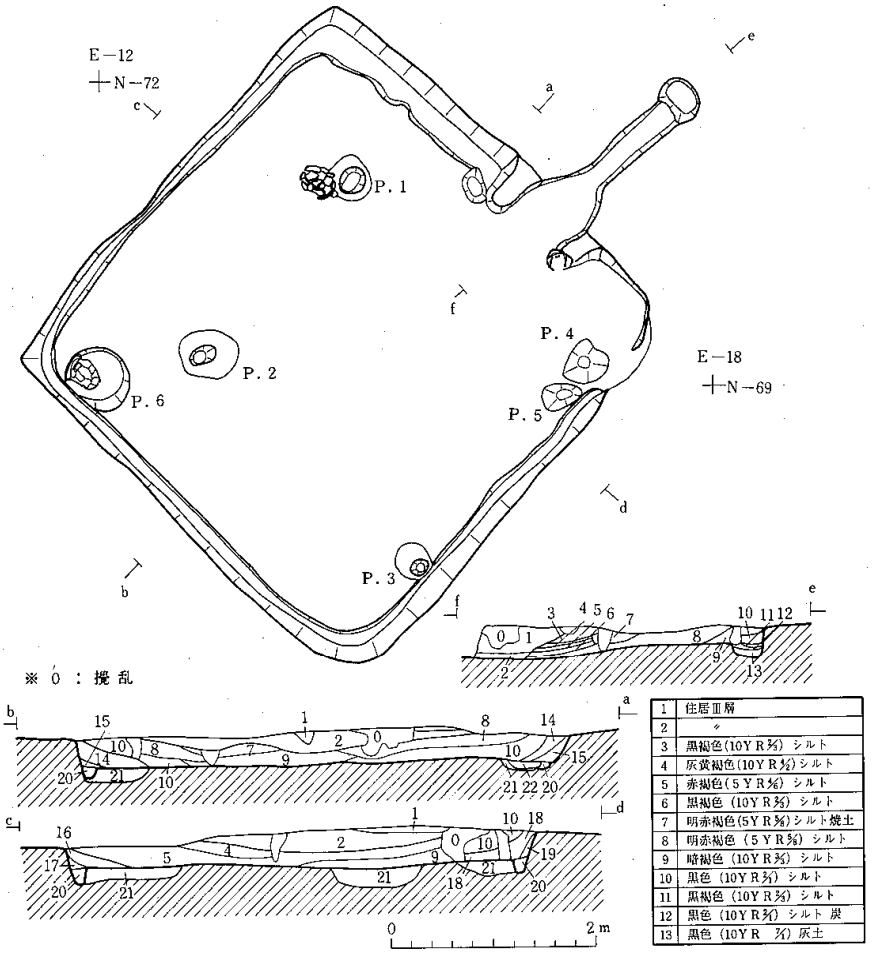
第33図　第14号住居跡出土土器

〔カマド〕　住居東辺南寄りの所に付設されている。残存する燃焼部側壁は粘土積み上げによってつくられており、右側壁の先端には補強のため土師器甕が倒置されている。底面は中央部でややくぼみ上方に次第に上がり、煙道部へと連続するがその境は明確でない。煙道部は地山をほぼ水平に掘り抜いてつくられており、先端部には径 25cm、深さ 25cm のピットがある。

〔その他の施設〕　住居北西隅に貯蔵穴状ピット（Ｐ６）がある。径 70cm、床面からの深さは約 15cm である。

〔堆積土〕　４層認められる。第Ⅰ層は部分的にみられるにすぎない。第Ⅱ層は灰白色火山灰で住居中央部から周壁近くまで堆積している。第Ⅲ層は住居全域、床面上にまで堆積している。第Ⅲ層は壁沿いに堆積している。自然流入土である。

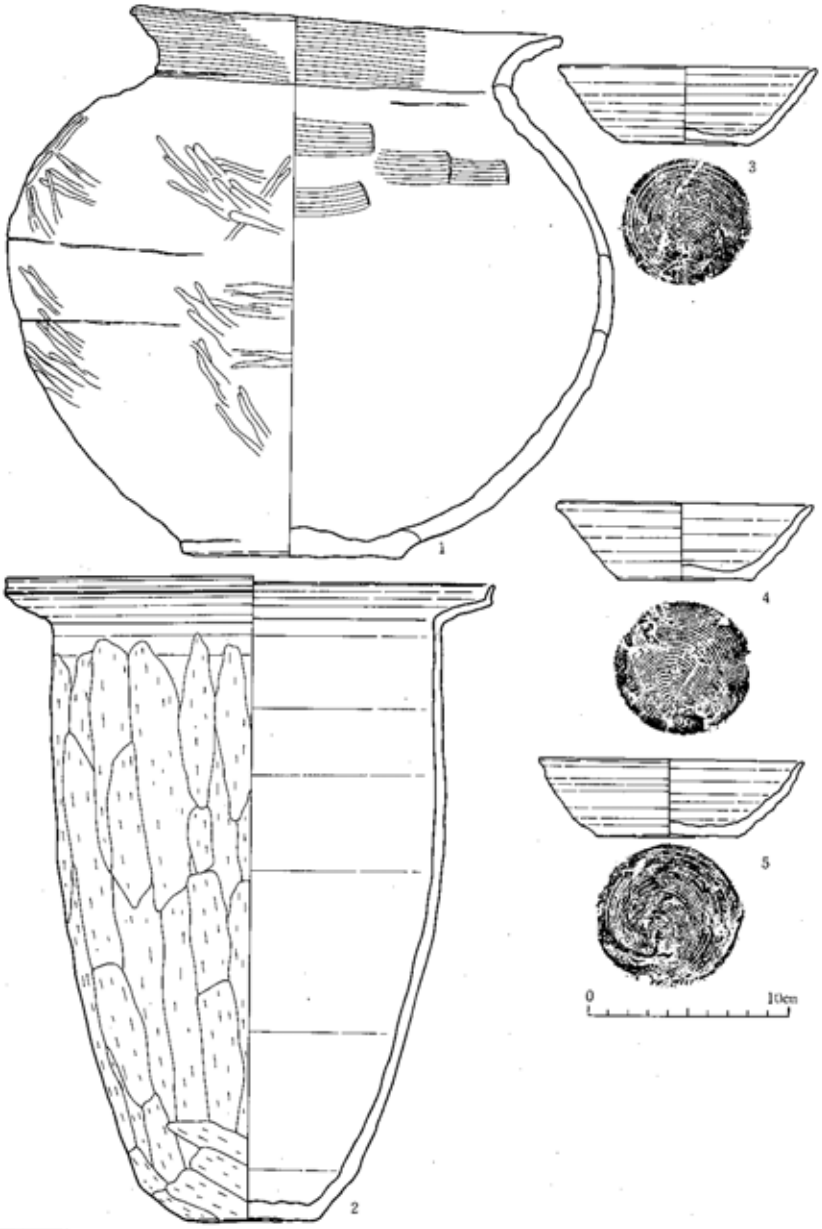
〔出土土器〕　図示したものは15 点である。その内、土師器甕１点、須恵器坏３点、カマド内から土師器甕２点、須恵器坏３点、カマド燃焼部側壁補強用としての土師器甕２点、P. ４内から須恵器１点、貯蔵穴状ピットから土師器甕１点が各々出土している。これらの土器は住居内で



1	住居Ⅲ層
2	〃
3	黒褐色(10YR3/3) シルト
4	灰黄褐色(10YR4/2)シルト
5	赤褐色(5YR4/6) シルト
6	黒褐色 (10YR3/3) シルト
7	明赤褐色(5YR5/6)シルト焼土
8	明赤褐色 (5YR5/6) シルト
9	暗褐色 (10YR3/3) シルト
10	黒色 (10YR3/1) シルト
11	黒褐色 (10YR3/3) シルト
12	黒色 (10YR3/1) シルト 炭
13	黒色 (10YR 3/1) 灰土

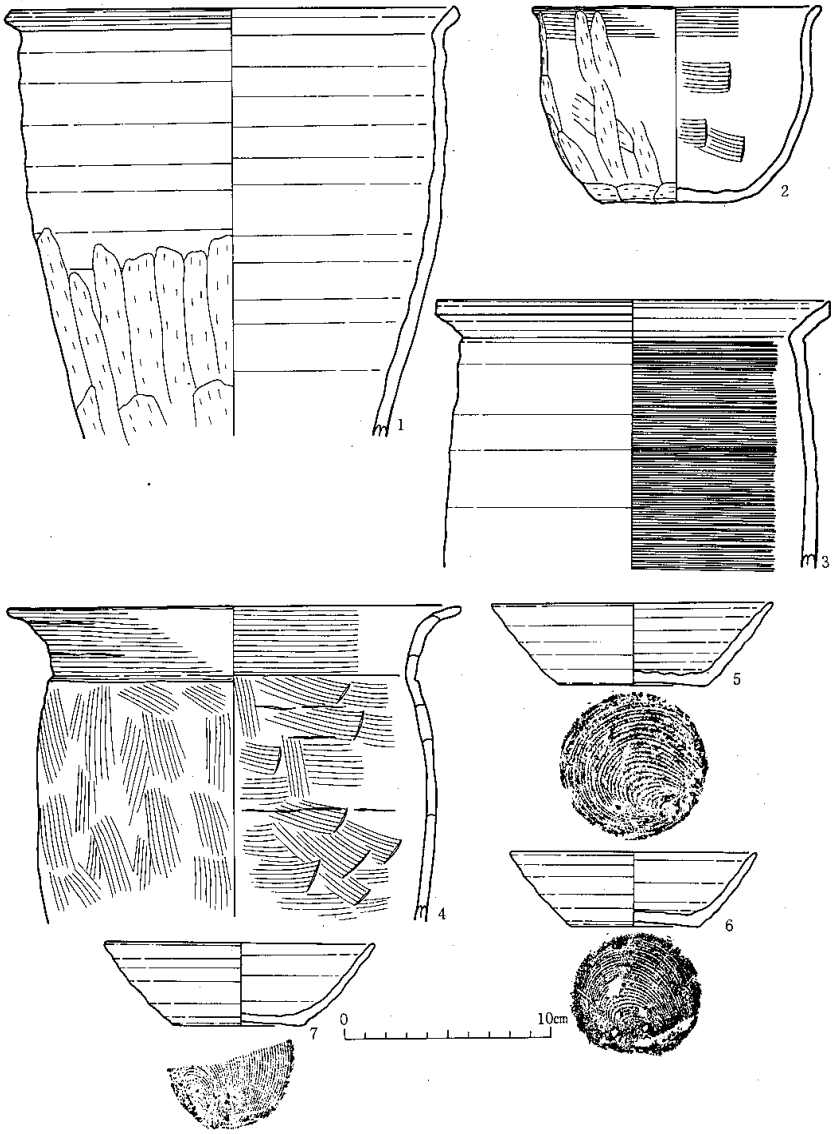
層位	層No.	土色	土性	備考	遺物取り上げ層位
Ⅰ	1	黒色 (7.5YR3/2)	シルト		1 層
Ⅱ	2	灰黄色 (2.5YR7/2)	〃		2 層
Ⅲ	3	黒褐色 (10YR3/2)	〃		3 層
	4	黒褐色 (10YR3/3)	〃		〃
	5	暗褐色 (7.5YR3/3)	〃	焼土粒混入	〃
	6	黒褐色 (10YR3/2)	〃	木炭粒多く混入	〃
	7	暗褐色 (10YR3/3)	〃		〃
	8	黒褐色 (10YR3/2)	〃		〃
	9	黒褐色 (7.5YR3/2)	〃	木炭多く混入	〃
	10	暗褐色 (10YR3/3)	〃		〃
	11	黒褐色 (7.5YR3/2)	〃		〃
Ⅳ	12	黒褐色 (10YR3/2)	〃	地山混入	
	13	明黄褐色 (10YR6/6)	〃	地山多く混入	
	14	黒褐色 (10YR3/2)	〃		
	15	明黄褐色 (10YR6/6)	〃	地山多く混入	
	16	黒褐色 (10YR3/2)	〃		
	17	黒褐色 (10YR3/2)	〃	地山粒混入	
	18	黒色 (10YR2/1)	〃		
	19	明黄褐色 (10YR6/6)	〃	地山多く混入	
周溝内	20	明黄褐色 (10YR6/6)	〃	地山多く入る	
掘り方埋土	21	暗褐色 (7.5YR3/4)	〃		
Pit	22	褐色 (7.5YR4/6)	〃		

第34図　第15号住居跡



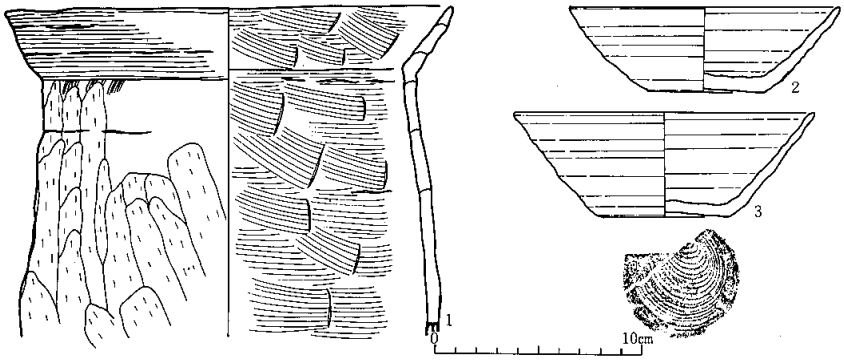
番号	層位	種類・器形	分類	特徴	法量	登録	保存
1	床	土師器・甕	AEIa II	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ下ヘラミガキ 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	口径21.4cm 器高27.6cm	15住－12	外
2	P．6	土師器・甕	BII2	外面：口縁部ロクロナデ、胴部ヘラケズリ 内面：ロクロナデ	口径24.5cm 器高32.5cm	15住－17	外
3	床	須恵器・坏	C	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ロクロナデ	口径13.0cm 底径 6.5cm 器高 4.0cm	15住－1	外
4	P．4	須恵器・坏	BII	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ロクロナデ	口径17.9 底径 6.8cm 器高 4.0cm	15住－2	外
5	床	須恵器・坏	BI	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ロクロナデ	口径13.2cm 底径 7.3cm 器高 4.0cm	15住－5	外

第35図　第15号住居跡出土土器(1)



番号	層位	種類・器形	分類	特徴	登録	残存
1	カマド	土師器・甕	B Ⅱ 2	外面：口～胴部、ロクロナデ、胴下半部ヘラケズリ、内面：ロクロナデ	15住－13	½
2	3 層	土師器・甕	A Ⅰ 1bii	外面：口縁部ヨコナデ、ヘラケズリ、胴部ヘラケズリ、内面：口縁部ヨコナデ、ヘラナデ	15住－10	¼
3	カマド	土師器・甕	B Ⅱ 2	外面：ロクロナデ、内面：口縁部ロクロナデ、胴部回転刷毛目	15住－11	一部
4	カマド	土師器・甕	A Ⅰ 1ai	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ナデ、内面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	15住－14	一部
5	カマド	須恵器・坏	B Ⅱ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ロクロナデ　口径13.7cm、底径7.3cm、器高4.1cm	15住－4	⅔
6	床	須恵器・坏	B Ⅱ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ロクロナデ　口径12.0cm、底径6.4cm、器高3.6cm	15住－7	⅔
7	カマド	須恵器・坏	C	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ロクロナデ　口径13.1cm、底径6.3cm、器高4.1cm	15住－6	½

第36図　第15号住居跡出土土器(2)



番号	層位	種類・器形	分類	特徴	登録	残存
1	カマド	土師器・甕	AⅠ1aii	外面：口縁部ヨコナデ、胴部刷毛目ヘラケズリ　内面：ヘラナデ	15住－15	½
2	不明	須恵器・坏	BⅡ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ロクロナデ　口径13.0cm 底径5.5cm 器高4.1cm	15住－3	¾
3	3層	須恵器・坏	C	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ロクロナデ　口径14.5cm 底径6.5cm 器高5.1cm	15住－8	½

第37図　第15号住居跡出土土器(3)

共伴するものと考えられる。その他、堆積土中から土師器甕、須恵器坏各１点が出土している。

第16号住居跡

〔規模・平面形〕　3.5×3.4mのほぼ方形を呈し、南壁がやや脹らむ。

〔壁〕　地山を壁としている。残存する壁高は約35～40cmである。床面からの立ち上がりはやや急である。

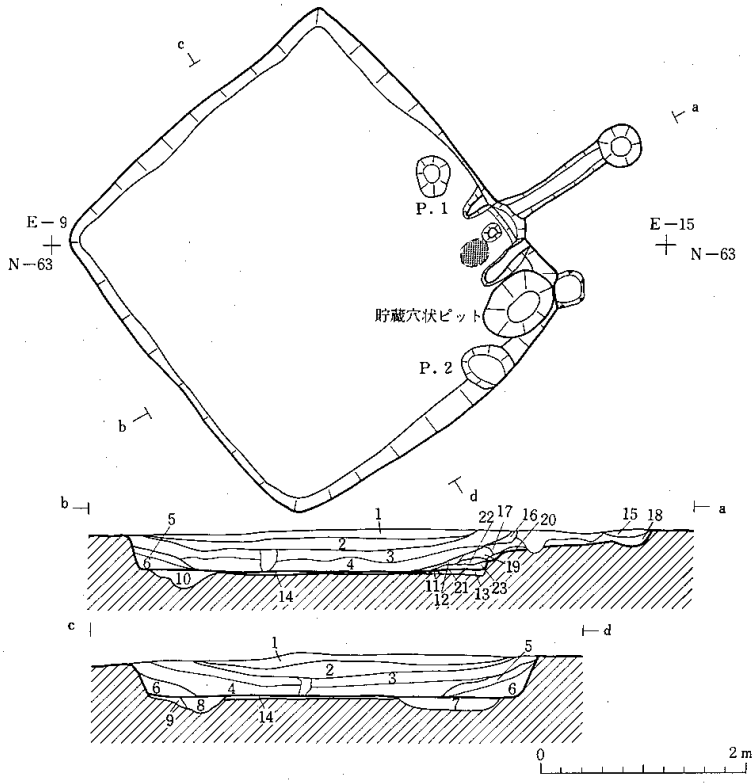
〔床面〕　住居中央部は厚さ約２～５cmの貼り床がされ、東側部分を除いた周壁沿いには掘り方がみられ、その埋土上面を床としている。面は平坦である。床面上及び床面を除去した段階で柱穴、周溝は認められない。

〔カマド〕　住居東辺南寄りの所に付設されている。残存する燃焼部側壁は白色粘土を積み上げてつくられている。底面は平坦で、中央部には地山を削り出してつくった高さ７cm、径15cmの高まりがあり支脚痕と推定される。また、この支脚痕に接して西側には火熱を受け赤変している部分がある。煙道部との境には約10cmの段が形成されて区切りにしている。煙道部は地山を先端部に向かって上がるように掘り抜かれてつくられている。先端部には径40cm、深さ15cmのピットがある。

〔その他の施設〕　住居南東隅、カマドの右側に貯蔵穴状ピットがある。75×50cmの楕円形を呈し、床面からの深さは約20cmである。

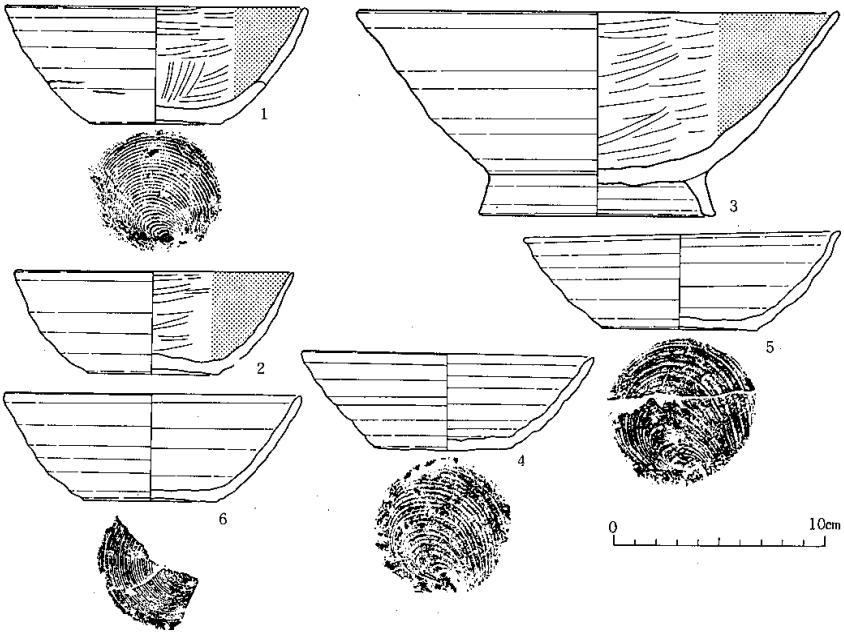
〔堆積土〕　４層認められる。第Ⅰ・Ⅱ層は住居中央部から周壁近くまで堆積しており、第Ⅲ層は住居全域、床面上まで堆積している。第Ⅳ層は壁沿いに堆積している。

〔出土土器〕　図示したものは６点である。その内、カマド内から土師器坏、高台付鉢、須恵器坏が各１点ずつ出土しており、貯蔵穴状ピット内から土師器坏、須恵器坏が各１点ずつ出土している。また、Ｐ．１からは須恵器坏１点が出土している。



層位		層No	土色	土性	備考	遺物取り上げ層位
Ⅰ		1	黒色（7.5Y R 2/2）	シルト		1層
Ⅱ		2	灰黄色（7.5Y R 3/2）	シルト		2層
Ⅲ		3	暗褐色（7.5Y R 3/4）	シルト		3層
		4	黒褐色（10Y R 3/2）	シルト		3層
Ⅳ		5	極暗褐色（7.5Y R 2/3）	シルト	焼土粒小し混入	4層
		6	暗褐色（7.5Y R 3/3）	シルト	地山粒多く混入	4層
掘り方埋土		7	褐色（10Y R 4/4）	シルト		
		8	黄褐色（10Y R 5/8）	シルト		
		9	暗褐色（10Y R 3/4）	シルト		
		10	明黄褐色（10Y R 7/6）	シルト		
	掘りカマド方	11	暗赤褐色（5 Y R 3/6）	シルト		
		12	にぶい赤褐色（5 Y R 4/4）	シルト		
		13	暗赤褐色（5 Y R 3/6）	シルト		
貼り床		14	にぶい黄褐色（10Y R 5/4）	シルト		
カマド内		15	暗褐色（7.5Y R 3/3）	シルト	焼土粒わずかに混入	
		16	褐色（7.5Y R 4/4）	シルト	焼土粒わずかに混入	
		17	黒褐色（7.5Y R 3/3）	シルト	焼土粒わずかに混入	
		18	黒褐色（7.5Y R 3/4）	シルト	木炭、焼土粒少し混入	
		19	灰褐色（7.5Y R 5/2）	シルト	木炭、焼土粒多く混入	
		20	褐色（7.5Y R 4/4）	シルト	焼土粒混入	
		21	褐色（7.5Y R 4/3）	シルト	焼土粒混入	
		22	褐色（7.5Y R 4/6）	シルト	焼土粒混入	
		23	明褐色（7.5Y R 5/6）	シルト	焼土粒混入	

第38図　第16号住居跡



番号	層位	種類・器形	分類	特徴	登録	残存
1	貯蔵穴状ピット	土師器・坏	BⅠ	外面：口～胴部ロクロナデ、積み上げ痕あり、底部回転糸切り 内面：ヘラミガキ（横・斜）　口径14.4cm　底径 6.3cm　器高 5.0cm	16住－1	½
2	カマド	土師器・坏	BⅠ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ヘラミガキ（横・斜）　口径13.3cm　底径 6.3cm　器高 5.0cm	16住－2	½
3	カマド	土師器・鉢	B	外面：口～台部ロクロナデ　内面：ヘラミガキ(横・斜)黒色処理　口径23.2cm	16住－5	¾
4	カマド	須恵器・坏	BⅡ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り　内面：ロクロナデ　口径14.1cm　底径6.9cm　器高5.2cm	16住－4	½
5	貯蔵穴状ピット	須恵器・坏	BⅡ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り　内面：ロクロナデ　口径13.3cm　底径6.6cm　器高4.9cm	16住－3	¾
6	Pit2	須器器坏	BⅡ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り　内面：ロクロナデ　口径15.1cm　底径7.5cm　器高4.8cm	16住－6	¾

第39図　第16号住居跡出土土器

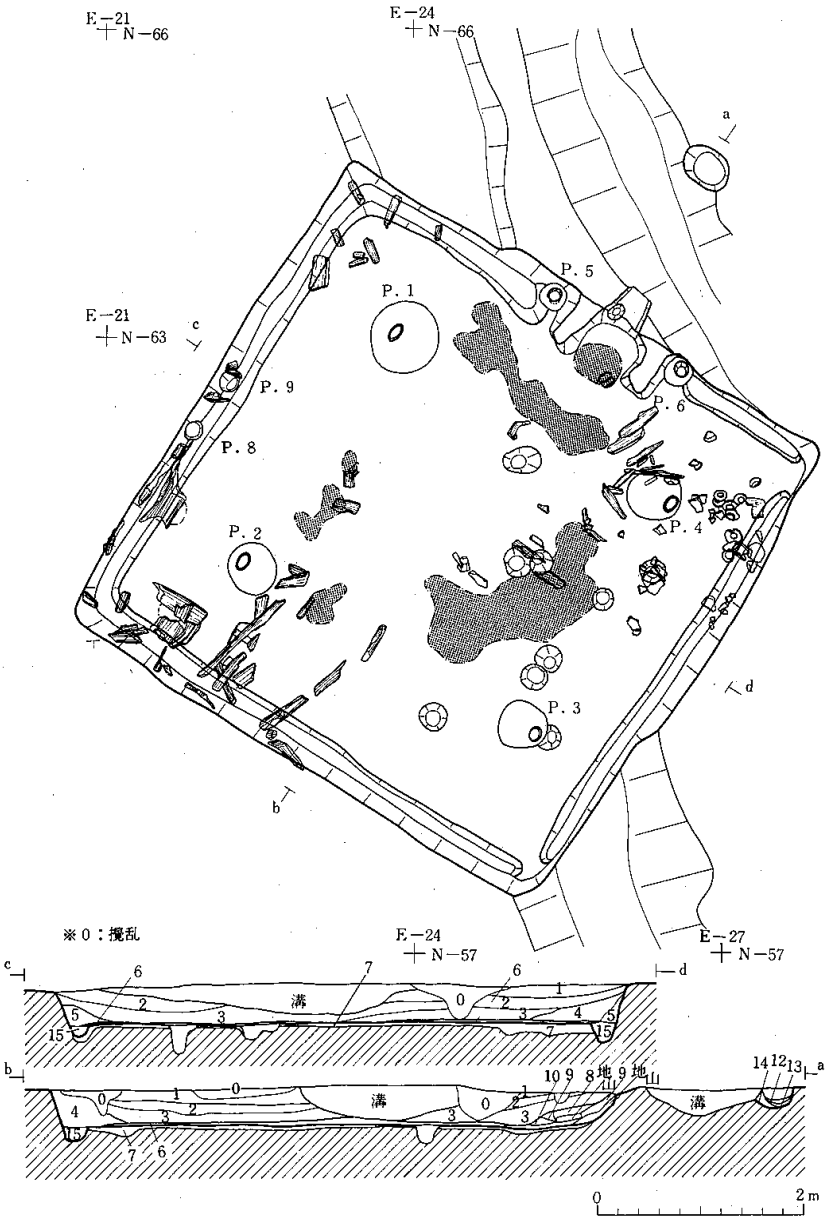
第17号住居跡堆積土

層位	層No	土色	土性	備考	遺物取り上げ層位
Ⅰ	1	黒褐色（7.5YR3/2）	シルト		1　層
Ⅱ	2	暗褐色（7.5YR3/3）	〃		2　層
	3	極暗褐色（7.5YR2/3）	〃	木炭、焼土粒多く混入	3　層
Ⅲ	4	暗褐色（7.5YR3/4）	〃	地山粒混入	4　層
	5	黒褐色（7.5YR3/1）	〃	木炭多く混入	〃
生活層	6	黒褐色（7.5YR3/2）	〃		床　面
掘り方	7	明褐色（7.5YR5/6）	粘土		
カ	8	暗褐色（7.5YR3/3）	シルト	焼土混入、天井崩落土	
	9	暗褐色（7.5YR3/4）	〃		
マ	10	暗赤褐色（2.5YR3/4）	〃	灰土	
ド	11	暗褐色（7.5YR3/3）	〃	木炭混入	
	12	黒色（7.5YR1.7/1）	炭		
内	13	黒褐色（7.5YR3/2）	シルト	木炭混入	
	14	極暗褐色（7.5YR2/3）	〃	地山多く混入	
周溝内	15	暗褐色（7.5YR3/4）	〃	地山多く混入	

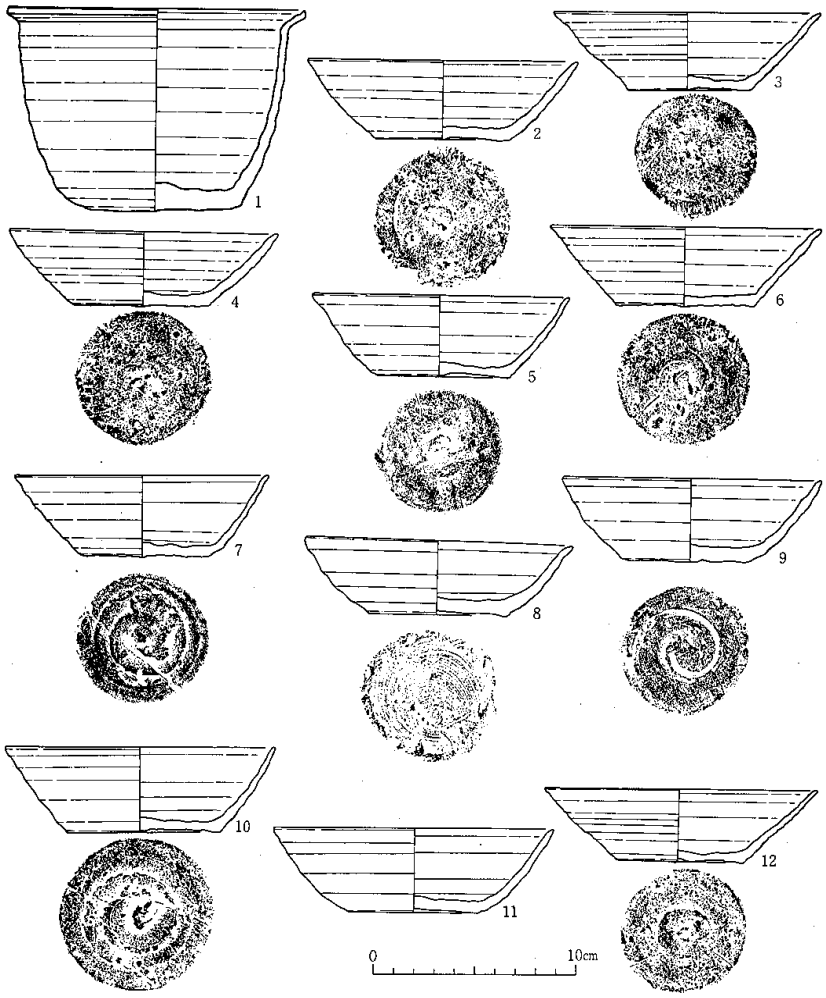
これらの土器は住居内で共伴するものと考えられる。土師器坏は全てロクロ使用のものである。

第 17 号住居跡

〔重複・規模・平面形〕　溝と重複し切られている。特に、カマド煙道部の大半は残存しない。

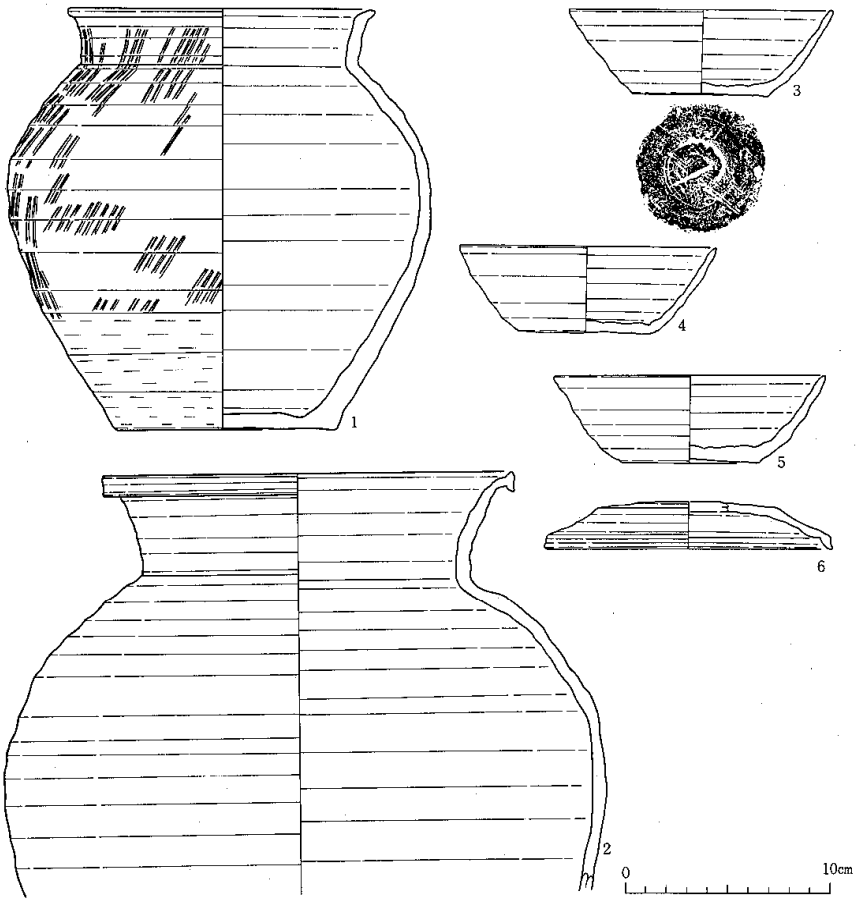


第40図　第17号住居跡



番号	層位	種類・器形	分類	特	徴	登録	残存
1	カマド	土師器・甕	BⅠ1	外面：ロクロナデ、底部ヘラケズリ、内面：ロクロナデ	口径14.7cm、器高10cm	17住—16	3/4
2	床	須恵器・坏	BⅡ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部ヘラ切り、内面：ロクロナデ	口径13.2cm、底径6.7cm、器高4.0cm	17住—1	3/4
3	床	須恵器・坏	BⅡ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部ヘラ切り、内面：ロクロナデ	口径13.2cm、底径6.0cm、器高3.9cm	17住—2	1/4
4	床	須恵器・坏	AⅢ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部ヘラ切り、内面：ロクロナデ	口径13.2cm、底径6.7cm、器高3.8cm	17住—3	3/4
5	床	須恵器・坏	BⅡ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部ヘラ切り、内面：ロクロナデ	口径12.6cm、底径6.6cm、器高4.0cm	17住—4	3/4
6	床	須恵器・坏	BⅡ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部ヘラ切り、内面：ロクロナデ	口径13.4cm、底径6.8cm、器高4.0cm	17住—5	3/4
7	床	須恵器・坏	BⅡ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部ヘラ切り、内面：ロクロナデ	口径12.5cm、底径6.3cm、器高4.1cm	17住—6	3/4
8	床	須恵器・坏	AⅢ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ロクロナデ	口径13.2cm、底径6.7cm、器高3.8cm	17住—8	1/4
9	床	須恵器・坏	BⅠ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部ヘラ切り、手持ちヘラケズリ、内面：ロクロナデ	口径12.7cm、底径6.2cm、器高4.1cm	17住—9	1/4
10	カマド	須恵器・坏	BⅠ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部ヘラ切り、内面：ロクロナデ	口径13.4cm、底径7.5cm、器高4.3cm	17住—7	1/4
11	床	赤焼坏		外面：口～胴部ロクロナデ、底部手持ちヘラケズリ、内面：ロクロナデ	口径13.8cm、底径6.5cm、器高4.2cm	17住—17	1/4
12	3層	須恵器・坏	AⅢ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部ヘラ切り、内面：ロクロナデ	口径13.4cm、底径6.3cm、器高3.6cm	17住—10	3/4

第41図　第17号住居跡出土土器(1)



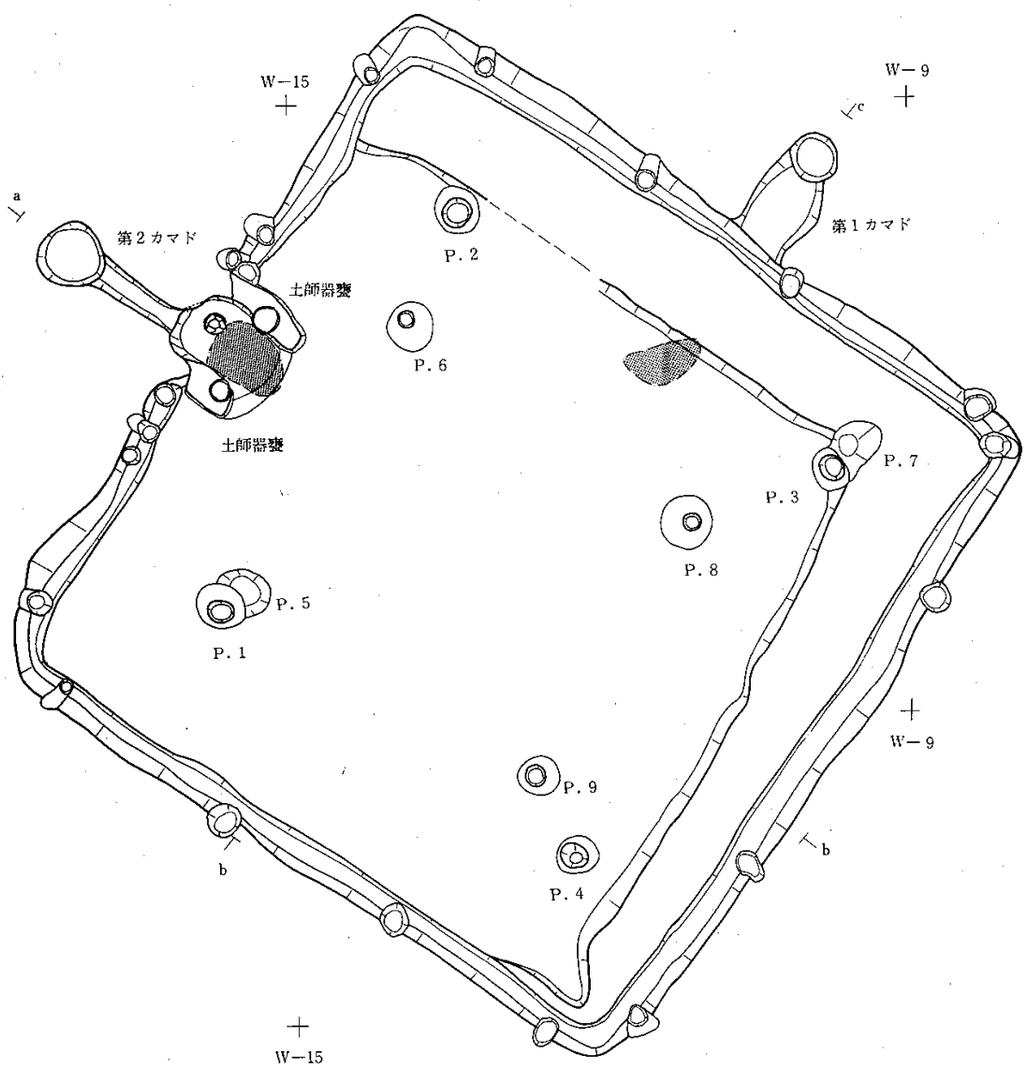
番号	層位	種類・器形	分類	特徴	登録	残存
1	床	須恵器・甕	B2	外面：口～胴部平行タタキ、ロクロナデ、胴下半部回転ヘラケズリ 内面：ロクロナデ　口径15.0cm　器高20.9cm	17住－19	1/4
2	床	須恵器・甕	B2？	外、内面：ロクロナデ	17住－18	1/4
3	3層	須恵器・坏	BⅡ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部ヘラ切り「×」ヘラ書きあり 内面：ロクロナデ　口径13.0cm　底径 6.6cm　器高 4.2cm	17住－12	1/4
4	3層	須恵器・坏	BⅠ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部ヘラ切り、手持ちヘラケズリ 内面：ロクロナデ　口径12.6cm　底径 6.5cm　器高 4.3cm	17住－13	1/4
5	3層	須恵器・坏	BⅠ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ロクロナデ	17住－11	1/4
6	3層	須恵器・蓋	C	外、内面：ロクロナデ	17住－15	一部

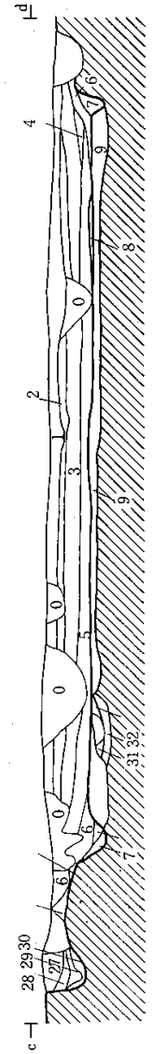
第42図　第17号住居跡出土土器(2)

5.4×5.3mのほぼ方形を呈する。
〔壁〕　地山を壁としている。残存する壁高は約35～40cmである。床面からの立ち上がりはやや急である。
〔床面〕　住居のほぼ全域に掘り方がみられ、その埋土上面を床としている。特に住居西～南壁沿いと北東隅の壁沿いの掘り方は深く掘られている。面は平坦である。床面上には厚さ２～３cmの生活層がほぼ全域にみられ、また、比較的広い範囲にわたって焼面があり、しかも炭化材が住居南から西壁沿いに集中し散在している。
〔柱穴〕　床面上から10個のピットが検出された。その内、４個のピット（Ｐ１～Ｐ４）には柱痕と掘り方の区別があり、規模、配置に規則性があり柱穴と考えられる。これらのピットは住居対角線上に位置し、結んだ線は住居平面形と相似する。
〔周溝〕　カマド付設部分、北東・南東隅の一部を除いた住居壁沿いに巡る。幅は約20～25cm床面からの深さは約10～20cmで断面形は「Ｕ」字状を呈する。
〔カマド〕　住居北辺のやや東寄りの所に付設されている。残存する燃焼部側壁は粘土積み上げによってつくられている。底面は煙道部へ向かってやや上がっていく。底面中央、側壁内面は火熱を受け赤変しており、底面上には灰土が溜まっている。煙道部との境には約15cmの段を形成し区切りとしている。煙道部は先述したように、わずかに先端部のピットが残存しているにすぎない。このピットは径約35cm、深さ約20cmある。掘り込みはほぼ垂直である。さらに、燃焼部側壁の両側には径25cmの円形ピット（Ｐ．５・Ｐ．６）が配されている。
〔その他の施設〕　住居西辺中央部の壁沿いに径約20cmのピット（Ｐ．７・Ｐ．８）が60cmの間隔をあけて配されている。これは住居入口部に伴うものと推定される。
〔堆積土〕　溝による攪乱のため住居中央部付近の堆積土は残っていないが３層認められる。第Ⅰ～Ⅱ層は住居全域に堆積しており、第Ⅲ層は壁沿いに堆積している。自然流入土である。
〔出土土器〕　図示したものは18点である。その内、床面上から須恵器坏８点、須恵器甕１点、赤焼土器１点出土している。カマド内からは土師器甕１点、須恵器坏１点出土している。これらの土器は住居内で共伴するものと考えられる。その他、堆積土中から須恵器坏５点、須恵器甕１点出土している。カマド内出土の土師器甕はロクロ使用のものである。

第18号住居跡

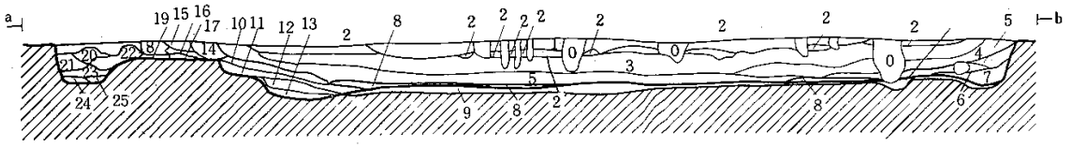
〔増改築〕　住居北から東側にかけて約1.5mの拡張がみられ、部分的な改築が認められる。改築以前の住居を18ａ住、改築後の住居を18ｂ住として以下記していく。
〔規模・平面形〕18ａ住は一辺6.2mの方形を呈す。18ｂ住は南・西辺は18ａ住と共有し、北・東辺を各々約1.5m拡張したものである。
〔壁〕　18ａ住の北・東壁は18ｂ住構築時に大半が削平され残存する壁高は２～３cm程度であ



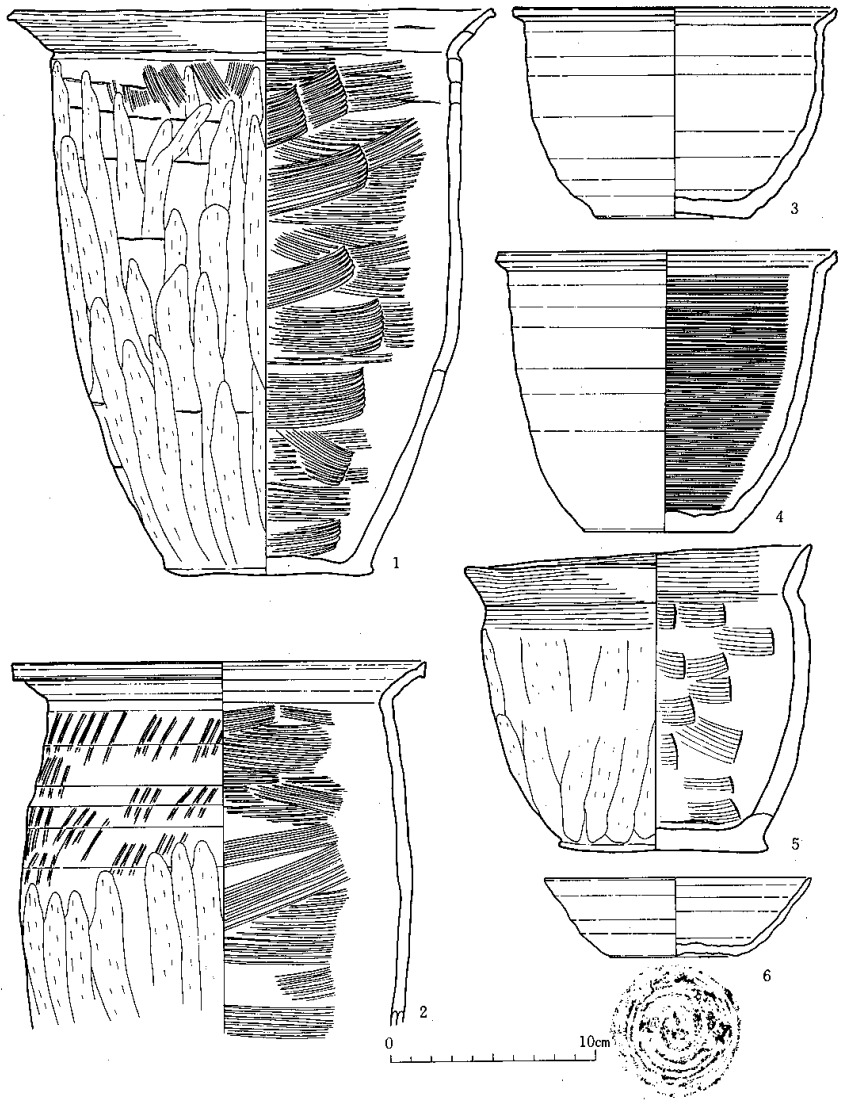


※0：撹乱

層位	層No	土色	土性	備考	遺物取り上げ層位
Ⅰ	1	黒色（7.5Y R 3/1）	シルト		
Ⅱ	2	灰白色（7.5Y R 8/2）	火山灰		
Ⅲ	3	暗褐色（7.5Y R 3/3）	シルト	地山ブロック混入	
	4	暗褐色（7.5Y R 3/4）	シルト	地山粒少し混入	
Ⅳ	5	暗褐色（10Y R 3/4）	シルト		
	6	暗褐色（10Y R 3/3）	シルト		
周溝	7	暗褐色（7.5Y R 3/4）	シルト	しまりがない	
生活層	8	黒褐色（7.5Y R 3/2）	シルト	炭化物混入	
貼り床	9	黒褐色（7.5Y R 3/1）	シルト	地山多く混入	
第2カマド内	10	にぶい黄燈色（10Y R 6/4）	シルト	焼土多く混入	
	11	暗赤褐色（5Y R 3/3）	シルト	灰土、炭化物混入	
	12	赤褐色（5Y R 3/4）	シルト		
	13	赤色	シルト	焼土多く混入	
	14	赤褐色（2.5Y R 4/6）	シルト	焼土塊多く混入	
	15	にぶい褐色（7.5Y R 5/3）	シルト		
	16	にぶい褐色（7.5Y R 5/3）	シルト	焼土多く混入	
	17	赤褐色（5Y R 3/3）	シルト	灰土、炭化物混入	
	18	明黄褐色（10Y R 6/6）	シルト	煙道の天井部崩壊土	
	19	褐色（7.5Y R 4/3）	シルト		
	20	灰褐色（7.5Y R 4/2）	シルト		
	21	にぶい赤褐色（5Y R 4/3）	シルト	焼土ブロック状に混入	
	22	にぶい赤褐色（5Y R 4/4）	シルト	焼土混入	
	23	暗赤褐色（5Y R 3/4）	シルト		
	24	灰褐色（7.5Y R 4/2）	シルト	炭化物混入	
	25	にぶい褐色（7.5Y R 5/3）	シルト	炭化物混入	
第1カマド内	26	明褐色（7.5Y R 5/6）	シルト	灰土混入	
	27	灰褐色（7.5Y R 5/2）	シルト		
	28	灰褐色（7.5Y R 5/2）	シルト	焼土混入	
	29	灰白色（7.5 Y R 8/2）	粘土		
	30	灰褐色（7.5Y R 4/2）	シルト		
	31	赤色（10R 5/6）		焼けの及んだ部分	
カマド掘り方	32	褐色（7.5Y R 5/6）	シルト		



第43図　第18号住居跡



番号	層位	種類・器形	分類	特徴	登録	残存
1	床	土師器・甕	AⅠ1ai	外面：口縁部ヨコナデ、胴部刷毛目、ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ、胴部刷毛目　口径23.7cm、器高27.5cm	18住－8	¾
2	カマド	土師器・甕	BⅡ2	外面：口縁部ロクロナデ、胴部平行タタキ、ロクロナデ、ヘラケズリ 内面：口縁部ロクロナデ、胴部刷毛目　口径20.2cm	18住－17	½
3	床	土師器・甕	BⅠ1	外面：ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ロクロナデ　口径15.7cm、器高10.2cm	18住－5	⅔
4	床	土師器・甕	BⅠ1	外面：ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：回転刷毛目　口径16.7cm、器高13.8cm	18住－6	⅔
5	カマド	土師器・甕	AⅠ1bii	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ、底部未整形 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ　口径16.9cm、器高15cm	18住－7	½
6	3 層	須恵器・坏	BⅡ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部ヘラ切り 内面：ロクロナデ　口径13.0cm、底径6.2cm、器高3.8cm	18住－1	¾

第44図　第18号住居跡出土土器(1)

る。18ｂ住は地山を壁とし、残存する壁高は約 40cm で床面からの立ち上がりはほぼ垂直である。

〔床面〕　18ａ住の床面の状況には不明な点が多い。18ｂ住の床はほぼ全域に厚さ５～10cm の貼り床がされ、その上面を床としている。面は多少の凹凸があるが、ほぼ平坦である。住居中央部を除いた部分に厚さ２～５cm の生活層がみられる。

〔柱穴〕　床面上から９個のピットが検出された。その内、18ａに伴う柱穴はＰ５・６・８・９であり、18ｂ住に伴う柱穴はＰ1～Ｐ4 である。両住居の柱穴の配置は住居平面形に相似し、四角形を呈する。なお、Ｐ５(18ａ住)とＰ１(18ｂ住)とは重複しており、Ｐ１の方が新しい。また 18ｂ住の壁沿いに 19 個のピットがあり、壁柱穴と考えられる。

〔周溝〕　18ｂ住のカマド付設部分を除いた壁沿いに巡る。幅約７cm の床面からの深さは約 20cm である。18ａ住の拡張前の壁には周溝は認められない。

〔カマド〕　住居北辺中央部と西辺中央部の２ヶ所に付設されている。前者を第１カマド、後者を第２カマドとする。第１カマド：煙道部が 18ｂ住の壁によって切られているため古い段階のもので 18ａ住に伴うものと考えられる。燃焼部はすでに消失し、18ａ住の北壁沿い、煙道部の延長線上に 30×60cm の焼面がみられるにすぎない。おそらく、燃焼部底面の一部であろう。煙道部の先端には径 40cm、深さ 40cm のピットがある。第２カマド：改築後の 18ｂ住に伴うもので新しい段階のカマドである。燃焼部は住居壁より外方に約 30cm 掘り込まれてつくられている。残存する側壁は土師器甕を芯にして粘土を積み上げでつくられている。底面は床面から約 10cm 低く、舟底状を呈し、火熱を受け赤変している。また、中央部には土師器甕が倒置されている。支脚に使用されたのであろう。煙道部の境には約 20cm の段を形成し区別している。煙道部は地山をほぼ水平に掘り抜いている。先端部には径 60cm、深さ 40cm のピットがある。

〔堆積土〕　４層認められる。各層ともほぼ全域に堆積している。第Ⅱ層は灰白色火山灰である。自然流入土である。

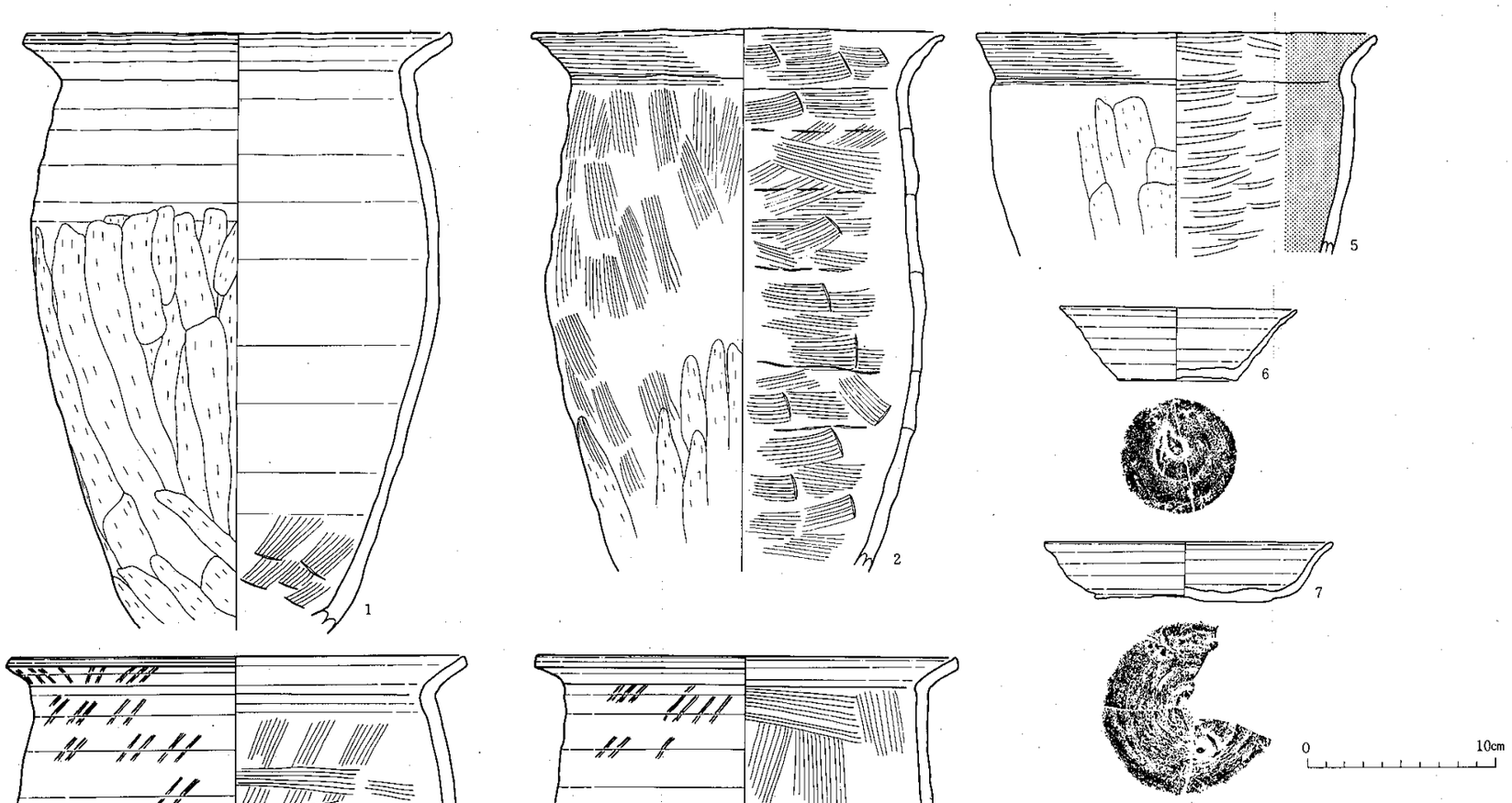
〔出土土器〕　図示したのは 13 点である。その内、床面上、床面直上で土師器甕３点、須恵器坏１点、須恵器甕１点が出土している。また、カマド内（支脚・側壁芯・先端部ピット内）から土師器甕７点が出土している。その他、堆積土中から須恵器坏２点が出土している。これらの大半は第 18ｂ住に伴うものとして取り上げた。

第 19 号住居跡

〔攪乱・規模・平面形〕　カマド煙道部は攪乱のため大半は残存しない。4.2×4.1ｍの隅丸方形を呈する。

〔壁〕　地山を壁としている。残存する壁高は約 35～40cm である。床面からの立ち上がりは緩やかである。

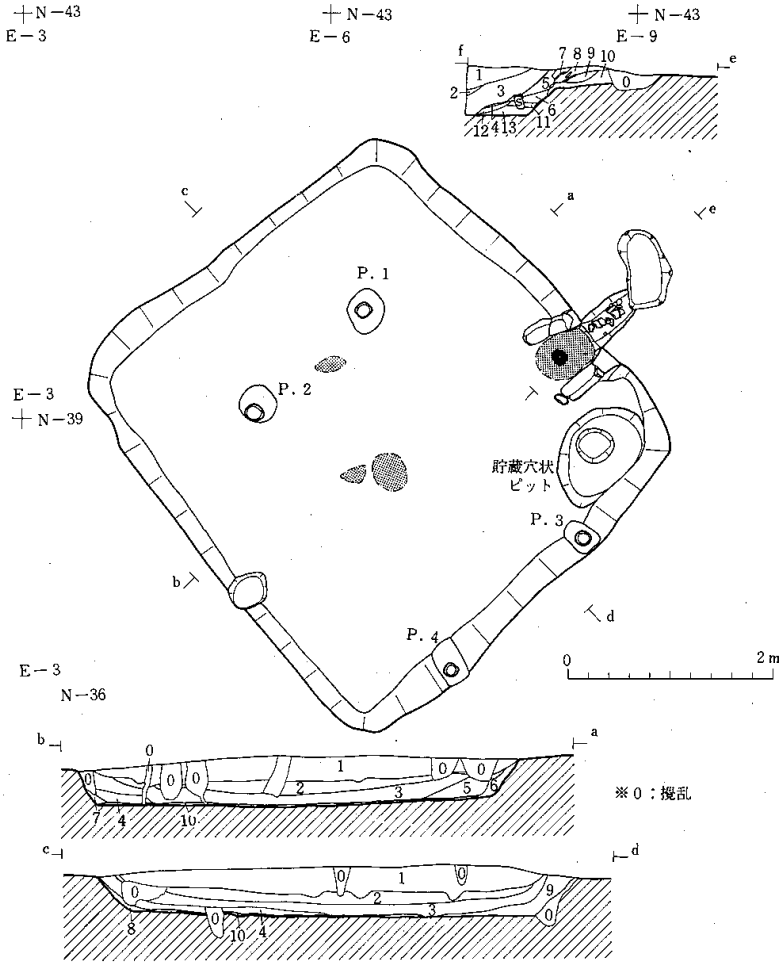
〔床面〕　住居全域、地山をそのまま床としている。面はほぼ平坦である。住居ほぼ中央部に



番号	層位	種類・器形	分類	特徴	登録	残存
1	カマド	土師器・甕	BⅡ1	外面：口～胴部ロクロナデ、胴下半部ヘラケズリ、内面：ロクロナデ、ヘラナデ	18住－9	⅔
2	カマド	土師器・甕	AⅠ1aⅱ	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ、ナデ、内面：ヘラナデ	18住－11	⅓
3	カマド	土師器・甕	BⅡ1	外面：口～胴部平行タタキ、ロクロナデ、胴下半部ヘラケズリ、内面：口縁部ロクロナデ、胴部ナデ	18住－13	½
4	カマド	土師器・甕	BⅡ2	外面：口縁部ロクロナデ、胴部平行タタキ、ロクロナデ、ヘラケズリ、内面：口縁部ロクロナデ、胴部ナデ	18住－12	½
5	カマド	土師器・甕	AⅠ1bⅰ	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ、内面：ヘラミガキ(横)、黒色処理	18住－10	½
6	床	須恵器・坏	BⅡ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部ヘラ切り、内面：ロクロナデ　口径12.6cm、底径6.9cm、器高4.0cm	18住－2	⅔
7	3層	須恵器・坏	AⅠ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部ヘラ切り、内面：ロクロナデ　口径15.4cm、底径9.3cm、器高3.1cm	18住－3	½

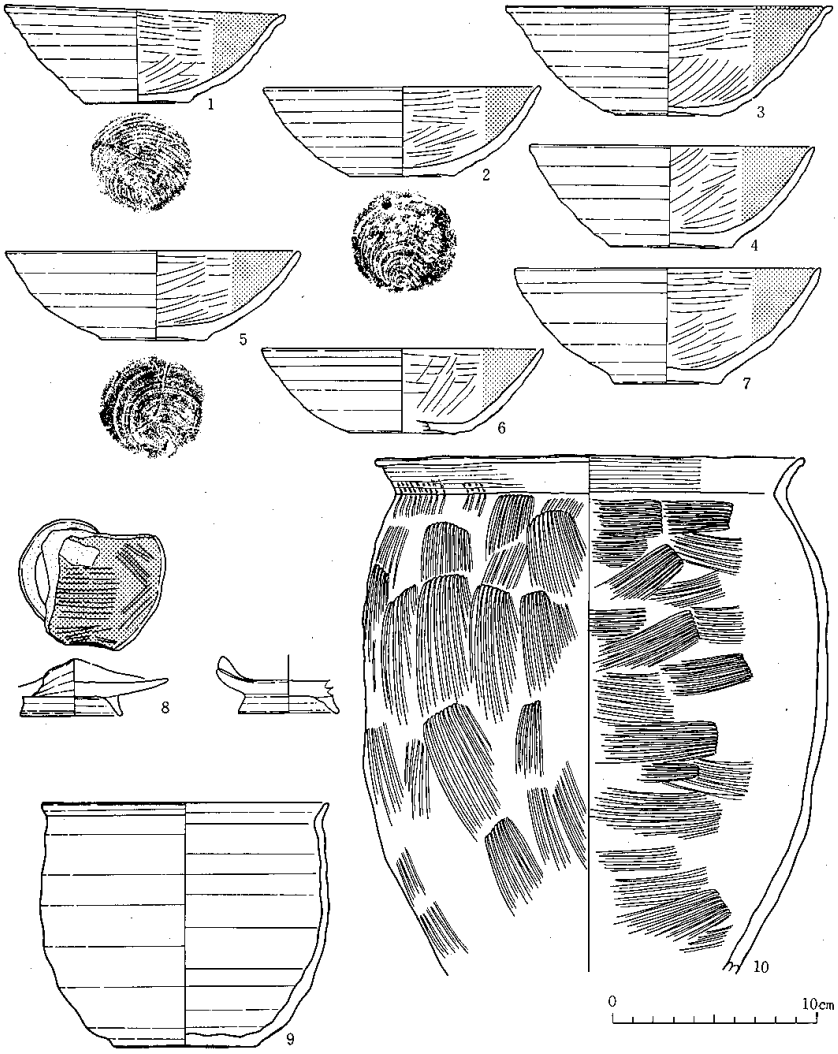
第45図　第18号住居跡出土土器(2)

1	住居Ⅰ層	6	暗褐灰色土（7.5YR 3/4）シルト	11	黒褐色土（10YR 3/2）シルト
2	住居Ⅱ層	7	明赤褐色土（5YR 5/6）シルト	12	暗褐色土（7.5YR 3/4）シルト
3	住居Ⅲ層	8	黒褐色土（10YR 3/3）シルト	13	カマド天井崩壊土（5と同じ）
4	黒色土（10YR 3/1）シルト	9	暗褐色土（7.5YR 3/4）シルト		
5	にぶい黄橙色土（10YR 6/4）砂	10	赤褐色土（5YR 5/6）シルト		



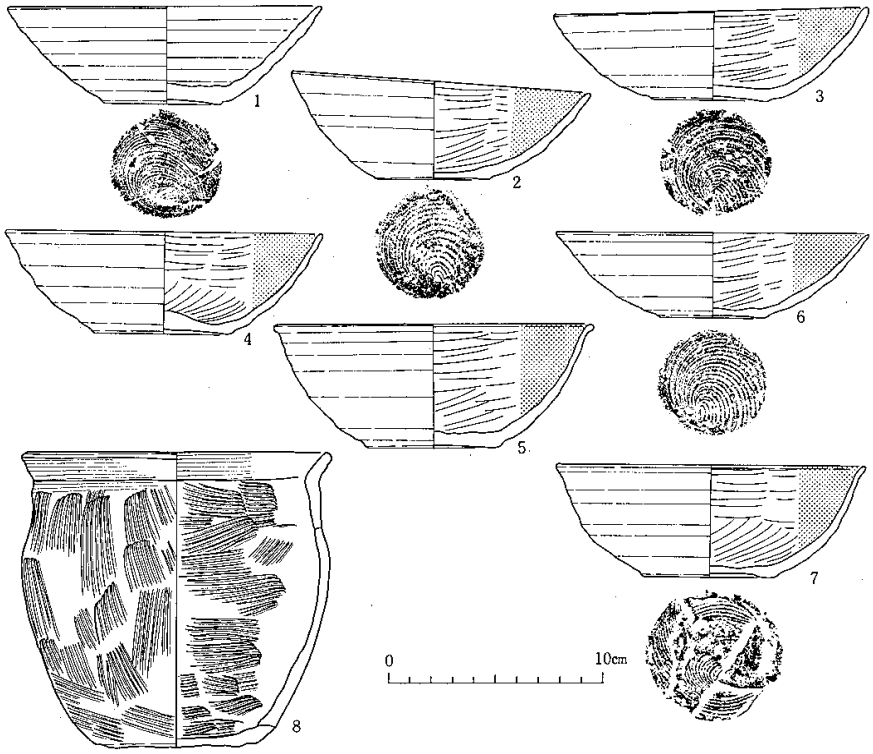
層位	層No	土色	土性	備考	遺物取り上げ層位
Ⅰ	1	黒褐色（10YR 3/2）	シルト		1層
Ⅱ	2	灰白色（10YR 8/2）	火山灰		2層
Ⅲ	3	黒褐色（10YR 3/2）	シルト	木炭少し混入	3層
	4	黒褐色（10YR 3/2）	〃	木炭少し混入	〃
Ⅳ	5	黒褐色（7.5YR 3/2）	〃	木炭混入	4層
	6	黒褐色（7.5YR 3/2）	〃		〃
	7	黒褐色（10YR 3/2）	〃		〃
	8	黒褐色（10YR 3/2）	〃	地山多く混入	〃
	9	黒褐色（10YR 3/2）	〃	地山多く混入	〃
生活層	10	黒褐色（10YR 3/2）	〃	木炭多く混入	床面

第46図　第19号住居跡



番号	層位	種類・器形	分類	特徴	登録	残存
1	床	土師器・坏	B Ⅲ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ヘラミガキ（横・放射）黒色処理　口径13.8cm、底径5.2cm、器高4.9cm	19住－1	3/4
2	床	土師器・坏	B Ⅲ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ヘラミガキ（横・放射）黒色処理　口径13.6cm、底径5.2cm、器高4.4cm	19住－2	3/4
3	床	土師器・坏	B Ⅲ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ヘラミガキ（横・放射）黒色処理　口径16.0cm、底径5.3cm、器高5.4cm	19住－3	3/4
4	カマド内	土師器・坏	B Ⅲ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ヘラミガキ（横・斜）黒色処理　口径13.9cm、底径6.1cm、器高5.0cm	19住－6	1/2
5	カマド	土師器・坏	B Ⅲ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ヘラミガキ（横・斜）黒色処理　口径14.4cm、底径5.2cm、器高4.4cm	19住－4	3/4
6	床	土師器・坏	B Ⅲ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ヘラミガキ（横・斜）黒色処理　口径13.8cm、器高4.1cm	19住－5	1/2
7	床	土師器・坏	B Ⅲ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ヘラミガキ（横・斜）黒色処理　口径14.9cm、底径5.2cm、器高5.7cm	19住－11	1/2
8	カマド	土師器・耳皿		外面：ロクロナデ、内面：ヘラミガキ、黒色処理	19住－15	1/2
9	カマド	土師器・甕	A Ⅱ 3	外面：口縁部ヨコナデ、胴部刷毛目、内面：口縁部ヨコナデ、胴部刷毛目	19住－19	1/2
10	カマド	土師器・甕	B Ⅰ 2	外面：ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ロクロナデ	19住－17	1/2

第47図　第19号住居跡出土土器(1)



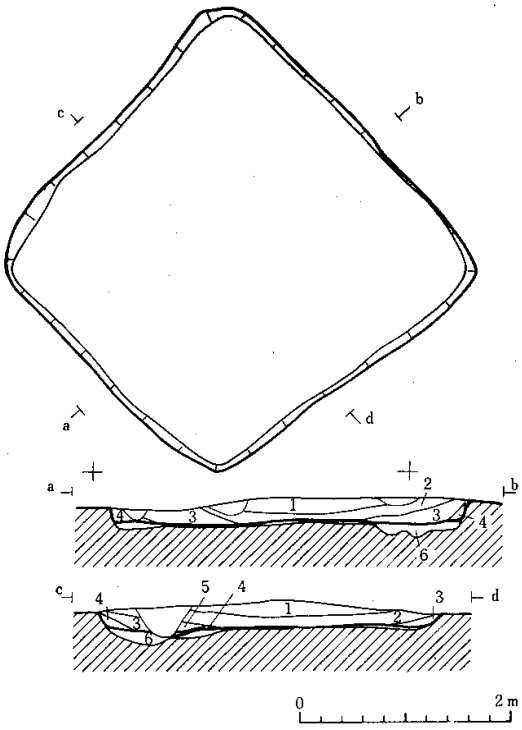
番号	層位	種類・器形	分類	特徴	登録	残存
1	カマド	須恵器・坏	C	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ロクロナデ　口径14.6cm　底径 5.5cm　器高 4.6cm	19住－16	¾
2	3層	土師器・坏	BⅢ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ヘラミガキ（横・斜）黒色処理　口径13.9cm　底径 5.3cm　器高 5.1cm	19住－7	½
3	3層	土師器・坏	BⅢ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ヘラミガキ（横・斜）黒色処理　口径14.7cm　底径 5.4cm　器高 4.2cm	19住－8	½
4	3層	土師器・坏	BⅢ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ヘラミガキ（横・放射）黒色処理　口径14.8cm　底径 6.5cm　器高 4.8cm	19住－10	½
5	3層	土師器・坏	BⅠ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ヘラミガキ（横・放射）黒色処理　口径14.9cm　底径 6.3cm　器高 5.9cm	19住－12	⅓
6	3層	土師器・坏	BⅢ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ヘラミガキ（横・斜）黒色処理　口径14.6cm　底径 5.1cm　器高 4.0cm	19住－13	⅓
7	3層	土師器・坏	BⅠ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ヘラミガキ（横、放射）黒色処理　口径14.4cm　底径 6.3cm　器高 5.3cm	19住－21	⅔
8	3層	土師器・甕	AⅠ1bii	外面：口縁部ヨコナデ、胴部刷毛目、底部蔵状圧痕 内面：口縁部ヨコナデ、胴部刷毛目　口径14.5cm　器高14.0cm	19住－12	½

第48図　第19号住居跡出土土器(2)

焼面がみられる。床面上のほぼ全域には木炭を含む生活層がみられる。また、床面上では周溝はみられない。

〔柱穴〕　床面上から６個のピットが検出された。その内、４個のピット（Ｐ．１～Ｐ．４）には柱痕と掘り方の区別があり、規模、配置などに規則性があり、柱穴と考えられる。これらのピットを結んだ線は長方形を呈するが南側に寄っており、特にＰ．３とＰ．４は南壁沿いに位置している。

〔カマド〕　住居東辺の南寄りの所に付設されている。先述したように煙道部の大半は残存しない。残存する燃焼部側壁は切石を芯にし粘土で補強してつくられている。底面はややくぼみ



層位	層No	土色	土性	備考	遺物取り上げ層位
Ⅰ	1	灰白色（7.5Y R 8/2）	火山灰		
Ⅱ	2	黒褐色（7.5Y R 3/2）	シルト	地山粒混入	
Ⅲ	3	黒褐色（10Y R 3/2）	シルト	地山粒、炭化物粒混入	
	4	黒褐色（10Y R 3/1）	シルト		
生活層	5	黒褐色（7.5Y R 3/2）	シルト	地山混入	
掘り方	6	暗褐色（7.5Y R 3/3）	シルト	地山混入	

第49図　第20号住居跡

舟底状を呈し、火熱を受け赤変している。また、ほぼ中央部には石を芯にし粘土で周りを覆った高まりがある。支脚として使用されたのであろう。煙道部との境には約30cmの段が形成され区切りにしている。煙道部は地山を掘り抜いてつくられているが残存部が少なく詳細は不明である。

〔その他の施設〕　住居北東隅カマドの右側に貯蔵穴状ピットがある。1.0m×70cmの楕円形を呈し、床面からの深さは10cm前後である。

〔堆積土〕　4層認められる。第Ⅰ～Ⅲ層は住居ほぼ全域に堆積している。特に第Ⅲ層は床面上まで至っている。また、第Ⅱ層は灰白色火山灰である。第Ⅳ層は壁沿いに堆積している。自然流入土である。

〔出土土器〕　図示したものは18点である。その内、床面上から土師器坏5点、カマド内から土師器坏2点、耳皿1点、土師器甕1点、須恵器坏1点出土している。これらの土器は住居内で共伴するものと考えられる。その他、堆積土中から土師器坏6点、高台付坏1点、甕2点が出土している。土師器坏は全てロクロ使用のものである。

第20号住居跡

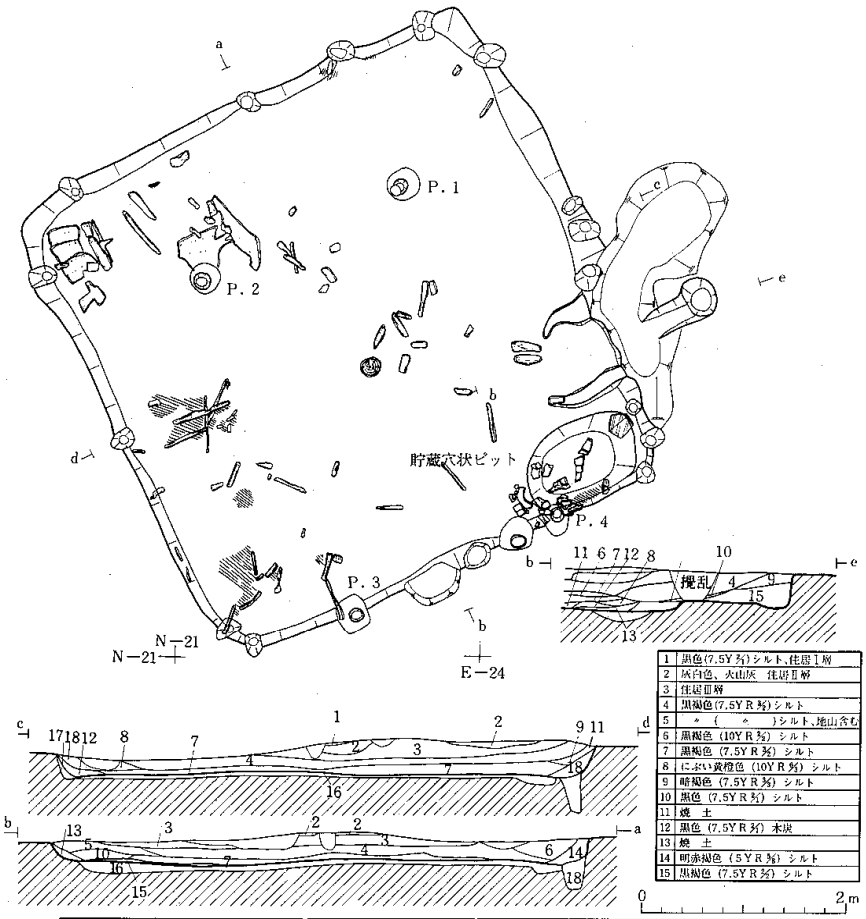
〔規模・平面形〕　3.1×2.9mの方形を呈する。各隅はやや丸味をもつ。

〔壁〕　地山を壁としている。残存する壁高は約15～20cmで床面からの立ち上がりは南・北壁は緩やかで東・西壁は急である。

〔床面〕　大半の地域に掘り方がみられ、その埋土上面を床としているが、中央部付近の一部は地山をそのまま床としている。面はほぼ平坦である。また、北壁近くに生活層がみられる。その他、柱穴、周溝、カマド等の施設は検出されない。
〔堆積土〕　３層認められる。第Ⅰ・Ⅱ層は住居全域、Ⅲ層は壁沿いに堆積している。
〔出土土器〕　図示できるものはない。全て破片で量も少ない。その中にはロクロ使用の土師器坏の破片がある。

第 21 号住居跡

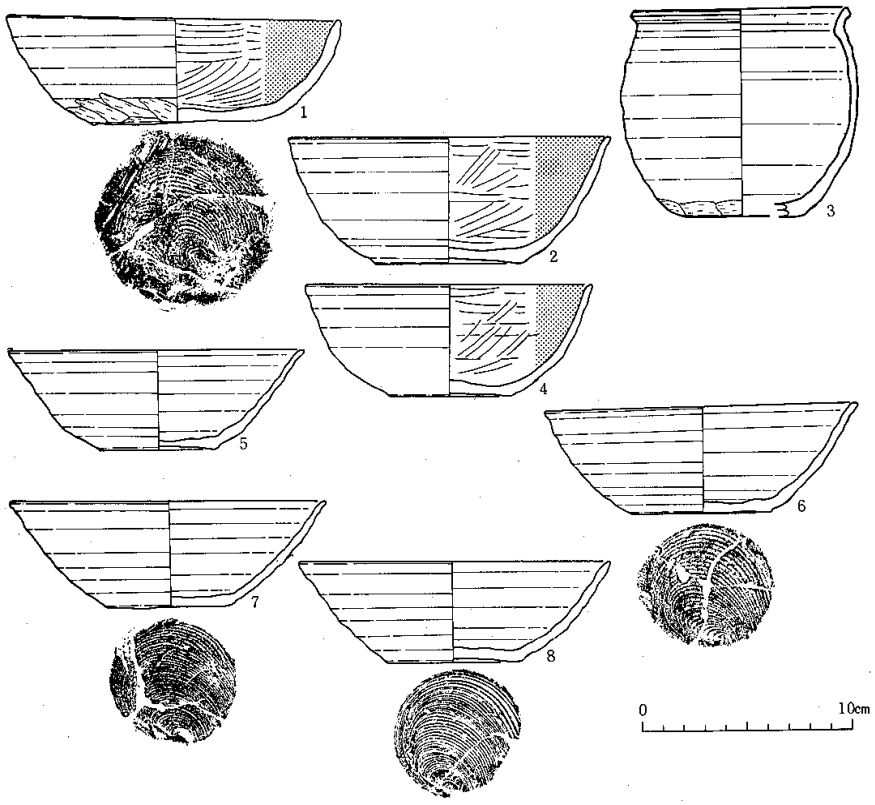
〔攪乱・規模・平面形〕　カマド付設部分は攪乱をうけ、特に煙道部はあまり残っていない。4.8×4.7ｍの隅丸方形を呈する。
〔壁〕　地山を壁としている。残存する壁高は約 20～50㎝ である。床面からの立ち上がりは南壁は緩やかであるが、その他は急である。
〔床面〕　住居全域に掘り方がみられ、その埋土上面を床としている。面は南側がやや高くなっている。床面上には生活層がみられる部分もあり、また、炭化した木材やカヤ（？）の敷物等が散在している。周溝は床面上では認められない。
〔柱穴〕　床面上から４個のピット（Ｐ．１～Ｐ．４）が検出された。これら全てのピットには柱痕と掘り方の区別があり、規模、配置等に規則性があり、柱穴と考えられる。これらのピットを結んだ線は長方形を呈するが南側に寄り、特にＰ．３、Ｐ．４は南壁沿いに位置している。また、住居壁沿いに径 25㎝ 前後のピットが 17 個あり、壁柱穴と考えられる。
〔カマド〕　住居東辺の南寄りの所に付設されている。先述したように煙道部の一部は残存しない。残存する燃焼部側壁は白色粘土積み上げによってつくられ、右側壁の先端部には切石が置かれている。底面はほぼ平坦で火熱をうけ赤変している。煙道部との境には約 10㎝ の段を形成し区切りとしている。煙道部は地山を掘り抜いてつくられており、底面は先端部に向かってやや傾斜している。先端部は径 40㎝ のピット状になっている。
〔その他の施設〕　住居南東隅、カマドの南側に貯蔵穴状ピットがある。1.2ｍ×80㎝ の楕円形を呈し、床面からの深さは約 30㎝ である。
〔堆積土〕　第Ⅰ層は住居中央部、カマド燃焼部上に一部みられるにすぎない。第Ⅱ層は灰白色火山灰で住居中央部に部分的にみられる。第Ⅲ層は中央部に第Ⅳ層は住居ほぼ全域に堆積している。第Ⅴ層は住居全域で床面上にまで堆積している。第Ⅵ層は壁沿いに堆積している。自然流入土である。
〔出土土器〕　図示したものは８点である。その内、カマド内から土師器坏２点出土しており、その他は全て堆積土中出土のものである。土師器坏はロクロ使用のものである。



1	黒色(7.5Y 3/2)シルト、住居Ⅰ層
2	灰白色、火山灰　住居Ⅱ層
3	住居Ⅲ層
4	黒褐色(7.5Y R 3/2)シルト
5	〃　(　〃　)シルト、地山含む
6	黒褐色 (10Y R 3/2) シルト
7	黒褐色 (7.5Y R 3/2) シルト
8	にぶい黄橙色 (10Y R 6/4) シルト
9	暗褐色 (7.5Y R 3/3) シルト
10	黒色 (7.5Y R 3/1) シルト
11	焼　土
12	黒色 (7.5Y R 3/1) 木炭
13	焼　土
14	明赤褐色 (5Y R 3/6) シルト
15	黒褐色 (7.5Y R 3/2) シルト

層　位	層 No	土　色	土　性	備　考	遺物取り上げ層位
Ⅰ	1	黒褐色 (10Y R 3/2)	シルト		
Ⅱ	2	灰白色 (7.5Y R 8/2)	火山灰		
Ⅲ	3	黒褐色 (7.5Y R 3/2)	シルト	木炭粒少し混入	
Ⅳ	4	黒褐色 (7.5Y R 3/2)	シルト	木炭粒、焼土粒混入	
	5	黒色 (7.5Y R 3/1)	シルト	木炭混入	
	6	黒褐色 (10Y R 3/2)	シルト	木炭混入	
Ⅴ	7	黒褐色 (7.5Y R 3/2)	シルト	焼土、混入	
	8	黒褐色 (10Y R 3/2)	シルト	木炭、焼土混入	
	9	黒褐色 (7.5Y R 3/2)	シルト	焼土、木炭混入	
	10	黒褐色 (10Y R 3/2)	シルト	木炭、焼土混入	
Ⅵ	11	暗褐色 (10Y R 3/4)	シルト		
	12	暗褐色 (10Y R 3/3)	シルト	地山粒混入	
	13	暗褐色 (10Y R 3/3)	シルト	地山ブロック混入	
	14	黒褐色 (10Y R 3/2)	シルト	地山粒、木炭粒混入	
生活層	15	暗褐色 (10Y R 3/3)	シルト	木炭混入	
掘り方	16	黒褐色 (10Y R 3/2)	シルト	地山ブロック混入	
ピット	17	黒褐色 (10Y R 3/2)	シルト		
ピット	18	黒褐色 (7.5Y R 3/2)	シルト		

第50図　第21号住居跡



番号	層位	種類・器形	分類	特徴	登録	残存
1	カマド	土師器・坏	BⅡ	外面：口～胴ロクロナデ、胴下半手持ちヘラケズリ、底部手持ちヘラケズリ、回転糸切り 内面：ヘラミガキ（横・放射）黒色処理　口径16.0cm、底径8.2cm、器高5.0cm	21住－1	¾
2	カマド	土師器・坏	BⅠ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ヘラミガキ（横・斜）黒色処理　口径15.3cm、底部7.1cm、器高6.1cm	21住－2	½
3	5　層	土師器・坏	BⅠ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部不明 内面：ヘラミガキ（横・斜）黒色処理　口径13.6cm、底径5.9cm、器高5.4cm	21住－3	½
4	4　層	土師器・甕	BⅠ2	外面：口～胴部ロクロナデ、底部手持ちヘラケズリ 内面：ロクロナデ　口径10.4cm、器高10.1cm	21住－4	½
5	5　層	須恵器・坏	C	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ロクロナデ　口径14.1cm、底径5.7cm、器高4.8cm	21住－6	¾
6	4・5層	須恵器・坏	C	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ロクロナデ　口径15.2cm、底径6.0cm、器高5.1cm	21住－9	¾
7	4・5層	須恵器・坏	BⅡ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ロクロナデ　口径14.8cm、底径6.5cm、器高5.0cm	21住－7	¾
8	3・4・5層	須恵器・坏	BⅡ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ロクロナデ　口径14.9cm、底径6.8cm、器高5.3cm	21住－8	¾

第51図　第21号住居跡出土土器

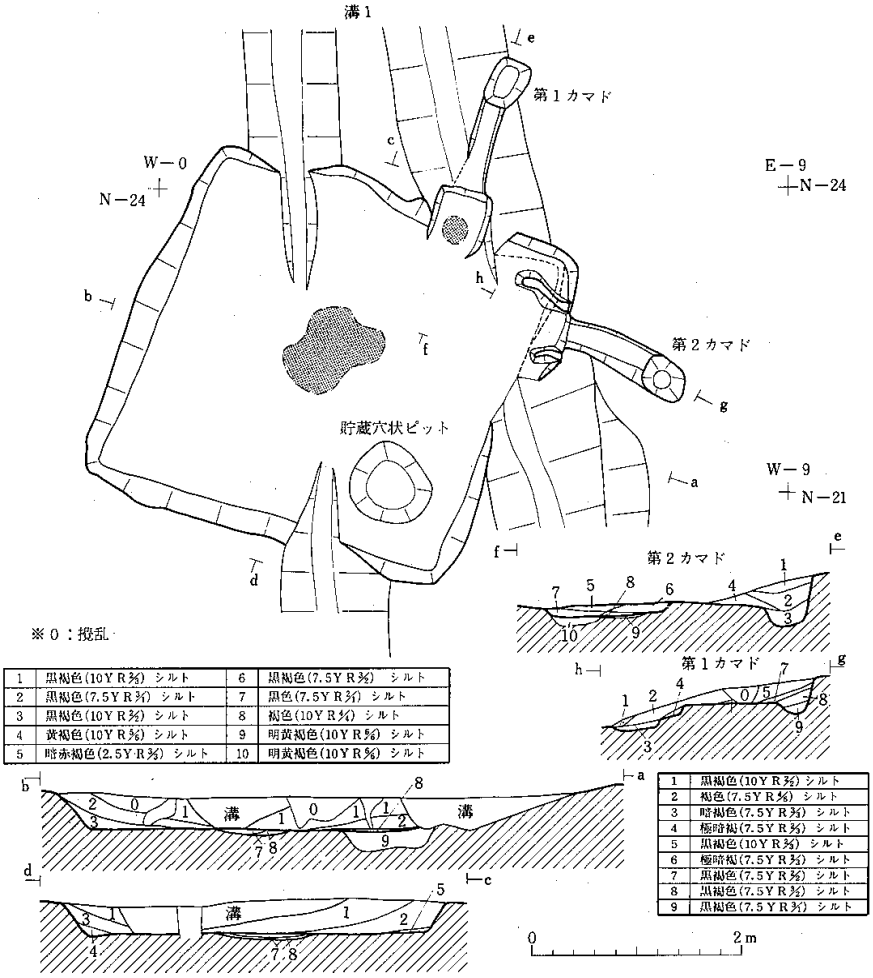
第22号住居跡

〔重複・増改築〕　溝1と重複している。住居北、南、東壁の一部は溝によって切られ残存しない部分がある。住居東壁は約40cm外方に拡張がみられ、さらに後述するように新たにカマドが付設されていることから部分的な増改築が行なわれたものと推定される。しかし、丁度東壁は溝によって切られ、増改築後の壁は半分位しか残存していない。以下、改築以前の住居を22a住、以後を22b住として記していく。

〔規模・平面形〕　22ａ住は一辺 3.6ｍの隅丸方形を呈し、22ｂ住は東壁を約 40㎝拡張したものでやや東西に長い方形を呈する。
〔壁〕　両住居とも地山を壁としている。東壁以外の壁は両住居で共有している。しかし、22ａ住、22ｂ住とも東壁の大半は拡張、攪乱等のため残っていない。残存する壁高は約 30～35㎝ で床面からの立ち上がりは緩やかである。
〔床面〕　増・改築は先述したように東壁のみで、床面も両住居で共有していたものと考えられる。住居中央部には厚さ約５㎝ の貼り床がされ、火熱を受け赤変している。その他は地山をそのまま床としているのが大半であるが、東側部分に掘り方がみられ、その埋土上面を床としている。住居東側の一部に生活層がみられる。また、床面上・下でも柱穴、周溝はみられない。
〔カマド〕　住居北辺の東寄りの所と東辺の北寄りの所に各１基ずつ付設されている。前者を第１カマド、後者を第２カマドとする。第１カマド：燃焼部底面と煙道部のみが残存している。燃焼部底面は住居床面を除去した段階で検出されたもので、しかも、床面上には地山粒、焼土を含む土が埋められていたようにあり、その上面は住居床とされているため、第１カマドは第２カマドより古い段階のもので増改築以前の 22ａ住に伴うカマドと推定される。燃焼部は住居壁より外方に約 30㎝ 掘り込んでつくられている。煙道部との境には約 10㎝ の段が形成され区切りにしている。この段と底面は火熱を受け赤変している。煙道部は溝による攪乱のため残存する部分は少ないが、先端部には径 45㎝、深さ 50㎝ のピットがある。第２カマド：東壁の拡張後につくられたカマドで 22ｂ住に伴うものである。残存する燃焼部側壁は粘土積み上げによってつくられている。底面には先述した 22ａ住の壁と考えられるわずかの段が残存している。煙道部との境には約 10㎝ の段が形成され区切りとしている。煙道部は地山をほぼ水平に掘り抜いてつくられ、先端部には径約 40㎝、深さ 35㎝ のピットがある。
〔その他の施設〕　住居南東隅に貯蔵穴状ピットがあるが、どの住居に伴うかどうか不明な点が多い。
〔堆積土〕　22ｂ住が廃棄された後に堆積したものである。３層認められる。大半は溝等の攪乱のため残りは良くない。第Ⅰ・Ⅱ層は住居ほぼ全域に堆積し、第Ⅱ層は床面上にまで至る。第Ⅲ層は壁沿いに堆積している。
〔出土土器〕　図示したのは堆積土中出土の土師器甕 1 点のみである。その他は破片で量も少ない。

第 23 号住居跡

〔重複・規模・平面形〕　土壙 10 と重複している。土壙を切って住居床としているためこれより新しい。6.0×5.8ｍの方形を呈するが東西にやや長い。
〔壁〕　地山を壁としている。残存する壁高は約 25～40㎝ である。床面からの立ち上がりは急

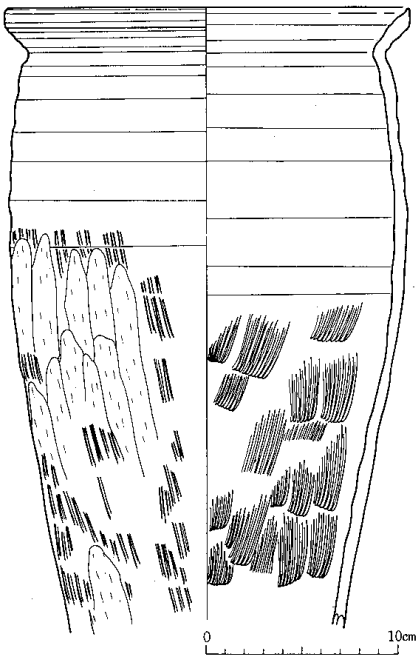


1	黒褐色(10YR3/3) シルト	6	黒褐色(7.5YR3/3) シルト
2	黒褐色(7.5YR3/1) シルト	7	黒色(7.5YR3/1) シルト
3	黒褐色(10YR3/3) シルト	8	褐色(10YR4/4) シルト
4	黄褐色(10YR5/6) シルト	9	明黄褐色(10YR6/6) シルト
5	暗赤褐色(2.5YR3/3) シルト	10	明黄褐色(10YR6/6) シルト

1	黒褐色(10YR3/3) シルト
2	褐色(7.5YR4/4) シルト
3	暗褐色(7.5YR3/3) シルト
4	極暗褐(7.5YR3/3) シルト
5	黒褐色(10YR3/3) シルト
6	極暗褐(7.5YR3/3) シルト
7	黒褐色(7.5YR3/3) シルト
8	黒褐色(7.5YR3/3) シルト
9	黒褐色(7.5YR3/1) シルト

層位	層No.	土色	土性	備考	遺物取り上げ層位
Ⅰ	1	黒褐色 (10YR3/3)	シルト		1層
Ⅱ	2	黒褐色 (10YR3/1)	シルト		2層
Ⅲ	3	黒色 (7.7YR3/1)	シルト		3層
	4	黒褐色 (10YR3/3)	シルト		〃
	5	黒色 (10YR3/1)	シルト		〃
生活層	6	黒褐色 (10YR3/3)	シルト		
貼り床	7	にぶい赤褐色 (5YR5/3)	粘土	火熱をうけている	
	8	黒褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒多く含む	
掘り方	9	黒褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒多く含む	

第52図　第22号住居跡



番号	層位	種類・器形	分類	特徴	登録	残存
1	3層	土師器・甕	B Ⅲ1	外面：口～胴部ロクロナデ、胴下半平行タタキ、ロクロナデ、ヘラケズリ 内面：ロクロナデ、刷毛目	22住－1	片

第53図　第22号住居跡出土土器

である。

〔床面〕　住居全域に掘り方がみられ、その埋土上面を床としている。面は平坦である。

〔柱穴〕　床面上で４個のピットを検出した。これら全てのピットには柱痕と掘り方の区別があり、規模、配置等から柱穴と考えられる。各ピットは住居の対角線上に位置し、結んだ線は住居平面形に相似する。

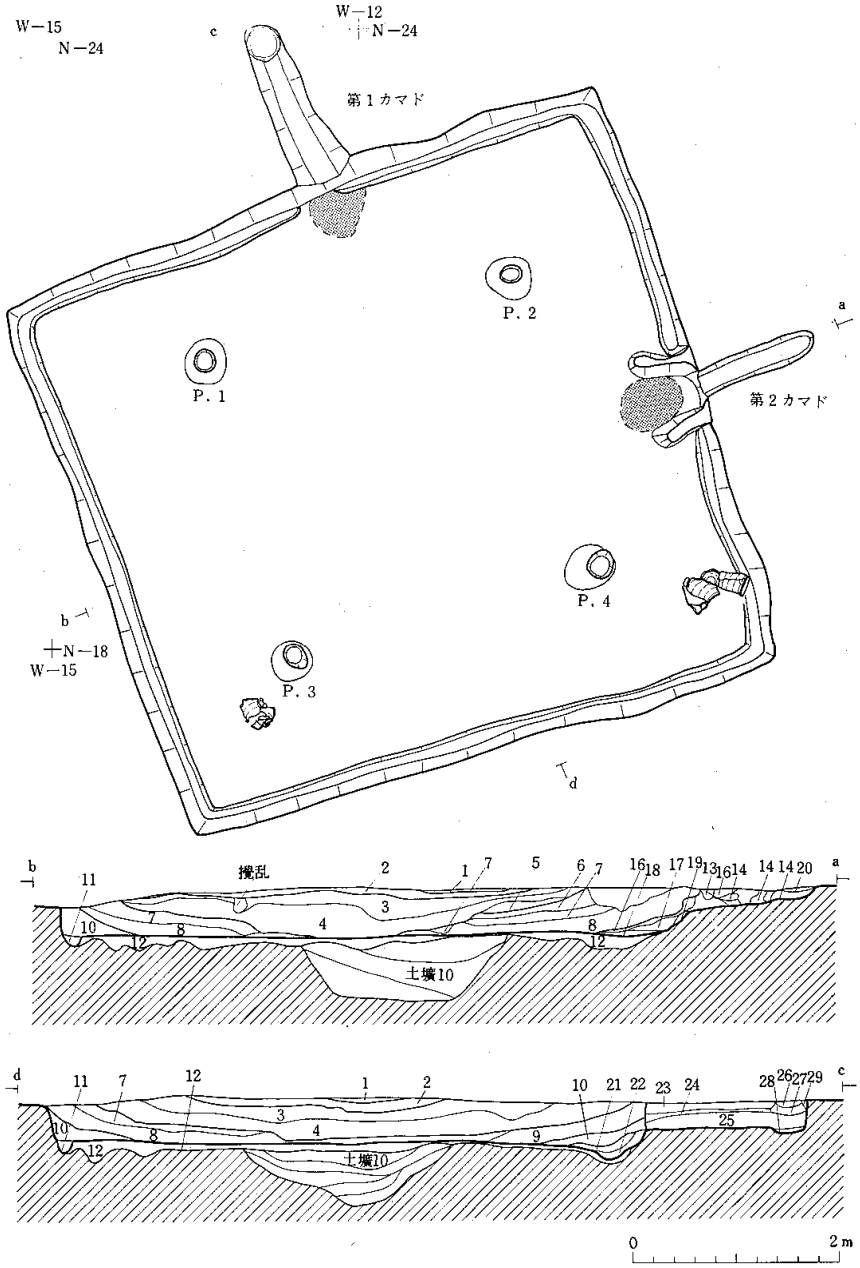
〔周溝〕　カマド付設部分を除いた住居壁沿いに巡る。幅は15cm前後、床面からの深さは約10cmで断面形は「U」字状を呈する。

〔カマド〕　住居北辺のやや東寄りの所と東辺のほぼ中央部に各１基ずつ付設されている。前者を第１カマド、後者を第２カマドとする。

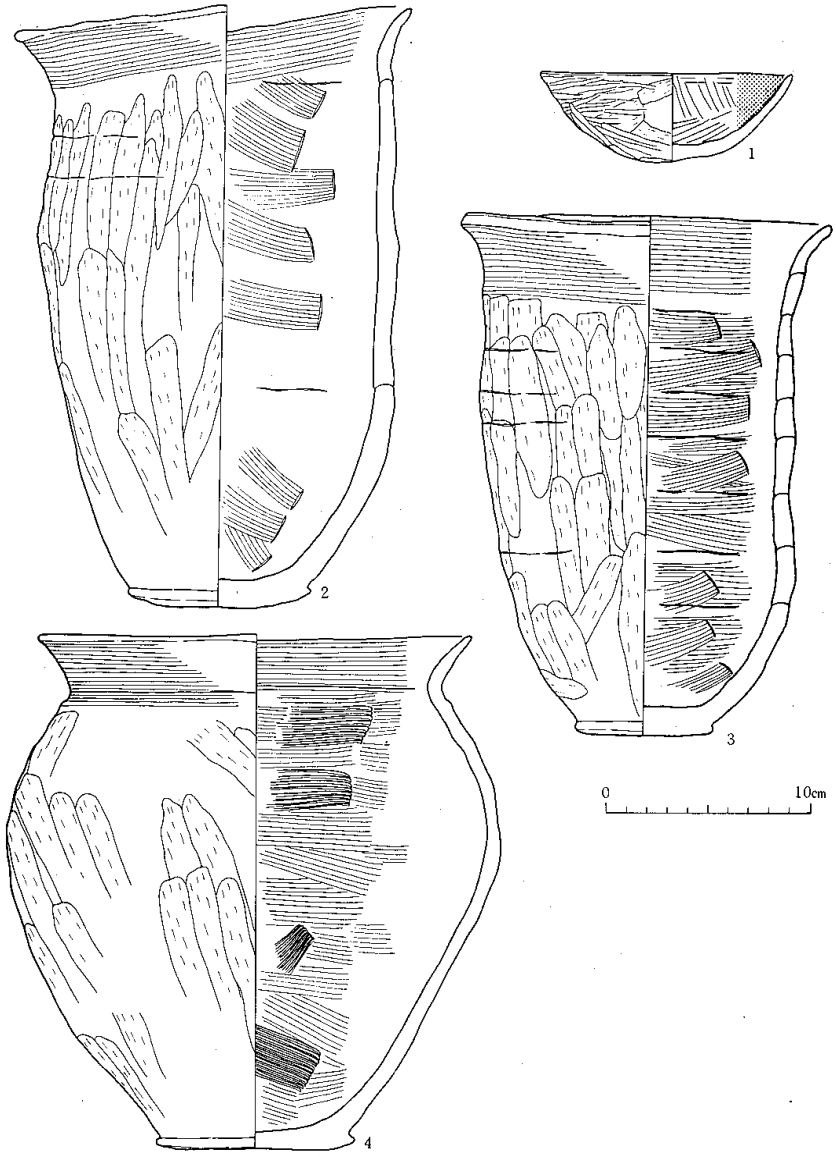
第１カマド：燃焼部底面の一部と煙道部のみが残存しているにすぎない。底面の中央部はややくぼみ舟底状を呈し、火熱を受け赤変しており、灰土、焼土を含む土が溜まっている。煙道部との境には約15cmの段が形成され区切

第23号住居跡堆積土

層位	層No	土色	土性	備考	遺物取り上げ層位
Ⅰ	1	黒色（7.5Y R 2/1）	シルト		
Ⅱ	2	灰白色（7.5Y R 8/2）	火山灰		
Ⅲ	3	黒褐色（7.5Y R 3/2）	シルト		
	4	黒褐色（7.5Y R 3/3）	シルト		
	5	黒褐色（7.5Y R 3/2）	シルト	焼土混入	
Ⅳ	6	黒褐色（7.5Y R 3/2）	シルト	炭化物混入多い	
	7	褐灰色（7.5Y R 4/1）	シルト	小石混入	
	8	暗褐色（7.5Y R 3/3）	シルト	地山粒混入	
	9	暗褐色（7.5Y R 3/4）	シルト	焼土、地山粒混入	
Ⅴ	10	黒褐色（7.5Y R 3/3）	シルト	地山粒多く混入	
周溝内	11	黒褐色（7.5Y R 3/2）	シルト	しまりがない	
掘り方	12	暗褐色（7.5Y R 3/3）	シルト	地山粒多く混入	
第2カマド内	13	橙色（5Y R 7/8）	シルト	焼土	
	14	明黄褐色（10Y R 7/6）	シルト	灰土混入	
	15	暗赤褐色（2.5Y R 3/6）	シルト	焼土混入	
	16	淡黄色（2.5Y 8/4）	シルト	天井部崩壊土	
	17	暗赤褐色（2.5Y R 3/6）	シルト	灰土	
	18	極暗褐色（7.5Y R 2/3）	シルト	焼土塊が混入	
	19	赤色（10R 5/8）	シルト	焼土	
	20	明褐色（7.5Y R 5/6）	シルト	焼土塊混入	
第1カマド内	21	灰黄褐色（10Y R 5/2）	シルト	焼土混入	
	22	暗赤褐色（2.5Y R 3/4）	シルト	灰土混入	
	23	浅黄色（2.5Y 7/4）	シルト	天井部崩壊土	
	24	赤褐色（10R 4/3）	シルト		
	25	赤黒（10R 2/1）		灰土、焼土塊含む	
	26	極暗赤褐色（10R 2/3）	シルト	地山ブロック混入	
	27	極暗赤褐色（10R 2/3）	シルト	炭化物混入	
	28	黒色（10Y R 2/1）	シルト	炭化物混入	
	29	浅黄（2.5Y 7/4）	シルト	地山	

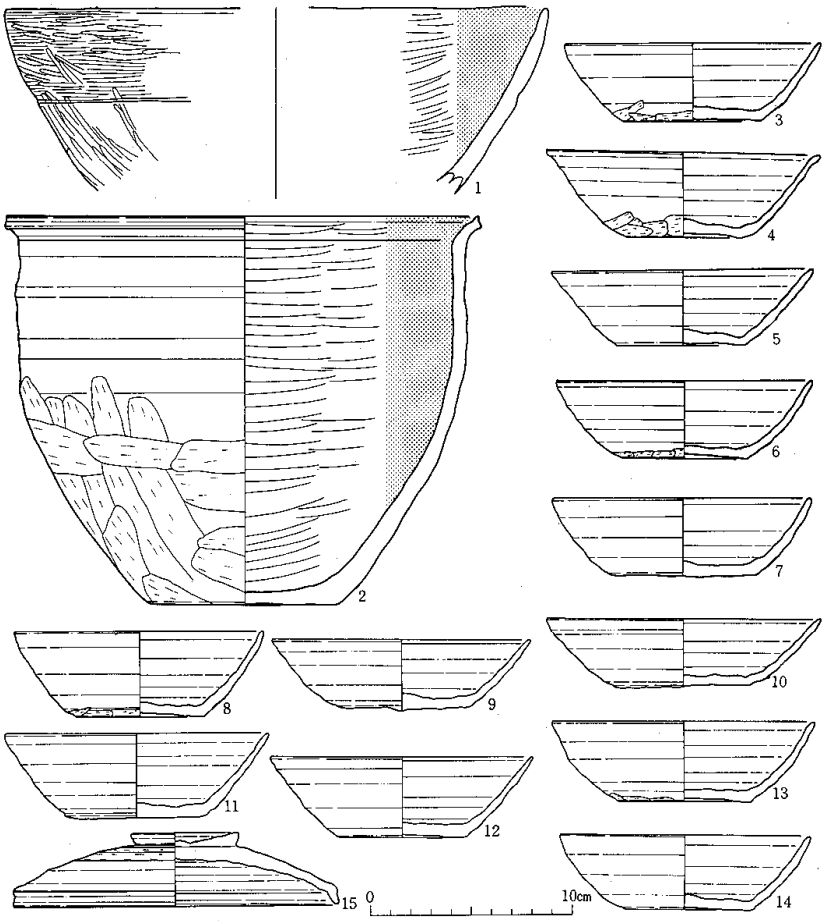


第54図　第23号住居跡



番号	層位	種類・器高	分類	特徴	登録	残存
1	床	土師器・坏	AⅣ	外面：口～底部ヘラケズリ　ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ（横・斜）黒色処理　口径12.3cm、器高4.5cm	23住－1	3/4
2	床	土師器・甕	AⅠ1aii	外面：口縁部ヨコナデ、胴・底部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ　口径19.4cm、器高30.0cm	23住－4	3/4
3	床	土師器・甕	AⅠ1aii	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ　口径18.2cm、器高25.9cm	23住－5	1/4
4	3 層	土師器・甕	AⅡ2	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ、胴部磨毛目、ナデ　口径21.3cm、器高25.6cm	23住－6	3/4

第55図　第23号住居跡出土土器(1)



番号	層位	種類・器形	分類	特徴	登録	残存
1	5層	土師器・鉢		外面：口縁部ヨコナデ、ヘラミガキ、胴部ヘラケズリ、ヘラミガキ、段あり、内面：ヘラミガキ、(横)黒色処理	23住－2	一部
2	3層	土師器・甕	B Ⅱ 1	外面：口～胴部ロクロナデ、胴下部ヘラケズリ 内面：ヘラミガキ（横）、黒色処理　口径23.5cm、器高19.3cm	23住－7	⅔
3	2・3層	須恵器・坏	B Ⅰ	外面：口～胴部ロクロナデ、胴下端手持ちヘラケズリ 内面：ロクロナデ　口径12.7cm、底径6.8cm、器高3.9cm	23住－9	⅔
4	3層	須恵器・坏	B Ⅱ	外面：口～胴部ロクロナデ、胴下端手持ちヘラケズリ 内面：ロクロナデ　口径13.6cm、底径5.6cm、器高4.4cm	23住－10	⅔
5	2・3層	須恵器・坏	B Ⅱ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ロクロナデ　口径13.0cm、底径6.5cm、器高3.8cm	23住－11	⅔
6	2・3層	須恵器・坏	B Ⅰ	外面：口～胴部ロクロナデ、胴下端手持ちヘラケズリ、底部手持ちヘラケズリ 内面：ロクロナデ　口径12.7cm、底径6.2cm、器高3.9cm	23住－12	⅔
7	3層	須恵器・坏	B Ⅰ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部手持ちヘラケズリ 内面：ロクロナデ　口径12.8cm、底径7.5cm、器高3.9cm	23住－13	½
8	3層	須恵器・坏	B Ⅰ	外面：口～胴部ロクロナデ、胴下端手持ちヘラケズリ、底部手持ちヘラケズリ 内面：ロクロナデ　口径12.4cm、底径6.4cm、器高4.3cm	23住－15	½
9	3層	須恵器・坏	A Ⅲ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部ヘラ切り 内面：ロクロナデ　口径12.8cm、底径6.7cm、器高3.7cm	23住－16	½
10	3層	須恵器・坏	A Ⅲ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部ヘラ切り 内面：ロクロナデ　口径13.6cm、底径6.8cm、器高3.5cm	23住－14	½
11	3層	須恵器・坏	B Ⅱ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部手持ちヘラケズリ 内面：ロクロナデ　口径13.1cm、底径7.1cm、器高4.2cm	23住－18	½
12	3層	須恵器・坏	B Ⅱ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部手持ちヘラケズリ 内面：ロクロナデ　口径13.0cm、底径6.4cm、器高4.0cm	23住－19	⅓
13	3層	須恵器・坏	B Ⅱ	外面：口～胴部ロクロナデ、胴下端手持ちヘラケズリ、底部手持ちヘラケズリ 内面：ロクロナデ　口径13.1cm、底径6.6cm、器高4.0cm	23住－17	½
14	2層	須恵器・坏	B Ⅰ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部手持ちヘラケズリ 内面：ロクロナデ　口径12.4cm、底径6.4cm、器高3.7cm	23住－24	⅔
15	5層	須恵器・甕	C	外面：突帯部回転ヘラケズリ、口縁部ロクロナデ、リング状ツマミあり 内面：ロクロナデ	23住－25	¼

第56図　第23号住居跡出土土器(2)

りとしている。煙道部は地山を水平に掘り抜いてつくられており、先端部は径 35cm のピット状になっている。また、煙道部内の堆積土は先述した燃焼部との区切りの段付近で途切れ、しかも、燃焼部内には住居内堆積土と同質のものが堆積しており、側壁はすでに消失していることから、古い段階のカマドと推定される。第２カマド：残存する燃焼部側壁は粘土積み上げによってつくられている。底面はややくぼみ浅い皿状を呈す。側壁内面と伴に火熱を受け赤変している。煙道部との境には約 20cm の段が形成され区切りにしている。煙道部は地山を先端部に向かって上がるように掘り抜かれている。先端部にはピット等はない。

〔堆積土〕　５層認められる。第Ⅰ層は住居中央部付近に一部薄く堆積している。第Ⅱ層は灰白色火山灰で住居中央部に堆積している。第Ⅲ層は周壁沿いを除いたほぼ全域に堆積しており中央部では一部床面上に至る。第Ⅳ層は壁沿いから床面上に堆積している。第Ⅴ層は壁沿いに堆積している。自然流入土である。

〔出土土器〕　図示したのは 19 点である。その内、床面上から土師器坏１点、土師器甕２点が出土している。これらの土器は住居内で共伴するものと考えられる。土師器坏はロクロ不使用のもので底部が半球状を呈している。その他、堆積土中から土師器鉢１点、土師器甕２点、須恵器坏 12 点、須恵器蓋１点が出土している。

第 24 号住居跡

〔規模・平面形〕　3.5×2.5mの隅丸長方形を呈するが、やや不整形である。

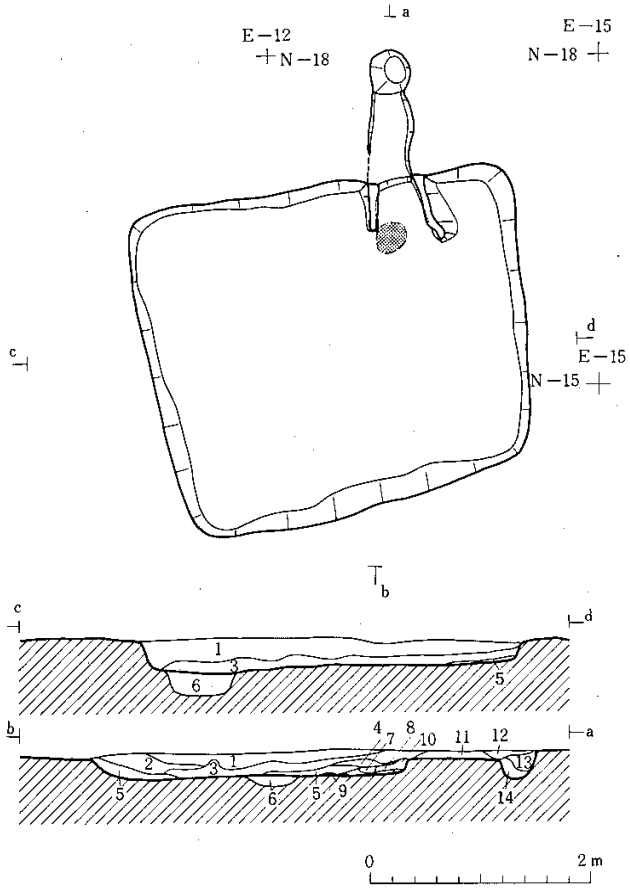
〔壁〕　地山を壁としている。残存壁高は約 15～25cm である。床面からの立ち上がりは南壁は緩やかであるが、その他は急である。

〔床面〕　大半は地山をそのまま床としているが、部分的に掘り方がみられ、その上面を床にしている所もある。面は多少の凹凸はあるが、全体的に平坦である。床面上・下では柱穴は不明である。周溝も認められない。

〔カマド〕　住居北辺の東寄りの所に付設されている。残存する燃焼部側壁は粘土積み上げによってつくられている。底面はほぼ平坦で左側壁近くは火熱を受け赤変している。煙道部との境には約 10cm の段を形成し区切りとしている。煙道部は地山を水平に掘り抜いてつくられている。先端部には径約 40cm、深さ 25cm のピットがある。

〔堆積土〕　３層認められる。第Ⅰ、Ⅱ層は住居全域、第Ⅲ層は壁沿いに堆積している。自然流入土である。

〔出土土器〕　図示したものは２点のみである。床面から須恵器坏、堆積土中から土師器坏が各々１点出土している。その他は破片で量も少ない。



層位	層No	土色	土性	備考	遺物取り上げ層位
Ⅰ	1	黒褐色 (7.5Y R 3/2)	シルト		
Ⅱ	2	暗褐色 (7.5Y R 3/4)	シルト	地山粒、炭化物混入	
	3	黒褐色 (7.5Y R 3/2)	シルト		
Ⅲ	4	暗褐色 (7.5Y R 3/4)		地山粒混入	
	5	黒褐色 (7.5Y R 3/2)	シルト		
掘り方	6	にぶい黄橙色 (10Y R 6/4)	粘土	地山、多く混入	
カマド内	7	黒褐色 (7.5Y R 3/2)	シルト	地山粒多く混入	
	8	暗褐色 (7.5Y R 3/3)	シルト	焼土ブロック混入	
	9	赤色 (7.5R 4/6)		焼土	
	10	暗褐色 (7.5Y R 3/3)	粘土質シルト	地山、焼土粒多く混入	
	11	暗褐色 (7.5Y R 3/3)	シルト	炭化物、焼土、地山ブロック混入	
	12	暗褐色 (7.5Y R 3/3)	シルト		
	13	暗褐色 (7.5Y R 3/4)	シルト	炭化物、焼土地山ブロック混入	
	14	黒褐色 (7.5Y R 3/2)	シルト		

第57図　第24号住居跡

第25号住居跡

〔重複・規模・平面形〕　溝５と重複している。住居の北東隅が溝によって切られている。5.8×5.7ｍの隅丸方形を呈する。

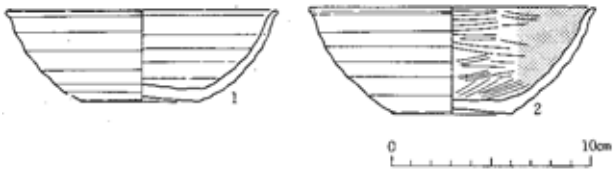
〔壁〕　地山を壁としている。残存する壁高は約25～30cm である。床面からの立ち上がりはやや緩やかである。

〔床面〕　住居のほぼ全域には掘り方がみられ、その埋土上面を床としている。特に壁沿いの掘り方は中央部のそれと比較してやや深い。面は平坦であるが、南・西側はやや高くなっている。また床面の中央部には約 1.5×１ｍの範囲の焼面がみられ、西壁沿いには炭化物、炭化した木材が散在している。

〔柱穴〕　床面上で４個のピットが検出された。これら全てのピットには柱痕と掘り方の区別があり、規模、配置等から柱穴と考えられる。各ピットは住居の対角線上に位置し、結んだ線は住居平

面形に相似する。

〔周溝〕　カマド付設部分、東壁の半分を除いた住居壁沿いに巡る。幅は約15cm、床面からの深さは約５～10cmである。断面形は「U」字状を呈する。



1．須恵器坏　外面：ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ロクロナデ
2．土師器坏　外面：ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ヘラミガキ、黒色処理

第58図　第24号住居跡出土土器

〔カマド〕　住居北辺の東寄りの所に付設されている。燃焼部は住居壁を外方に約20cm掘り込んでつくられている。残存する燃焼部側壁は粘土積み上げによってつくられており、両側壁の先端部には掘り方があり、土師器甕がオサエとして利用されている。ただし、右側壁は掘り方のみが残存している。底面はほぼ平坦であり、面側壁内面と伴に火熱を受け赤変している。また底面の左寄りの所に地山を削り出してつくった径約20cm、高さ約３cmの高まりがあり、支脚として使用されたものであろう。煙道部との境には約10cmの段が形成され区切りとしている。煙道部は削平のため大半は残っていないが、底面は先端部に向かって上がっていき、先端部には径約40cm、深さ25cmのピットがある。

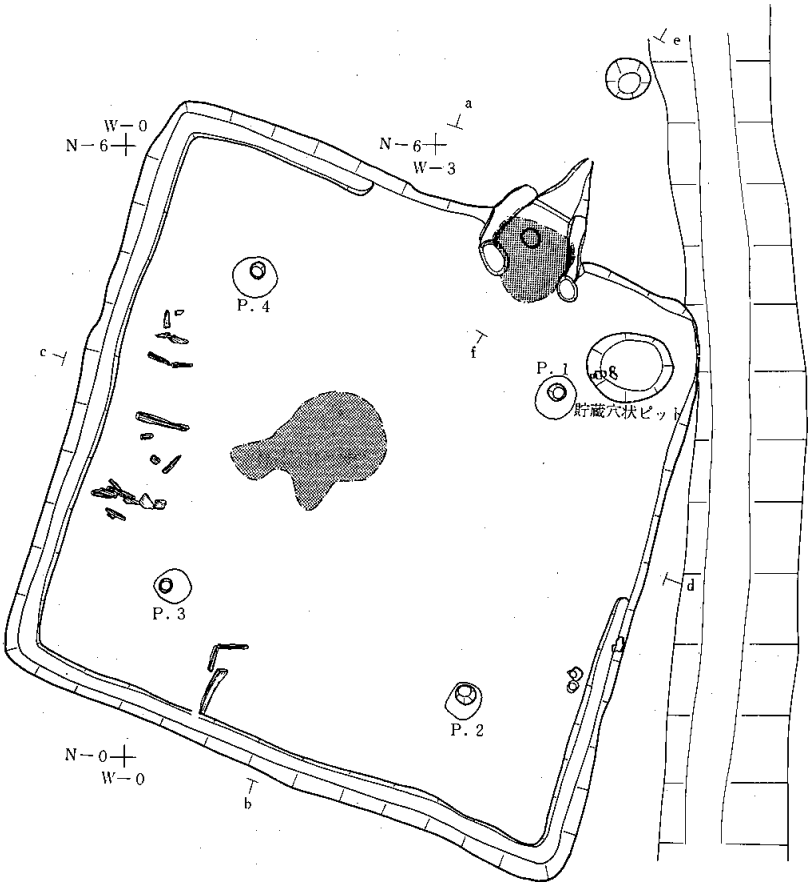
〔その他の施設〕　住居北東隅、カマド右側に貯蔵穴状ピットがある。85×70cmの楕円形を呈し底面からの深さは約20cmである。

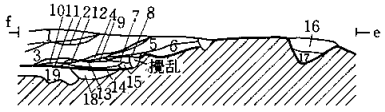
〔堆積土〕　４層認められる。第Ⅰ層は住居中央部付近、第Ⅱ・Ⅲ層は住居ほぼ全域、特に第Ⅲ層は床面上まで堆積している。第Ⅳ層は壁沿いに堆積している。自然流入土である。

〔出土土器〕　図示したのは16点である。その内、床面上から須恵器坏３点出土している。貯蔵穴状ピットから土師器坏１点、須恵器坏１点出土している。また、カマド内からは土師器甕（側壁オサエの甕も含む）４点、須恵器坏１点出土している。これらの土器は住居内で共伴するものと考えられる。その他、堆積土中から土師器甕１点、須恵器坏４点出土している。土師器坏はロクロ使用のものである。

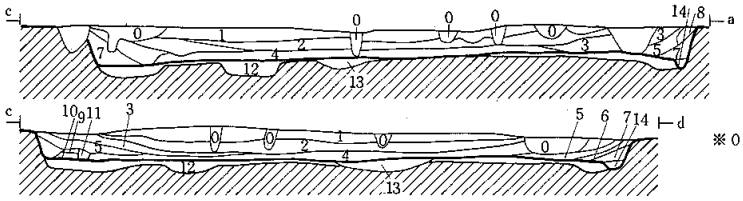
第25号住居跡堆積土

層位	層No	土色	土性	備考	遺物取り上げ層位
Ⅰ	1	黒褐色（7.5YR3/4）	シルト		
Ⅱ	2	褐色（10YR5/3）	シルト		
Ⅲ	3	暗褐色（7.5YR3/4）	シルト	地山粒混入	
	4	黒褐色（7.5YR2/3）	シルト	木炭、焼土粒混入	
Ⅳ	5	褐色（7.5YR4/4）	シルト	木炭粒混入	
	6	黒褐色（7.5YR3/4）	シルト		
	7	極暗褐色（7.5YR2/3）	シルト	地山粒混入	
	8	褐色（10YR4/3）	シルト	壁のくずれ	
	9	にぶい褐色（7.5YR5/3）	シルト		
	10	褐色（7.5YR4/3）	シルト		
	11	暗褐色（7.5YR3/4）	シルト	木炭、焼土粒混入	
掘り方	12	黒褐色（10YR2/3）	シルト	地山粒、ブロック混入	
焼け面	13	赤色（10R4/6）			
周溝内	14	暗褐色（7.5YR3/3）	シルト		



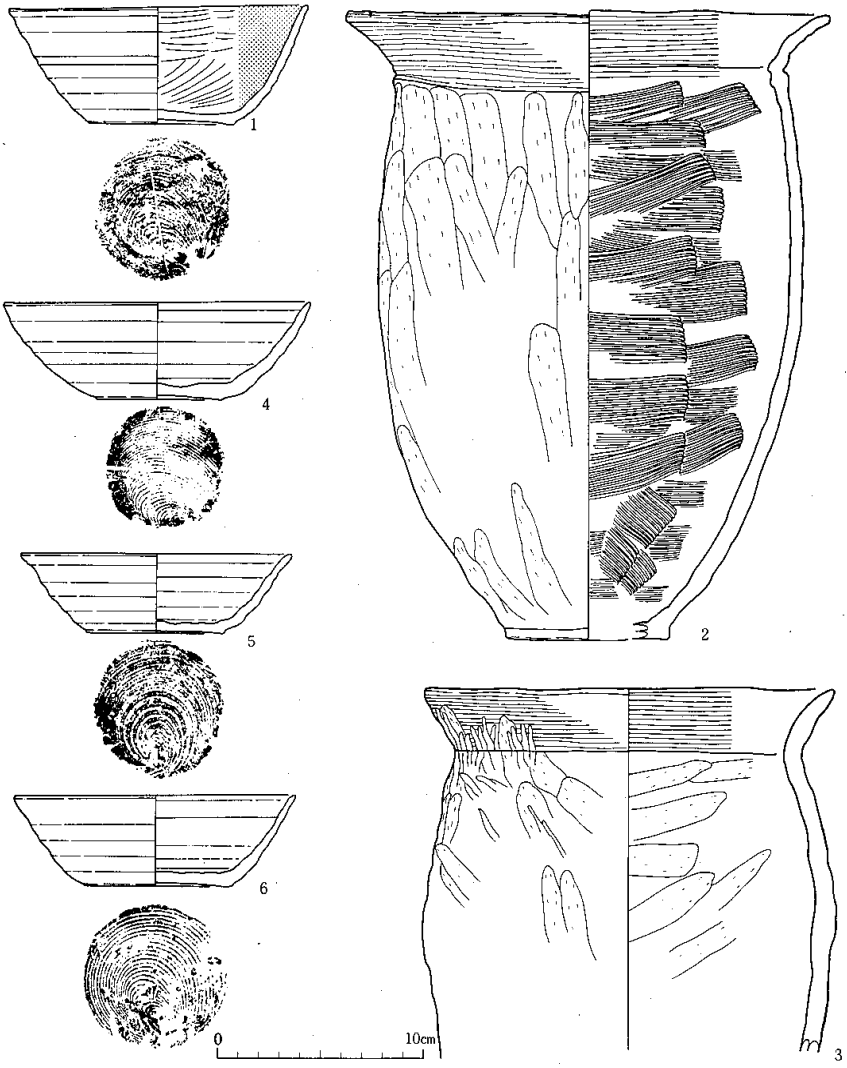


1	住居内Ⅰ層	11	黒褐色（7.5Y R 3/2）シルト
2	〃 Ⅱ層	12	暗褐色（7.5Y R 3/3）シルト
3	〃 Ⅲ層	13	黒褐色(7.5Y R 3/2）シルト、木炭
4	黒褐色（7.5Y R 3/2）シルト	14	灰　土
5	黒褐色（7.5Y R 3/2）シルト	15	にぶい赤褐色（5 Y R 4/4）シルト
6	灰褐色（7.5Y R 4/2）シルト	16	黒褐色（7.5Y R 3/2）シルト
7	褐色（10Y R 4/4）シルト	17	暗褐色（7.5Y R 3/3）シルト
8	暗赤褐色（2.5Y R 3/4）シルト	18	焼　面
9	にぶい赤褐色（5 Y R 4/4）シルト	19	暗褐色（10Y R 3/4）シルト
10	赤色（10Y R 3/6）焼土		



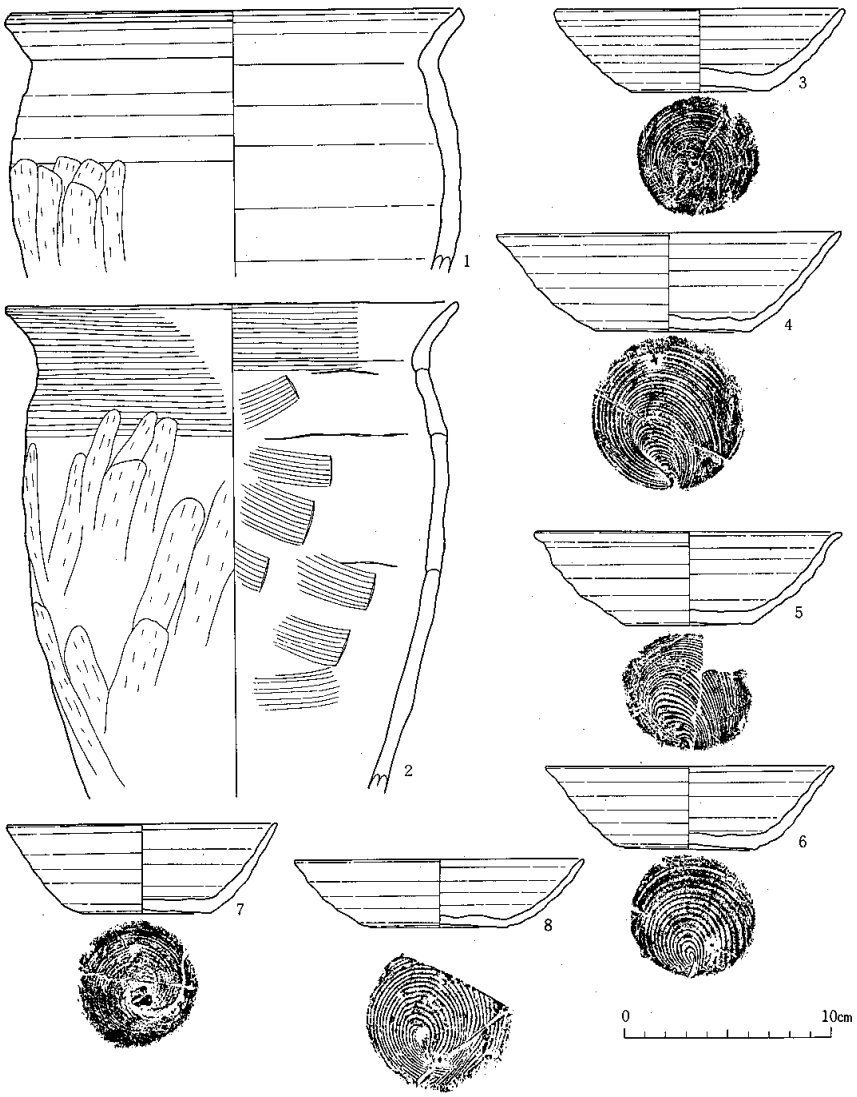
第59図　第25号住居跡

0　2m



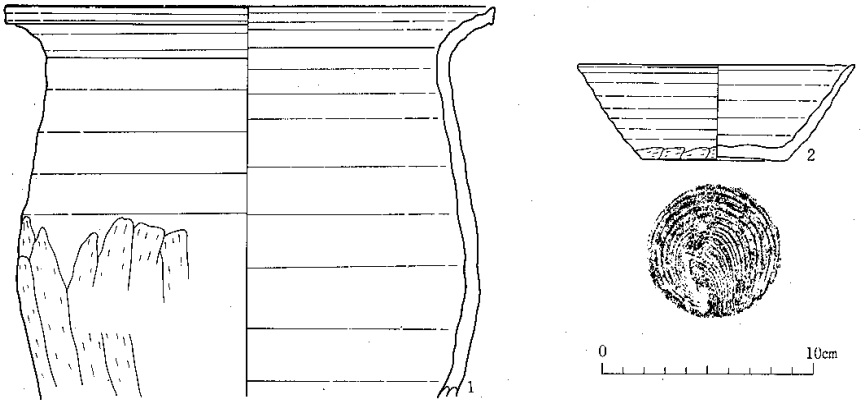
番号	層位	種類・器形	分類	特徴	登録	残存
1	貯蔵穴	土師器・坏	BⅠ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ヘラミガキ（横、放射）黒色処理　口径14.4cm、底径7.0cm、器高5.8cm	25住－1	3/4
2	カマド	土師器・甕	AⅠaⅠ	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ、胴部刷毛目　口径23.4cm、器高30.6cm	25住－12	1/4
3	カマド	土師器・甕	AⅠaⅠii	外面：口縁部ヨコナデ、ヘラミガキ、胴部ヘラケズリ、ヘラミガキ 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	25住－15	1/4
4	床	須恵器・坏	C	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ロクロナデ　口径14.9cm、底径6.2cm、器高4.8cm	25住－3	3/4
5	床	須恵器・坏	BⅡ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ロクロナデ　口径13.2cm、底径6.7cm、器高3.9cm	25住－4	1/4
6	床	須恵器・坏	BⅠ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ロクロナデ　口径13.7cm、底径7.2cm、器高4.5cm	25住－7	3/4

第60図　第25号住居跡出土土器(1)



番号	層位	種類・器形	分類	特徴	登録	残存
1	カマド	土師器・甕	BⅡ1	外面：口～胴部ロクロナデ、胴下半ヘラケズリ、内面：ロクロナデ	25住—17	-- 部
2	カマド	土師器・甕	AⅠ1aii	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ、内面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	25住—13	¼
3	カマド	須恵器・坏	BⅡ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ロクロナデ　口径14.0cm、底径6.9cm、器高4.0cm	25住—9	½
4	貯蔵穴	須恵器・坏	BⅡ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ロクロナデ　口径16.8cm、底径7.7cm、器高4.9cm	25住—6	¾
5	3 層	須恵器・坏	BⅡ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ロクロナデ　口径14.9cm、底径6.2cm、器高4.6cm	25住—11	½
6	3 層	須恵器・坏	BⅡ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ロクロナデ　口径13.1cm、底径6.4cm、器高4.4cm	25住—8	⅔
7	3 層	須恵器・坏	AⅢ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ロクロナデ　口径14.0cm、底径6.6cm、器高3.3cm	25住—10	½
8	4 層	須恵器・坏	BⅡ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ロクロナデ　口径14.0cm、底径7.1cm、器高4.1cm	25住—5	¾

第61図　第25号住居跡出土土器(2)



番号	層位	種類・器形	分類	特徴	登録	残存
1	3 層	土師器・甕	BⅡ	外面：口～胴部ロクロナデ、胴下半ヘラケズリ、内面ロクロナデ	25住－14	¼
2	4 層	須恵器・坏	BⅠ	外面：口～胴部ロクロナデ、胴下端手持ちヘラケズリ、胴部回転糸切り、内面：ロクロナデ 口径13.1cm 底径6.8cm 器高4.5cm	25住－2	½

第62図　第25号住居跡出土土器(3)

第26号住居跡

〔残存・規模・平面形〕　カマド煙道部の先端部は攪乱をうけ残存しない。3.7×3.5mの方形を呈するがやや東西に長い。各隅はやや丸味をもつ。

〔壁〕　地山を壁としている。残存する壁高は約20～25cmである。床面からの立ち上がりは緩やかである。

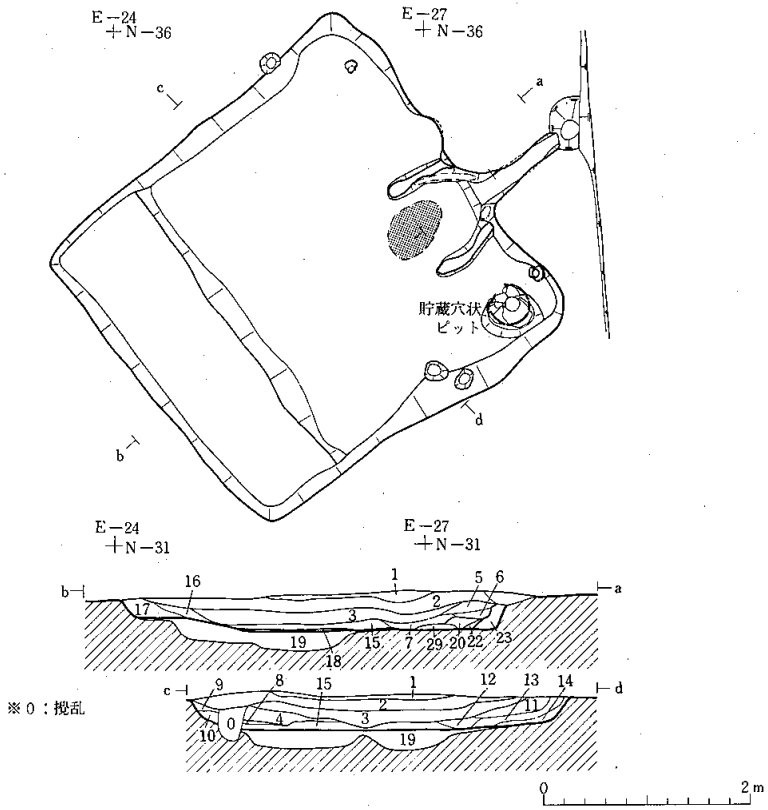
〔床面〕　住居東から北側の一部は地山をそのまま床としているが、その他の部分には掘り方がみられ、その埋土上面を床としている。面はほぼ平坦であるが、西壁から幅約1m、高さ10cm前後の高まりがある。また、住居中央部付近には生活層がみられる。柱穴は床面上・下においても不明であり、周溝もみられない。

〔カマド〕　住居東辺のやや南寄りの所に付設されている。残存する燃焼部側壁は地山を削り出してつくられているが、天井部はすでに崩落し残らないが、わずかに堆積土に灰白粘土がみられることから粘土構築によるものと推定される。底面はほぼ平坦であり、側壁内面と伴に火熱を受け赤変している。煙道部との境には約7cmの段があり区切りとしている。煙道部は地山を先端部に向かってやや上がるように掘り抜かれているが、先端部は先述したように原形を留めていない。

〔その他の施設〕　住居南東隅、カマド右側に貯蔵穴状ピットがある。径約50cmの円形を呈し床面からの深さは約20cmある。

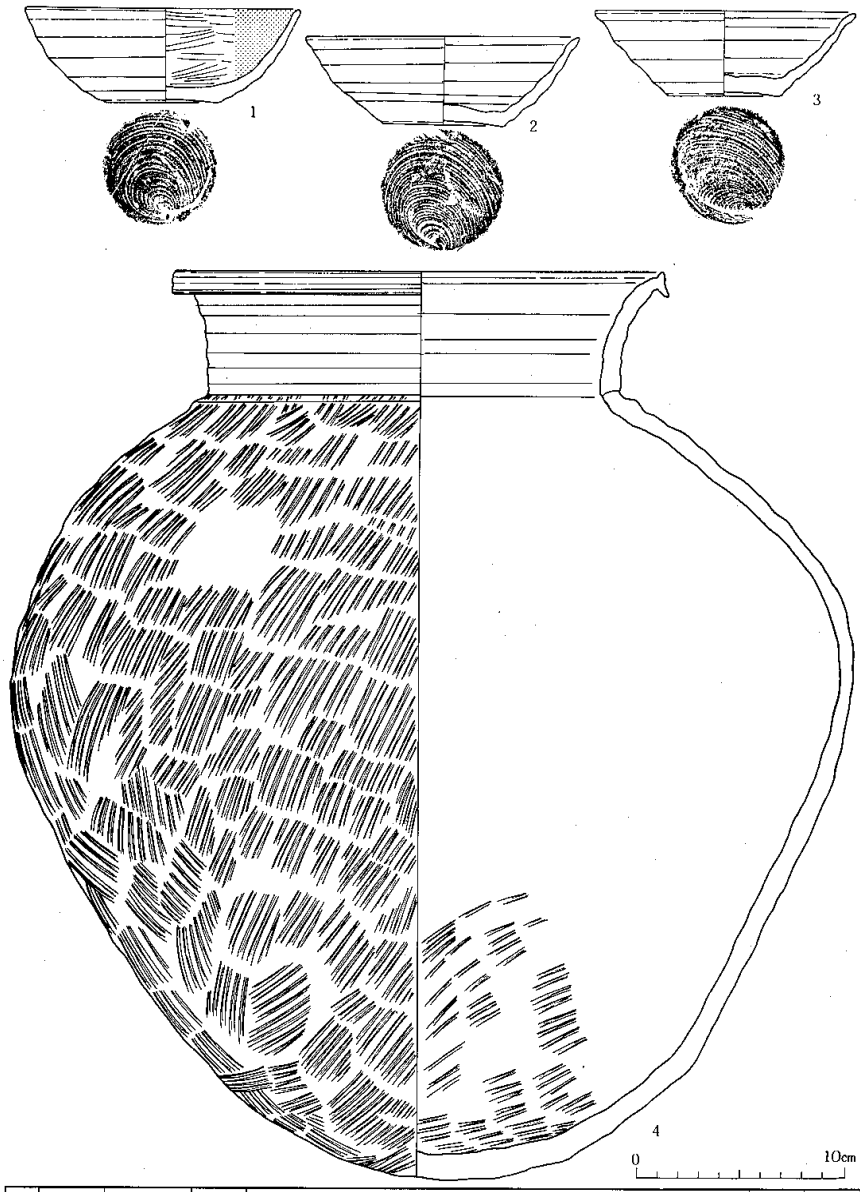
〔堆積土〕　5層認められる。第Ⅰ層は灰白色火山灰で住居ほぼ中央部に一部堆積し、第Ⅱ、Ⅲ層はほぼ全域に堆積している。第Ⅳ層は住居南側に部分的に堆積している。第Ⅴ層は壁沿いから床面上に堆積している。自然流入土である。

〔出土土器〕　図示したのは10点である。その内、床面上から土師器坏1点、須恵器坏2点、



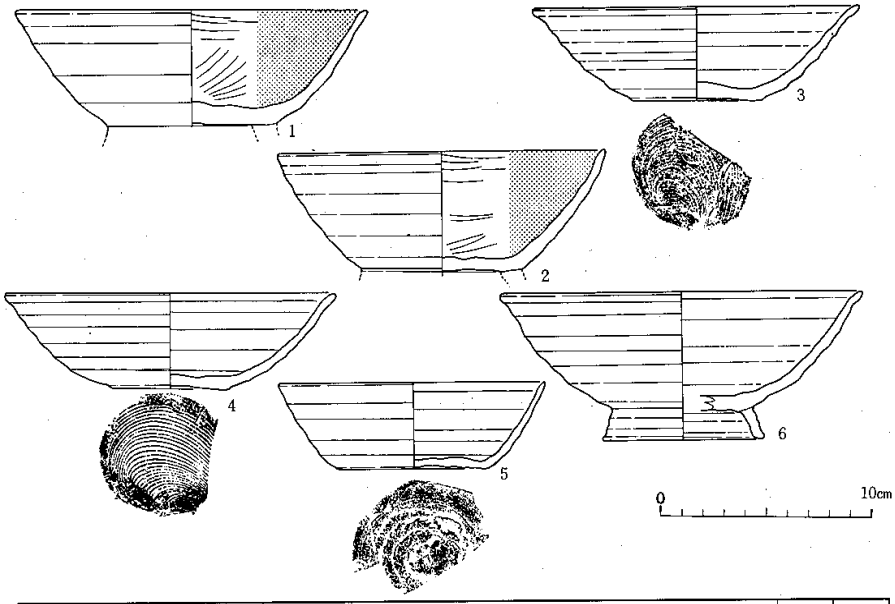
層位	層No	土色	土性	備考	遺物取り上げ層位
Ⅰ	1	灰白色（7.5Y R 8/2）	火山灰		1層
Ⅱ	2	暗褐色（10Y R 3/4	シルト		2層
Ⅲ	3	黒褐色（10Y R 3/2）	シルト		3層
Ⅳ	4	褐色（10Y R 4/4）	地山		4層
Ⅴ	5	暗褐色（10Y R 3/3）	シルト	地山粒シモフリ状に混入	5層
	6	にぶい褐色（7.5Y R 5/4）	シルト	焼土白色土混入	〃
	7	暗褐色（10Y R 3/4）	シルト	木炭少し混入	〃
	8	黒褐色（10Y R 3/2）	シルト	地山粒少し混入	〃
	9	黒褐色（10Y R 3/2）	シルト	地山粒混入8より多い	〃
	10	褐色（10Y R 4/4）	シルト	地山ブロック多く混入	〃
	11	黒褐色（10Y R 3/2）	シルト	地山粒、焼土粒少し混入	〃
	12	黒褐色（10Y R 3/2）	シルト	木炭多く混入	〃
	13	黒褐色（10Y R 3/2）	シルト		〃
	14	暗褐色（10Y R 3/3）	シルト	地山粒シモフリ状に混入	〃
	15	暗褐色（7.5Y R 3/4）	シルト	焼土木炭多く混入	〃
	16	黒褐色（10Y R 3/2）	シルト	地山粒少し混入	〃
	17	暗褐色（10Y R 3/3）	シルト	地山粒多く混入	〃
生活層	18	黒褐色（10Y R 3/2）	シルト	炭化物混入	床面
掘り方	19	明褐色（7.5Y R 5/6）	粘土	暗褐色土多く混入	
カマド内	20	黒褐色（10Y R 3/2）	シルト	木炭、焼土混入	
	21	明赤褐色（5Y R 5/6）	シルト	焼土	
	22	橙色（5Y R 6/6）	シルト	木炭、焼土混入	
	23	明黄褐色（10Y R 6/6）	粘土	カマド側壁	

第63図　第26号住居跡



番号	層位	種類・器形	分類	特徴	登録	残存
1	床	土師器・坏	B I	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ヘラミガキ（横・斜）黒色処理　口径13.4cm、底径5.9cm、器高4.5cm	26住－1	⅓
2	床	須恵器・坏	B II	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ロクロナデ　口径13.3cm、底径6.1cm、器高4.4cm	26住－5	¾
3	床	須恵器・坏	B II	外面：口～横部ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ロクロナデ　口径12.6cm、底径4.8cm、器高4.1cm	26住－6	⅓
4	床	須恵器・甕	A I	外面：口縁部ロクロナデ、胴部平行タタキ 内面：口縁部ロクロナデ、平行タタキ	26住－13	¾

第64図　第26号住居跡出土土器(1)



番号	層位	種類・器形	分類	特徴	登録	残存
1	2層	土師器・高台付	BⅢ	外面：口～胴部ロクロナデ　内面：ヘラミガキ（横・斜位）黒色処理	26住－3	½
2	2層	土師器・高台付	BⅢ	外面：口～胴部ロクロナデ　内面：ヘラミガキ（横）黒色処理	26住－4	½
3	2層	須恵器・坏	C	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り　内面：ロクロナデ　口径15.5cm 底径6.4cm 器高4.4cm	26住－7	½
4	2層	須恵器・坏	C	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り　内面：ロクロナデ　口径15.7cm 底径5.8cm 器高4.5cm	26住－8	½
5	3～5層	須恵器・坏	BⅠ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部、ヘラ切り　内面：ロクロナデ　口径12.7cm 底径7.5cm 器高4.1cm	26住－10	¼
6	2層	須恵器・高台付	C	外面：口～胴部ロクロナデ　内面：ロクロナデ	26住－12	½

第65図　第26号住居跡出土土器(2)

須恵器甕１点が出土している。これらの土器は住居内で共伴するものと考えられる。その他、堆積土中から土師器高台付坏２点、須恵器坏３点、高台付坏１点出土している。土師器坏はロクロ使用のものである。

第27号住居跡

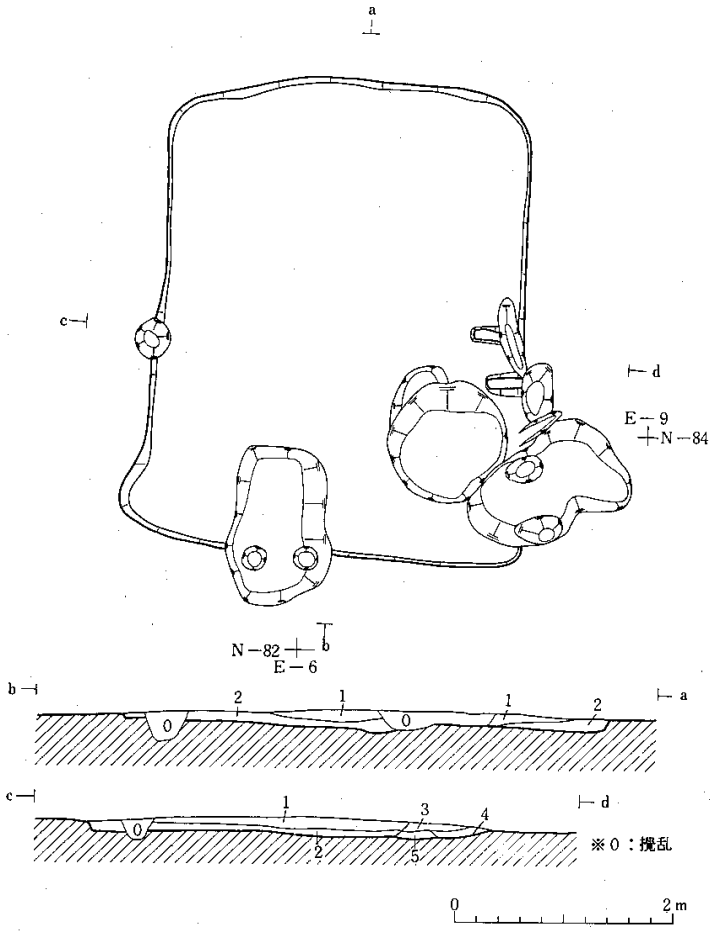
〔攪乱・規模・平面形〕　住居南壁、カマド周辺の東壁は攪乱をうけ残存しない部分がある。4.2×3.2mの隅丸長方形を呈するが、北辺は外方に張り出している。

〔壁〕　地山を壁としている。残存する壁高は約５～15cm である。床面からの立ち上がりはやや緩やかである。

〔床面〕　地山をそのまま床としている。面は若干の凹凸があり、南西側はやや高くなっている。床面上では柱穴、周溝、その他の施設は不明である。

〔カマド〕　住居東辺の南寄りの所に付設されているが、燃焼部側壁の一部のみが残存しているにすぎない。側壁は粘土積み上げによってつくられている。

〔堆積土〕　２層認められる。第Ⅰ層は住居中央部、第Ⅱ層は住居全域に堆積している。



層　位	層No	土　色	土　性	備　考	遺物取り上げ層位
Ⅰ	1	黒褐色（10YR 3/2）	シルト	灰白色土少し混入	
Ⅱ	2	黒褐色（10YR 3/2）	シルト	地山ブロック混入	
カマド内	3	暗褐色（10YR 3/4）	シルト	焼土多く混入	
	4	褐色（10YR 5/4）	シルト	焼土混入	
	5	黒褐色（7.5YR 3/2）	シルト		

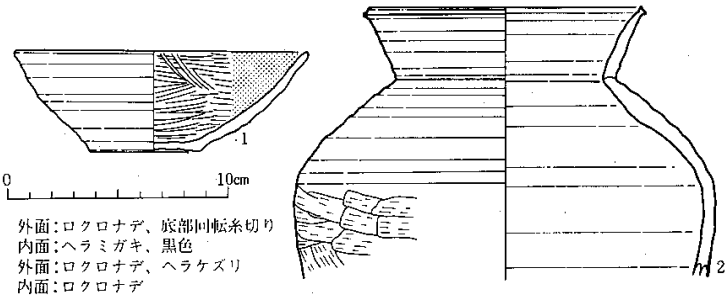
第66図　第27号住居跡

〔出土土器〕　図示したものは２点である。カマド内から土師器坏（ロクロ使用）１点、堆積土中から須恵器甕１点が出土している。

第28号住居跡

〔重複・規模・平面形〕　溝１と重複している。住居北西隅付近が溝によって切られている。3.9×3.7mの隅丸方形を呈するがやや南北に長い。

〔壁〕　地山を壁としている。ほぼ全範囲が火熱を受け赤変している。残存する壁高は約45～



1．カマド、土師器坏　外面：ロクロナデ、底部回転糸切り
　　内面：ヘラミガキ、黒色
2．2層、須恵器甕　外面：ロクロナデ、ヘラケズリ
　　内面：ロクロナデ

第67図　第27号住居跡出土土器

50cm である。床面からの立ち上がりはやや急である。

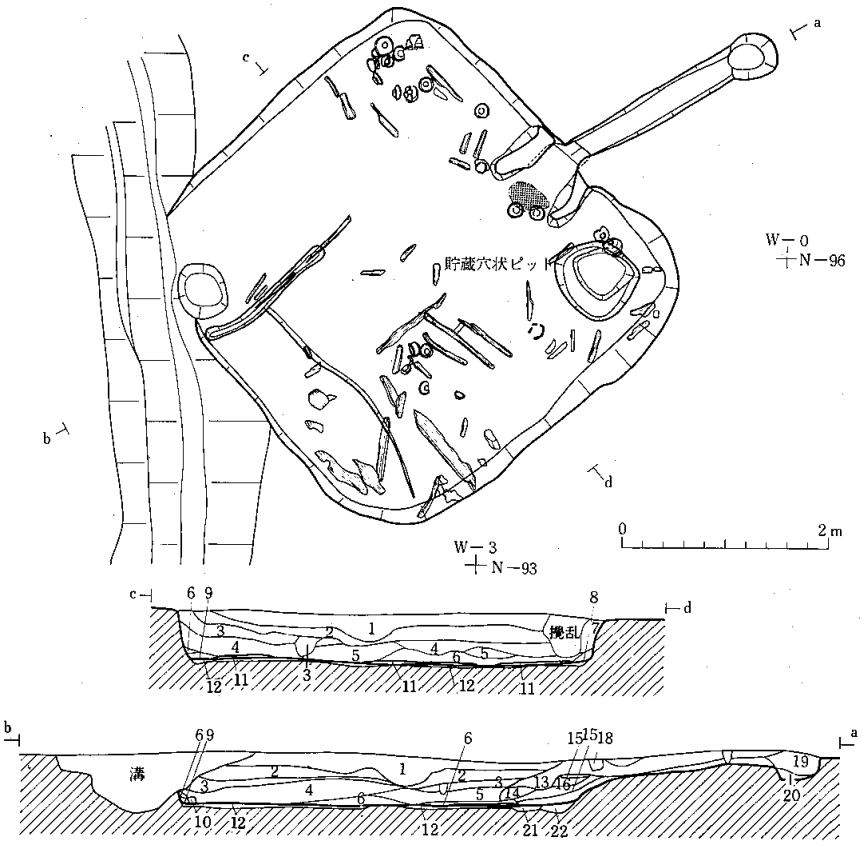
〔床面〕　住居のほぼ全域に掘り方がみられ、その埋土上面を床としている。掘り方は全体的に浅い。面はほぼ平坦であるが、住居西側に幅約 50～60cm、高さ約２～３ｍの高まりがある。この部分は地山の床面に比して軟質であり、北端部は幅約 15cm、床面からの深さ５cm の細い溝によって区切られている。また、床面上には多数の炭化材がみられる。その中には屋根材と考えられるカヤ（？）及び垂木の一部と考えられるものもある。垂木と推定される炭化した木材は住居中央部に向かい放射状に遺存しているようである。この炭化材と伴に床面上には部分的ではあるが生活層がみられる。また、床面上からは土器類等が多くまとまって出土している。以上のことから火災に遭遇したものと考えられる。床面上・下では柱穴・周溝は不明である。

〔カマド〕　住居東辺のほぼ中央部に付設されている。残存する燃焼部側壁は粘土積み上げによってつくられている。天井部はすでに崩落し残っていないが、堆積土中に崩落土と考えられる粘土があり、側壁と同様な方法・材料でつくられたものと推定される。底面はほぼ平坦であり奥に向かってやや上がる。側壁内面と伴に火熱を受け赤変している。煙道部との境には約 15cm の段があり区切りとしている。煙道部は地山を先端部に向かって上がるように掘り抜いてつくられている。先端部には径約 45cm、深さ約 30cm のピットがある。

〔その他の施設〕　住居南東隅、カマド右側に貯蔵穴状ピットがある。２回の使用が推定される。最初の使用は小さいピット（径 55cm）で堆積土中には混入物は少ない。さらに、西側に延びて浅いピット（径 80cm）が次の使用のピットである。

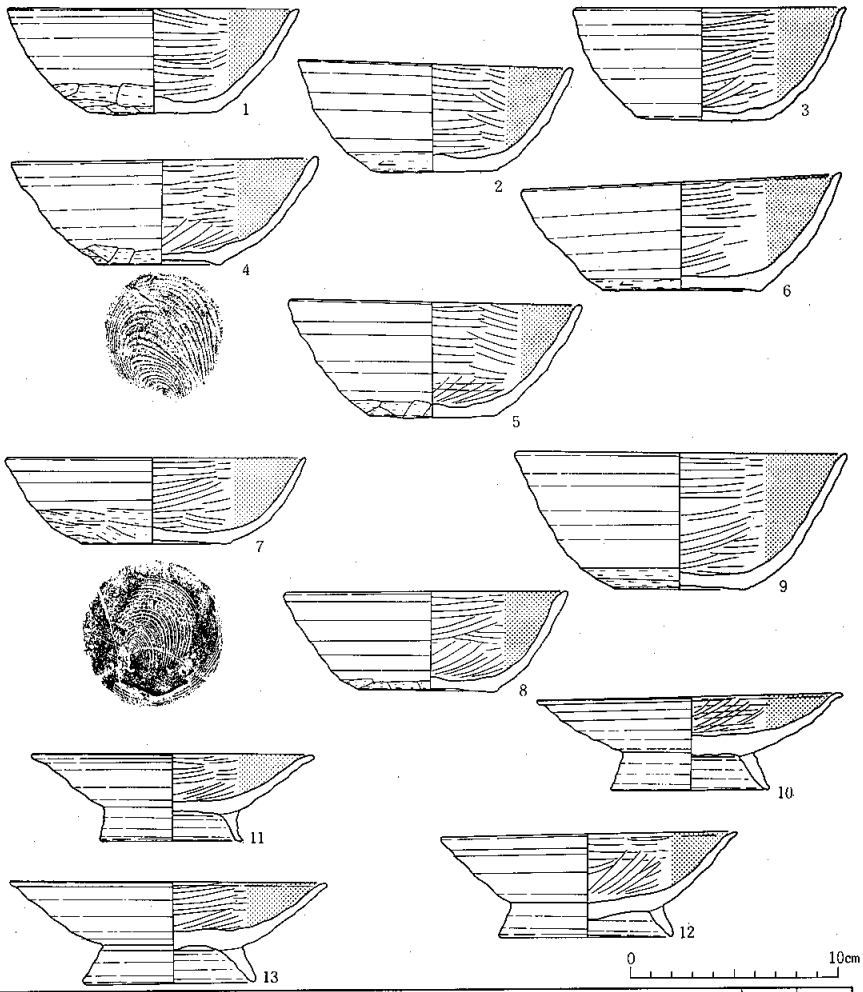
〔堆積土〕　５層認められる。第Ⅰ・Ⅱ層は住居全域に堆積している。特に第Ⅱ層は灰白色火山灰である。第Ⅲ層は北から西側に堆積している。第Ⅳ層は住居全域の床面上に堆積している。第Ⅴ層は壁沿いに堆積している。この内、第Ⅳ層は住居火災の際、一時的に堆積し、主に第Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ層は火災後堆積したものと推定される。自然流入土である。

〔出土土器〕　図示したものは35 点である。その内、床面上から土師器坏７点、高台付坏４点、甕２点、須恵器坏 12 点、壺２点が出土している。カマド内からは土師器坏１点、甕２点、須恵



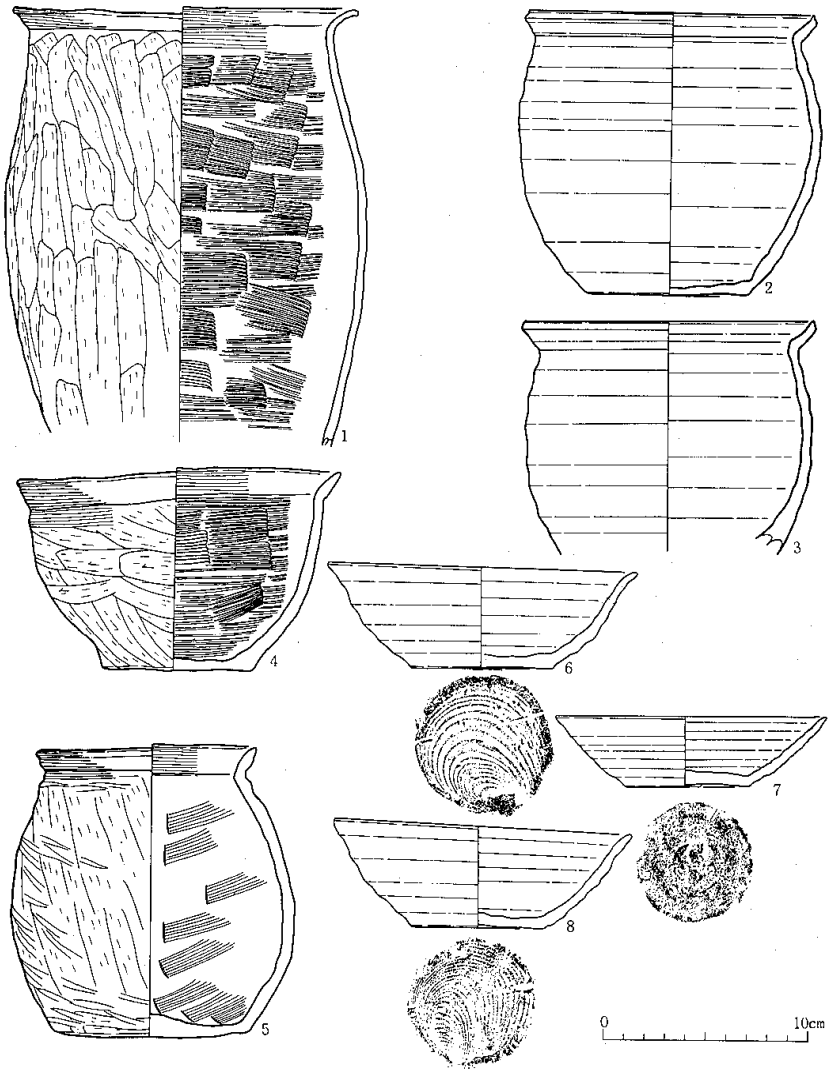
層位	層No	土色	土性	備考	遺物取り上げ層位
Ⅰ	1	黒色（10YR 3/1）	シルト		1層
Ⅱ	2	灰白色（7.5YR 8/2）	火山灰		2層
Ⅲ	3	黒褐色（10YR 3/3）	シルト	地山粒、木炭粒少し混入	3層
Ⅳ	4	暗褐色（10YR 3/4）	シルト	木炭塊多く混入	4層
	5	褐色（10YR 4/4）	シルト		5層
	6	暗褐色（7.5YR 3/4）	シルト	焼土多く混入、木炭塊混入	6層
Ⅴ	7	褐色（10YR 4/4）	シルト	地山、ブロック多く混入	〃
	8	暗褐色（10YR 3/4）	シルト	地山粒多く混入	〃
	9	褐色（10YR 4/4）	シルト	地山粒多く混入	〃
	10		シルト	木炭塊	
生活層	11	暗褐色（10YR 3/3）	粘土		床面
掘り方	12	黄褐色（10YR 5/6）	シルト		
カマド	13	暗褐色（10YR 3/3）	シルト	焼土、地山粒少し混入	
	14	暗褐色（10YR 3/4）	シルト		
	15	明褐色（7.5YR 5/6）	粘土	天井部崩落土	
	16	褐色（7.5YR 4/4）	シルト	焼土多く混入	
	17	極暗褐色（7.5YR 2/3）	シルト	焼土多く混入	
	18	明褐色（7.5YR 5/6）	粘土	カマド天井部	
	19	褐色（10YR 4/4）	シルト	焼土塊スス混入	
	20	黒褐色（10YR 3/2）	シルト	地山粒、焼土粒混入	
	21	赤色（10R 4/6）		火熱が及んだ所	
カマド掘り方	22	明褐色（7.5YR 5/6）	シルト	地山粒混入	

第68図　第28号住居跡



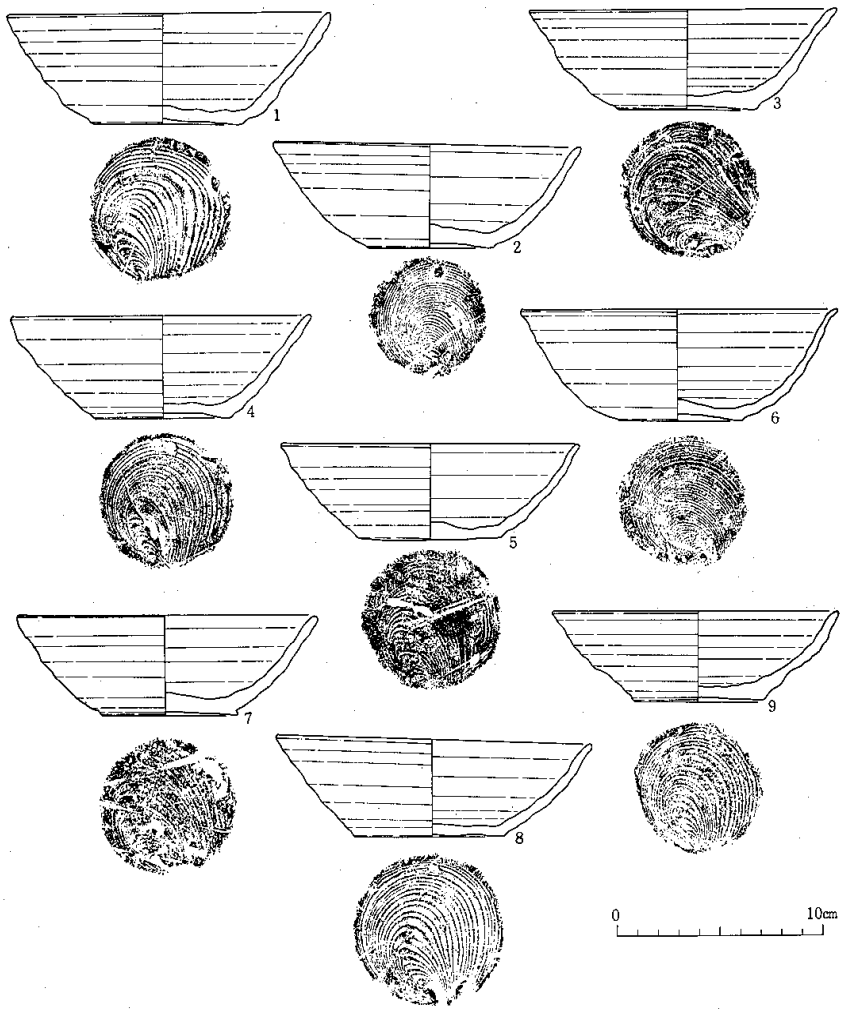
番号	層位	種類・器形	分類	特徴	登録	残存
1	床	土師器・坏	BI	外面：口～胴部ロクロナデ、底部手持ちケズリ 内面：ヘラミガキ（横・斜）黒色処理　口径13.9cm　底径 6.2cm　器高 5.0cm	28住－1	1/4
2	床	土師器・坏	BI	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転ケズリ 内面：ヘラミガキ（横・斜）黒色処理　口径13.2cm　底径 5.9cm　器高 5.3cm	28住－2	1/4
3	床	土師器・坏	BI	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ヘラミガキ（横・斜）黒色　口径12.9cm　底径 6.4cm　器高 5.5cm	28住－3	1/4
4	床	土師器・坏	BI	外面：口～胴部ロクロナデ、手持ちケズリ、底部回転糸切り 内面：ヘラミガキ、黒色　口径14.7cm　底径 6.0cm　器高 5.3cm	28住－5	1/4
5	床	土師器・坏	BI	外面：口～胴部ロクロナデ、底部手持ちケズリ 内面：ヘラミガキ、黒色　口径14.2cm　底径 6.1cm　器高 5.7cm	28住－4	1/4
6	床	土師器・坏	BI	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転ケズリ、回転糸切り 内面：ヘラミガキ、黒色　口径15.4cm　底径 7.7cm　器高 5.7cm	28住－6	3/4
7	カマド	土師器・坏	BII	外面：口～胴部ロクロナデ、手持ちケズリ、底部回転糸切り 内面：ヘラミガキ、黒色　口径14.5cm　底径 7.0cm　器高 4.2cm	28住－8	3/4
8	床	土師器・坏	BI	外面：口～胴部ロクロナデ、底部手持ちケズリ 内面：ヘラミガキ（横・斜）黒色　口径13.6cm　底径 6.6cm　器高 5.0cm	28住－7	3/4
9	4層	土師器・坏	BI	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転ケズリ 内面：ヘラミガキ、黒色　口径16.0cm　底径 6.4cm　器高 6.6cm	28住－9	3/4
10	床	土師器・高台付	BI	外面：口～台部ロクロナデ　内面：ヘラミガキ、黒色	28住－35	3/4
11	床	土師器・高台付	BI	外面：口～台部ロクロナデ　内面：ヘラミガキ、黒色	28住－11	1/4
12	床	土師器・高台付	BI	外面：口～台部ロクロナデ　内面：ヘラミガキ、黒色	28住－10	1/4
13	床	土師器・高台付	BI	外面：口～台部ロクロナデ　内面：ヘラミガキ、黒色	28住－12	3/4

第69図　第28号住居跡出土土器(1)



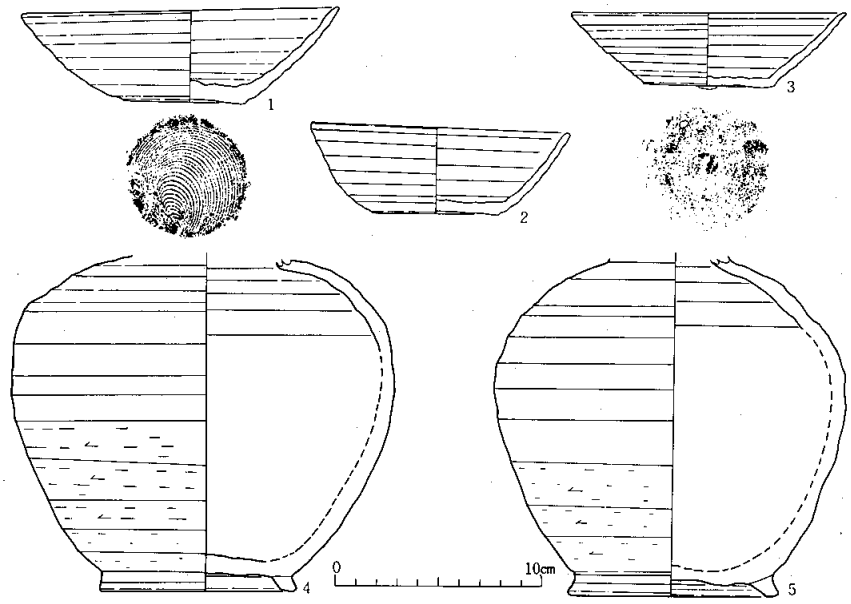
番号	層位	種類・器形	分類	特徴	登録	残存
1	カマド	土師器・甕	AⅠ2	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ、内面：口縁部ヨコナデ、胴部刷毛目	28住—13	½
2	床	土師器・甕	AⅠibii	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ、内面：口縁部ヨコナデ、胴部刷毛目　口径15.8cm、器高9.9cm	28住—15	¾
3	5層	土師器・甕	AⅡ4	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ、ヘラミガキ、内面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ　口径10.8cm、器高14.2cm	28住—16	¾
4	床	土師器・甕	BⅠ3	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ロクロナデ　口径14.2cm、器高13.7cm	28住—14	¾
5	カマド	土師器・甕	BⅠ3	外面・内面：口～胴部ロクロナデ	28住—17	½
6	床	須恵器・坏	BⅡ	外面：口～胴部ロクロナデ、胴部回転糸切り、内面：ロクロナデ　口径15.2cm、底径7.0cm、器高5.2cm	28住—18	¾
7	床	須恵器・坏	AⅢ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部ヘラ切り、内面：ロクロナデ　口径13.2cm、底径5.8cm、器高3.5cm	28住—20	¼
8	床	須恵器・坏	BⅡ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ロクロナデ　口径14.7cm、底径6.5cm、器高5.3cm	28住—19	¼

第70図　第28号住居跡出土土器(2)



番号	層位	種類・器形	分類	特徴	登録	残存
1	床	須恵器・坏	B II	外面：口～胴部、ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ロクロナデ　口径15.8cm、底径7.2cm、器高5.5cm	28住－21	½
2	床	須恵器・坏	B II	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ロクロナデ　口径14.9cm、底径6.2cm、器高5.1cm	28住－22	¾
3	床	須恵器・坏	B II	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り 内部：ロクロナデ　口径15.0cm、底径6.6cm、器高5.0cm	28住－23	½
4	カマド	須恵器・坏	B II	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ロクロナデ　口径14.7cm、底径6.1cm、器高5.0cm	28住－24	½
5	カマド	須恵器・坏	B II	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、手持ちケズリ 内面：ロクロナデ　口径14.5cm、底径7.0cm、器高4.7cm	28住－25	¾
6	床	須恵器・坏	B II	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ロクロナデ　口径15.4cm、底径6.2cm、器高5.4cm	28住－26	¾
7	床	須恵器・坏	B II	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ロクロナデ　口径14.8cm、底径6.7cm、器高4.9cm	28住－27	½
8	カマド	須恵器・坏	B II	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ロクロナデ　口径15.4cm、底径7.4cm、器高5.0cm	28住－28	½
9	床	須恵器・坏	B II	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ロクロナデ　口径13.7cm、底径6.2cm、器高4.5cm	28住－29	½

第71図　第28号住居跡出土土器(3)



番号	層位	種類・器形	分類	特徴		登録	残存
1	床	須恵器・坏	C	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ロクロナデ	口径15.3cm、底径5.8cm、器高4.8cm	28住－30	1/1
2	床	須恵器・坏	B Ⅰ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部手持ちけずり 内面：ロクロナデ	口径12.4cm、底径6.0cm、器高4.4cm	28住－31	3/3
3	床	須恵器・坏	A Ⅲ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部へラ切り 内面：ロクロナデ	口径13.3cm、底径6.2cm、器高3.8cm	28住－32	3/4
4	床	須恵器・甕		外面：ロクロナデ、回転ケズリ、内面：ロクロナデ		28住－34	3/3
5	床	須恵器・壺		外面：ロクロナデ、回転ケズリ、内面ロクロナデ		28住－33	3/3

第72図　第28号住居跡出土土器(4)

器坏３点出土している。また、堆積土中の床面に近い所から、土師器坏１点、甕１点が出土している。これらの土器は住居内で共伴すると考えられる。出土した土師器坏は全てロクロ使用のものである。

第29号住居跡

〔重複・規模・平面形〕　土壙11と重複している。土壙を切って壁としているため新しい。3.0×2.8mの隅丸方形を呈するがやや南北に長い。

〔壁〕　地山を壁としている。残存する壁高は約30～35cmで床面からの立ち上がりはやや急である。

〔床面〕　住居全域に掘り方がみられ、その埋土上面を床としている。特に周壁沿の掘り方は深く掘られている。床面上には炭化した木材、カヤ（？）がみられる。特に木材は住居中央部に向かって放射状に遺存している。その他、柱穴、周溝は床面上・下においても不明である。

〔カマド〕　住居東辺のほぼ中央部に付設されている。残存する燃焼部側壁は白色粘土を積み上げてつくられている。底面は奥に向かってやや上昇する煙道部との境には約15cmの段があり区切りとしている。煙道部は地山を先端部に向かってやや傾斜するように掘り抜いてつくられ

ており、先端部には径50cm、深さ40cmのピットがある。

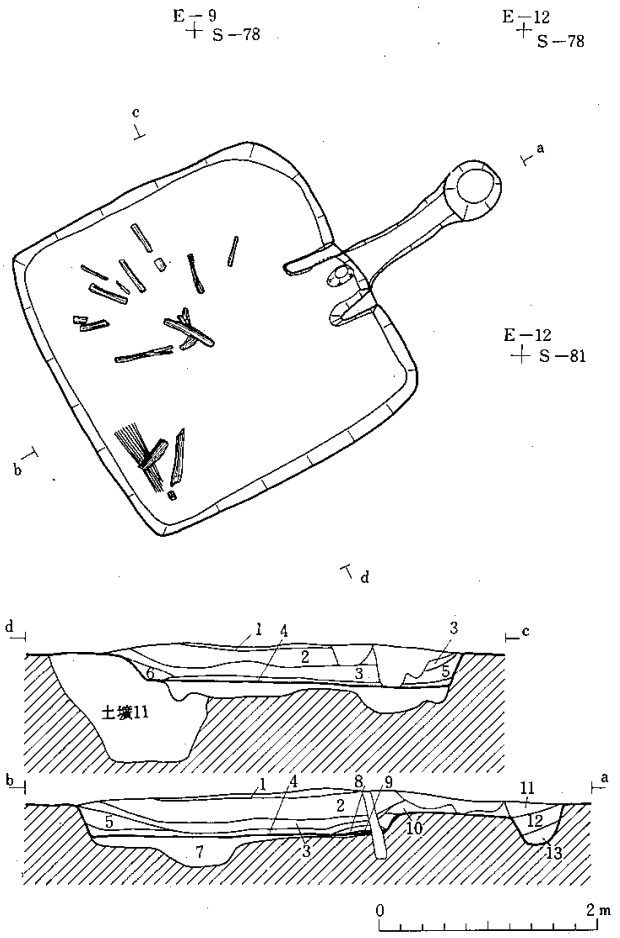
〔堆積土〕　５層認められる。第Ⅰ層は住居ほぼ中央部に薄く堆積している。第Ⅱ・Ⅲ層はほぼ全域に堆積している。特に第Ⅱ層は灰白色火山灰である。第Ⅳ層は床面上に堆積している。第Ⅴ層は壁沿いに堆積している。自然流入土である。

〔出土土器〕　図示したのはカマド煙道部出土の土師器甕１点のみである。その他は全て破片で量は少ない。

第30号住居跡

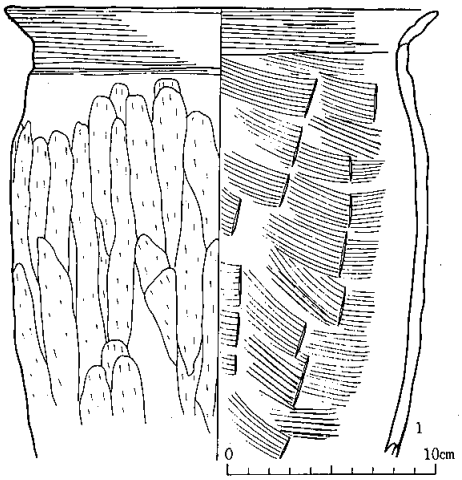
〔重複・規模・平面形〕　溝２と重複している。住居北・西・東壁はこれら溝によって切られている。6.3×6.0mの隅丸方形を呈するが、やや東西に長い。

〔壁〕　地山を壁としている。溝によって切られている部分は残っていないが、残存する壁高は約25～30cm である。床面からの立ち上がりはやや急



層　位	層 No	土　　色	土　性	備　　考	遺物取り上げ層位
Ⅰ	1	黒色 (7.5YR 2/1)	シルト		1層
Ⅱ	2	灰白色 (7.5YR 8/2)	火山灰		2層
Ⅲ	3	暗褐色 (7.5YR 3/3)	シルト	炭化粒、焼土粒混入	3層
Ⅳ	4	黒褐色 (7.5YR 3/2)	シルト	炭化物、焼土混入	4層
Ⅴ	5	暗褐色 (7.5YR 3/3)	シルト	焼土粒、地山粒混入	5層
	6	黒色 (7.5YR 2/1)	シルト		
掘り方	7	明褐色 (7.5YR 5/6)	粘　土	黒褐色土混入	
カマド内	8	極暗褐色 (5YR 2/3)	シルト	焼土粒混入	
	9	暗赤褐色 (2.5YR 3/4)	シルト		
	10	暗褐色 (7.5YR 3/3)	シルト	焼土粒少し混入	
	11	黒褐色 (7.5YR 3/2)	シルト	炭化物、地山粒混入	
	12	暗褐色 (7.5YR 3/4)	シルト	地山粒混入	
	13	暗褐色 (7.5YR 3/3)	シルト	炭化物粒混入	

第73図　第29号住居跡



1．土師器甕、カマド、煙道、外面：口縁部ヨコナデ
胴部ヘラケズリ、内面：ヨコナデ、ヘラナデ

第74図　第29号住居跡出土土器

である。

〔床面〕　住居全域に掘り方がみられ、その埋土上面を床としている。特に壁沿いの掘り方は深く掘られている。また、住居南、西側には貼り床が部分的にみられ、ほぼ平坦である。床面上の中央に１ｍ×90㎝の範囲に焼面があり、しかも生活層がみられる。

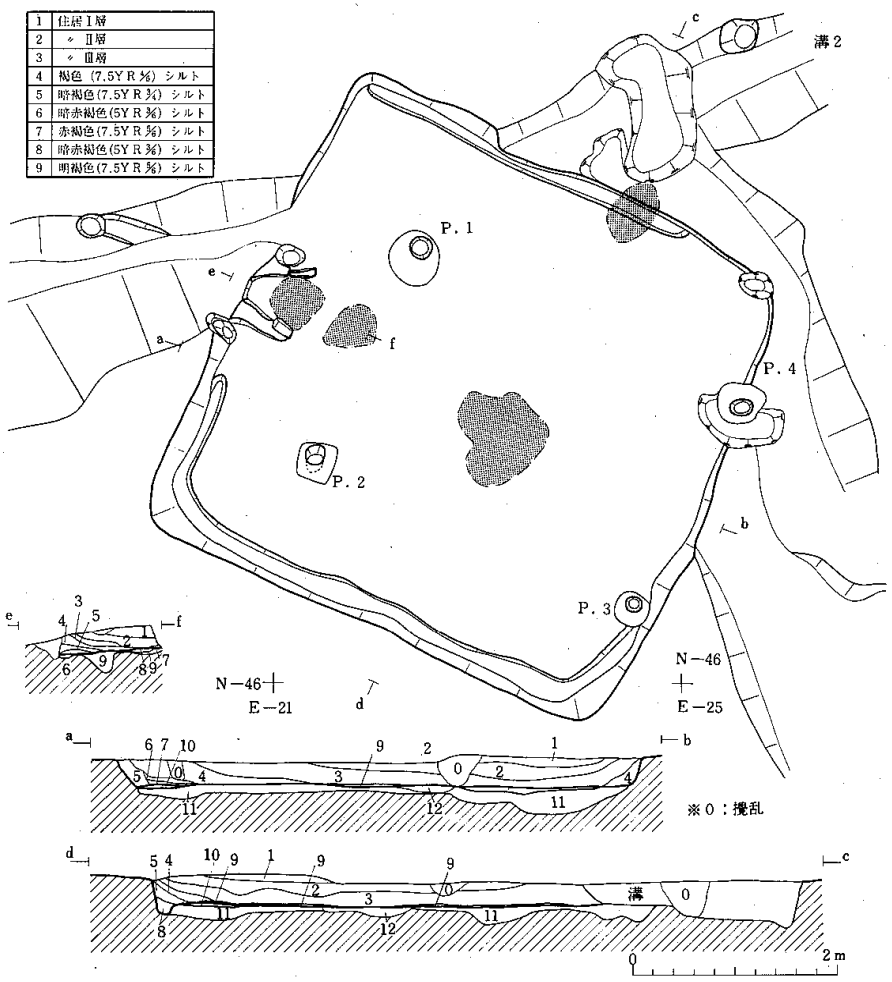
〔柱穴〕　床面上から４個のピットが検出された。これらピットには柱痕、掘り方の区別があり、規模、配置等から柱穴と考えられる。各ピットを結んだ線は四角形を呈し、住居平面形に相似するが、南側に寄っている。特にＰ．３・Ｐ．４は壁沿いに位置している。

〔周溝〕　カマド付設部分（後述する第２カマド付設部分）、溝によって切られている部分を除いた壁沿いに巡る。幅は20㎝前後、床面からの深さは約15㎝で断面形は「Ｕ」字状を呈する。

〔カマド〕　住居北辺のやや東寄りの所と西辺のほぼ中央部に各１基ずつ付設されている。前者を第１カマド、後者を第２カマドとする。第１カマド：燃焼部底面の火熱を受け赤変している部分と住居壁の外方約1.5ｍの所に位置する径40㎝のピットのみが残っている。底面は住居に伴う周溝によって切られていることから、古い段階のカマドと推定される。第２カマド：溝によって煙道部の大半は残っていない。残存する燃焼部側壁は粘土積み上げによってつくられているが、右側壁の残りは良くない。左側壁の先端部には切石が置かれている。底面は平坦で側壁内面と伴に火熱を受け赤変している。煙道部の先端部には径20㎝、深さ40㎝のピットがある。

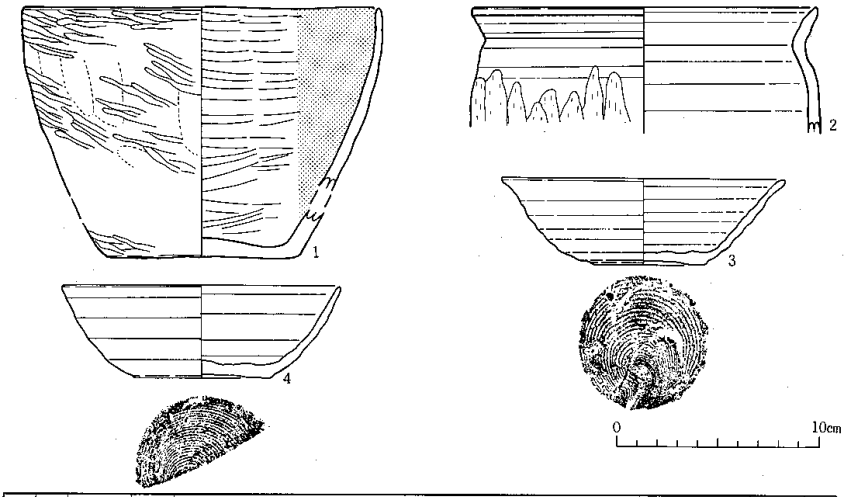
〔堆積土〕　４層認められる。第Ⅰ層は南・東側に部分的に残っているにすぎない。第Ⅱ層は住居中央部から南東側に堆積している。第Ⅲ層は住居ほぼ全域に堆積している。第Ⅳ層は壁沿いに堆積している。自然流入土である。

〔出土土器〕　図示したものは４点である。全て、堆積土中のものである。土師器鉢、甕各１点、須恵器坏２点である。土師器鉢はロクロ不使用のものである。



層位	層No	土色	土性	備考	遺物取り上げ層位
Ⅰ	1	黒褐色 (7.5YR ⅔)	シルト		1層
Ⅱ	2	極暗褐色 (7.5YR ⅔)	シルト	地山粒混入	2層
Ⅲ	3	褐色 (7.5YR ⅔)	シルト	地山粒、木炭粒含む	3層
Ⅳ	4	褐色 (7.5YR ⅔)	シルト	地山粒、多く混入	〃
	5	暗褐色 (7.5¾)	シルト	地山粒、灰白土混入	4層
	6	黒褐色 (7.5YR ⅔)	シルト		〃
	7	暗褐色 (10YR ⅔)	シルト	灰白土混入	〃
周溝内	8	褐色 (7.5YR ⅔)	シルト	地山粒多く混入	
生活層	9	極暗褐色 (7.5YR ⅔)	シルト	固くしまっている	4層
貼り床	10	褐色 (10YR ⅔)	粘土		
掘り方	11	明褐色 (7.5YR ⅔)	シルト	黒褐色土ブロック状に混入	
焼面	12	赤色 (10R ⅔)		焼けが及んだ部分	

第75図　第30号住居跡



番号	層位	種類・器形	分類	特徴	登録	残存
1	3層	土師器・鉢	AⅡ	外面：口～胴部ヘラケズリ、ヘラミガキ、内面：ヘラミガキ、黒色	30住－1	½
2	3層	土師器・甕	BⅡ1	外面：口縁部ロクロナデ、胴部ヘラケズリ、内面：ロクロナデ	30住－2	一部
3	3層	須恵器・坏	BⅠ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ロクロナデ　口径13.9cm、底径7.1cm、器高4.6cm	30住－5	½
4	3層	須恵器・坏	BⅡ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ロクロナデ　口径14.2cm、底径5.7cm、器高4.3cm	30住－4	½

第76図　第30号住居跡出土土器

第31号住居跡

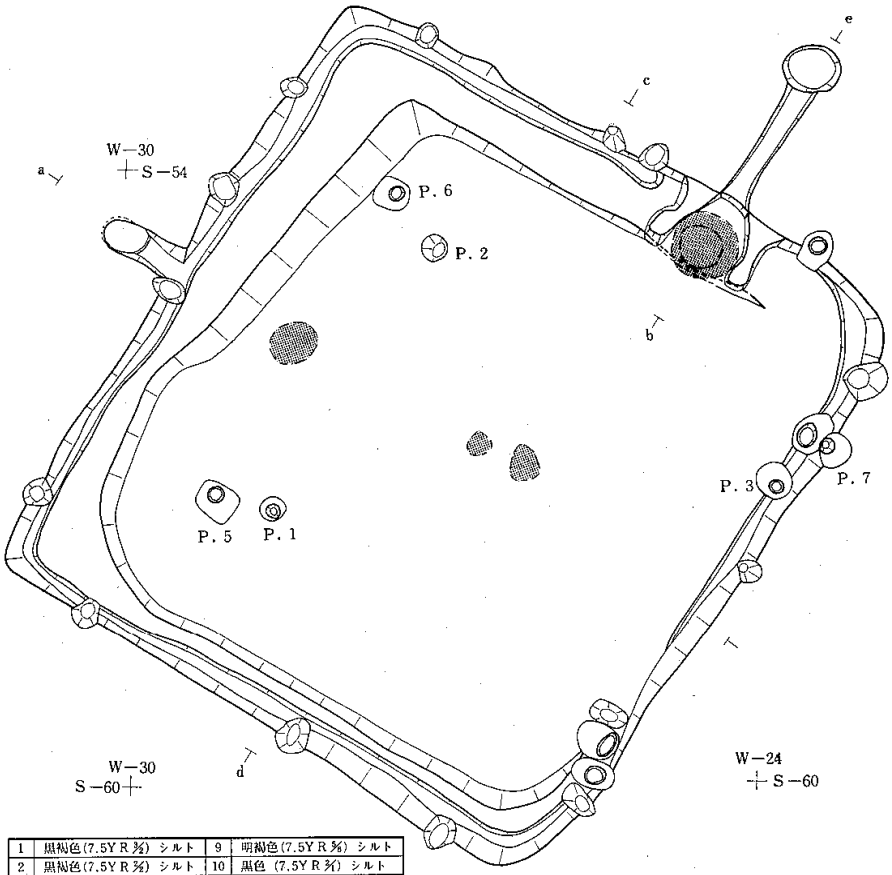
〔増改築〕　住居東壁を除いた部分は拡張されている。北、西壁は約50cm、南壁は約20cm拡張され、大規模な増改築がされたと考えられる。改築以前の住居を31a住、改築後の住居を31b住とする。

〔規模・平面形〕　31a住の東壁は残存しないが、5.6×5.5mの方形を呈し、各隅はやや丸味をもつものと推定される。31b住は6.3×6.0mの隅丸方形を呈する。

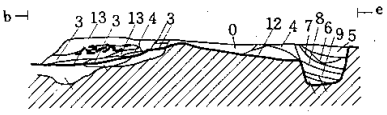
〔壁〕　両住居とも地山を壁としているが、31a住の壁は改築に伴う31b住の掘り方等により

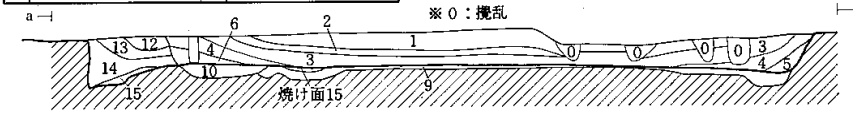
第31号住居跡堆積土

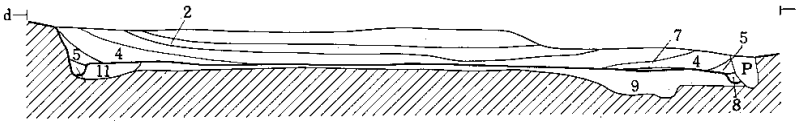
層位	層No	土色	土性	備考	遺物取り上げ層位
Ⅰ	1	黒色（7.5YR 3/1）	シルト		
Ⅱ	2	灰白色（7.5YR 8/2）	火山灰		
Ⅲ	3	暗褐色（7.5YR 3/3）	シルト	地山粒、混入	
	4	黒褐色（7.5YR 3/2）	シルト	地山粒、混入	
Ⅳ	5	暗褐色（7.5YR 3/3）	シルト	地山粒、混入	
	6	黒褐色（10YR 3/2）	シルト	焼土粒混入	
生活層	7	黒褐色（7.5YR 3/2）	シルト	地山、混入	
周溝内	8	暗褐色（7.5YR 3/4）	シルト	地山粒混入	
掘り方	9	暗褐色（7.5YR 3/3）	シルト	地山ブロック混入	
	10	暗褐色（7.5YR 3/4）	シルト	地山粒、混入	
	11	褐色（7.5YR 5/6）	シルト	地山粒、混入	
第1カマド内	12	暗褐色（10YR 3/3）	シルト	地山、焼土粒混入	
	13	暗褐色（10YR 3/4）	シルト	地山粒混入	
	14	黒褐色（10YR 3/2）	シルト	地山、焼土粒混入	
	15	暗赤褐色（2.5YR 3/4）	シルト	灰土	
焼面	16	赤色（10R 5/6）			



1	黒褐色(7.5YR 3/2) シルト	9	明褐色(7.5YR 5/6) シルト
2	黒褐色(7.5YR 3/2) シルト	10	黒色 (7.5YR 3/1) シルト
3	暗赤褐色(2.5YR 3/3) シルト、灰	11	黒色 (7.5/1) シルト
4	暗赤褐色(5YR 3/4) 焼土	12	褐色 (10YR 4/6) シルト
5	明褐色 (7.5YR 5/6) 粘土	13	灰土
6	黒色 (7.5YR 3/1) シルト	14	灰土
7	明褐色(7.5YR 5/6) シルト	15	焼土
8	黒色 (7.5YR 3/1) シルト		







0 2m

第77図　第31号住居跡

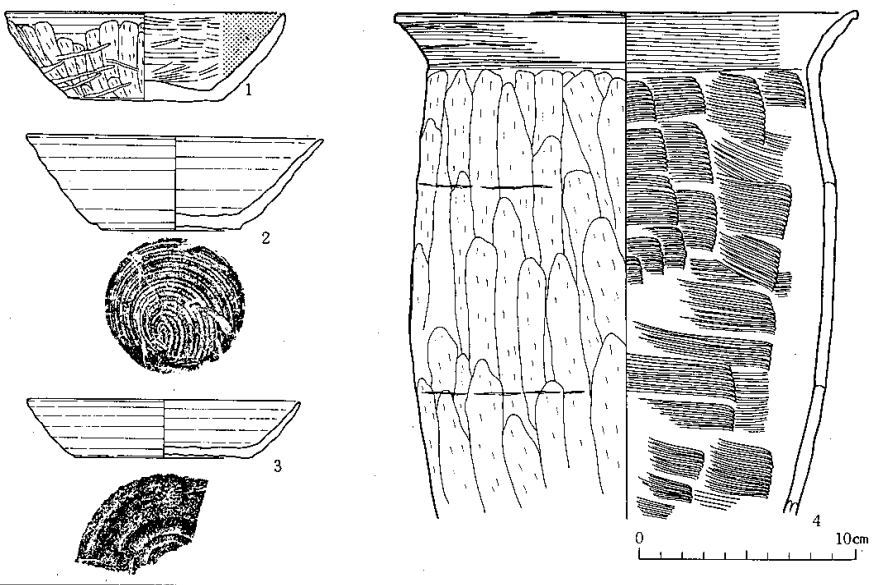
残りは良くない。残存する壁高は約２～８cmである。31ｂ住の残存壁高は約25～40cmで床面からの立ち上がりはやや緩やかである。

〔床面〕　31ａ住の床面の状況の詳細は定かでない。31ｂ住は住居全域に掘り方がみられ、その埋土上面を床としている。特に壁沿いの掘り方は中央部のそれと比較して深く掘られている。中央部の床面上には焼面がみられ、また、北側に一部生活層がみられる。

〔柱穴〕　床面上から８個のピットが検出された。31ａ住に伴う柱穴はＰ1、Ｐ2、Ｐ3、Ｐ4と考えられる。また、31ｂ住に伴う柱穴はＰ5、Ｐ6、Ｐ7、Ｐ8と考えられる。各ピットを結んだ線は両住居とも、住居平面形に相似する。しかも、いずれも南寄りである。さらに31ｂ住の壁沿いには計15個のピットがあり、壁柱穴と考えられる。

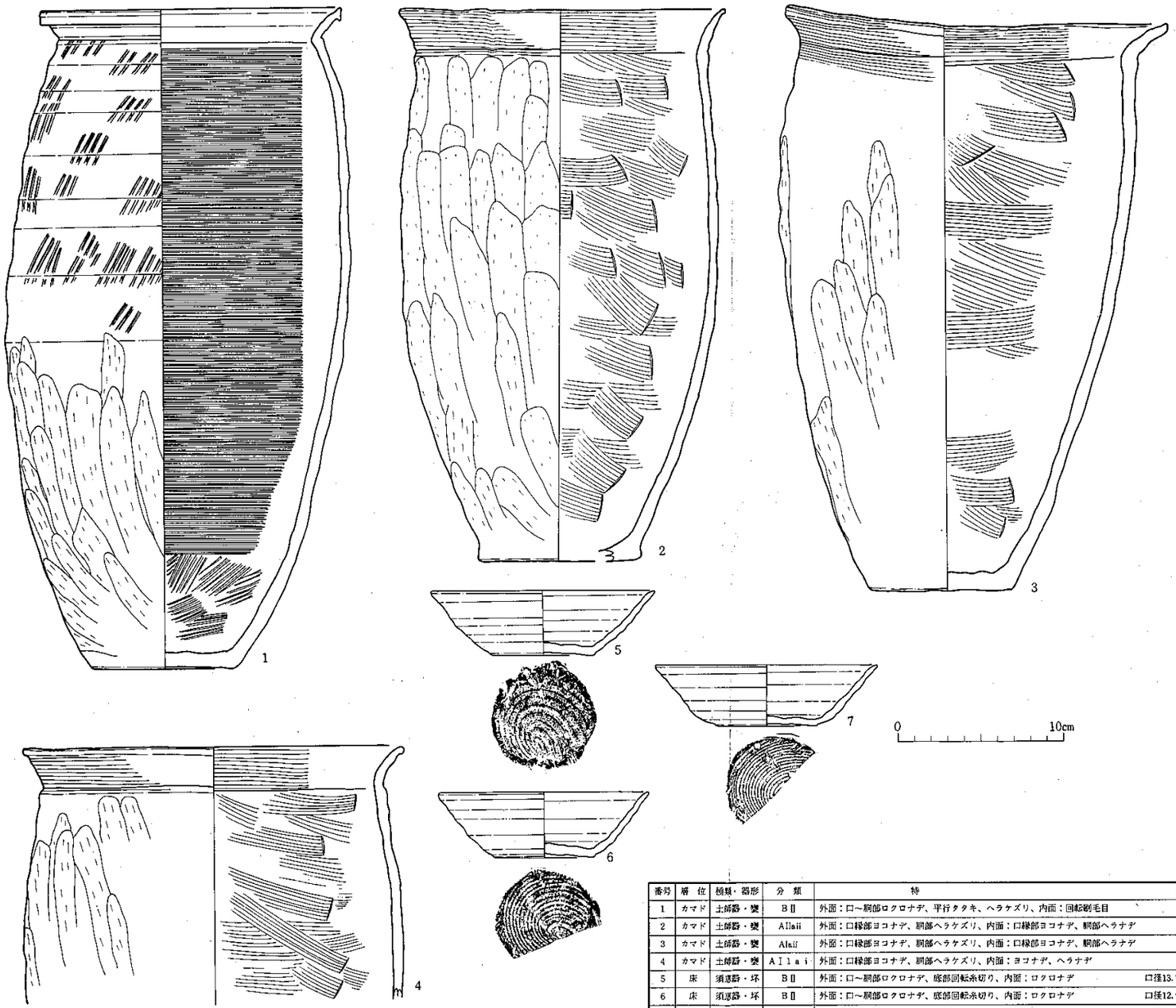
〔周溝〕　31ｂ住のカマド付設部分、東壁の一部を除いた壁沿いに巡る。幅は約10～25cmで、床面からの深さは約９～15cmである。断面形は「U」字状を呈する。

〔カマド〕　31ｂ住の西辺中央部と北辺の東寄りの所に各１基ずつ付設されている。前者を第１カマド、後者を第２カマドとする。第１カマド：燃焼部底面の一部である焼面と煙道部の一部のみが残存している。煙道部は31ｂ住の壁によって切られており、底面の焼面は31ａ住の壁



番号	層位	種類・器形	分類	特徴	登録	残存
1	3層	土師器・坏	BⅡ	外面：口縁部ロクロナデ、胴～底部ヘラケズリ、ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ、黒色　口径13.1cm、底径7.3cm、器高4.3cm	31住－1	⅓
2	3層	須恵器・坏	BⅡ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ロクロナデ　口径13.9cm、底部6.8cm、器高4.5cm	31住－9	⅓
3	3層	須恵器・坏	AⅢ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部ヘラ切り 内面：ロクロナデ　口径12.8cm、底径8.5cm、器高2.7cm	31住－12	⅓
4	3層	土師器・甕	AⅠ1aii	外面：口縁部、ヨコナデ、胴部ヘラケズリ、内面：口縁部ヨコナデ、胴部刷毛目	31住－3	⅓

第78図　第31号住居跡出土土器(1)



番号	層位	種類・器形	分類	特徴	登録	残存
1	カマド	土師器・甕	BⅡ	外面：口～胴部ロクロナデ、平行タタキ、ヘラケズリ、内面：回転刷毛目	31住－5	⅓
2	カマド	土師器・甕	AⅡaii	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ、内面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	31住－2	⅓
3	カマド	土師器・甕	AⅠaii	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ、内面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	31住－4	⅓
4	カマド	土師器・甕	AⅠiai	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ、内面：ヨコナデ、ヘラナデ	31住－7	¼
5	床	須恵器・坏	BⅡ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ロクロナデ　口径13.7cm、底径6.5cm、器高4.0cm	31住－8	¾
6	床	須恵器・坏	BⅡ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ロクロナデ　口径12.9cm、底径6.4cm、器高4.0cm	31住－10	½
7	床	須恵器・坏	AⅢ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ロクロナデ　口径13.5cm、底径6.3cm、器高3.7cm	31住－11	½

第79図　第31号住居跡出土土器(2)

近くにあることから、31ａ住に伴うカマドと考えられる。そして側壁等は改築時に除去されたものであろう。第２カマド：31ｂ住に伴うもので、残存する燃焼部側壁は白色粘土を積み上げてつくられている。底面の使用は２回に亘り、最初の使用時の底面は中央部がくぼみ舟底状を呈するが、次の使用時の底面はほぼ平坦である。いずれの底面と側壁内面は火熱を受け赤変している。煙道部との境には約 10～15cm の段が形成され区切りとしている。煙道部は先端部に向かって傾斜するように地山を掘り抜いてつくられ、先端部には径 50cm、深さ 40cm のピットがある。

〔堆積土〕　31ｂ住の堆積土のみ残っている。４層認められる。第Ⅰ層は住居周壁付近を除いた部分に堆積している。第Ⅱ・Ⅲ層は全域に堆積している。特に第Ⅱ層は灰白色火山灰である。第Ⅳ層は壁沿いに堆積している。自然流入土である。

〔出土土器〕　図示したのは 11 点である。この中で 31ａ・ｂ住居いずれに伴うか否かの判断には困難を要する。したがって、全て 31ｂ住出土土器として取り扱うこととする。床面上から土師器甕１点、須恵器坏３点、カマド内から土師器甕３点出土しており、住居内で共伴するものと考えられる。その他、堆積土中から土師器坏１点、土師器甕１点、須恵器坏２点出土している。

第 32 号住居跡

〔規模・平面形〕　住居東辺中央部は幅 1.5ｍで外方に 60cm 張り出すが、4.7×4.0ｍの隅丸長方形を呈する。各辺はややふくらむ。

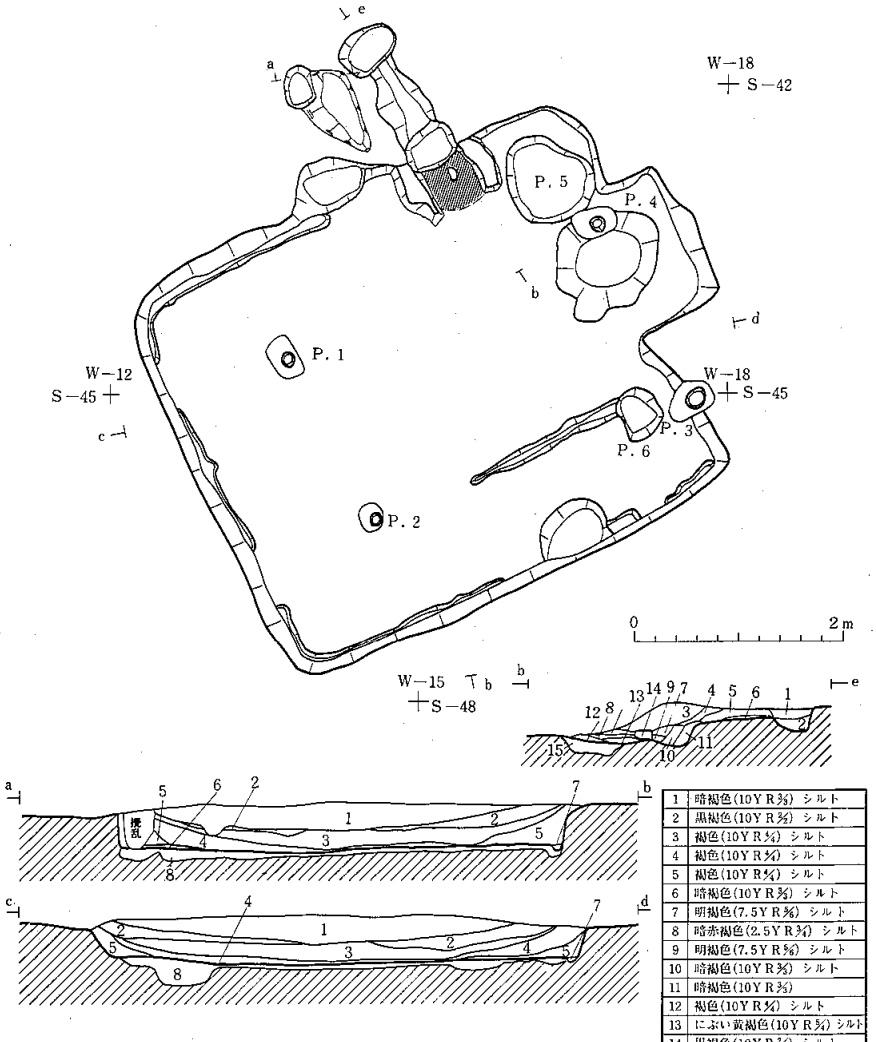
〔壁〕　地山を壁としている。残存する壁高は約 30～40cm である。床面からの立ち上がりは東壁は緩やかであるが、その他はやや急である。

〔床面〕　住居全域に掘り方がみられ、その埋土上面を床としている。面は中央部がやや低く浅い皿状を呈する。北側には厚さ２～３cm の生活層が部分的にみられる。

〔柱穴〕　床面検出の４個のピット（Ｐ1、Ｐ2、Ｐ3、Ｐ4）には、柱痕と掘り方の区別があり、規模、配置等から柱穴と考えられる。各ピットを結んだ線は住居平面形に相似するが、東寄りになっている。特にＰ3・4 は壁沿いに位置している。

〔周溝〕　東壁、カマド付設部分を除いた壁沿いに部分的に途切れるが巡る。幅は約５～10cm 底面からの深さは４～10cm である。断面形は「Ｕ」字状を呈する。

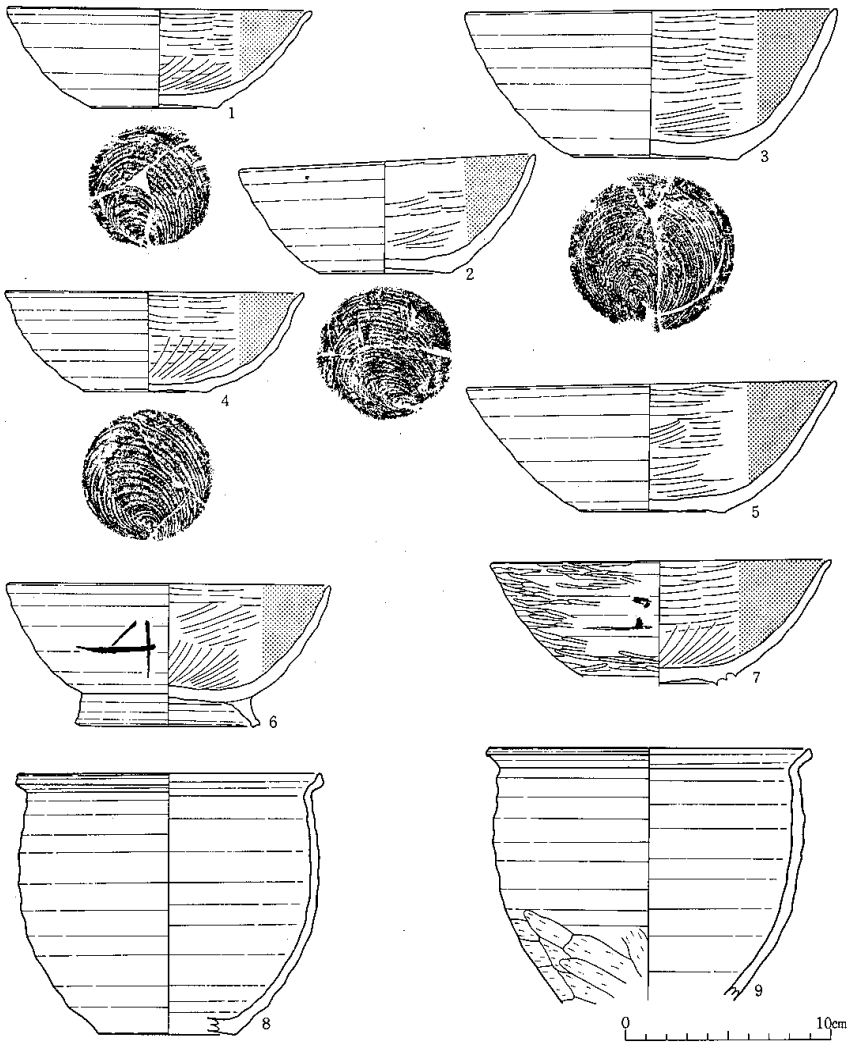
〔カマド〕　住居北辺の東寄りの所に付設されている。燃焼部は住居壁を外方へ約 15cm 掘り込んでつくられている。また、残存する側壁は粘土積み上げによってつくられている。底面は床面より約５cm 低く、さらに奥にいくにしたがって 10cm 低くなり、２段に掘られている。２段目近くには地山を削り出した高まりがあり、支脚痕と推定されその周辺は火熱を受け赤変しているが、奥壁近くでは赤変していない。煙道部との境には約 20cm の段を形成し区切りとしている。



1	暗褐色(10YR3/3) シルト
2	黒褐色(10YR2/2) シルト
3	褐色(10YR4/4) シルト
4	褐色(10YR4/6) シルト
5	褐色(10YR4/4) シルト
6	暗褐色(10YR3/3) シルト
7	明褐色(7.5YR5/6) シルト
8	暗赤褐色(2.5YR3/4) シルト
9	明褐色(7.5YR5/6) シルト
10	暗褐色(10YR3/3) シルト
11	暗褐色(10YR3/3)
12	褐色(10YR4/4) シルト
13	にぶい黄褐色(10YR5/4) シルト
14	黒褐色(10YR2/2) シルト
15	褐色(10YR4/4) シルト

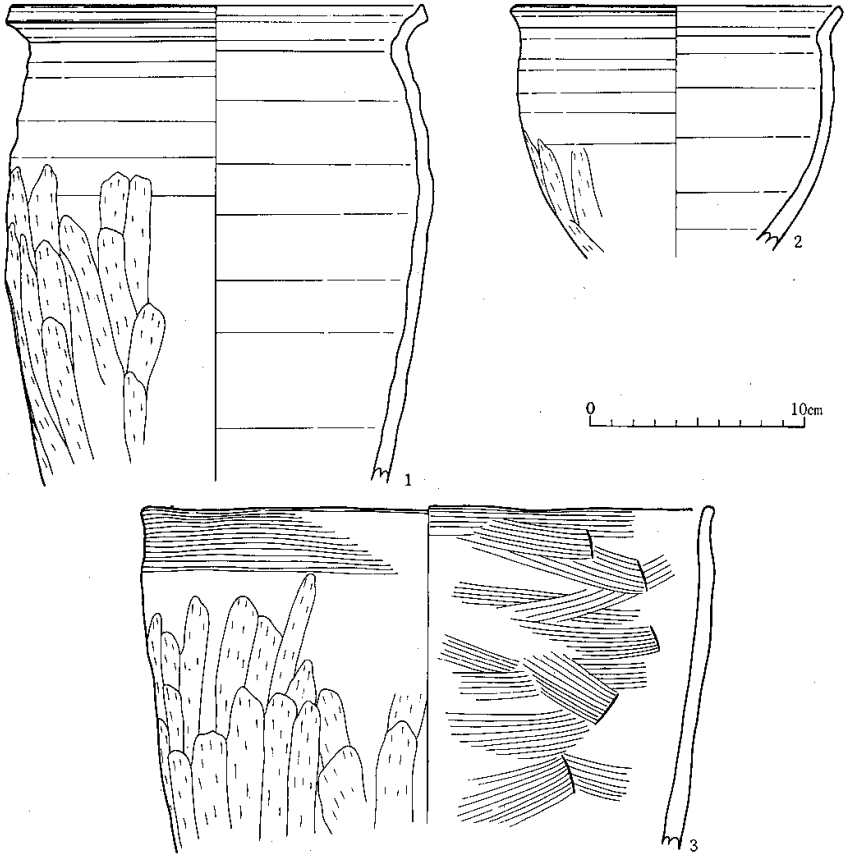
層位	層No.	土色	土性	特徴	遺物取り上げ層位
Ⅰ	1	黒色(7.5YR2/1)	シルト		
Ⅱ	2	褐色(7.5YR4/3)	シルト		
Ⅲ	3	灰白色(7.5YR8/2)	火山灰		
Ⅳ	4	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	焼土粒混入	
Ⅴ	5	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト	焼土・木炭混入	
生活層	6	にぶい赤褐色(5YR4/4)	シルト	焼土・多量に混入	
周溝内	7	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト		
掘り方	8	にぶい褐色(7.5YR5/3)	シルト		

第80図　第32号住居跡



番号	層位	種類・器形	分類	特徴	登録	残存
1	P.4	土師器・坏	BI	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ヘラミガキ、黒色　口径15.0cm、底径6.2cm、器高5.0cm	32住－1	½
2	P.4	土師器・坏	BI	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ヘラミガキ、黒色　口径14.5cm、底径6.6cm、器高5.9cm	32住－3	½
3	P.4	土師器・坏	BI	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ヘラミガキ、黒色　口径18.2cm、底径8.2cm、器高7.4cm	32住－2	⅔
4	P.4	土師器・坏	BI	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ヘラミガキ、黒色　口径14.7cm、底径6.5cm、器高5.0cm	32住－6	½
5	貯蔵穴	土師器・坏	BI	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ヘラミガキ、黒色　口径18.1cm、底径7.3cm、器高6.5cm	32住－15	¾
6	カマド	土師器高台付	BIII	外面：口～台部ロクロナデ、煤書あり、内面：ヘラミガキ、黒色	32住－14	½
7	カマド	土師器高台付	BIII	外面：口～胴部ロクロナデ、ヘラミガキ、煤書あり、内面：ヘラミガキ、黒色	32住－5	½
8	貯蔵穴	土師器・甕	BII	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ロクロナデ　口径15.0cm、器高12.9cm	32住－7	½
9	カマド	土師器・甕	BII	外面：口～胴部ロクロナデ、ヘラケズり、内面：ロクロナデ	32住－8	½

第81図　第32号住居跡出土土器(1)



番号	層　位	種類・器形	分　類	特　　徴	登　録	残存
1	カマド右ソデ	土師器・甕	BⅡ1	外面：口～胴部ロクロナデ、ヘラケズリ、内面：ロクロナデ	32住－14	½
2	P．4	土師器・甕	BⅠ	外面：口～胴部ロクロナデ、ヘラケズリ、内面：ロクロナデ	32住－10	½
3	張り出し部	土師器・低		外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ、内面：ヨコナデ、ヘラナデ	32住－9	½

第82図　第32号住居跡出土土器(2)

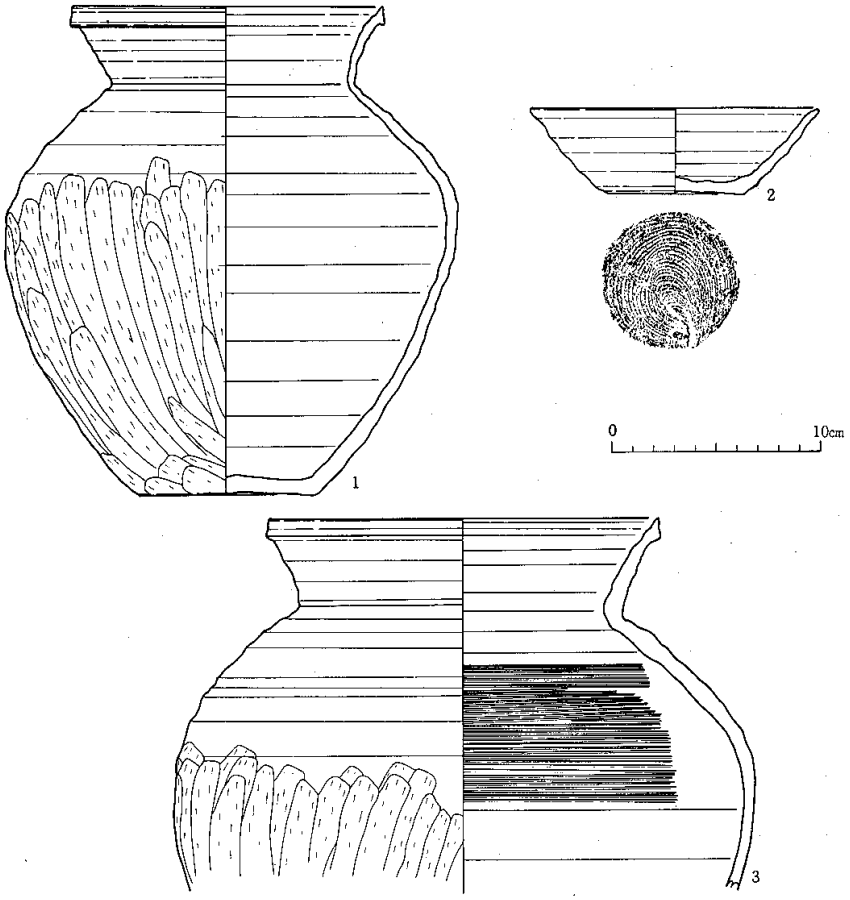
煙道部は地山を水平に掘り抜き、先端部には径 40cm、深さ 20cm のピットがある。また、このカマドの西側に住居壁を外方へ約 50cm 掘り込んだ所があり、その延長上に径 30cm、深さ 20cm のピットがありカマドの可能性がある。いずれにしても古い段階のカマドと推定される。

〔その他の施設〕　住居北東隅、カマド右側に貯蔵穴状ピット（Ｐ５）がある。径 90cm の円形を呈し、床面からの深さは約 25cm で壁の立ち上がりは緩やかである。また、住居南東隅の床面上のピット（Ｐ６）から西側に延びる溝がある。長さ 1.6cm、幅約 15cm、床面からの深さ約３～５cm である。先述した張り出し部が住居東辺にある。

〔堆積土〕　５層認められる。第Ⅰ、Ⅲ層は住居ほぼ全域に堆積している。特にⅢ層は灰白色

火山灰である。第Ⅱ層は住居中央部を除いた部分に堆積している。第Ⅳ層は床面上に堆積している。第Ⅴ層は壁沿いに堆積している。自然流入土である。

〔出土土器〕　図示したものは15点である。その内、カマド内から土師器高台付坏１点、甕２点出土している。P．４から土師器坏４点、甕１点、貯蔵穴状ピットから土師器坏１点、甕２点、張り出し部から土師器高台付坏１点、甑１点が出土している。これらの土器は住居内で共伴するものと考えられる。土師器坏は全てロクロ使用のものである。



番号	層　位	種類・器形	分　類	特　　徴	登　録	残　存
1	2　層	須恵器・甕	B２	外面：口～胴部ロクロナデ、ヘラケズリ、内面：ロクロナデ	32住－13	¾
2	不　明	須恵器・坏	BⅡ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ロクロナデ	32住－11	½
3	カマド付近	須恵器・甕	B２？	外面：口～胴部ロクロナデ、ヘラケズリ、内面：同転刷毛目	32住－12	½

第83図　第32号住居跡出土土器(3)

第 33 号住居跡

〔重複・規模・平面形〕　溝９と住居壁の一部が接する。6.5×5.7ｍの長方形を呈する。

〔壁〕　地山を壁としている。残存する壁高は約 15～25cm である。床面からの立ち上がりはやや急である。

〔床面〕　住居全域に掘り方がみられ、その埋土上面を床としている。掘り方の深さは一定しない。床面上には生活層が部分的にみられる。面は中央部がややくぼんでいる。また、北側と西側にベット状の高まりがある。北側のは北壁から幅約 2.5ｍ、高さ約 10cm ある。西側のは西壁から幅約 1.8ｍ、高さ約 10cm である。

〔柱穴〕　床面を除去した段階で４個のピットを検出した。これらのピットには柱痕と掘り方の区別があり、規模、配置等に規則性があり、柱穴と考えられる。各ピットを結んだ線は住居平面形に相似するが南寄りである。特にＰ３とＰ４は壁沿いに位置している。

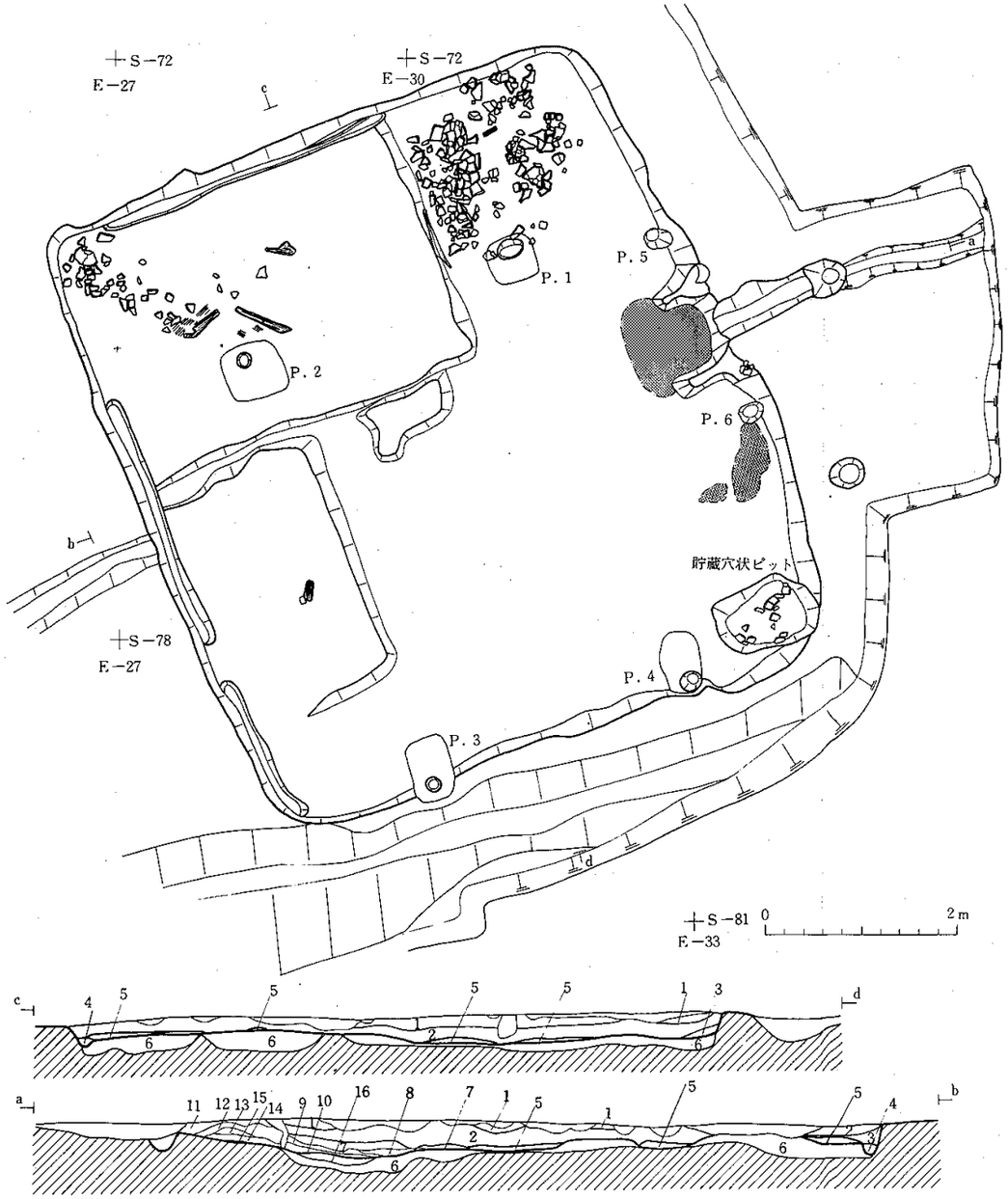
〔周溝〕　西壁と北壁の一部の壁沿いに巡っているにすぎない。幅は約 10～15cm、床面からの深さは 10cm 前後である。断面形は「Ｕ」字状を呈する。

〔カマド〕　住居東辺に２基付設されている。やや南寄りに付設されているのを第１カマド、中央部に付設されているのを第２カマドとする。第１カマド：燃焼部底面の一部である焼面と住居外に位置する径 30cm の円形ピットが残るだけである。古い段階のカマドである。第２カマド：残存する燃焼部側壁は粘土積み上げによってつくられている。底面は床面より約 10cm 低くなり舟底状を呈しており火熱を受け赤変している。煙道部との境には約 10cm の段が形成され区切りとしている。煙道部は住居外方に、地山を先端部に向かって上がるように掘り抜いてつくられている。先端部には径 40cm の円形のピットがある。また、燃焼部側壁の両側には径 20cm のピットが２個（Ｐ５・６）位置している。

〔その他の施設〕　住居南東隅に貯蔵穴状ピットがある。1.3ｍ×80cm の楕円形を呈し、床面からの深さは約 30cm である。壁の立ち上がりは緩やかである。

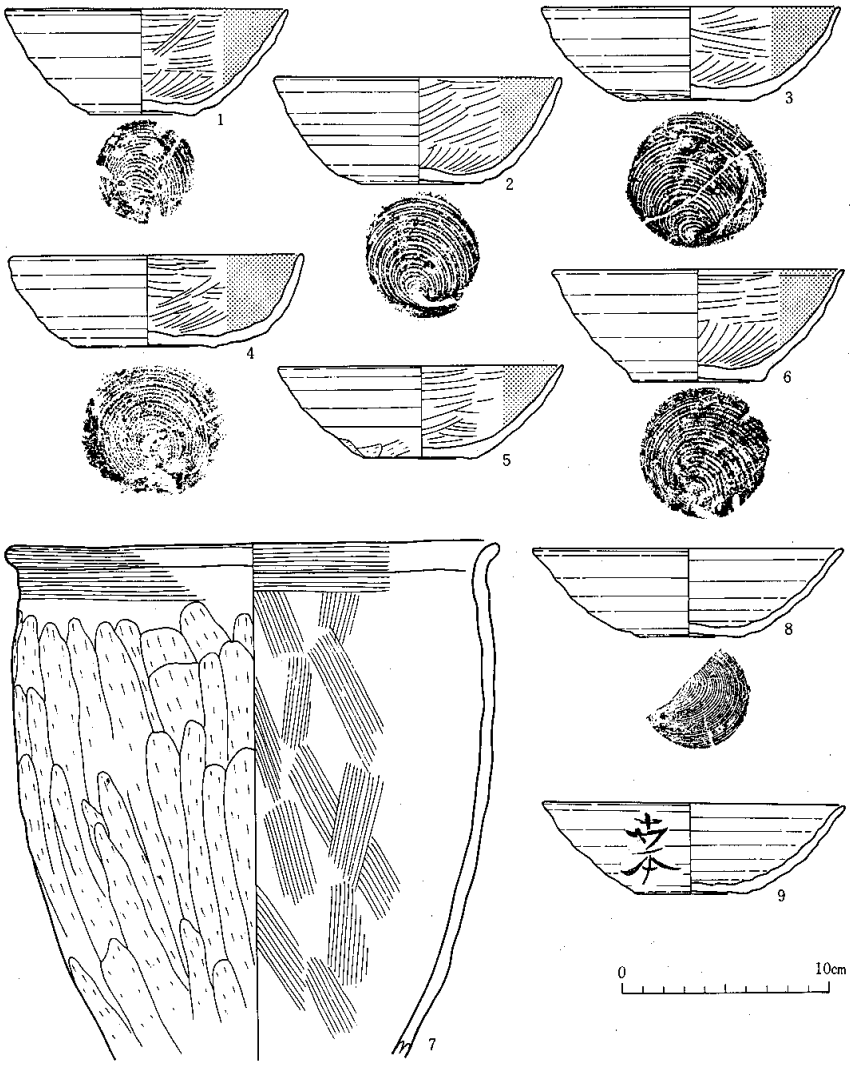
〔堆積土〕　２層認められる。攪乱が激しい。第Ⅰ層は中央部に堆積し、第Ⅱ層は住居全域、床面上に堆積している。自然流入土である。

〔出土土器〕　図示したのは 27 点である。その内、床直上から須恵器甕が１点出土している。カマド内から土師器坏３点、甕２点出土している。また、貯蔵穴状ピットから土師器坏２点出土しており、須恵器坏２点、赤焼土器１点出土している。これらは住居内で共伴するものと考えられる。その他、掘り方から土師器坏、須恵器坏各１点ずつ出土しており、堆積土中から土師器坏、高台付坏、須恵器甕、甕、壺、赤焼土器皿が出土している。土師器坏は全てロクロ使用のものである。



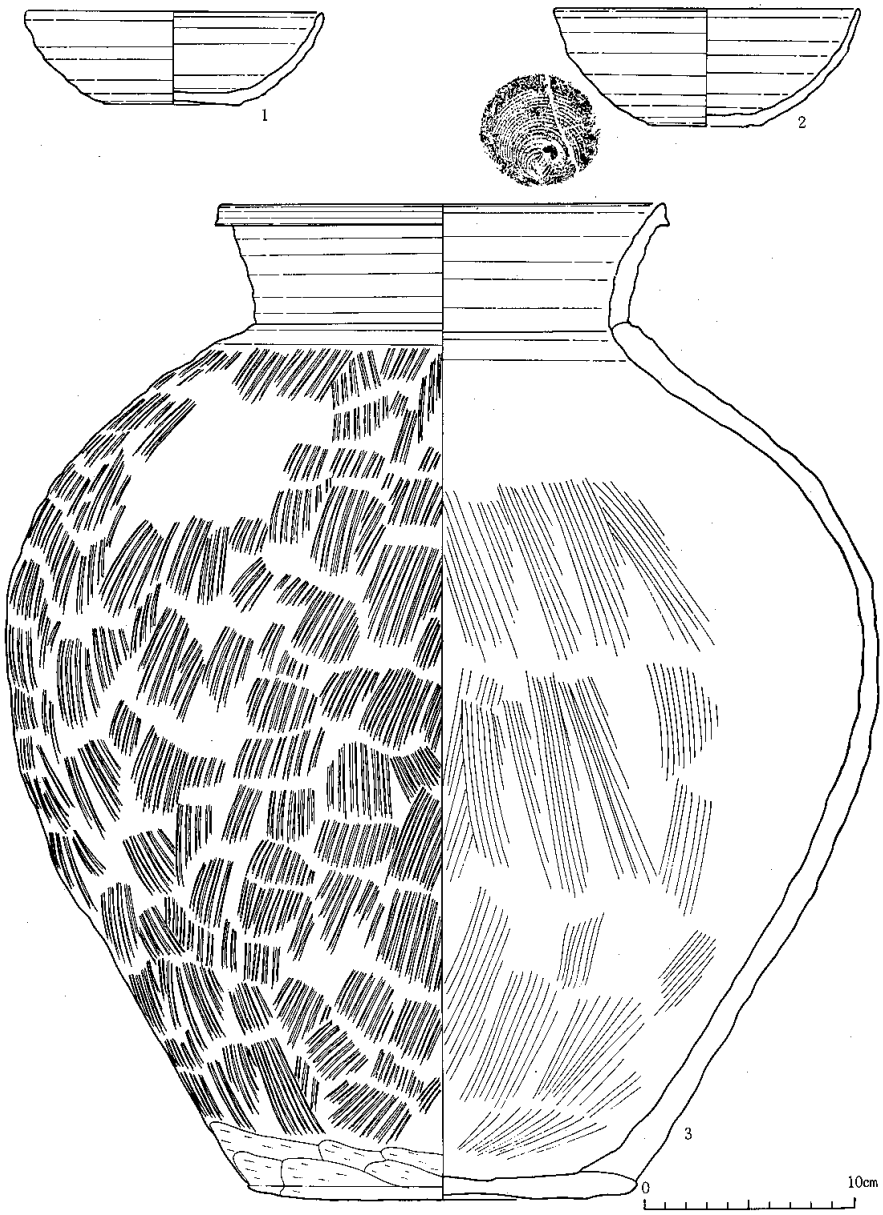
層位	層No	土色	土性	備考	遺物取り上げ層位
Ⅰ	1	暗褐色 (7.5Y R 3/4)	シルト		
Ⅱ	2	黒褐色 (10Y R 3/2)	シルト	炭化物、焼土混入	
	3	黒褐色 (10Y R 3/2)	シルト	炭化物、地山粒混入	
周溝内	4	黒褐色 (10Y R 3/2)	シルト	地山粒混入	
生活層	5	黒褐色 (10Y R 3/2)	シルト	炭化物多く混入	
掘り方	6	黒褐色 (10Y R 3/2)	シルト	地山混入	
カマド内	7	にぶい橙色(7.5Y R 7/4)	シルト	地山混入、天井部崩壊土	
	8	黒褐色 (7.5Y R 3/2)	シルト	炭化物多く混入	
	9	褐色 (7.5Y R 4/4)	シルト	灰　土	
	10	褐色 (7.5Y R 4/6)	シルト	焼土混入	
	11	褐色 (7.5Y R 4/4)	シルト	焼土混入	
	12	明赤褐色 (5Y R 5/6)	シルト	焼　土	
	13	黒褐色 (10Y R 3/2)	シルト	炭化物混入	
	14	褐色 (7.5Y R 4/4)	シルト	焼土混入	
	15	黒褐色 (10Y R 3/2)	シルト	炭化物	
カマド掘り方	16	黒褐色 (10Y R 3/2)	シルト	地山混入	

第84図　第33号住居跡



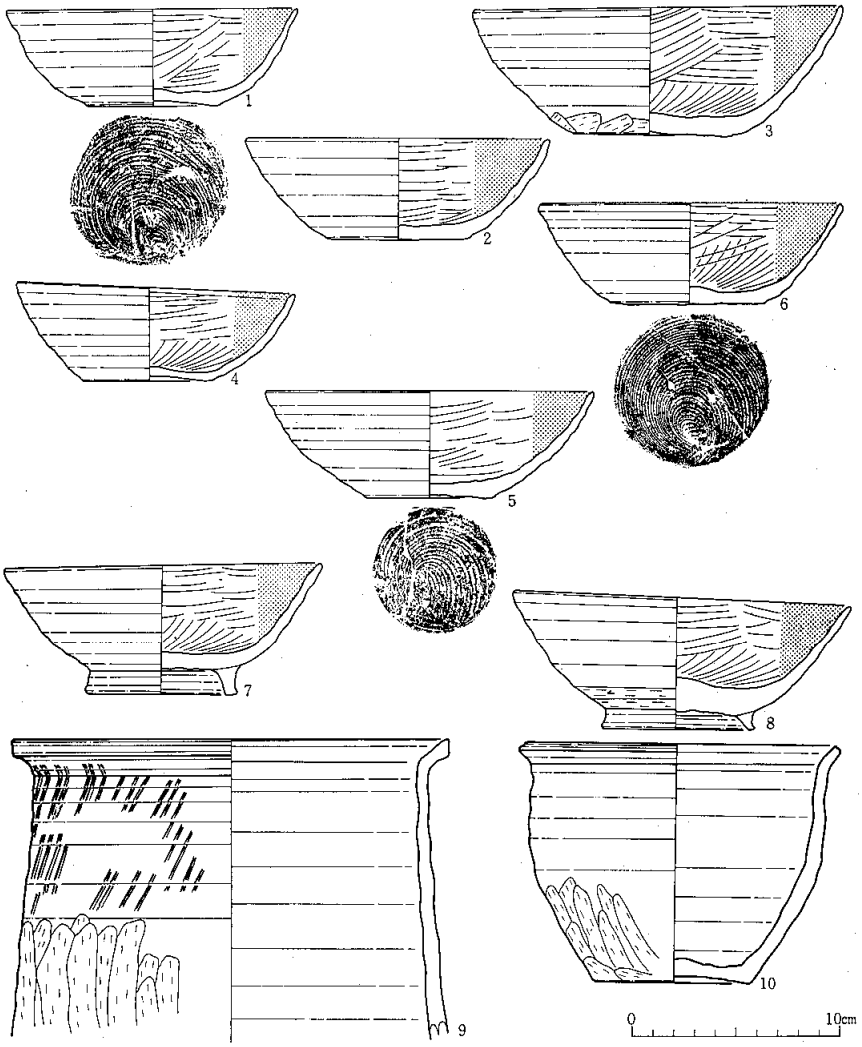
番号	層位	種類・器形	分類	特徴		登録	残存
1	カマド	土師器・坏	B Ⅰ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ヘラミガキ、黒色	口径13.6cm、底径5.4cm、器高5.1cm	33住－2	⅔
2	貯蔵穴	土師器・坏	B Ⅰ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ヘラミガキ、黒色	口径14.0cm、底径6.3cm、器高5.2cm	33住－6	½
3	カマド	土師器・坏	B Ⅱ	外面：口～胴部ロクロナデ、手持ちケズリ、底部回転糸切り、内面：ヘラミガキ、黒色	口径14.5cm、底径6.7cm、器高4.5cm	33住－7	½
4	貼床下	土師器・坏	B Ⅱ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ヘラミガキ、黒色	口径14.3cm、底径6.9cm、器高4.4cm	33住－1	½
5	カマド付近	土師器・坏	B Ⅰ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ヘラミガキ、黒色	口径13.8cm、底径5.6cm、器高4.5cm	33住－20	½
6	カマド	土師器・坏	B Ⅰ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ヘラミガキ、黒色	口径14.2cm、底径6.5cm、器高5.5cm	33住－9	½
7	カマド	土師器・甕		外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ、内面：ヨコナデ、ナデ		33住－22	½
8	貯蔵穴	須恵器・坏	C	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ロクロナデ	口径15.1cm、底径5.6cm、器高4.3cm	33住－14	½
9	貯蔵穴	須恵器・坏	C	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、墨書あり、内面：ロクロナデ	口径14.7cm、底径5.7cm、器高4.5cm	33住－13	½

第85図　第33号住居跡出土土器(1)



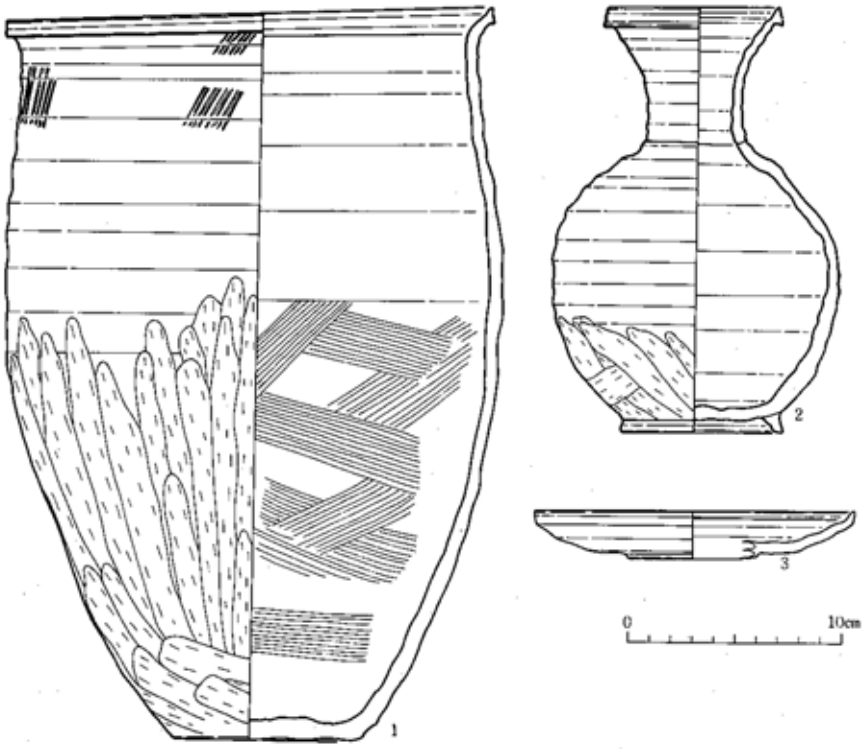
番号	層位	種類・器形	分類	特徴	整録	残存
1	貼床下	須恵器・坏	B II	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ロクロナデ　口径14.3cm、底径6.9cm、器高4.5cm	33住—15	½
2	貯蔵穴	赤焼坏		外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ロクロナデ　口径14.7cm、底径5.5cm、器高5.7cm	33住—16	⅔
3	床	須恵器・甕	B 1	外面：口縁部ロクロナデ、胴部平行タタキ、内面：ロクロナデ、ナデ	33住—25	⅔

第86図　第33号住居跡出土土器(2)



番号	層位	種類・器形	分類	特徴	登録	残存
1	2 層	土師器・坏	B Ⅰ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ヘラミガキ、黒色処理　口径14.0cm、底径6.5cm、器高4.7cm	33住－3	½
2	3 層	土師器・坏	B Ⅰ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ヘラミガキ、黒色　口径14.7cm、底径7.0cm、器高4.9cm	33住－10	¾
3	2 層	土師器・坏	B Ⅰ	外面：口～胴部ロクロナデ、手持ちケズリ、底部回転糸切り、内面：ヘラミガキ、黒色　口径17.8cm、底径7.7cm、器高6.4cm	33住－5	¾
4	2 層	土師器・坏	B Ⅰ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ヘラミガキ、黒色　口径13.5cm、底径5.4cm、器高4.8cm	33住－8	¾
5	2 層	土師器・坏	B Ⅰ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ヘラミガキ、黒色　口径15.9cm、底径6.4cm、器高5.2cm	33住－19	½
6	2 層	土師器・坏	B Ⅰ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ヘラミガキ、黒色　口径14.7cm、底径7.5cm、器高4.9cm	33住－4	¾
7	2 層	土師器高台付	B Ⅱ	外面：ロクロナデ、内面：ヘラミガキ、黒色	33住－11	½
8	2 層	土師器高台付	B Ⅱ	外面：ロクロナデ、回転ケズリ、内面：ヘラミガキ、黒色	33住－12	¾
9	第1カマド付近	土師器・甕	B Ⅱ 2	外面：ロクロナデ、平行タタキ、ヘラケズリ、内面：ロクロナデ	33住－24	一部
10	2 層	土師器・甕	B Ⅰ 1	外面：ロクロナデ、ヘラケズリ、内面：ロクロナデ	33住－23	¾

第87図　第33号住居跡出土土器(3)



番号	層位	種類・器形	分類	特	徴	登録	残存
1	2 層	土師器・甕	BE1	外面：ロクロナデ、平行タタキ、ヘラケズリ、内面：ロクロナデ	口径22.9cm、器高34.4cm	33E－21	大
2	2 層	須恵器・壺		外面：ロクロナデ、ヘラケズリ、内面：ロクロナデ		33E－18	大
3	不明	赤焼皿		外面：ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ロクロナデ		33E－17	大

第88図　第33号住居跡出土土器(4)

第 34 号住居跡

〔重複・規模・平面形〕　床面を除去した段階で住居内に収まるもうひとつの住居跡（第 38 号住居跡）を検出した。この第 38 号住居跡と重複しており、これを切っている。一辺 4.5mの隅丸方形を呈し、各辺は外にややふくらむ。

〔壁〕　地山を壁としている。第 38 号住居跡に伴うカマド（特に煙道部）を壊わして壁としている部分もある。残存壁高は約 10～20cm で床面からの立ち上がりは緩やかである。

〔床面〕　住居ほぼ全域に掘り方がみられ、その埋土上面を床としているが、住居周辺部には貼り床がされている。中央部の床は第 38 号住居跡の床面と共有している。面は中央部に向かって傾斜しており、浅い舟底状を呈している。床面上からは柱穴、周溝は検出されない。

〔カマド〕　住居北辺の東寄りの所に付設されている。燃焼部は住居壁を外方へ約60cm 掘り込

番号	層位	種類・器形	分類	特徴	登録	残存
1	1層	須恵器・甕	A 1	外面：ロクロナデ、格子状タタキ、内面：ナデ	33住—26	3/4
2	2層	須恵器・甕	A 2	外面：ロクロナデ、平行タタキ、内面：平行タタキ	33住—27	3/4

第89図　第33号住居跡出土土器(5)

んでつくられている。側壁は粘土積み上げによって構築されている。底面はややくぼみ、中央部は火熱を受け赤変している。また、支脚として使用されたと思われる切石が奥壁の近くに埋められている。煙道部との境には20cmの段が形成され区切りとしている。煙道部は地山を掘り抜いてつくられており、底面は中央部がやや高くなっている。先端部には径45cm、深さ50cmのピットがある。

〔堆積土〕　4層認められる。第Ⅰ層はほぼ全域に堆積しており、第Ⅱ層は周辺部を除いた部分、第Ⅲ層は床面上に堆積している。第Ⅳ層は壁沿いに堆積している。自然流入土である。

〔出土土器〕　図示したものは３点のみである。38 住に伴うものもあるかもしれないが区別することは困難である。床面上、カマド内から土師器甕１点ずつ出土している。その他、堆積土中から土師器坏１点出土している。

第35号住居跡

〔重複・規模・平面形〕　溝と重複している。カマド煙道部と住居北東隅は溝によって切られている。4.9×4.7mの隅丸方形を呈するがやや南北に長い。

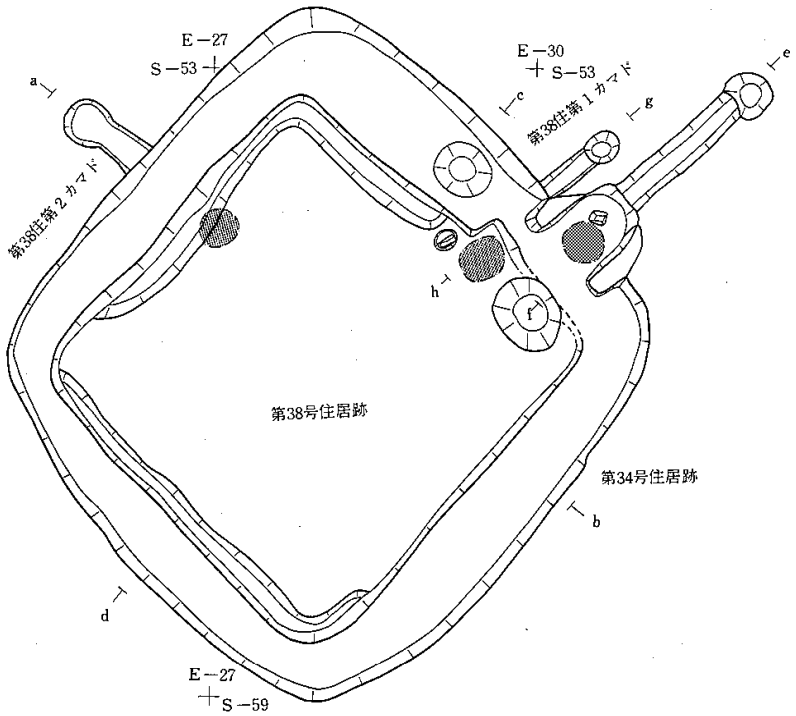
〔壁〕　地山を壁としている。残存する壁高は約40～45cmである。床面からの立ち上がりはやや急である。

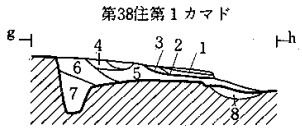
〔床面〕　住居全域に掘り方がみられ、その埋土上面を床としている。掘り方は全体的に浅いが周辺部の掘り方は深く掘られている。面はほぼ平坦である。床面上のほぼ全域には生活層がみられる。また、中央部に焼面がみられる。

〔柱穴〕　床面上から４個のピットが検出された。これらのピットには柱痕と掘り方の区別があり、規模・配置等に規則性があり、柱穴と考えられる。各ピットを結んだ線は住居平面形に相似するが東寄りになっている。特にＰ．３、Ｐ．４は壁沿いに位置している。

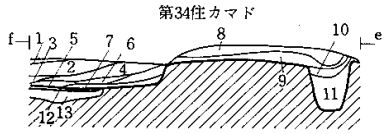
〔周溝〕　カマド付設部分を除いた壁沿いに巡る。幅は約７cm、床面からの深さは約６～10cmである。

〔カマド〕　３基のカマドが付設されている。住居西辺中央部に付設されているものを第１カマド、北辺に付設されている２基の内、西側のものを第２カマド、東側のものを第３カマドとする。第１カマド：残存する燃焼部側壁は粘土積み上げによってつくられているが、床面から約５cmのみ残存している状態である。底面はほぼ平坦で火熱を受け赤変している。奥壁近くには粘土を積み上げてつくった高まりがあり、支脚として使用されたものであろう。煙道部とは住居壁を利用した約20cmの段を境にし区切りにしている。煙道部は残りは良くないが、底面は先端部に向かって上がるようである。また、燃焼部内の堆積土はすでに消失していることから古い段階のものである。第２カマド：燃焼部側壁は第３カマド構築時にすでに壊わされて残っていない。底面は平坦で火熱を受け赤変している。煙道部とは住居壁を利用して約15cmの段が

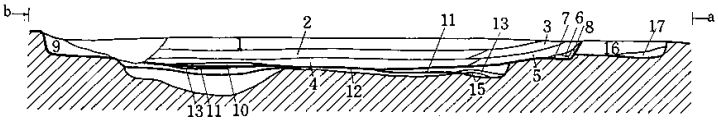


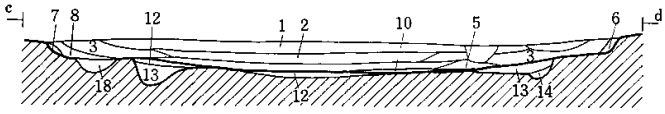


1	住　居 Ⅲ層	5	暗赤褐色(5YR 3/2) シルト
2	〃　Ⅵ層	6	黒褐色(7.5YR 3/2) シルト
3	〃　Ⅵ層	7	黒色 (7.5YR 3/1) シルト
4	赤褐色 (5YR 4/6) シルト	8	暗褐色(5YR 3/6) シルト



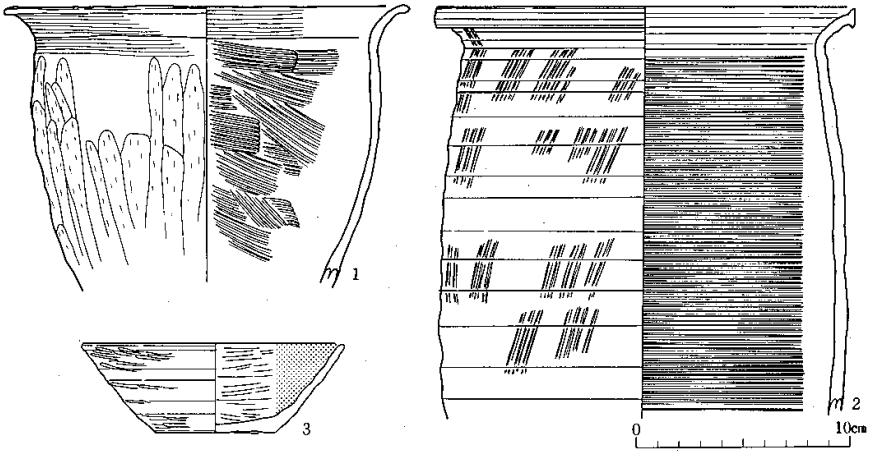
1	住　居 Ⅰ層	7	暗褐色 (10YR 3/3) シルト
2	〃　Ⅱ層	8	黒褐色 (10YR 3/2) シルト
3	〃　Ⅲ層	9	にぶい黄褐色 (10YR 5/4) シルト
4	褐色 (10YR 4/4) シルト	10	黒褐色 (10YR 3/3) シルト
5	赤褐色 (5YR 4/8) 焼土	11	にぶい黄褐色 (10YR 5/4) シルト
6	暗褐色 (10YR 3/3) シルト	12	黒褐色 (10YR 3/2) シルト
		13	明褐色 (7.5YR 5/6) シルト





第90図　第34・38号住居跡

0　2 m



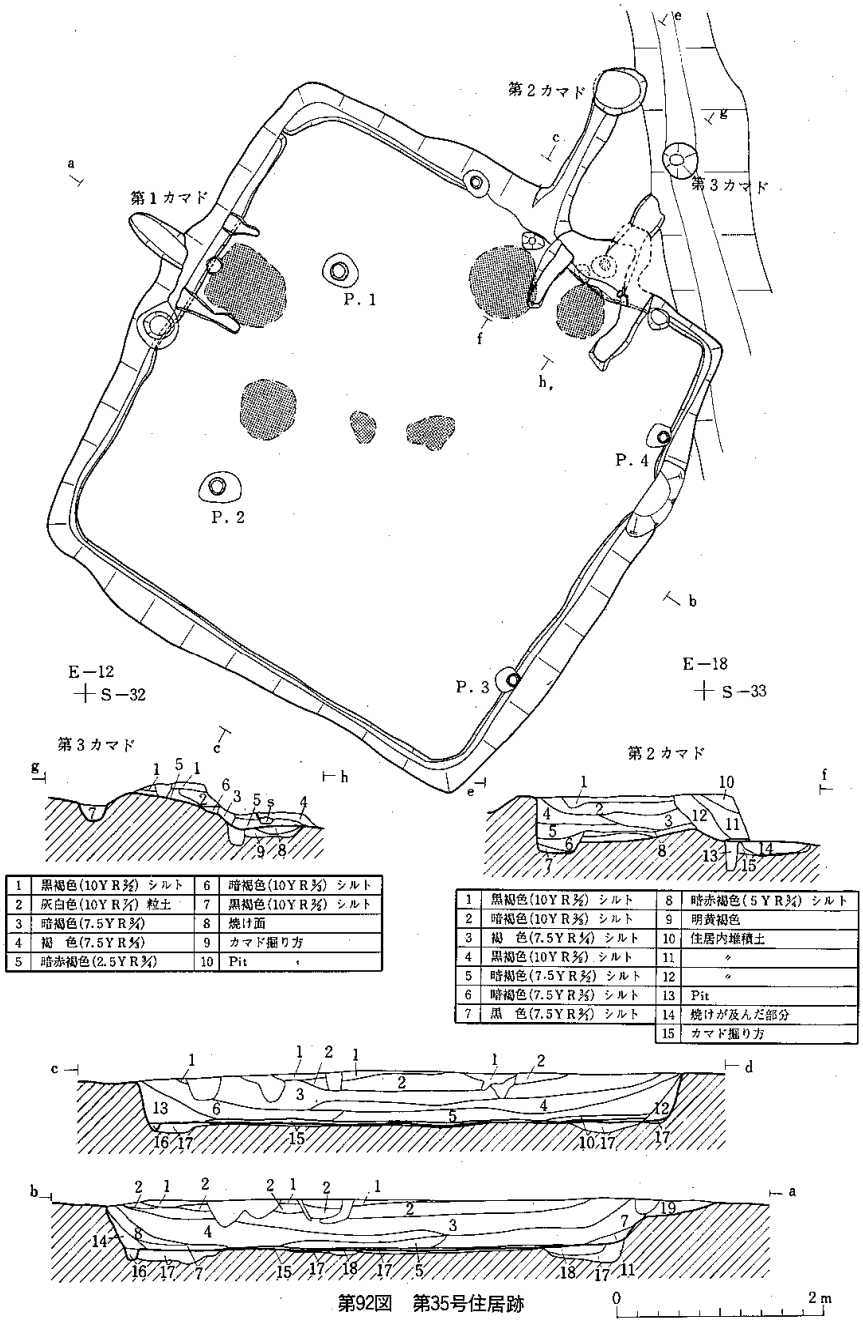
番号	層位	種類・器形	分類	特徴	登録	残存
1	床	土師器・甕	A I 2 b i i	外面：口縁部ヨコナデ、胴部、ヘラケズリ、内面：ヨコナデ、刷毛目	34住－2	½
2	2 層	土師器・坏	B I	外面：口 胴部ロクロナデ、 ヘラミガキ、内面：ヘラミガキ、黒色　口径12.3cm、底径5.8cm、器高4.2cm	34住－1	½
3	第2カマド内	土師器・甕	B II 2	外面：ロクロナデ、平行タタキ、内面：ロクロナデ、回転刷毛目	34住－3	一部

第91図　第34号住居跡出土土器

形成され区切りとしている。煙道部は先端部に向かって傾斜していくように掘り抜いてつくられ、先端部には径 50cm、深さ 50cm のピットがある。また、側壁が存在したと推定される所にピットがある。第３カマド：第２カマドを切っており、しかも、燃焼部底面下には住居壁、周溝の残存部分がわずかにみられることから最終使用時のカマドである。燃焼部はやや住居壁を外方に掘り込んでつくられている。残存する燃焼部側壁は粘土積み上げによってつくられている。底面はややくぼみ、火熱を受け赤変している。煙道部との境には約 20cm の段が形成され区切りとしている。煙道部は溝との重複により大半は残っていないが、底面は先端部に向かって上がり、先端部には径 25cm のピットがある。また、側壁の両外側に対になるようなピットが２個配されている。

第34・38号住居跡堆積土

層位	層No	土色	土性	備考	遺物取り上げ層位
I	1	極暗褐色（7.5YR 3/3）	シルト	炭化物含む	1層
II	2	黒褐色（7.5YR 3/1）	シルト	炭化物多く含む	2層
	3	黒褐色（7.5YR 3/1）	シルト	炭化物含む	+
III	4	黒褐色（5YR 3/1）	シルト	炭化物、焼土含む	3層
	5	暗褐色（7.5YR 3/3）	シルト	地山粒含む	+
	6	黒色（7.5YR 3/1）	シルト		4層
IV	7	褐色（7.5YR 4/6）	シルト		+
	8	暗赤褐色（5YR 3/3）	シルト	焼土わずかに含む	+
	9	褐色（7.5YR 4/6）	シルト	地山粒含む	+
生活層	10	黒色（5YR 1.7/1）	シルト	炭化物、焼土わずかに含む	床面
貼り床	11	極暗褐色（5YR 2/3）	シルト	炭化物、焼土含む	
掘り方	12	黒褐色（10YR 3/1）	シルト		
38住堆積土	13	黒褐色（10YR 3/1）	シルト		
+ 周溝	14	褐色（7.5YR 4/6）	シルト	地山粒含む	
+ 焼窪	15	赤色（10R 4/6）			
第1カマド	16	暗赤褐色（5YR 3/3）	シルト	木炭、焼土含む	
	17	極暗赤褐色（5YR 2/3）	シルト	焼土、木炭含む	
ピット 2	18	褐色（10YR 1.7/1）	シルト	地山粒含む	



1	黒褐色(10YR3/2) シルト	6	暗褐色(10YR3/3) シルト
2	灰白色(10YR7/1) 粒土	7	黒褐色(10YR3/2) シルト
3	暗褐色(7.5YR3/4)	8	焼け面
4	褐　色(7.5YR4/4)	9	カマド掘り方
5	暗赤褐色(2.5YR3/4)	10	Pit

1	黒褐色(10YR3/2) シルト	8	暗赤褐色(5YR3/4) シルト
2	暗褐色(10YR3/3) シルト	9	明黄褐色
3	褐　色(7.5YR4/4) シルト	10	住居内堆積土
4	黒褐色(10YR3/2) シルト	11	〃
5	暗褐色(7.5YR3/3) シルト	12	〃
6	暗褐色(7.5YR3/3) シルト	13	Pit
7	黒　色(7.5YR3/1) シルト	14	焼けが及んだ部分
		15	カマド掘り方

第92図　第35号住居跡

0　2m

〔堆積土〕　６層認められる。第Ⅰ層は部分的にみられる。第Ⅱ層は灰白色火山灰で、住居中央周辺部に、第Ⅲ層はほぼ全域に、第Ⅳ層は住居の北・東側に各々堆積している。第Ⅴ層は住居壁沿いから中央部全域に堆積している。第Ⅵ層は壁沿いにのみ堆積している。

〔出土土器〕　図示したのは 12 点である。その内、床面上からは須恵器坏２点出土しているのみである。第３カマド内から土師器甕２点出土している。また、堆積土中から土師器坏３点、土師器甕２点、須恵器坏３点出土し、しかも、堆積土中で床面に近い所から出土したもののみであるため、これらの土器は住居内で共伴するものと考えられる。土師器坏は全てロクロ使用のものである。

第 36 号住居跡

〔重複・規模・平面形〕　土壙 12、13 と重複している。これら土壙より新しい。3.7×3.5mのほぼ方形を呈する。

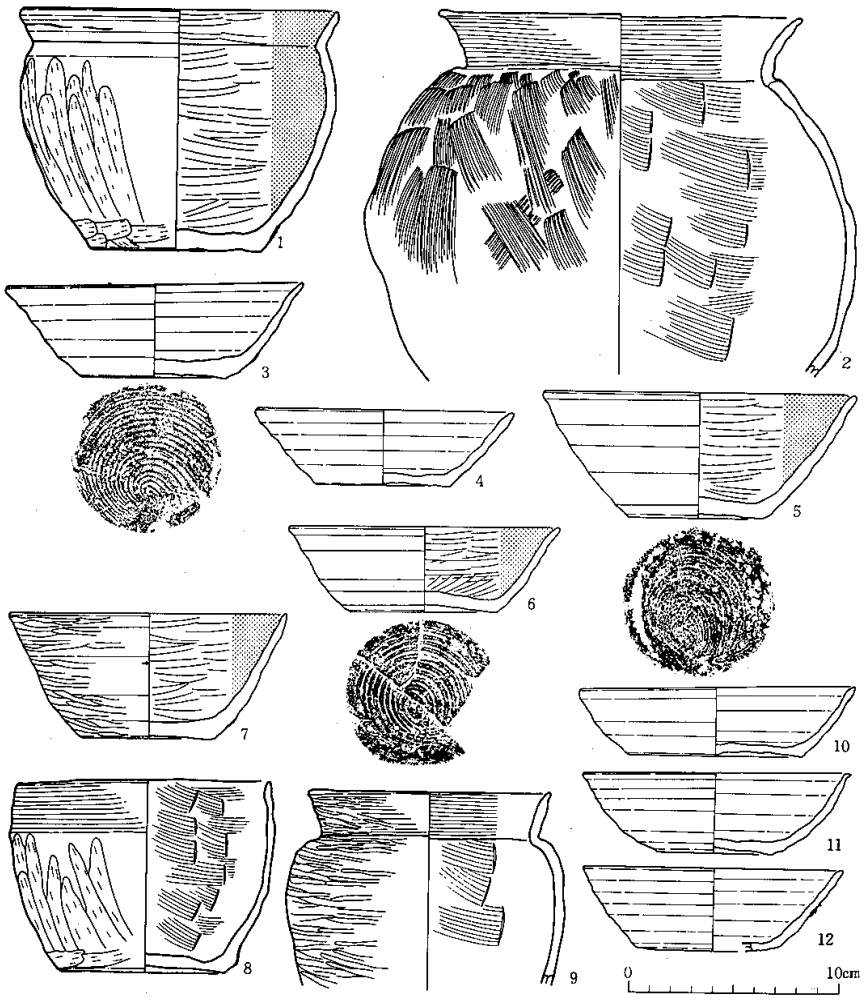
〔壁〕　地山を壁としている。残存する壁高は約 20～30cm である。床面からの立ち上がりは西壁でやや急であるが、その他は緩やかである。

〔床面〕　大半は地山をそのまま床としているが、南側の一部に掘り方がみられ、その埋土上面を床としている。さらに土壙 12、13 の上面には貼り床がされている。また、南壁近くには生活層がみられる。床面上・下では柱穴、周溝、その他の施設等は認められない。

〔カマド〕　住居東辺の南寄りの所と南辺の東寄りの所に各１基ずつ付設されている。前者を第１カマド、後者を第２カマドとする。第１カマド：燃焼部は住居壁をやや外方に掘り込んでつくられたものであるが、両側壁は残っておらず、底面の一部である焼面と煙道部が残存しているにすぎない。このことから、古い段階のカマドと考えられる。底面は中央部がややくぼみ火熱を受け赤変している。また、中央部には切石が置かれ支脚に使用されたものと推定される。煙道部との境には約 15cm の段が形成され、区切りにしている。煙道部は地山を先端部に向かっ

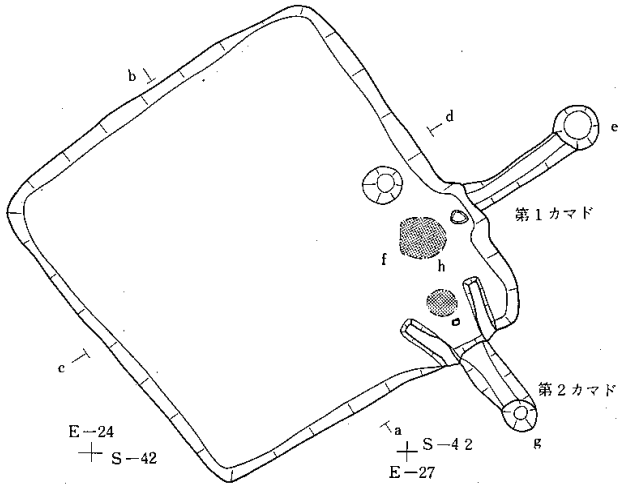
層位	層No.	土色	土性	備考	遺物取り上げ層位
Ⅰ	1	黒色（7.5YR3/1）	シルト		
Ⅱ	2	灰白色（7.5YR8/2）	火山灰		
Ⅲ	3	暗褐色（7.5YR3/3）	シルト	地山ブロック混入	
Ⅳ	4	黒褐色（10YR3/3）	シルト	木炭少し混入	
Ⅴ	5	黒褐色（7.5YR3/2）	シルト	木炭・焼土混入	
	6	黒褐色（10YR3/2）	シルト	地山粒・木炭混入	
	7	黒褐色（10YR3/2）	シルト		
	8	黒褐色（7.5YR3/2）	シルト		
	9	黒褐色（7.5YR3/2）	シルト	地山ブロック・木炭焼土混入	
Ⅵ	10	黒　色（10YR3/1）	シルト		
	11	黒　色（7.5YR1.7/1）	シルト		
	12	黒褐色（10YR3/2）	シルト	地山粒多く混入	
	13	黒褐色（10YR3/2）	シルト	〃	
	14	黒褐色（7.5YR3/3）	シルト	〃	
生活層	15	暗褐色（10YR3/3）	シルト		
周溝内	16	暗褐色（7.5YR3/3）	シルト		
掘り方	17	黒　色（10YR2/2）	シルト	地山ブロック多く混入	
焼面	18	赤　色（10R4/6）			
第１カマド	19	赤　色（10R5/6）	シルト	焼土	

第35号住居跡堆積土

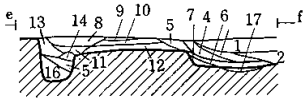


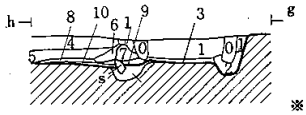
番号	層位	種類・器形	分類	特徴	登録	残存
1	カマド	土師器・甕	BⅠ1	外面；ロクロナデ、ヘラケズリ、内面；ヘラミガキ、黒色　口径15.2cm、器高11.7cm	35住－9	½
2	カマド	土師器・甕	AⅡ1ai	外面；口縁部ヨコナデ、胴部刷毛目、内面；ヨコナデ、ヘラナデ	35住－11	⅓
3	床	須恵器・坏	BⅡ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、底部回転糸切り、内面；ロクロナデ　口径14.1cm、底径7.0cm、器高4.7cm	32住－5	¾
4	床	須恵器・坏	AⅢ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部ヘラ切り、内面；ロクロナデ　口径12.3cm、底径6.5cm、器高3.6cm	32住－7	½
5	5 層	土師器・坏	BⅠ	外面：口～胴部ロクロナデ、ケズリ、ミガキ、内面：ヘラミガキ、黒色　口径13.2cm、底径6.5cm、器高6.1cm	35住－1	⅔
6	5 層	土師器・坏	BⅡ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ヘラミガキ、黒色　口径12.9cm、底径7.2cm、器高4.1cm	32住－3	½
7	4 層	土師器・坏	BⅠ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ヘラミガキ、黒色　口径14.9cm、底径7.0cm、器高6.1cm	35住－2	⅔
8	5 層	土師器・甕	AⅠ3	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ、底部木葉痕、内面；ヘラナデ	35住—10	⅔
9	5 層	土師器・甕	AⅡ5	外面：ヨコナデ、ケズリ、ミガキ、内面；ヨコナデ、ヘラミガキ	35住—12	½
10	4 層	須恵器・坏	AⅢ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部ヘラ切り、内面：ロクロナデ　口径13.0cm、底径8.4cm、器高3.5cm	35住－6	⅔
11	5 層	須恵器・坏	AⅢ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、内面；ロクロナデ　口径12.7cm、底径5.8cm、器高4.0cm	35住－4	¾
12	5 層	須恵器・坏	BⅡ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部ヘラ切り、内面；ロクロナデ	35住－8	½

第93図　第35号住居跡出土土器



第1カマド

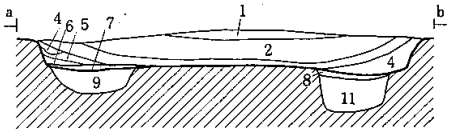




※0：攪乱

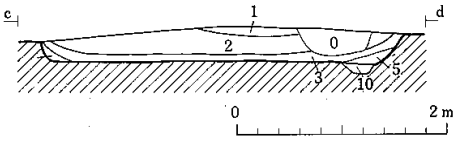
1	住居堆積土	9	明褐色(7.5YR 5/6) シルト
2	〃	10	暗赤褐色(5YR 3/4) シルト
3	暗褐色(7.5YR 3/3) シルト	11	暗褐色(7.5YR 3/3) シルト
4	黒褐色(7.5YR 2/2) シルト	12	黒褐色 (10YR 2/2) シルト
5	明褐色(7.5YR 5/6) シルト	13	黒褐色 (10YR 2/2) シルト
6	赤褐色 (5YR 4/6) シルト	14	明褐色(7.5YR 5/6) シルト
7	暗褐色(7.5YR 3/3) シルト	15	極暗褐色(7.5YR 2/3) シルト
8	暗褐色 (10YR 3/3) シルト	16	黒褐色 (10YR 2/1) シルト

第1カマド



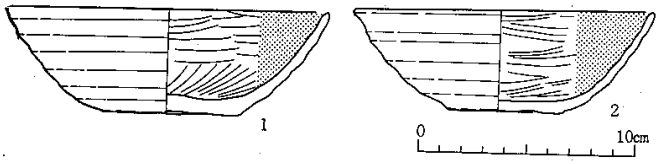
1	黒褐色 (10YR 3/3) シルト	6	黒褐色(7.5YR 2/2) シルト
2	黒褐色 (10YR 3/3) シルト	7	赤褐色 (5YR 4/6) シルト
3	黒褐色 (10YR 3/3) シルト	8	にぶい黄橙色(10YR 6/4) シルト
4	黒褐色 (10YR 2/3) シルト	9	暗褐色(7.5YR 3/4) シルト
5	黒褐色 (10YR 2/3) シルト	10	暗褐色(7.5YR 3/3) シルト
		11	暗褐色(7.5YR 3/4) シルト

第2カマド



層位	層No	土色	土性	備考	遺物取り上げ層位
Ⅰ	1	灰白色 (7.5YR 8/2)	火山灰		
Ⅱ	2	黒褐色 (10YR 2/2)	シルト		
Ⅲ	3	黒褐色 (10YR 3/3)	シルト	地山粒混入	
Ⅳ	4	極暗褐色 (7.5YR 2/3)	シルト		
	5	暗褐色 (10YR 3/4)	シルト		
	6	黒褐色 (7.5YR 2/2)	シルト		
生活層	7	極暗褐色 (7.5YR 2/3)	シルト	しまりあり	
貼り床	8	黒褐色 (7.5YR 3/1)	シルト		
掘り方	9	明褐色 (7.5YR 5/6)	シルト	地山混入	
Pit 1	10	黒褐色 (10YR 3/3)	シルト		
土壙	11				

第94図　第36号住居跡



1．土師器坏　床　　外面：ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ヘラミガキ、黒色処理　口径14.8cm、器高4.8cm、底径6.2cm
2．〃　〃　3層　外面：　〃　内面：　〃　口径13.8cm、器高4.6cm、底径5.2cm

第95図　第36号住居跡出土土器

て傾斜するように掘り抜いてつくられている。先端部には径 30cm、深さ 40cm のピットがある。第２カマド：最終使用時のカマドである。残存する側壁は粘土積み上げによってつくられている。底面は平坦である。中央部は火熱を受け赤変しており、切石が埋められた状態で検出され支脚に使用されたのであろう。煙道部との境には段が形成され区切りとしているが、段は攪乱のため約７cm のみ残存しているにすぎない。煙道部は地山を先端部に向かってやや傾斜するように掘り抜いてつくられている。先端部には径 25cm のピットがある。

〔堆積土〕　４層認められる。第Ⅰ層は灰白色火山灰で住居中央部に第Ⅱ・Ⅲ層はほぼ全域に第Ⅳ層は壁沿いに各々堆積している。

〔出土土器〕　図示したのは２点のみである。床面上から土師器坏１点出土している。また、堆積土中から土師器坏１点出土している。その他は破片で量も少ない。

第 37 号住居跡

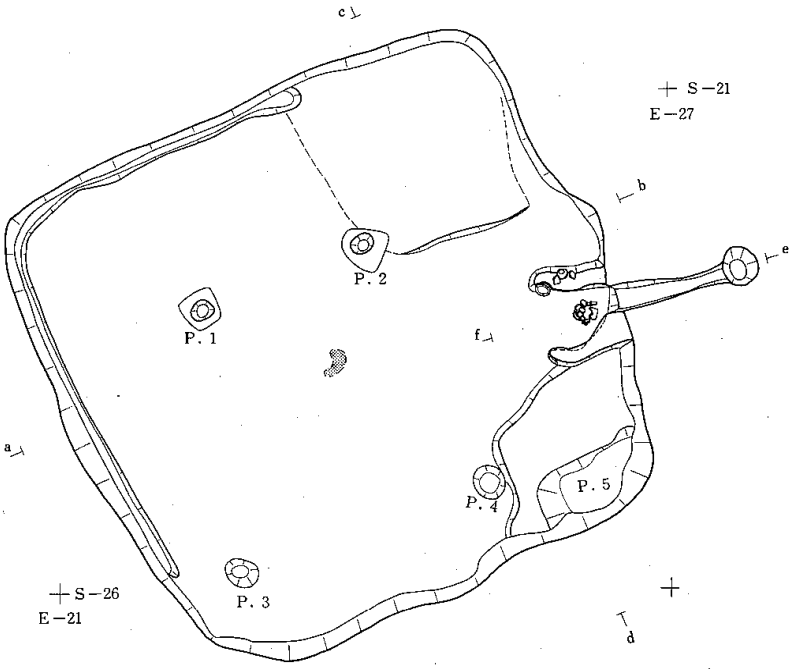
〔規模・平面形〕　5.0×4.7mの隅丸長方形を呈する。各辺はややふくらむ。

〔壁〕　地山を壁としている。残存する壁高は約 25～45cm である。床面からの立ち上がりは緩やかである。

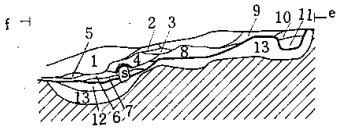
〔床面〕　住居中央部付近は地山をそのまま床としているが、周辺部には掘り方がみられ、そ

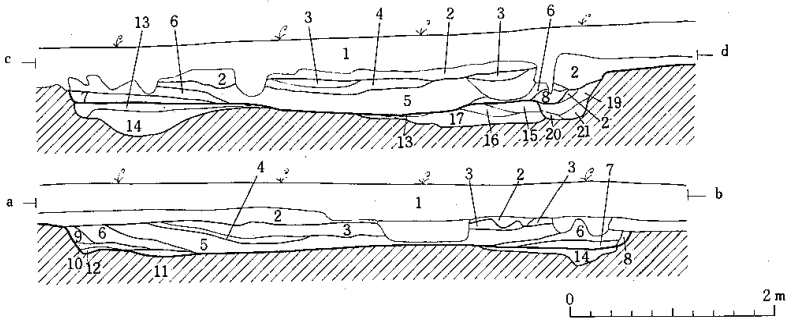
層位	層No	土色	土性	備考	遺物取り上げ層位
表土	1				
	2	黒色（7.5YR 3/1）	シルト		1層
Ⅰ	3	灰白色（7.5YR 8/1）	火山灰		2層
	4	極暗褐色（7.5YR 3/3）	シルト	灰白色火山灰多く混入	〃
Ⅱ	5	暗褐色（7.5YR 3/3）	シルト	地山粒混入	3層
Ⅲ	6	暗褐色（7.5YR 3/3）	シルト	地山粒しもふり状に混入	4層
Ⅳ	7	暗褐色（7.5YR 3/3）	シルト		5層
	8	暗褐色（7.5YR 3/4）	シルト	地山粒多く混入	〃
	9	黒褐色（7.5YR 3/1）	シルト		〃
	10	赤色（10R 4/8）	シルト	焼土	〃
	11	黒褐色（7.5YR 3/1）	シルト		〃
	12	黒褐色（7.5YR 3/1）	シルト		〃
掘り方	13	黒褐色（10YR 3/1）	シルト	地山土ブロック状に混入	
	14	褐色（10YR 4/6）	シルト	13の土を混入	
	15	黒褐色（10YR 3/1）	シルト	地山多量に混入	
	16	褐色（10YR 4/6）	シルト	〃	
	17	暗褐色（10YR 3/3）	シルト	〃	
ピット５	18	黒褐色（7.5YR 3/1）	シルト		
	19	暗褐色（7.5YR 3/3）	シルト	地山粒混入	
	20	黒褐色（7.5YR 3/1）	シルト	地山土多く混入	
	21	褐色（7.5YR 4/6）	シルト	木炭、焼土混入	

第37号住居跡堆積土



1	住居4と同じ	7	暗赤色土(2.5YR 3/4)
2	暗褐色土（7.5YR 3/4）	8	暗褐色土(7.5YR 3/3) シルト
3	にぶい赤褐色土（5YR 4/4）	9	黒褐色土(7.5YR 3/2) シルト
4	天井崩落土	10	黒褐色土(7.5YR 3/2) シルト
5	暗赤褐色土（5YR 3/6）	11	暗褐色土（10YR 3/4）
6	赤褐色土（5YR 4/6）	12	赤褐色土(2.5YR 3/6)
		13	黒色土（7.5YR 3/1）





第96図　第37号住居跡

の埋土上面を床としている。面は平坦であるが、北東、南東隅にはベット状の高まりがある。北東隅の部分は床面より約 10cm 高く、南東隅のもの約４cm とさほど高くない。また、住居中央部には焼面がみられる。

〔柱穴〕　床面上で４個のピットを検出した。その内Ｐ１、Ｐ２には柱痕と掘り方の区別があるがＰ３、Ｐ４にはない。しかし、配置等からこれら４個のピットは柱穴と考えられる。各ピットを結んだ線は台形を呈する。

〔周溝〕　住居北から西壁沿いにのみ巡る。幅は約 10cm、床面からの深さは約３～６cm である。

〔カマド〕　住居東辺の南寄りの所に付設されている。残存する燃焼部側壁は粘土積み上げによってつくられており、右側壁の先端には石が置かれオサエにしている。この石は全面が火熱を受け赤変しており、２次使用の可能性がある。さらに、左側壁先端には抜き取り痕と思われる小ピットがある。底面は中央部がくぼみ舟底状を呈し、側壁内面と伴に火熱を受け赤変している。また、中央部には石を掘り込んで埋め、その上に土師器坏が２個体、倒位に置かれていた。支脚として使用されたものであろう。煙道部との境には約 10cm の段が形成され区切りとしている。煙道部は地山を先端部に向かって上がるように掘り抜いてつくられ、先端部には径 40cm、深さ 20cm のピットがある。

〔堆積土〕　攪乱があり、堆積土の上方の保存は良くないが、４層認められる。住居内の上方には黒色土、灰白色火山灰があり、特に黒色土は住居外にも存在している。この層の下にあるⅡ層はほぼ住居全域に、Ⅲ、Ⅳ層は住居周辺部、又は壁沿いに堆積している。自然流入土である。

〔出土土器〕　図示したものは 16 点である。その内、床面上から土師器坏６点、高台付坏２点、甕１点、須恵器坏１点、須恵器壺１点出土している。カマド内から土師器坏２点、高台付坏１点、須恵器坏１点、柱穴内から土師器坏１点出土している。これらの土器は住居内で共伴するものと考えられる。土師器坏は全てロクロ使用のものである。

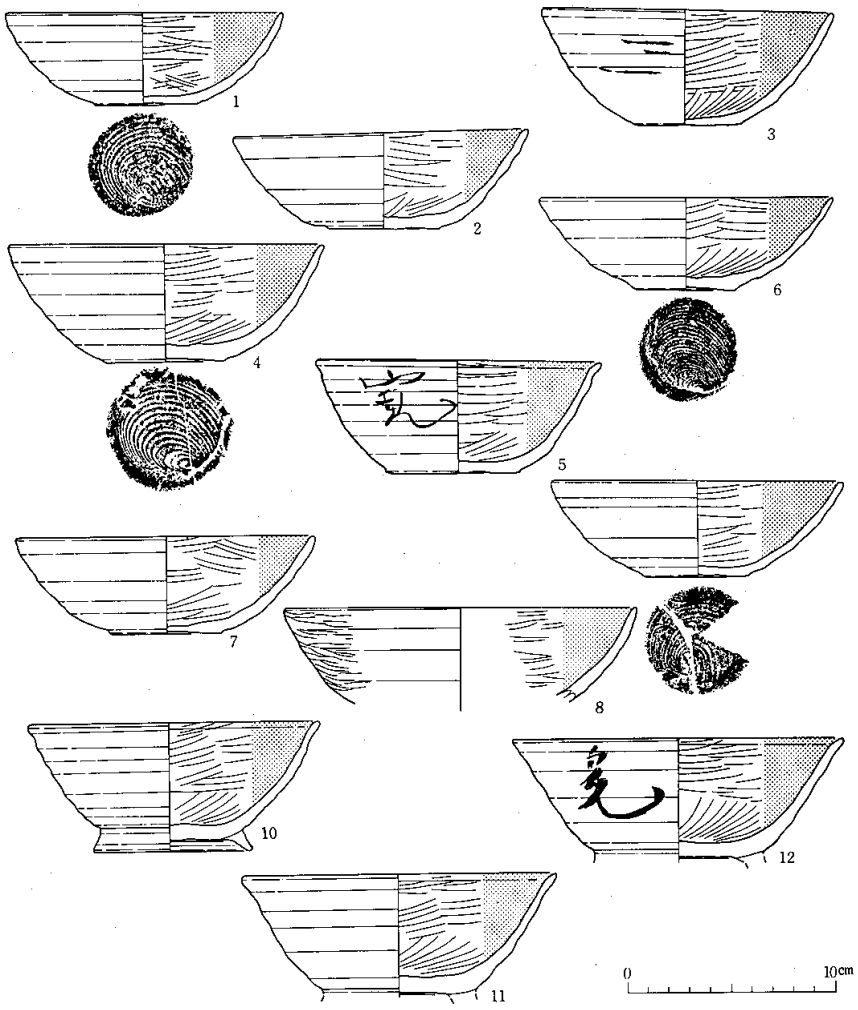
第 38 号住居跡

〔重複・平面形・規模〕　第 34 号住居と重複しており、これより古い。平面形は 3.7×3.6ｍの隅丸方形を呈する。

〔壁〕　地山を壁としているが、第 34 号住居跡構築のため残りは良くない。残存壁高は約７～15cm である。床面からの立ち上がりは不明な点が多いが急ではない。

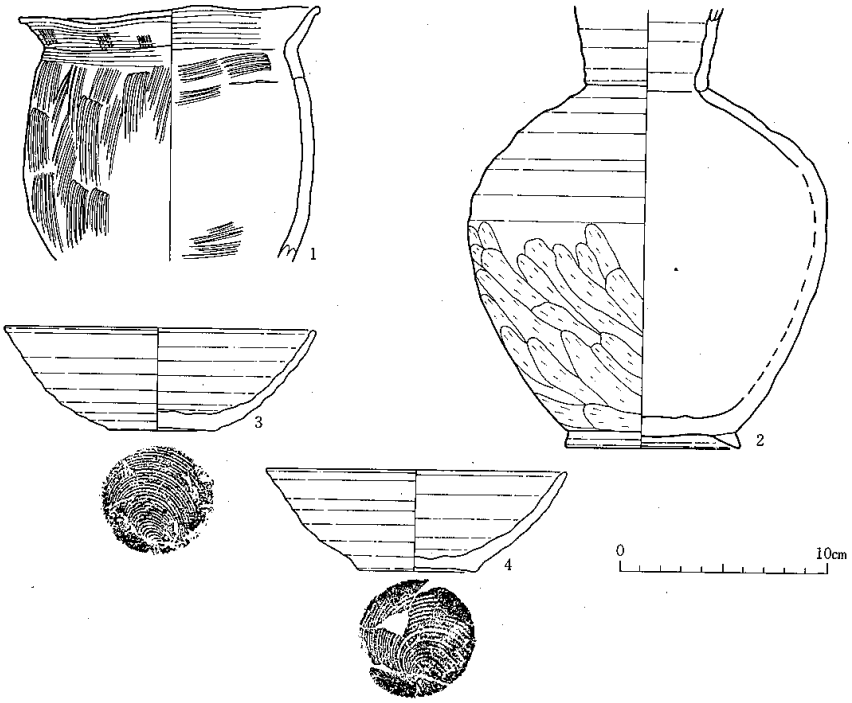
〔床面〕　ほぼ全域に掘り方がみられ、その埋土上面を床としている。周辺部には地山をそのまま床としている部分もある。面は第 34 号住居跡と同様な状況を示す。床面上では柱穴は検出されない。

〔周溝〕　北から西壁、南壁沿いに部分的であるが巡っている。幅は約 20cm、深さは約５～20



番号	層位	種類・器形	分類	特徴	登録	残存
1	床	土師器・坏	B Ⅲ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ヘラミガキ、黒色　口径13.3cm、底径5.1cm、器高4.5cm	37住－2	¼
2	床	土師器・坏	B Ⅲ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部手持ちケズリ、内面：ヘラミガキ、黒色　口径14.2cm、底径5.6cm、器高4.8cm	37住－1	¼
3	床	土師器・坏	B Ⅲ	外面：口～胴部ロクロナデ、内面：ヘラミガキ、黒色処理　口径14.0cm、底径5.3cm、器高5.7cm	37住－3	¼
4	カマド	土師器・坏	B Ⅲ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ヘラミガキ、黒色　口径15.2cm、底径6.1cm、器高5.8cm	37住－4	¼
5	床	土師器・坏	B Ⅰ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、墨書あり、内面：ヘラミガキ、黒色　口径13.7cm、底径6.5cm、器高5.6cm	37住－5	¼
6	カマド	土師器・坏	B Ⅲ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ヘラミガキ、黒色処理　口径14.1cm、底径4.9cm、器高4.5cm	37住－6	½
7	床	土師器・坏	B Ⅲ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ヘラミガキ、黒色　口径14.4cm、底径5.6cm、器高4.7cm	37住－7	½
8	床	土師器・坏		外面：口～胴部ロクロナデ、ヘラミガキ、内面：ヘラミガキ、黒色	37住－14	一部
9	P. 1	土師器・坏	B Ⅲ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部：回転糸切り、内面：ヘラミガキ、黒色　口径14.1cm、底径5.2cm、器高4.7cm	37住－9	⅔
10	床	土師器高台付	D Ⅱ	外面：ロクロナデ、内面：ヘラミガキ、黒色処理	37住－8	¾
11	カマド	土師器高台付	B Ⅱ	外面：ロクロナデ、墨書あり、内面：ヘラミガキ、黒色処理	37住－11	½
12	床	土師器高台付	B Ⅱ	外面：ロクロナデ、内面：ヘラミガキ、黒色処理	37住－10	½

第97図　第37号住居跡出土土器(1)



番号	層位	種類・器形	分類	特徴	登録	残存
1	床	土師器・甕		外面：口縁部ヨコナデ、胴部刷毛目、内面：ヨコナデ、刷毛目	37住—15	½
2	床	須恵器・坏	C	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ロクロナデ　口径15.1cm、底径5.5cm、器高5.0cm	37住—12	¾
3	カマド	須恵器・坏	C	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ロクロナデ　口径14.6cm、底径5.9cm、器高5.0cm	37住—13	¾
4	床	須恵器・壺		外面：ロクロナデ、ヘラケズリ、内面：ロクロナデ	37住—16	¾

第98図　第37号住居跡出土土器(2)

cm である。

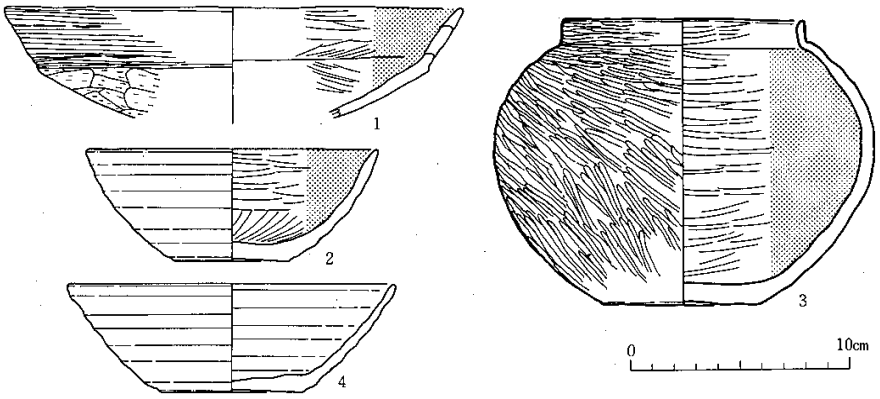
〔カマド〕　２基付設されているが、いずれも、煙道部のみと燃焼部底面の焼面のみ残存しているにすぎない。住居北辺の東寄りのカマドを第１カマド、西辺中央部のカマドを第２カマドとする。第１カマド：燃焼部は約 20cm 外方に掘り込んでつくられている。西側壁はすでに残存しないが、左側壁にあたると思われる部分に径約 20cm、深さ３cm のピットに切石が埋められており、側壁の芯と考えられる痕跡がある。底面はやや中央部がくぼみ火熱を受け赤変している。煙道部との境には約７cm の段が残存している。煙道部は先端部から半分のみが残存しているにすぎないが、底面はほぼ水平である。先端部には径 30cm、深さ 55cm のピットがある。第２カマド：燃焼部底面は奥に向かってやや傾斜しており、火熱を受け赤変している。残存する煙道部の底面は水平で先端部はピット状になっている。

〔その他の施設〕　第１カマドの右側に貯蔵穴状ピットがある。径70cm、床面からの深さは約

16cm である。

〔堆積土〕　大半は消失しているが、住居周辺部に一部一層のみ残存している。

〔出土土器〕　不明である。第 34 号住居内に混入している可能性はあるが区別することはできない。



番号	層位	種類・器形	分類	特徴	登録	残存
1		土師器・坏		外面：ヨコナデ、ヘラケズリ、内面：ヘラミガキ、黒色処理		
2		土師器・坏	B Ⅲ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ヘラミガキ、黒色処理		
3		須恵器・坏	B Ⅱ	外面：口～胴部ロクロナデ、底部回転糸切り、内面：ロクロナデ		¼
4		土師器・甕		外面：ヘラミガキ、内面：ヘラミガキ、黒色処理		¼

第99図　表土及び地点不明なもの

2．土　　壙

検出された土壙は13 基である。出土遺物はどの土壙からもなく年代、性格等は不明である。

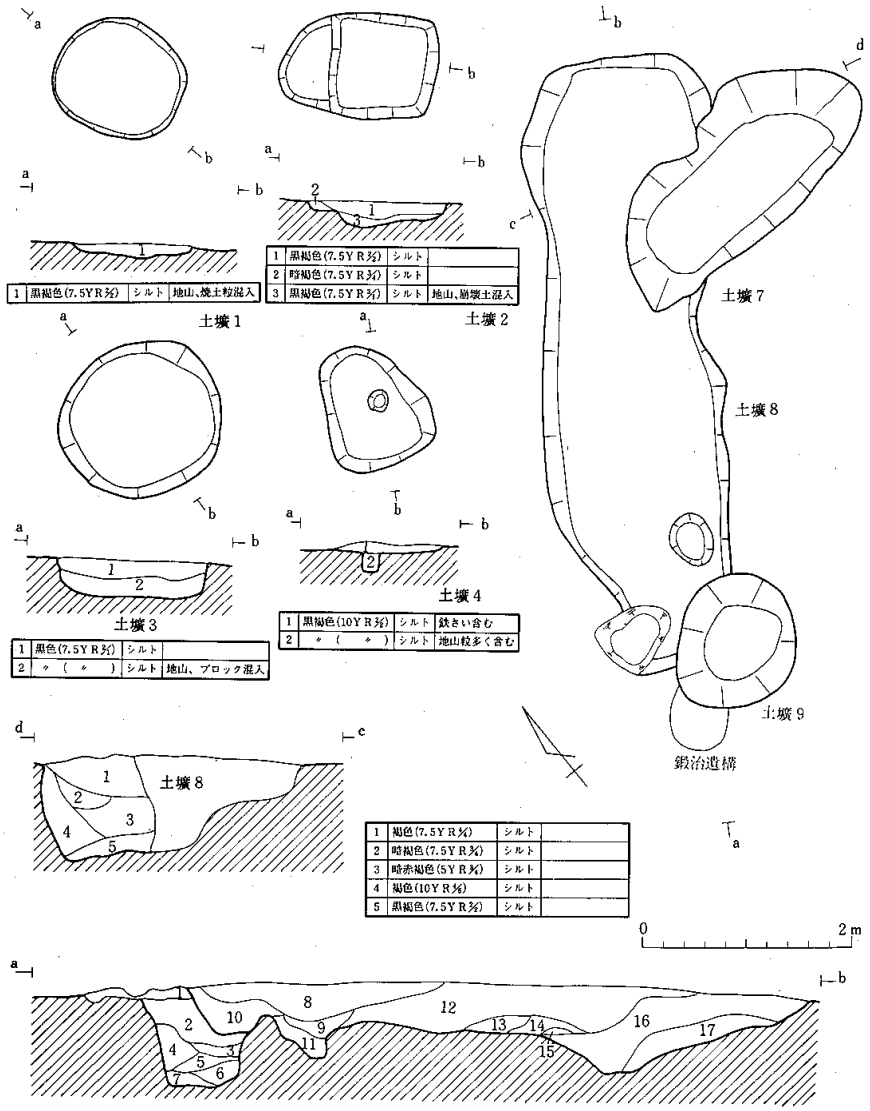
土壙１

径 1.3mの円形を呈する。確認面からの深さは約 15cm と浅い。底面は多少の凹凸があり、浅い舟底状を呈する。周壁の立ち上がりは緩やかである。堆積土は１層のみである。

土壙２

1.5m×1.0mの不整円形を呈する。確認面からの深さは約 30cm である。底面は西側で段がつき舟底状を呈する。周壁の立ち上がりはやや急である。堆積土は３層認められる。自然流入土である。

土壙３



1	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト	地山、焼土粒混入

1	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト	
2	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	
3	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト	地山、崩壊土混入

1	黒色(7.5YR3/1)	シルト	
2	〃 (〃)	シルト	地山、ブロック混入

1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	鉄さい含む
2	〃 (〃)	シルト	地山粒多く含む

1	褐色(7.5YR4/4)	シルト	
2	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	
3	暗赤褐色(5YR3/4)	シルト	
4	褐色(10YR4/4)	シルト	
5	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト	

1	鍛	冶	遺	構
2	暗褐色(10YR3/3)	シルト		土壌9
3	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロック含む	〃
4	明褐色(7.5YR5/6)	シルト		〃
5	極暗褐色(7.5YR2/3)	シルト	地山粒含む	〃
6	橙色(7.5YR6/8)	シルト	地山崩落土	〃
7	明褐色(7.5YR5/6)	シルト		〃
8	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロック多く含む	土壌8
9	〃 (〃)	シルト		〃
10	黒褐色(10YR3/2)	シルト	粒性あり	土壌8
11	〃 (〃)	シルト	地山多く含む	〃
12	極暗褐色(7.5YR2/3)	シルト	地山ブロック状に入る	〃
13	明褐色(7.5YR5/6)	シルト		〃
14	極暗褐色(7.5YR2/3)	シルト		〃
15	褐色(7.5YR4/6)	シルト		〃
16	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト	地山ブロック含む	〃
17	褐色(7.5YR4/6)	シルト		〃

土壌7・8・9

第100図　土　　壙(1)

径 1.6mの円形を呈する。確認面からの深さは約 40cm である。底面は平坦で、周壁の立ち上がりはやや急である。堆積土は２層ある。自然流入土である。

土壙４

1.2m×0.9mの不整円形を呈する。確認面からの深さは約 10cm と浅い。底面は若干の舟底状を呈し、中央部の東寄りに径約 20cm、深さ 35cm の小ピットがある。周壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は１層のみで鉄滓粉が多く含まれている。

土壙５

径 1.4mの円形を呈する。確認面からの深さは約 35cm である。底面には若干凹凸がある。周壁の立ち上がりはやや急である。堆積土は２層あり、自然流入土である。

土壙６

1.7m×1.0mの楕円形を呈する。確認面からの深さは約 40cm である。底面は舟底状を呈し、周壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は５層認められる。自然流入土である。

土壙７

土壙８と重複しており、それより古いものである。2.9m×1.2mの不整楕円形を呈する。確認面からの深さは約１ｍある。底面は若干凹凸がある。周壁の立ち上がりは急である。堆積土は５層認められる。自然流入土である。

土壙８

土壙７、９、鍛治遺構と重複しており、これより新しいものである。6.0m×1.7mの楕円形を呈する。確認面からの深さは約 50～80cm である。底面には凹凸がある。周壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は 10 層認められ、自然流入土である。

土壙９

土壙８、鍛治遺構と重複しており、これより古いものである。径 1.1mの円形を呈する。確認面からの深さは約 80cm ある。底面はほぼ平坦である。周壁の立ち上がりは急である。堆積土は６層認められる。自然流入土である。

土壙 10

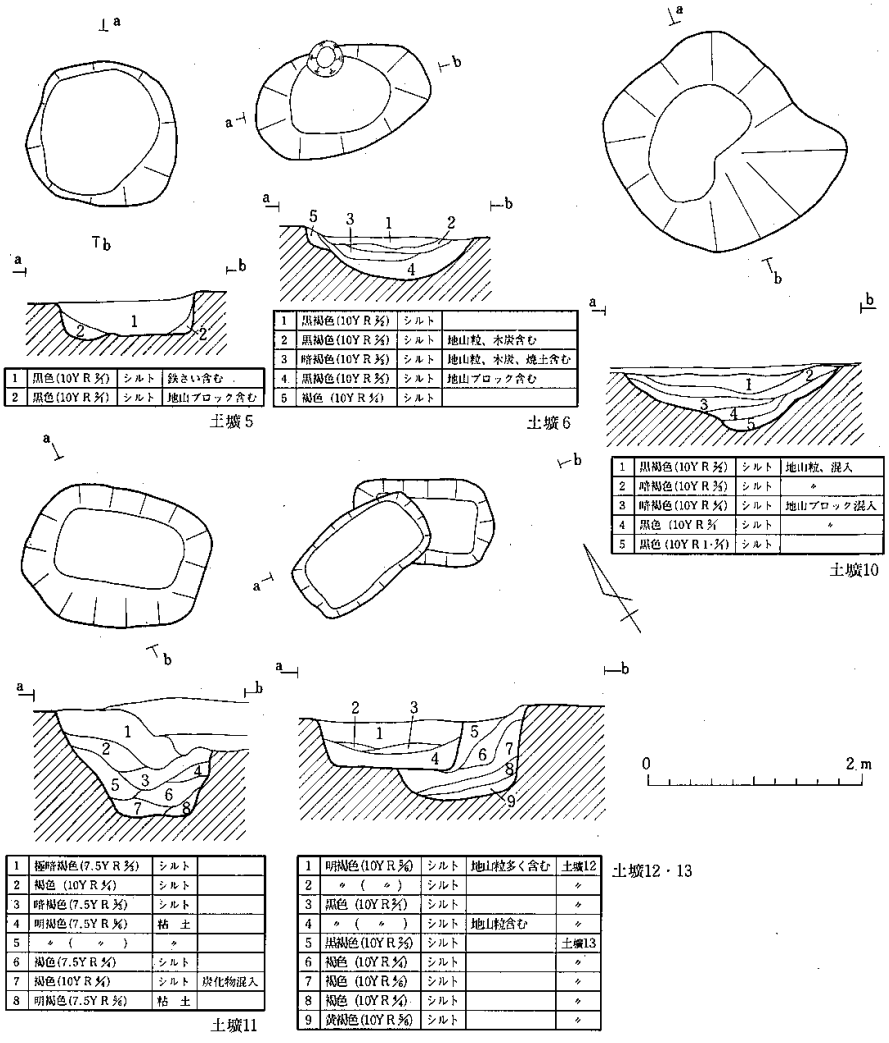
第 22 号住居跡と重複しており、これより古いものである。径 2.2mの不整円形を呈する。確認面からの深さは 50cm ある。底面はすり鉢状を呈する。周壁の立ち上がりは緩やかである。堆積土は５層認められ、自然流入土である。

土壙 11

第 29 号住居跡と重複しており、これより古いものである。1.7m×1.3mの楕円形を呈する。確認面からの深さは１ｍある。底面はほぼ平坦である。周壁の立ち上がりは急である。堆積土は８層認められ、自然流入土である。

土壙 12・13

第 36 号住居跡と重複しており、これより古いものである。さらに土壙 12 は土壙 13 を切って新しいものである。両土壙とも 1.7m×0.8mの楕円形を呈する。確認面からの深さは土壙 13 の方が深く 80cm ある。土壙 12 は 40cm 前後である。周壁の立ち上がりは急である。底面は土壙 12 で平坦であるが、土壙 13 は舟底状を呈する。堆積土は土壙 12 で４層、土壙 13 で５層認められ、自然流入土である。



1	黒色(10Y R 3/1)	シルト	鉄さい含む
2	黒色(10Y R 3/1)	シルト	地山ブロック含む

土壙 5

1	黒褐色(10Y R 3/2)	シルト	
2	黒褐色(10Y R 3/2)	シルト	地山粒、木炭含む
3	暗褐色(10Y R 3/3)	シルト	地山粒、木炭、焼土含む
4	黒褐色(10Y R 3/2)	シルト	地山ブロック含む
5	褐色 (10Y R 4/4)	シルト	

土壙 6

1	黒褐色(10Y R 3/2)	シルト	地山粒、混入
2	暗褐色(10Y R 3/3)	シルト	〃
3	暗褐色(10Y R 3/4)	シルト	地山ブロック混入
4	黒色 (10Y R 3/1)	シルト	〃
5	黒色 (10Y R 1·7/1)	シルト	

土壙10

1	極暗褐色(7.5Y R 3/3)	シルト	
2	褐色 (10Y R 4/4)	シルト	
3	暗褐色(7.5Y R 3/3)	シルト	
4	明褐色(7.5Y R 5/6)	粘 土	
5	〃 (〃)	〃	
6	褐色(7.5Y R 4/4)	シルト	
7	褐色(10Y R 4/4)	シルト	炭化物混入
8	明褐色(7.5Y R 5/6)	粘 土	

土壙11

1	明褐色(10Y R 5/6)	シルト	地山粒多く含む	土壙12
2	〃 (〃)	シルト		〃
3	黒色 (10Y R 2/1)	シルト		〃
4	〃 (〃)	シルト	地山粒含む	〃
5	黒褐色(10Y R 3/3)	シルト		土壙13
6	褐色 (10Y R 4/4)	シルト		〃
7	褐色 (10Y R 4/6)	シルト		〃
8	褐色 (10Y R 4/4)	シルト		〃
9	黄褐色(10Y R 5/6)	シルト		〃

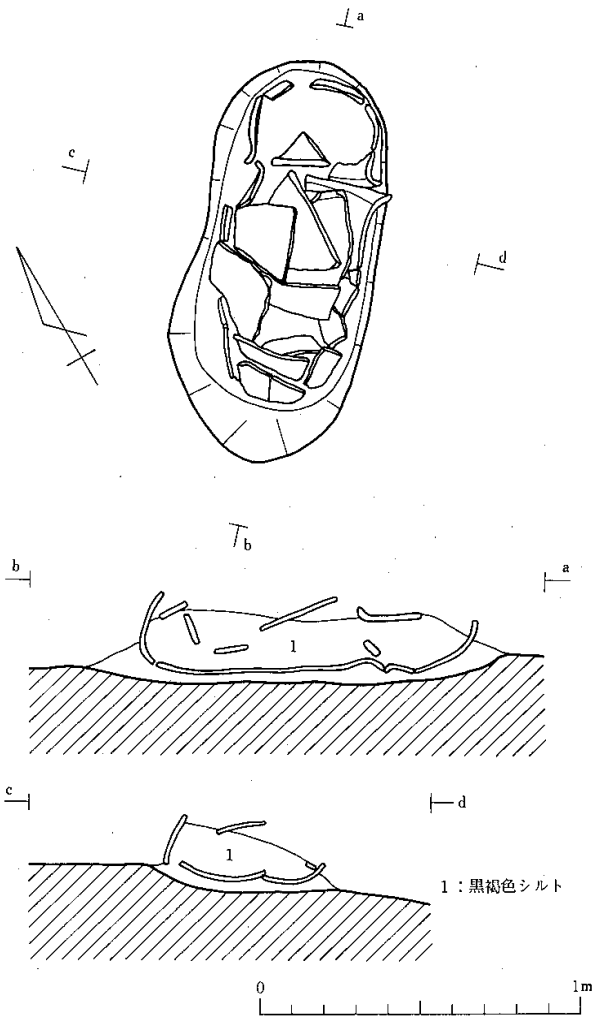
土壙12・13

第101図　土　　壙(2)

３．埋甕を伴う遺構

〔位置・確認〕　調査区中央部からやや北寄りで第 25 住から南西へ約 25ｍ離れた平坦地Ｗ－24、Ｓ－12 地区に単独で位置している。確認は地山面である。

〔平面形・規模等〕　精査の段階で埋甕の周辺を掘り過ぎたため、土壙の周壁、堆積土はほとんど残っていないが 65×28cm の楕円形を呈する。土壙の長軸方向は磁北に対して 42 度東に偏している。周壁は先述したように残存する部分が少ないため立ち上がり等は不明である。底面は浅い皿状を呈し、凹凸はない。堆積土はわずかに黒褐色土の１層のみ検出したのにすぎないが、単層の埋め土の可能性はある。また、周囲にはこの土壙に伴うと考えられる他の遺構等は検出されていない。

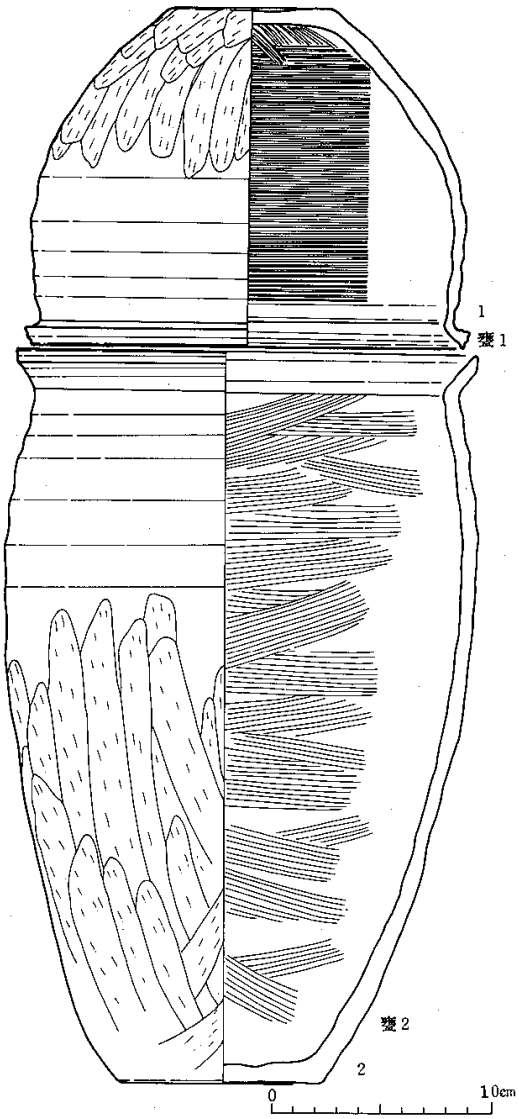


第102図　埋甕を伴う遺構

〔埋甕出土状況〕　２個体の土師器甕が土壙内から出土している。これらの甕は、いずれも土圧によって割れたり、押し潰されたりしているが、攪乱等の痕跡はなく現位置を保っていたものと思われる。２個体の土師器甕は出土状態から土壙の長軸に沿って横位に埋設され、北側の

短胴甕と南側の長胴甕の口縁を合わせており、短胴甕は蓋の役割を有しているようである。これらの甕は口縁部から底部まであり、特に、長胴甕はほぼ完形品である。また、いずれの埋甕中からは遺物は出土していない。

〔出土遺物〕　先述した合口埋甕２点のみである。いずれも製作にロクロを使用している。甕１：口径21cm底径８cm、器高14.5cmで口径に対して器高が小さい短胴の甕である。胴部は丸味をもって立ち上がり、口縁部は強く外反し短かい。端部は上方に突き出している。胴外面下半部はロクロナデの後、手持ちヘラケズリの調整が加えられ、内面は回転による刷毛目、底部付近では刷毛目の調整が加えられている。甕２:口径21cm、底径9.5m、器高34cmで口径に対して器高が大きい長胴の甕である。胴部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁部は外反し、端部は丸くおさまる。胴外面下半部はロクロナデの後、手持ちヘラケズリ、内面はナデの調整が各々加えられている。

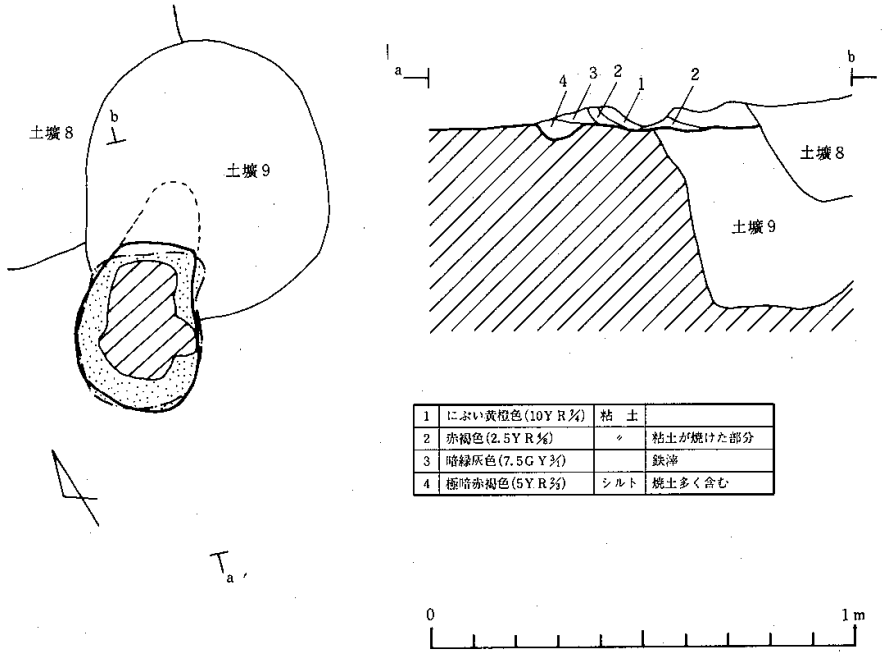


1．土師器甕　外面:ロクロナデ、ヘラケズリ、内面:回転刷毛目
2．　〃　　外面:ロクロナデ、ヘラケズリ、内面:ナデ

第103図　埋　甕

4．鍛 冶 遺 構

土壙８、９と重複している。土壙８に切られ、土壙９を切っている。北側は土壙８に切られ残存しないが、約1.1×0.6mの楕円形の掘り込みに、確認面から約10cmにわたり粘土をつめ込み炉底にしている。中央部は凹状にくぼみ、その凹部に鉄滓の塊が付着している。その周辺部の粘土は火熱を受け赤変している。また、周囲には鉄滓粒等が散在している。



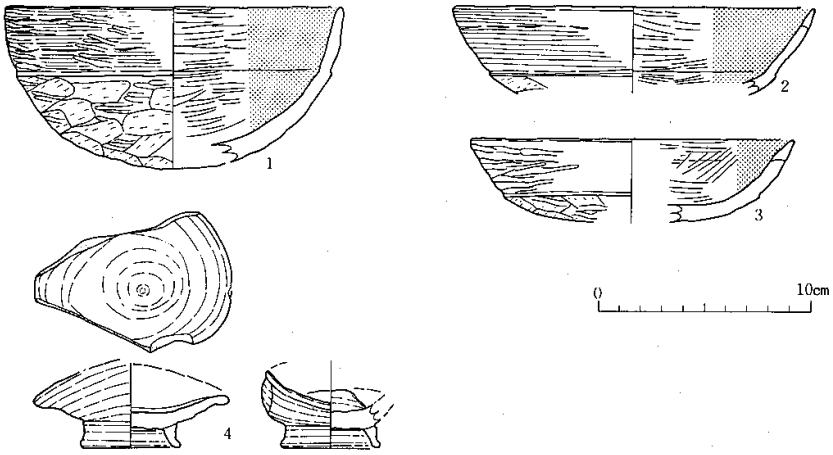
1	にぶい黄橙色(10YR7/4)	粘　土	
2	赤褐色(2.5YR4/6)	〃	粘土が焼けた部分
3	暗緑灰色(7.5GY3/1)		鉄滓
4	極暗赤褐色(5YR2/3)	シルト	焼土多く含む

第104図　鍛冶遺構

5．溝と出土土器

溝はいずれも住居跡を切っており、少なくとも平安時代以降のものである。南北方向に走るもの、東西方向に走るものとがある。南北方向に走る溝で溝１、３、６、７はほぼ真北に沿っている。出土遺物も少なく年代、性格等には不明な点が多い。

出土土器として土師器坏が溝９から２点、溝６から１点、須恵器耳皿が溝１から１点出土しているにすぎない。土師器坏はいずれもロクロ不使用のもので第Ⅰ群土器に含まれるものである。



番号	層地点	種類・器形	分類	特徴	登録	残存
1	溝6	土師器・坏		外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ、ミガキ　内面：ヘラミガキ、黒色処理	6M－1	½
2	溝9	土師器・坏		外面：ヨコナデ、ヘラケズリ　内面：ヘラミガキ、黒色処理	9M－1	一部
3	溝9	土師器・坏		外面：ヘラミガキ、ヘラケズリ　内面：ヘラミガキ、黒色処理	9M－2	一部
4	溝1	須恵器・耳皿		内・外面：ロクロナデ	1M－1	½

第105図　溝出土土器

Ⅳ. 調査南区の堆積層と縄文土器

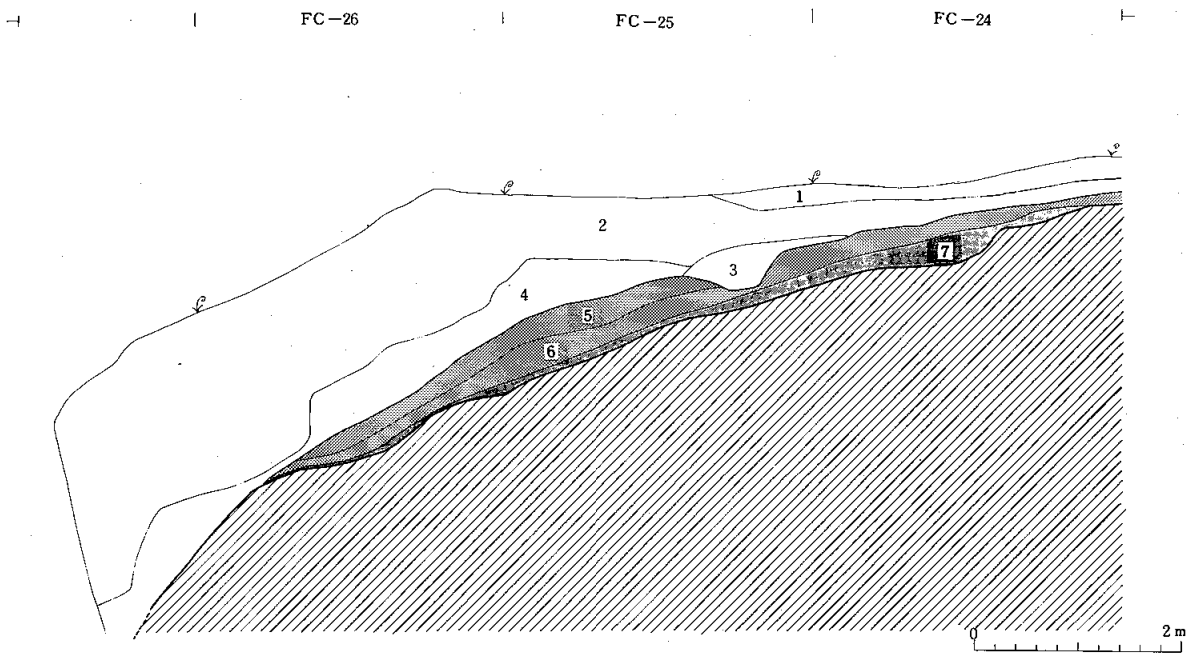
1．堆積層の状況

遺跡は先述したように丘陵の平坦地及び緩斜面に立地している。調査区内の地山面は南東方向に向かって緩やかに傾斜しており、さらに、南端付近では緩やかに傾斜してきた斜面が急に落ち込み低地と接する。この斜面付近では東側から沢が入り込み、凹状になっている。そして、東側に傾く斜面に遺物を含む層が堆積していた。

しかし、調査時点では斜面の大半は削平のため消失しており、斜面の上端付近のみが残存しているにすぎない。範囲は東側で不明であるが、南北約18mに亘っていたことが知られる。

層は表土から地山まで基本的に３枚の層が認められ、斜面の地山に沿って堆積し、下方にいくにしたがって幾分厚くなるようである。以下、各層毎に説明していく。

第Ⅰ層：黒褐色、暗褐色、明黄褐色土層である。この層は現表土、盛土、旧表土層からなり、斜面の下方には盛土が厚く堆積している。旧表土は斜面の上方にはなく下方で部分的に堆積しているにすぎない。出土遺物は縄文時代から現代に至るものが不規則な状態で発見された。いずれも小破片である。極めて不安定な層である。



No 1	土　　色	土　性	
1	褐色(10YR4/4)	砂質シルト	表土、耕作土
2	明黄褐色(10YR7/6)	砂	盛　土
3	暗褐色(7.5YR3/3)	シ　ル　ト	旧表土Ⅰ層
4	極暗褐色(7.5YR2/3)	シ　ル　ト	〃
5	黒色(10YR2/1)	シ　ル　ト	Ⅱ　層
6	黒褐色(10YR2/2)	シ　ル　ト	〃
7	暗褐色(10YR3/4)	砂質シルト	Ⅲ　層

第106図　調査南区堆積層の断面図

第Ⅱ層：黒色あるいは黒褐色土層である。２枚の層に細分される。斜面の中間部付近が最も厚く、約 50cm ある。斜面の上方で一部途切れるが、ほぼ連続する。この層は上からの攪乱が一部入っているが、ほぼ安定している。層中からは縄文土器と石器類が出土している。縄文土器は後に述べるが、縄文時代中期前～中葉の土器であり、他の時期の土器の混入はほとんどないため、限られた時期に形成された層といえる。しかし、その出土状態は層理面に対して規則的に存在しているわけでなく、任意な角度で出土しており、大半は破片である。しかも、層中にはあまり炭化物の含有物がなく、良好な遺物包含層とはいえない。

第Ⅲ層：暗褐色土層である。第Ⅱ層の下、地山上に堆積している層である。層の厚さは約 20cm で斜面の上方で一部途切れるが、連続する。攪乱はなく安定した層である。層中からの出土遺物、出土状態等は第Ⅱ層と同様なことがいえる。

以上、堆積層の状況について述べたが、まとめると次のようになる。主に縄文土器を含む層は第Ⅱ、Ⅲ層である。分布する範囲は東側を中心とした部分は削平され、不明な点が多く、全体の拡がりはつかめない。第Ⅱ、Ⅲ層は傾斜する地山面に沿って堆積しており、攪乱はほとんどなく、ほぼ現状を留めていると考えられる。しかも、出土する土器は全て縄文土器であり、その中でも後述するが縄文時代中期前、中葉頃のものでそれより新しい、あるいは古い土器は出土していない（第Ⅱ層から弥生時代後期の土器片 1 点が混入している）。このことから、限られた時期に形成された層といえる。その時期は後述する縄文土器の時期である。しかし、その出土状態をみると良好な遺物包含層とはいえない。つまり、層理面に対して任意な角度で出土しており、第Ⅱ、Ⅲ層の中で多少、土器の移動が推定されるからである。

２．縄文土器の特徴と分類

堆積土第Ⅰ～Ⅲ層から平箱にして３箱位の縄文土器が出土した。その中で第Ⅲ層出土のが多い。これら土器の大半は口縁、胴部破片で全体の器形、文様構成等が窺えるのは少ない。

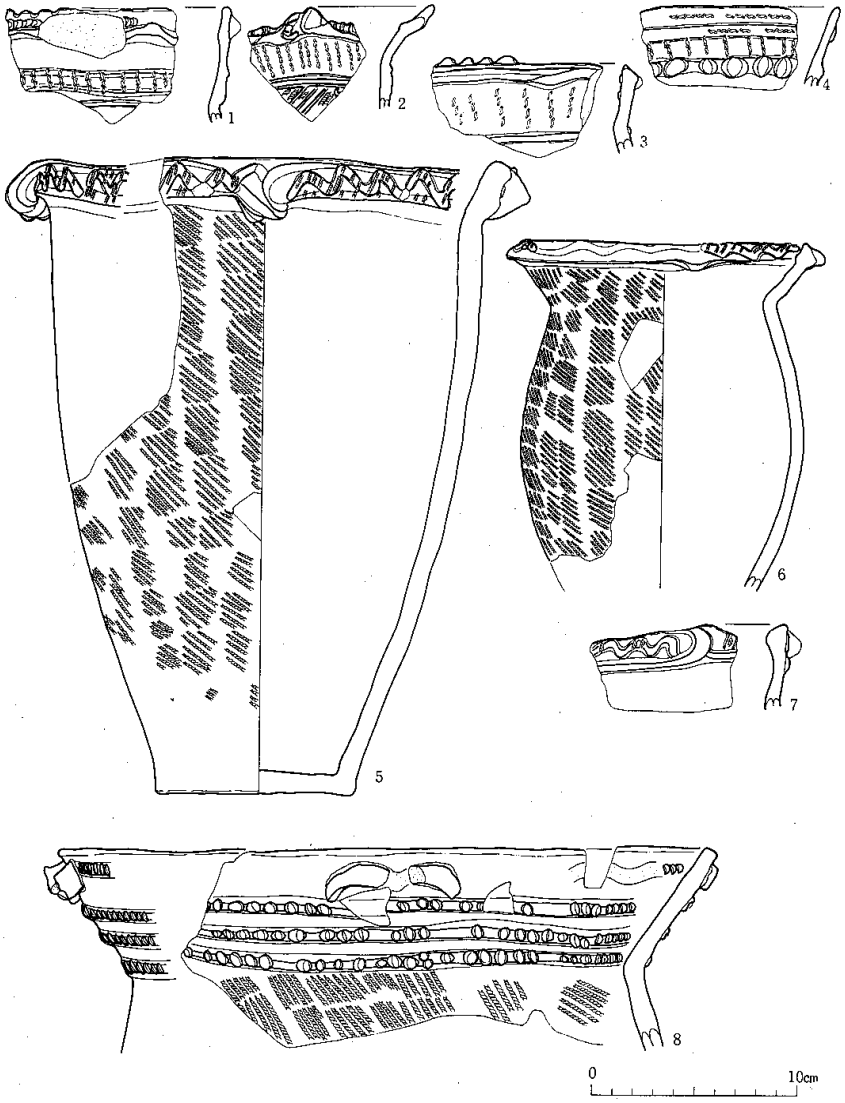
したがって、ここでは文様表現技法が特徴的な口縁部資料を取り上げ分類を試みる。器形的には深鉢形土器、浅鉢形土器があり、前者の方が多い。以下、器形毎にその特徴について述べ分類していく。

＜深鉢形土器＞

第１類：肥厚した口唇部、または頚部に連続した縦位の押圧縄文が施文されている。頚部に押圧縄文が施文されるのは第 107 図２、５である。外傾あるいはやや内弯気味の深鉢である。本類

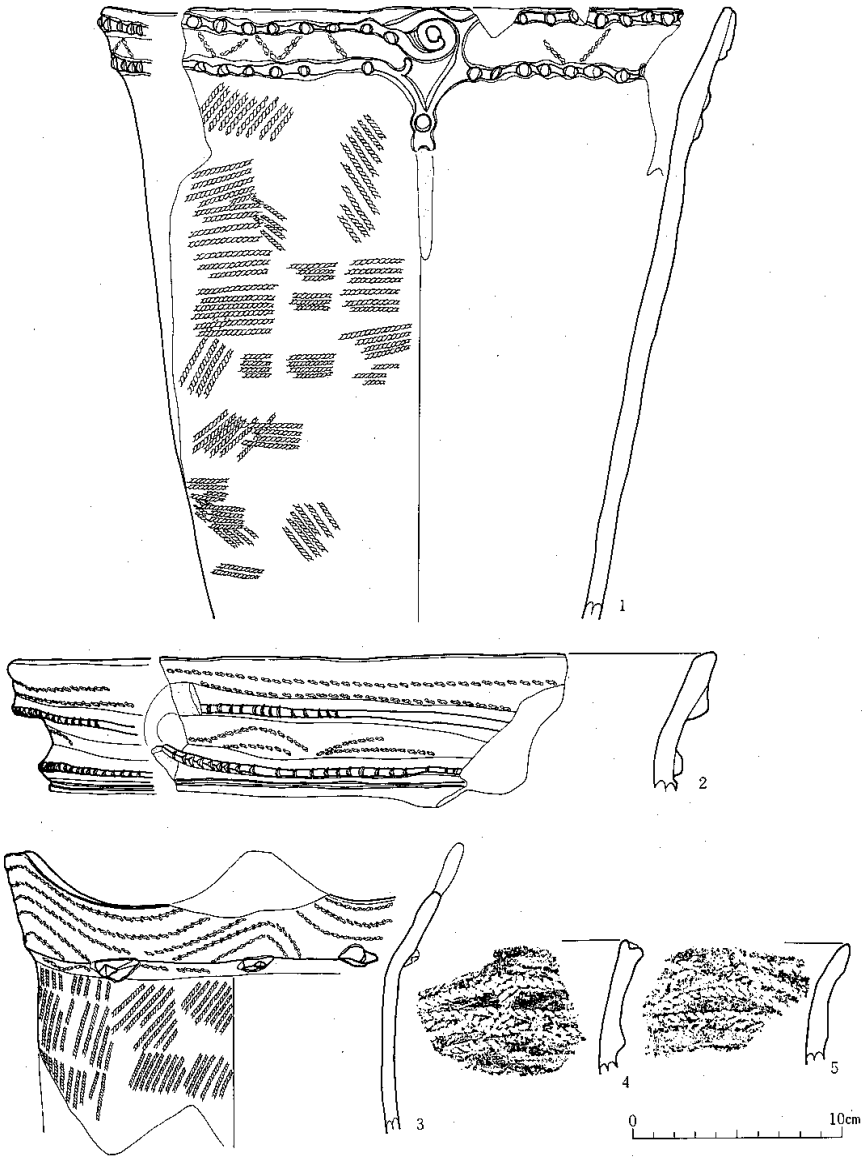
No	地点・層	分類	特徴
1	ET−23.24 3層	深鉢1a類	口縁部：押圧縄文（縦位）波状の粘土紐貼付、刻目、隆線による突起
2	ER−23 3層	〃 1a類	口唇部：波状の粘土紐貼付、縄文（LR）頸部：押圧縄文（縦位）胴部：縄文（LR）
3	FA−26 2層	〃 1a類	口唇部：押圧縄文（縦位）波状の粘土紐貼付、刻目、胴部：縄文（LR）
4	FC−23 〃	〃 1a類	口唇部：押圧縄文、波状の粘土紐貼付、刻目、胴部：縄文（LR）
5	FC−24 3層	〃 1a類	口唇部：波状の粘土紐貼付、突起、頸部：押圧縄文（縦位）胴部：縄文（LR）
6	FA−23 〃	〃 1a類	口唇部：波状の粘土紐貼付、頸部：押圧縄文
7	ES−22 1層	〃 1a類	口縁部：押圧縄文（縦位）波状の粘土紐貼付、縄文（LR）
8	FC−22 〃	〃 1a類	口縁部：押圧縄文（縦位）波状の粘土紐貼付
9	ET−24 3層	〃 1a類	口唇部：波状の粘土紐貼付、刻目、隆線による突起、頸部：押圧縄文（縦位）
10	〃 〃	〃 1a類	口唇部：波状の粘土紐貼付、縄文（LR）頸部：押圧縄文（縦位）
11	ES−23 〃	〃 1a類	口唇部：波状の粘土紐貼付、頸部：押圧縄文（縦位）
12	〃 1層	〃 1a類	口縁部：波状の粘土紐、隆線による橋状把手、押圧縄文（縦位）
13	ET−23 3層	〃 1a類	口唇部：粘土紐剝落、押圧縄文（縦位）隆線による「χ」状突起
14	FC−25 〃	〃 1b類	口唇部：角押文、隆線による突起、押圧縄文（縦位）胴部：粘土紐、縄文（LR）
15	〃 〃	〃 1b類	口唇部：角押文、隆線による突起、押圧縄文（縦位）粘土紐貼付

第107図　縄文土器(1)



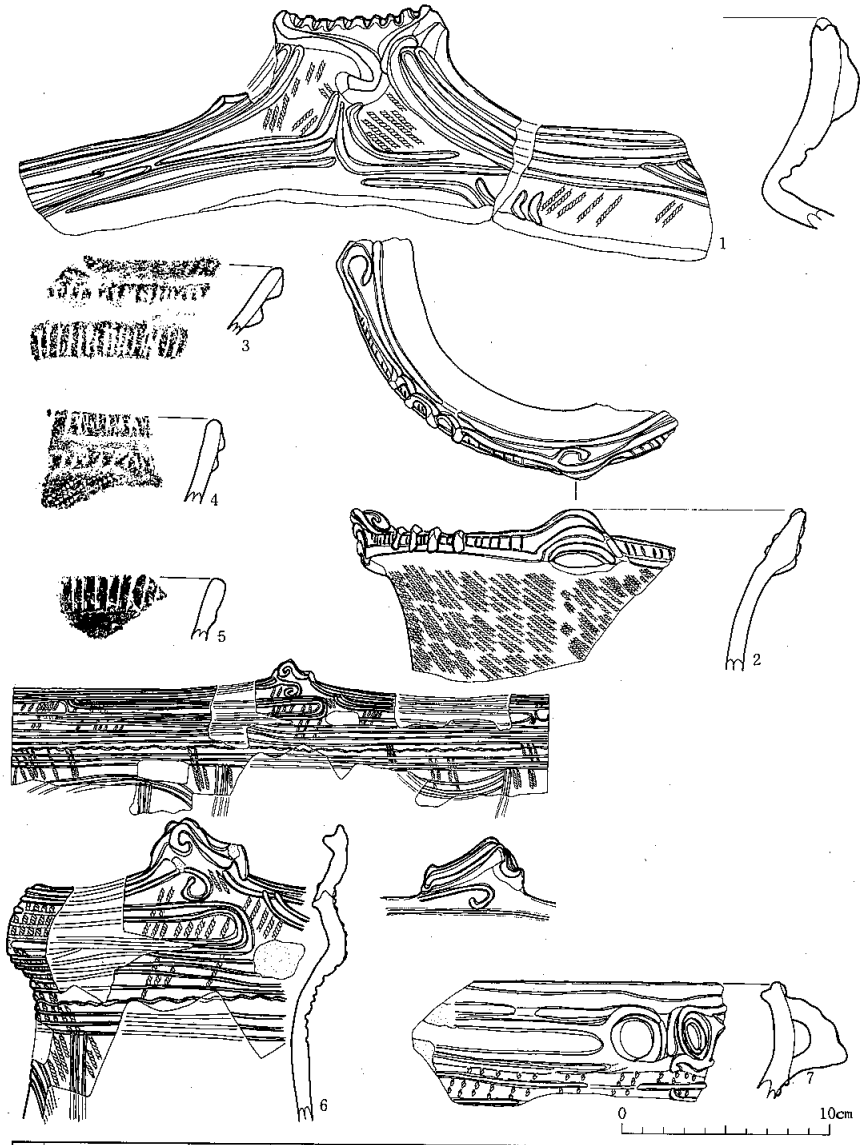
No	地点・層	分類	特徴
1	FC－25　2層	深鉢1b類	口唇部：瓜形文、粘土紐貼付、端部：刻目、頸部：押圧縄文(縦位)
2	〃　〃	深鉢1b類	口唇部：瓜形文、端部：刻目、小突起、頸部：押圧縄文(縦位)胴部：横位沈線、縄文(LR)
3	FC－23　〃	深鉢1c類	口唇部：粘土紐、端部：小突起、頸部：押圧縄文(縦位)
4	ES－24　3層	深鉢1d類	口縁部：横位押圧縄文、縦位押圧縄文、円形の刺突文
5	ES－23　〃	深鉢2類	口唇部：波状の粘土紐貼付、縄文(LR)、隆線により突起、胴部：縄文(LR)
6	ES－24　〃	深鉢2類	口唇部：波状の粘土紐貼付、縄文(LR)、隆線による突起、胴部：縄文(LR)
7	〃　〃	深鉢2類	口唇部：波状の粘土紐貼付、隆線、胴部：無文
8	FC－24　〃	深鉢3類	口縁部：横位粘土紐、円形刺突文、「∞」状の突起、胴部：縄文(LR)

第108図　縄文土器(2)



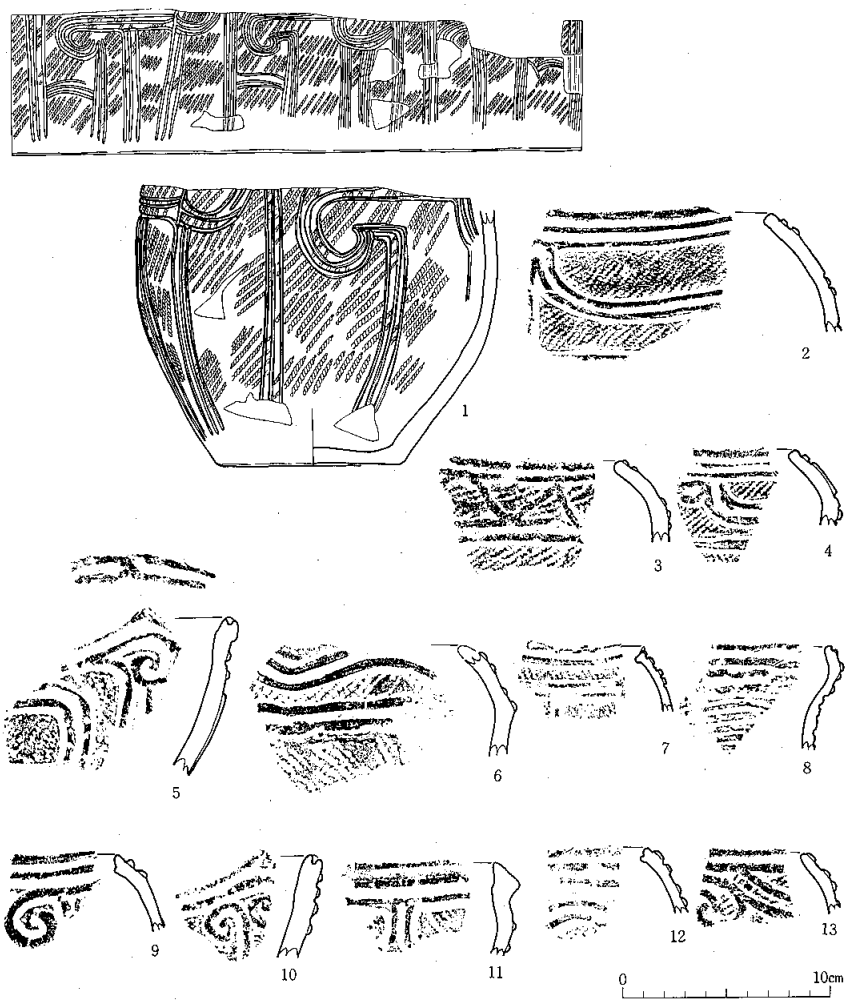
No	地点・層	分類	特徴
1	ＦＢ－26　3層	深鉢３類	口縁部：粘土紐、貼付、円形刺突文、波状の押圧縄文、胴部：縄文（ＬＲ）
2	ＥＳ－23　〃	深鉢４ｂ類	口縁部：横位、波状の押圧縄文、隆線上に瓜形文、桙状把手
3	ＦＡ－25　〃	深鉢４ａ類	口縁部：波状の押圧縄文、小突起、胴部：縄文（ＬＲ）
4	ＦＢ－25　〃	深鉢４ａ類	口縁部：波状の押圧縄文
5	ＦＢ－26　〃	深鉢４ａ類	口縁部：波状の押圧縄文

第109図　縄文土器(3)



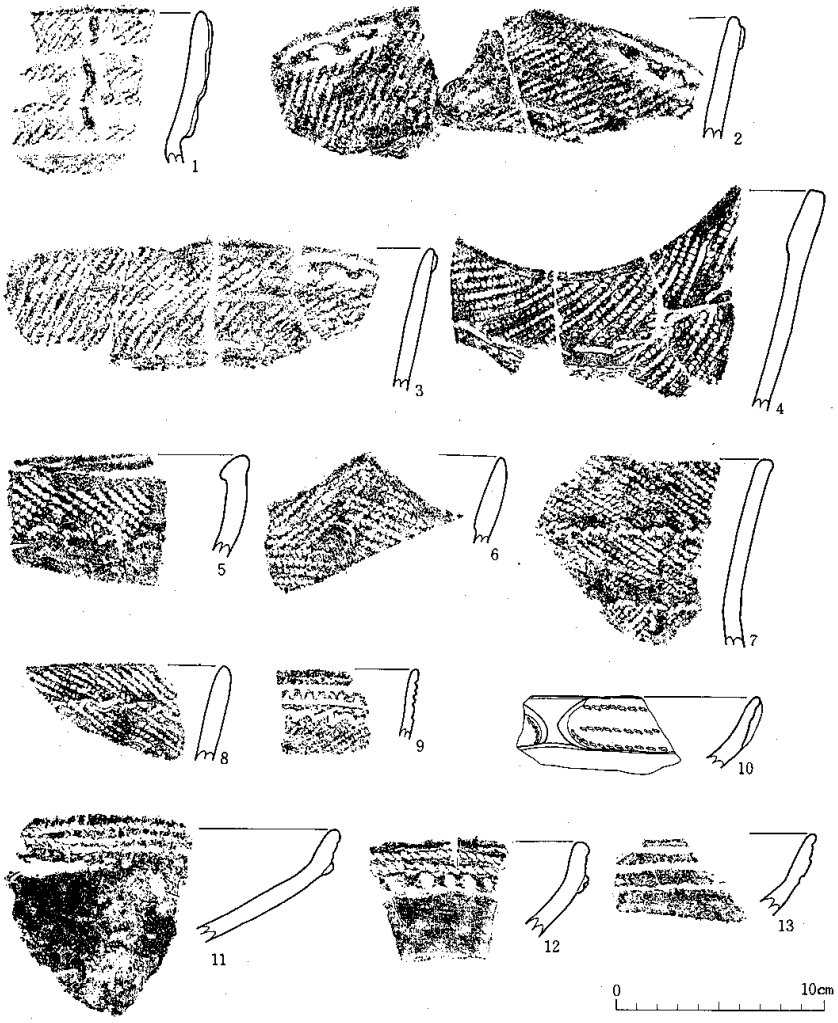
No	地点・層	分類	特徴
1	FC−24 3層	深鉢6類	口縁部：沈線文、縄文(LR)、大波状、端部、刻目、隆線による突起
2	FA−26 2層	深鉢5b類	口唇部：粘土紐貼付、刻目、隆線による突起、胴部：縄文(LR)
3	ES−24 3層	深鉢5a類	口縁部：隆線、刻目
4	〃 〃	深鉢5a類	〃
5	FB−25 〃	深鉢5a類	〃
6	ET−24 〃	深鉢7類	口縁部：粘土紐、渦巻、曲線的に展開　胴部：沈線文、波状、横位、縦位に展開、縄文(LR)
7	〃 〃	深鉢7類	口縁部：粘土紐貼付、隆線による模状抱毛　胴部：複節縄文(LRL)

第110図　縄文土器(4)



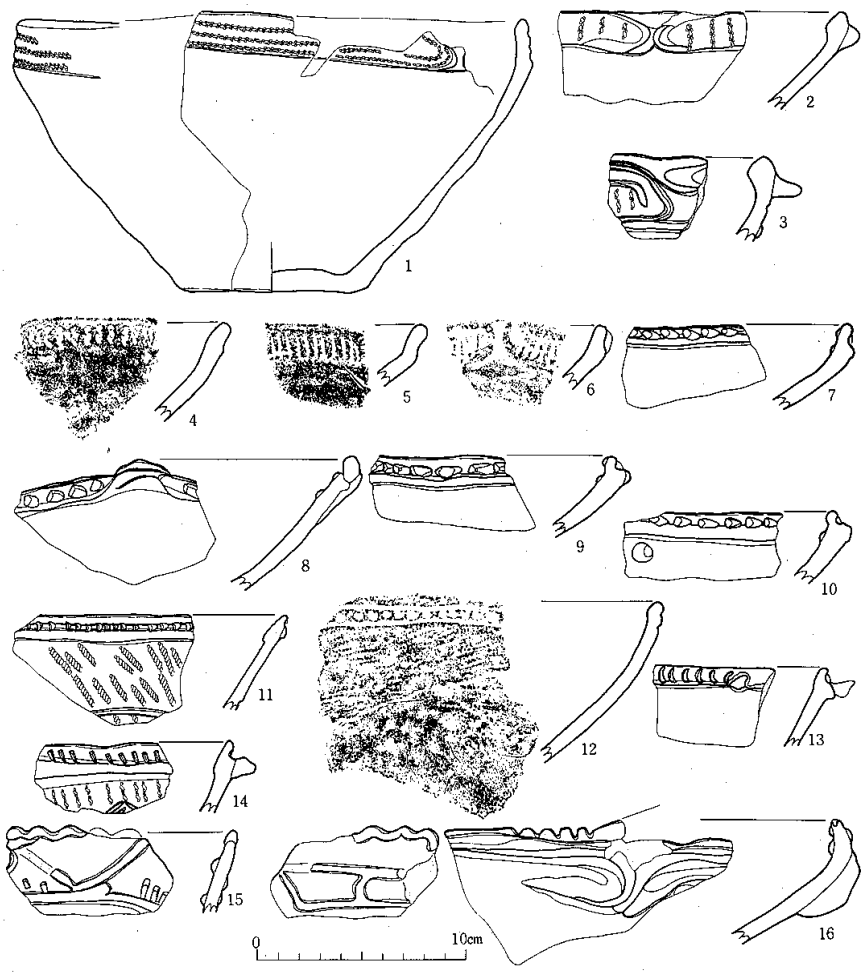
No	地点・層	分類	特徴
1	ES−23 3層	深鉢7,8類	胴部：縄文（LR）、沈線曲折状に展開
2	FC−25 〃	深鉢8類	口縁部：隆沈文、横位、曲線的に展開
3	FC−24 〃	〃 7類	口縁部：粘土紐貼付、波状に展開
4	FB−26 2層	〃 8類	口縁部：隆沈文、渦巻状に展開
5	FB−25 〃	〃 8類	口縁部：波状、隆沈文、渦巻状に展開
6	FR−24 3層	〃 8類	口縁部：端部欠損、隆沈文、波状に展開
7	FC−23 不明	〃 8類	口縁部：隆沈文、端部に小突起
8	FA−24 2層	〃 7類	口縁部：粘土紐貼り付け、胴部：沈線文
9	FC−25 3層	〃 7類	口縁部：粘土紐貼り付け、渦巻状に展開
10	FB−26 〃	〃 8類	口縁部：隆沈文、渦巻状に展開
11	FC−25 2層	〃 8類	口縁部：隆線、隆沈文
12	〃 〃	〃 8類	口縁部：隆沈文、曲線的に展開
13	〃 〃	〃 7類	口縁部：粘土紐、渦巻状に展開

第111図　縄文土器(5)



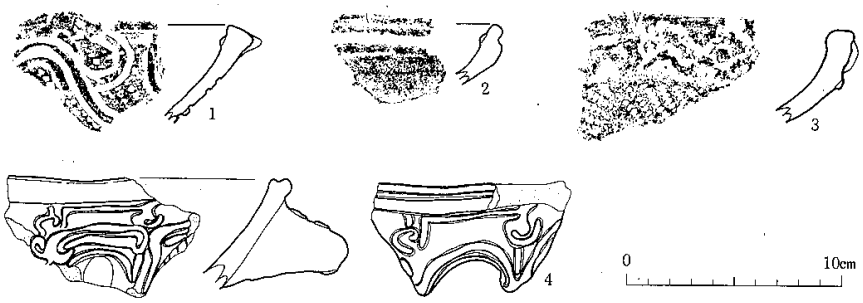
No	地点・層	分類	特徴
1	ER−22 1層	深鉢9類	口縁部：縄文（LR）粘土紐縦位に貼付
2	ES−24 3層	〃 9類	口縁部：縄文（LR）粘土紐横位に貼付
3	〃 〃	〃 9類	〃
4	〃 〃	〃 10類	口縁部：大波状縄文（LR）横位の結節文
5	ET−25 〃	〃 10類	口縁部：縄文（LR）横位の結節文
6	ES−23 2層	〃 10類	口縁部：波状、縄文（LR）横位の結節文
7	FC−25 〃	〃 10類	口縁部：縄文（LR）横位の結節文
8	FC−26 〃	〃 10類	〃
9	FB−28 3層	〃 11類	口縁部：連続交互刺突文、波状の沈線文
10	FB−26 〃	浅鉢1類	口縁部：横位の押圧縄文、隆線
11	ES−23 〃	〃 1類	〃
12	FB−24 1層	〃 1類	口縁部：横位の押圧縄文、円形の刷突文
13	FA−26 2層	〃 1類	口縁部：横位の押圧縄文

第112図　縄文土器(6)



No	地点・層	分類	特徴
1	FB−26 3層	浅鉢 1 類	口縁部：横位の押圧縄文、隆線、胴部：無文
2	FB−24 2層	浅鉢 2 類	口縁部：縦位の押圧縄文、隆線、胴部：無文
3	FC−23 〃	浅鉢 2 類	口縁部：縦位の押圧縄文、隆線による突起
4	FC−25 3層	浅鉢 2 類	口縁部：縦位の押圧縄文
5	FC−24 〃	浅鉢 2 類	〃
6	FC−26 2層	浅鉢 2 類	口縁部：縦位の押圧縄文、隆線
7	ES−23 1層	浅鉢 3 類	口　部：角押文、隆線
8	ET−24 3層	浅鉢 3 類	口　部：角押文、隆線による突起
9	ES−23 3層	浅鉢 3 類	口　部：角押文、隆線
10	FT−24 2層	浅鉢 3 類	口唇部：角押文、隆線
11	FC−24 3層	浅鉢 3 類	口　部：瓜形文、粘土紐、胴部：縄文（RC）
12	FB−26 3層	浅鉢 3 類	口唇部：円形刺突文、沈線文、胴部：縄文（LR）
13	ES−25 2層	浅鉢 3 類	口唇部：瓜形文、隆線による突起
14	FC−25 2層	浅鉢 3 類	口唇部：瓜形文、縦位の押圧縄文、隆線による突起
15	FB−26 3層	浅鉢 5 a類	口縁部：粘土紐貼付、端部、小波状
16	ES−23 〃 〃	浅鉢 4 類	口　部：隆線による突起、端部、刻目

第113図　縄文土器(7)



No	地点・層	分類	特徴
1	ET−24 3層	浅鉢5c類	口縁部：粘土紐、波状に貼付、隆沈文
2	〃 2層	浅鉢5b類	口縁部：隆沈文
3	FB−26 3層	浅鉢5b類	口縁部：粘土紐貼付、波状に展開、横位の押圧縄文
4	FC−25 2層	突起	隆線による突起、粘土紐波状に貼付

第114図　縄文土器(8)

は押圧縄文と組み合う文様によってさらに細分される。

ａ：口唇部に粘土紐を波状に貼付したもので押圧縄文は粘土紐の下方に施文された。波状の粘土紐上には縄文が施文されるものと縦位の刻目が施文されるもの、また、そのままのものとがある。大半は平縁を呈するが、中に第 107 図１、12 のように波状を呈するのもある。また、口縁部には隆線による突起が付くのもある。

ｂ：口唇部に連続した角押文、瓜形文が施文されているものである。いずれも隆線による突起が付く。口縁部は平縁である。第 108 図１の口縁端部には連続した刻目が入っている。

ｃ：口縁端部に連続した小突起が付くものである。口縁上方には粘土紐による隆線が横位に貼り付けられている。

ｄ：口縁上方に横位の押庄縄文が施文されるもので、下方には隆線があり、連続した円形の刺突文が配されている。

第２類：肥厚した口唇部に粘土紐を波状に貼り付け、その上に縄文が施文されているもの。口縁部は全て外傾する。特に第 108 図６は頚部がすぼまり胴部が張り出す器形に対して第 108 図５の胴部は張らず、ほぼ直線的に外傾する。口縁部にはいずれも隆線による突起が付く。第 108 図５の突起は４個である。また、胴部は地文の縄文（ＬＲ）のみが施文される。７は無文になっている。

第３類：口縁部に粘土紐を貼り付け、その上に円形の刺突文が施されるものである。口縁部は平縁で外傾するが、第108図８の頚部は強く屈曲して口縁部は大きく外傾する。刺突文のある粘土紐は横位に４本施文され、口縁部上方に「∽」状の突起が付く。第109図１は前者に比して口

縁部の外傾具合は弱い。しかも、胴部はほぼ直線的である。口縁部の粘土紐は横位に 2 本施文され、その間には押圧縄文が連続する山形状に施文されている。また、粘土紐は途中渦巻状になり、「Y」状に垂下する。胴部は両者とも地文の縄文（ＬＲ）のみが施文される。第 109 図１の場合は多方向から施文されている。

第４類：肥厚した口縁部に横位の押圧縄文が施文されるものである。口縁部は外傾する。大波状を呈するもの、平縁のものとがある。
ａ：押圧縄文が波状に施文されるものである。口縁部は大波状を呈する。第 109 図３の頚部には小突起が配され、胴部には地文の縄文（ＬＲ）のみが施文されている。
ｂ：押圧縄文が波状と直線状の両者を併用して施文されているものである。横位の隆線上には連続した瓜形文が施され、また、橋状把手がつく。

第５類：肥厚した口唇部に連続した縦位の刻目が施文されるものである。口縁部は外傾し、波状を呈する。
ａ：隆線上に刻目が施文されるもので、隆線は１段のもの、２段のものとがある。前者の刻目は長い。
ｂ：粘土紐を貼り付けてつくられた区画内に刻目が施文されるものである。隆線による突起が付く。胴部は地文の縄文（ＬＲ）のみが施文されている。

第６類：口縁部に幅の広い沈線文が横、斜位に施文されるものである。口縁部は大波状を呈し内弯気味になり、頚部で強く屈曲する。波状に高くなった端部には連続した刻目が施され、小突起状を呈する。さらに端部から下方に隆線が「J」状に付く。沈線文は波状になった口縁部に沿って展開し、頚部にまで及んでいる。

第７類：口縁部に粘土紐が横、縦、斜位に貼付され、その後、調整されないまま波状、山形状、渦巻状に展開する。口縁部は内弯する。第 111 図６の口縁部には突起が１個付く。頚部から胴部には沈線文が横、縦、斜位に展開し、横位の沈線文の中には波状に巡るのもある。

第８類：口縁部に第７類と同様、粘土紐が貼り付けられるが、その後、両側を沈線状に調整した隆沈文が施文される。口縁部は内弯する。中に波状を呈するのもある。隆沈文は横、曲折状、渦巻状に展開し、第 110 図７には隆線による橋状の把手が付く。
　また、第 110 図１は口縁部に欠け、正確には判断できないが、第７、８類に入るものである。

胴部から底部まで残存しているもので胴部には沈線文が縦、横位に施文されている。縦位の沈線文の中には曲折状に展開するのがあり、また、横位の沈線文は孤状になっている。

第９類：口縁部に太い粘土紐を貼り付け、その上を連続的に押圧している。その結果、粘土紐には連続する凹凸がある。口縁部は平縁で外傾するが、第 112 図１はやや内弯気味である。凹凸のある粘土紐は縦位に施文されるものと横位に施文されるものとがある。

第 10 類：口縁部に横位の結節文が施文されるものである。口縁部は外傾するのが大半であるが中に内弯気味のもある。また、口縁部は平線のものと波状のものとがあり、特に第 112 図４は大波状を呈し、口縁部は肥厚している。

第 11 類：口唇部に連続した交互刺突文が横位に施文され、その下に沈線文が波状に施されている。口縁部は外傾する。

＜浅鉢形土器＞

第１類：口唇部に押圧縄文が横位に施文されるものである。口縁部は直立気味に立ち上がる浅鉢である。押圧縄文は隆線による区画内に施文される。第 112 図 12 の隆線上には連続した円形の刺突文が施されている。胴部はいずれも無文になっている。

第２類：口唇部に連続した縦位の押圧縄文が施文されているものである。口縁部が直立気味に立ち上がる浅鉢である。押圧縄文は隆線による区画内に施文される。隆線は顕著なものとそうでないものとがあり、前者の場合の結合部は明瞭な「χ」状になり、しかも、第１類の区画では平坦であるのに対して盛り上がっている。さらに、第 113 図３の隆線は外方に張り出している。

第３類：口唇部に連続する角押文、円形の刺突文、瓜形文が施文されるものである。口縁部は内弯気味、直立気味、外傾するのがあり、刺突文等は隆線間に施文されるのが大半であるが、第 113 図 12 は沈線間に施文される。また、第 113 図８には突起が付く。第 113 図 11、12 以外、胴部は無文である。

第４類：口縁端部に連続する刻目が施されるものである。口縁部は波状を呈し、内弯気味である。口縁部は無文で隆線による突起がある。

第５類：口縁部に粘土紐を貼付したものである。口縁部は内弯気味、直立気味、外傾するのとがある。
ａ：口縁部は無文になり、粘土紐は横位、山形状に施文され、方形の刺突文が不規則に配される。口縁端部にはさらに、粘土紐を貼り付け、小波状を呈するようにしている。また、内面にも粘土紐が貼付される。
ｂ：口縁部に粘土紐を波状に貼り付け、さらに上方には押圧縄文が波状に施文されている。口縁部は波状を呈する。胴部には地文の縄文（ＬＲ）が施されている。
ｃ：口縁部に貼付されている粘土紐の両側を調整した隆沈文が波状に展開し、胴部にまで及ぶ。地山には縄文（ＬＲ）が施されている。
また、第 114 図４は浅鉢形土器の突起部である。突起の上面には粘土紐が渦巻状に展開している。さらに、口縁端部には幅の広い沈線が１本走っている。

３．縄文土器の編年的位置

前項で主に文様表現技法の特徴により、深鉢形土器は 11 類、浅鉢形土器は５類まで分類された。ここでは、これら縄文土器の編年的考察を試みたい。深鉢形土器についてみると、連続する縦位、横位の押圧縄文が施文されるもの、波状の粘土紐を貼り付け、上に縄文が施文されるもの、粘土紐を貼り付け、その上に円形の刺突文が配されるもの、連続した縦位の刻目が施文されるもの、幅の広い沈線文が施文されるもの、粘土紐を渦巻状等に展開させるもの、隆沈文が曲折状等に展開するものと様々な文様の特徴がある。このような特徴をもつ縄文土器は縄文時代中期の大木 7b 式期から大木 8a 式期の土器と考えられる。しかし、上述したような文様表現技法は大木 7b 式、大木 8a 式の土器、両者にみられる文様要素であり、どちらに属するか判断するのに困難を要する場合がある。浅鉢形土器も深鉢形土器の文様から影響をうけ、同じような文様を示している。以下、各類毎に検討していく。
深鉢形土器第１類、浅鉢形土器第２類は肥厚した口唇部に縦位の連続した押圧縄文が施されたのが特徴である。このような特徴をもつ土器は南方町青島貝塚（加藤、後藤他：1975）出土の第６類土器に類似しており、大木 8a 式に位置づけられる。深鉢形土器第２類は粘土紐を波状に貼付し、その上に縄文を施文しているものである。このような文様は先に大木 8a 式と理解した 1a 類の深鉢形土器で押圧縄文と組み合っており、ほぼ同じ時期が考えられる。深鉢形土器第３類は粘土紐に円形の刺突文が配されるのが特徴である。この中で第 109 図１に類似したものは青島貝塚第 5b 類土器の中にあり、大木 7b 式とされている。しかし、第 108 図８は同じ粘土紐に刺突文が配されているが、頚部がすぼまり、胴が張る器形であり、また、「∽」状の突起も付くことから大木 8a 式に近いものと考える。深鉢形土器第４類、浅鉢形土器第１類にはともに押圧縄文が

横位に施文されるという特徴があり、大木 7b 式に位置づけられると考えられる。特に、深鉢形土器第４類の中の第 109 図３の口縁部は大波状を呈する。また、浅鉢形土器第１類は青島貝塚第５類土器の浅鉢と同じ特徴を示している。深鉢形土器第５類は刻目が施される。これと類似するのは大和町勝負沢遺跡第Ⅰ群土器第 6b 類（丹羽、阿部、小野寺：1982）の中にみられる。第 6b 類は大木 8a 式と考えられ、本類も同じ時期だろう。深鉢形土器第６類は大波状を呈し、波状の高くなった端部は平坦になり、刻目が施されるのが特徴であり、特に口縁部の形態から大木 7b 式と考えられる。深鉢形土器第７、８類は南方町長者原貝塚第１号住居跡（阿部、遊佐：1978）に類似した土器があり、大木 8a 式と考えられる。深鉢形土器第９～11 類は時期は限定できない。しかし、第 10 類の大波状を呈する土器は口縁部の特徴から大木 7b 式のものと考えられる。その他の土器は縄文時代中期前葉頃のものとしておきたい。浅鉢形土器第３類は長者原貝塚から類似したものが出ており、大木 8a 式の土器と考える。浅鉢形土器４～５類は特に時期を限定できない。その中で 5c 類は隆沈文が施文されていることから大木 8a 式のものと考えられる。

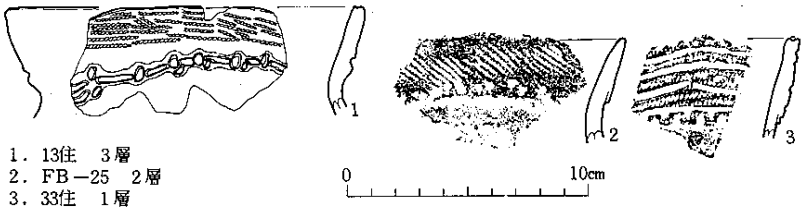
以上、各類の編年的位置についてみてきたが、現在、この種の土器がまとまって出土している例はほとんどなく、その実態には不明な点が多い。その中で、大木 8a 式は粘土紐貼付文・縦位の押圧縄文などが盛行する土器群は曲折文末端に渦巻文が形成され、その中に棘が付加され粘土紐貼付文に一部沈線が沿っており、縦位の押圧縄文が少ない土器群より古い段階のものとされている（丹羽：1981）。このことから、大木 8a 式とした土器の中で深鉢形土器第１類は第７、８類より古い様相を示しているといえる。また、大木 7b 式とした深鉢形土器第３類の中の第 108 図８、深鉢形土器第 4b 類は大木 8a 式に近い要素をもっている。いずれも頚部がすぼまり、胴部が張る器形を示すと考えられ、4b 類には橋状把手が付き、第３類の第 108 図８には「∽」状の突起が付くことから大木 8a 式の中に含めてもよいと考えられる。しかし、現在、どちらに含めてよいか判断するには困難を要する。今、仮に両者の土器を大木 8a 式に含ませると大木 7b 式土器にすぐ後続する土器といえる。このことは今後、類例の増加をまってさらに検討されるだろう。

Ⅴ．その他の出土遺物

その他の出土遺物として弥生土器、土錘、木器、石器、砥石、鉄製品についてその特徴と主に年代について検討する。

弥生土器（第 115 図１～３）

３点出土している。全て壺形土器口縁部資料である。いずれも口縁部は肥厚している。特に２は複合口縁を呈する。１の口縁部下端には交互刺突文が施されるが、規則的なものでない。口縁部には縄文（ＲＬ）が施文されている。また、口縁端部には浅い沈線が巡っている。２の口

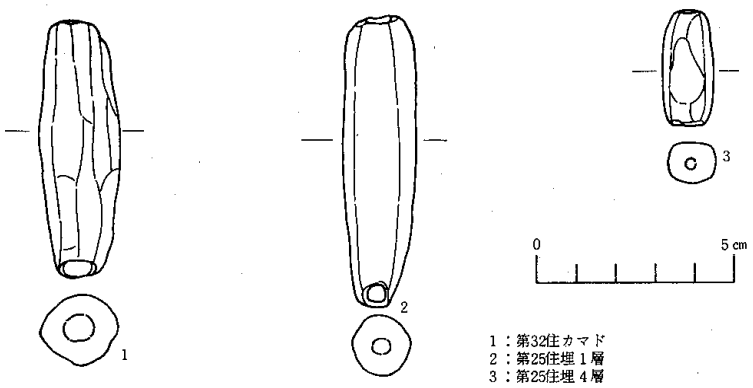


第115図　弥生土器

縁部には縄文（ＬＲ）が施文され、下端には連続する円形の刺突文が施されている。３の口縁部には縄文（ＲＬ）が施文され、その後、浅い沈線を山形に施文し、その間に連続する円形の刺突文が施されている。口縁部下端に連続する交互刺突文が巡っている。また、口縁端部には刻目と円形の刺突文がある。いずれも土器の内面の調整は横位のナデ調整である。以上のような文様の特徴から、これら３点の弥生土器は、弥生時代後期の天王山式のものと考えられる。しかし、口縁部において、複合口縁が退化気味であること、交互刺突文にあまり規則性がみられないこと等から天王山式土器でも若干新しいものと考えられる。

土錘（第 116 図１～３）

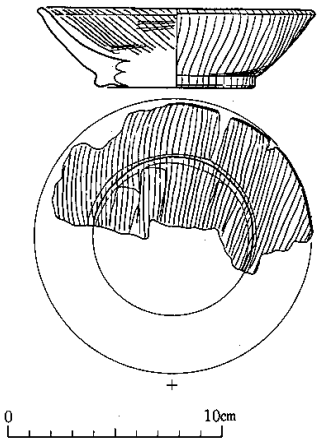
３点ある。１は中央部がふくらむ紡錘状を呈し、２、３は両端が丸味をもつ管状を呈する。３点ともほぼ完形品である。１の長さは 7.4cm、径は２cm、貫通孔の径は 0.6cm である。外面の器面調整はオサエの後、軽いヘラケズリが施されているが、磨滅のため単位は不明瞭である。重量は 21.8g である。２の長さは 6.7cm、径は 1.5cm、貫通孔の径は 0.5cm である。外面の器面調整はオサエの後ヘラケズリが施され、最終的にはヘラミガキが施されている。重量は 20.6g である。３は他の２点に比して小形で長さは 2.8cm、径 1.2cm、貫通孔の径は 0.2cm である。外面の器面調整は１と同様な手法である。これら３点の土錘はいずれも第Ⅱ群土器を出土する住居内から出土しており、平安時代（表杉ノ入式期）のものと考えられる。



第116図　土　錘

木器（第 117 図）

低平な台がつく坏形を呈する。1/2 程欠損しているが、口径 13.0cm、底径 7.5cm、器高 3.7cm を測る。内・外面ともロクロ挽きによってつくり出されている。高台の部分もロクロにより削り出されており、外面にはさらにケズリの痕跡がみられる。胴から口縁部はやや丸味をもって外傾し、その傾き具合は大きく皿に近い。口縁端部は平坦である。第 28 号住居跡床面出土のものである。第 28 号住居跡は第Ⅱ群土器を出土するもので同じ年代と考えられる。



第117図　木　器

石器

石器は大きく剥片石器と礫石器とにわけられる。剥片石器には石鏃、石錘、石匙、石槍、不定形なものがある。礫石器には磨製石斧、凹石、磨石、石皿がある。土器の出土量に比して極めて少ない。主に調査南区の堆積土中出土のものが多い。

剥片石器（第 118 図１～10、119 図１、２）

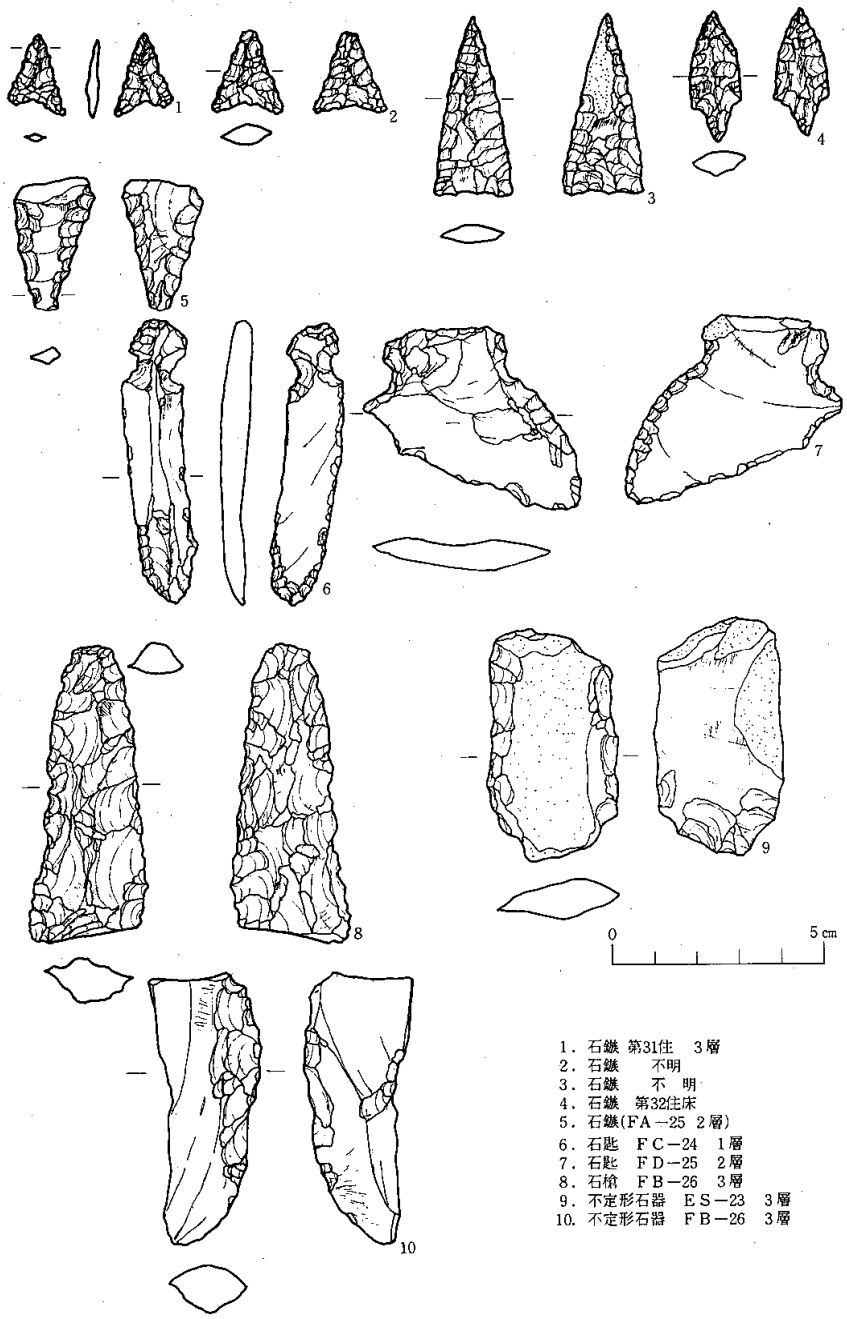
石鏃（１～４）　２の先端部、１の基部の一部が欠損しているが全てほぼ完形品である。いずれも縦長の剥片を使用している。基部形態をみると４には凸状の茎があり、１～３の基部中央には抉りが入れられ凹状になっている。尖頭部側縁は３、４はふくらみ外弯気味であるが、１、２はほぼ直線的である。いずれも、細かい調整剥離が加えられている。

石錘（５）　尖頭部は破損して残存している部分は少ない。基部の側縁には調整剥離が加えられ、形態は逆三角形を呈する。基部と尖頭部との区別は不明瞭でそのまま尖頭部に移行する。

石匙（６～７）　２点ある。６は縦長で７は横長の形態である。両者とも両側辺から抉りを入れてつくられたつまみ部と刃部とからなる。つまみ部はいずれも打面のある部分につくられ７では打面が残っている。さらに７のつまみ部は広い。刃部先端部は６の場合は尖っており、幅は狭いが７は平坦で幅は広い。刃部の調整剥離の状況をみると、縦長の７の先端部は両側辺から調整剥離が加えられているが、他の側辺は一方のみからである。横長の７は各側辺両側から調整剥離が加えられているが入念なものではない。

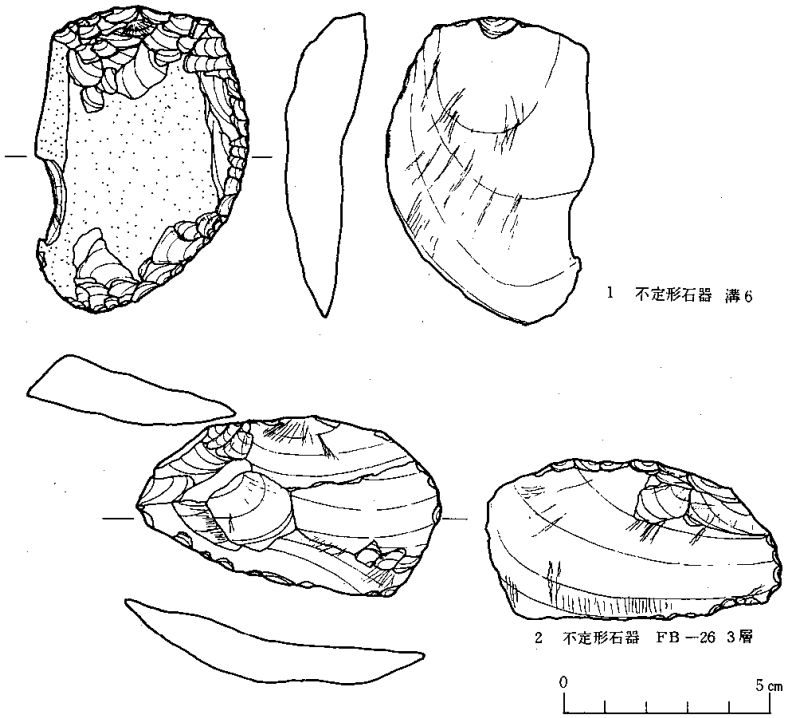
石槍（８）　１点ある。尖頭部の一部から基部にかけて破損している。尖頭部は両側辺から調整剥離が加えられている。先端部はそれほど鋭利でない。断面は凸レンズ状を呈する。

不定形なもの（9.10 1.2）素材が横長なもの（10. 2）と縦長なもの（1）とがある。その内、１と９は楕円形を呈し、各側辺に調整剥離が加えられ石ベラに近似する。両者の打面



1．石鏃 第31住　3層
2．石鏃　　不明
3．石鏃　　不　明
4．石鏃　第32住床
5．石鏃(FA－25　2層)
6．石匙　FC－24　1層
7．石匙　FD－25　2層
8．石槍　FB－26　3層
9．不定形石器　ES－23　3層
10．不定形石器　FB－26　3層

第118図　剥片石器(1)



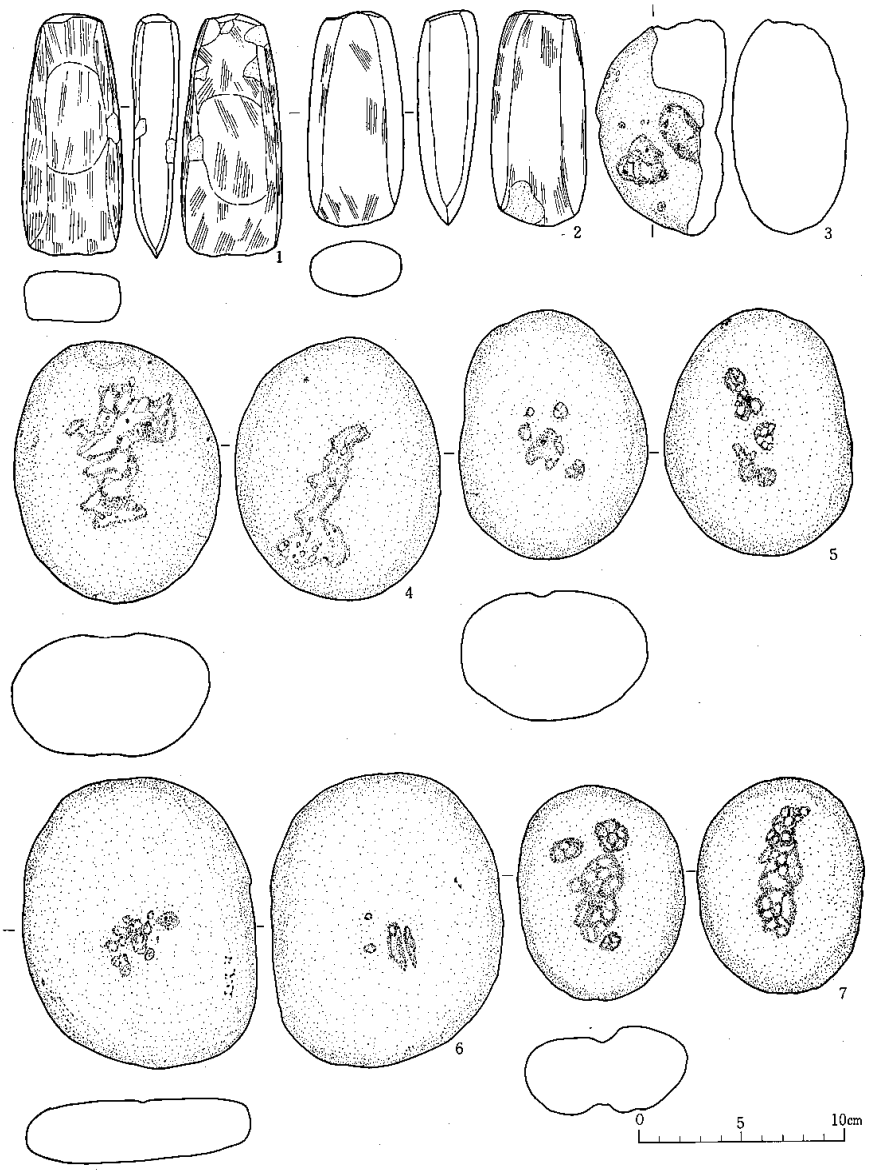
第119図　剥片石器(2)

はいずれも除去され、腹面にバルバスカーのみが残っている。10 は外弯した１側辺に両側から調整剥離が加えられている。

礫石器（第 120～122 図）

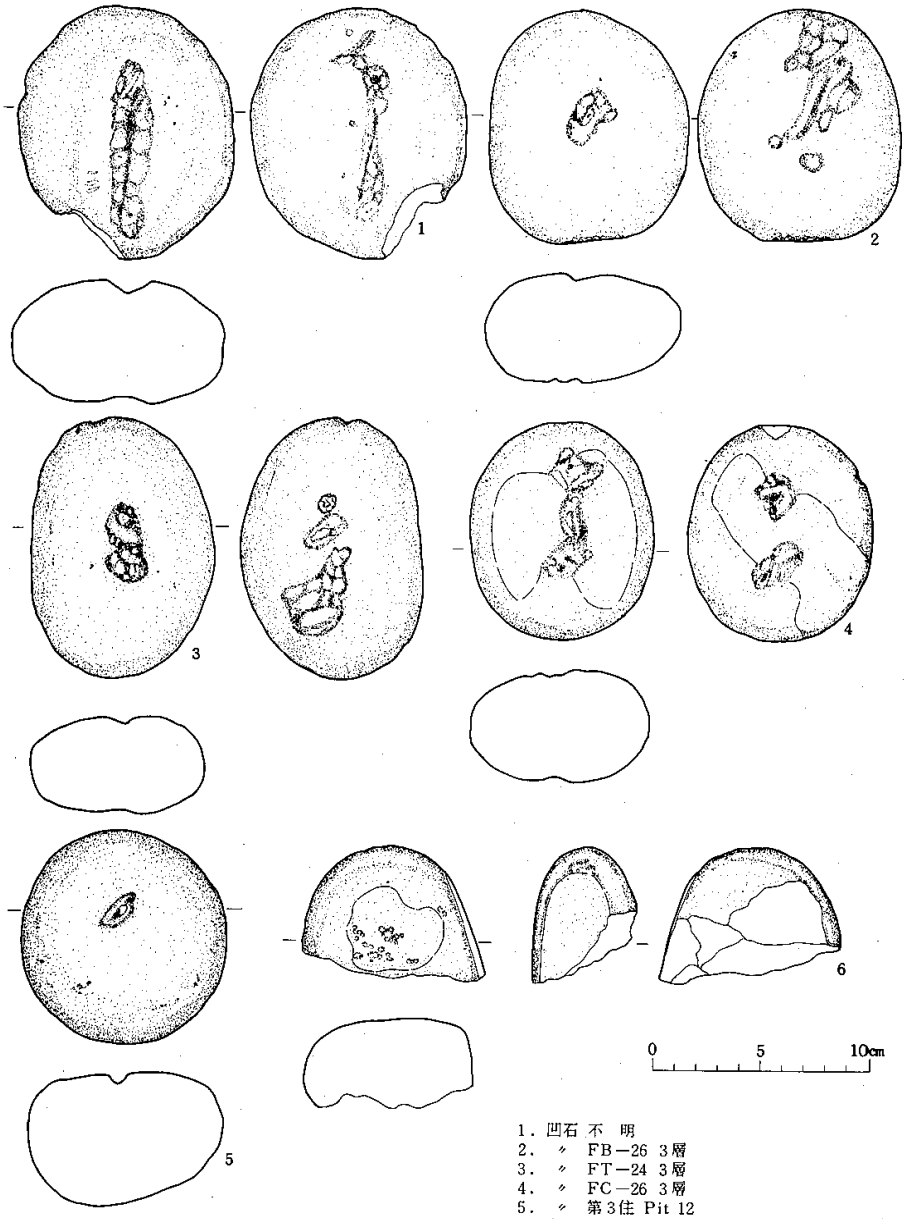
磨製石斧（１、２）　２点ある。いずれも刃部と基部とからなる。２は、基部先端が丸味をもち、側縁との境が不明瞭で胴部断面形が楕円形のものである。１は基部先端がほぼ平坦で側縁との境に稜をもち、胴部断面形がやや隅の丸い長方形を呈するものである。両者の刃はいずれも両刃でやや破損している。また、刃縁に対して斜方向の線条痕がみられる。

凹石（第 120 図３～７、第 121 図）10 点ある。いずれも自然礫の一部に凹部がある。その内破損品は２点である。平面形は楕円形を基調とするが、中に円形に近いのもある。横断面形はいずれも楕円形を呈する。凹部が上・下両面にあるのが大半であるが、５のように片面にのみあるのもある。凹部の形態には平面形が単孔の場合ほぼ円形を基本とするが、小孔が集まっている場合には楕円形もしくは不定形になっている。凹部の断面形をみると前者の場合「V」状を呈するが後者になると「U」状あるいは皿状を呈するのもある。また、４には磨面がみられ磨



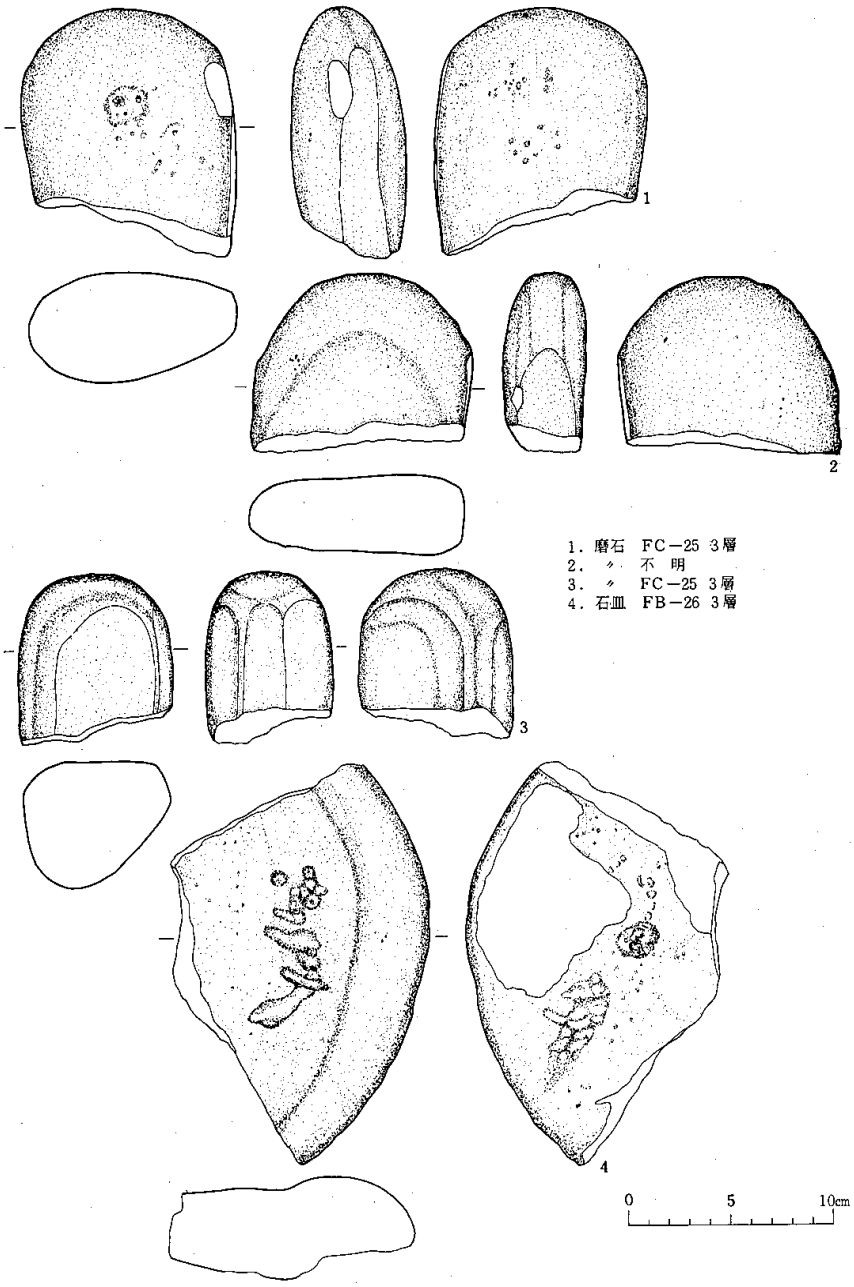
1．磨製石斧 AM－30 1層　4．凹石 FB－25 3層　7．凹石 FC－22 1層
2．〃 FC－26 3層　5．〃 BH－24 3層
3．凹石 FB－26 3層　6．〃 FT－20 3層

第120図　礫石器(1)



1．凹石 不 明
2．〃 FB－26 3層
3．〃 FT－24 3層
4．〃 FC－26 3層
5．〃 第3住 Pit 12
6．磨石 FC－25 3層

第121図 礫石器(2)



第122図　礫石器(3)

石としても利用されたのもある。

磨石（第 121 図６、122 図１～３）４点ある。全て破損品である。そのため、全体の平面形には不明な点が多いが、残存部分から推定すると３は棒状を呈するが、他は楕円形を呈するものと考えられる。磨面はほぼ全面にわたり擦痕が認められる。また、６、１には敲打痕がみられ敲石としても利用されたものと考えられる。

石皿（第 122 図４）１点ある。破損部分が多く全体の形状はわからない。隅は丸くなっている。上面は中央部にいくにしたがって低くなり皿状を呈するようであるが、周縁部からの移行は極めて緩やかである。低くなっている部分の面は平滑である。また、上・下面に多数の凹部がみられ、凹石としても利用されたものと思われる。

次に、これら石器の年代について検討してみる。石器の大半は調査区南側の堆積土Ⅰ～Ⅲ層出土のものである。この地区の堆積土からは先述したように縄文時代中期中葉、大木 8a 式期を主体とした縄文土器が出土しており、ほぼこの時期の頃と思われる。しかし、中には住居内出土のものもある。その中で石鏃２点が、土師器を出土する住居内から出土している。これは混入と考えられる。また、第３号住居跡から凹石が出土している。第３号住居内からは縄文土器は出土しているが量も少なく時期は限定できない。

砥石（第 123 図１～12、第 124 図１～２）

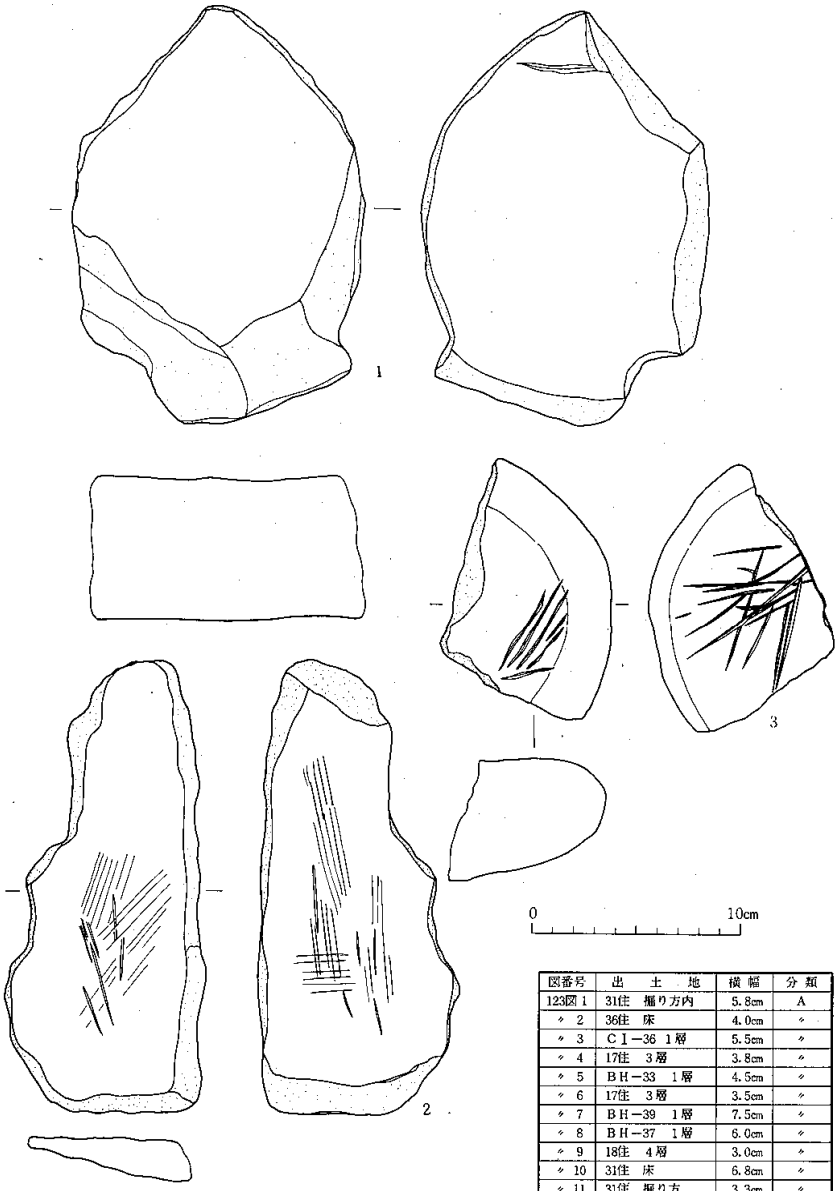
砥石は 15 点出土している。素材の大きさにより２つに分類することができる。素材が小さい小形品をＡ類、素材が大きい大形品をＢ類とする。両類とも素材を加工して砥石としているがＢ類はあまり加工していない。中には欠損品もあり、横幅の長さでＡ・Ｂ類をわけた。

Ａ類（第 123 図１～11）横幅が３～７㎝の小形品である。（11 は長さが約 20㎝あり、大形品の中に入ると思われるが横幅からＡ類に入れた）。石材の粒子は均質なシルト質、砂質シルト状で細いが中に 11 のように粗いのもある。両端以外の各面は砥面として使用されている。砥面の状況は大半が皿状にくぼんでおり、特に２の砥面のくぼみ方は激しい。全体的に使用の度合が激しいことが言える。各砥面には擦痕が認められる。また、10 の砥面には研磨溝とみられる痕跡がある。

Ｂ類（第 123 図 12、第 124 図１、23）横幅が９～10㎝前後の大形品である。石材の粒子が均質な砂質状で粗いものである。自然面を残し素材の加工、整形はＡ類に比して粗雑である。砥面は全て平坦である。砥面として使用されているのは 12 で、上・下２面と１側面の３面でその他は上・下２面のみである。各砥面には擦痕がみられ、また、第 124 図２には研磨溝がみられる。また、３は破損品であるが上・下両面に多くの研磨溝のみがみられる。

以上、素材の大きさによって２つに分類された。各類は大きさだけでなく、石材粒子にも違いがみられる。すなわち、A類の小形品では粒子が細かく、B類の大形品では粗い粒子の石材

第123図　砥　石(1)



図番号	出　土　地	横　幅	分　類
123図 1	31住　掘り方内	5.8cm	A
〃 2	36住　床	4.0cm	〃
〃 3	C I −36　1層	5.5cm	〃
〃 4	17住　3層	3.8cm	〃
〃 5	BH−33　1層	4.5cm	〃
〃 6	17住　3層	3.5cm	〃
〃 7	BH−39　1層	7.5cm	〃
〃 8	BH−37　1層	6.0cm	〃
〃 9	18住　4層	3.0cm	〃
〃 10	31住　床	6.8cm	〃
〃 11	31住　掘り方	3.3cm	〃
〃 12	6住　Pit	9.0cm	B
124図 1	31住　床	14　cm	〃
〃 2	14住　床	9.0cm	〃
〃 3	19住　床	13.5cm	〃

第124図　砥　石(2)

を利用していることがわかる。このことから、Ａ類の砥面には、きめ細かい仕上げ砥、中砥的な要素があり、Ｂ類の砥面には粗砥的な要素があるものと推定される。これらの砥石は、住居内出土と調査区南側の表土出土のものである。住居内出土の砥石は出土土器の年代からある程度の年代が推定される。第６号住居跡出土の第 123 図 12 は出土土器の年代が奈良時代、第 14 号住居跡出土の第 123 図２、第 17 号住居跡出土の第 123 図４・６、第 18 号住居跡出土の第 123 図９、第 32 号住居跡出土の第 123 図１・10・11、第 124 図１、第 36 号住居跡出土の第 123 図２は平安時代のものと考えられる。第 19 号住居跡出土の第 123 図３、６は平安時代のものと考えられる。その他表土出土の砥石の年代は特定できない。

鉄製品

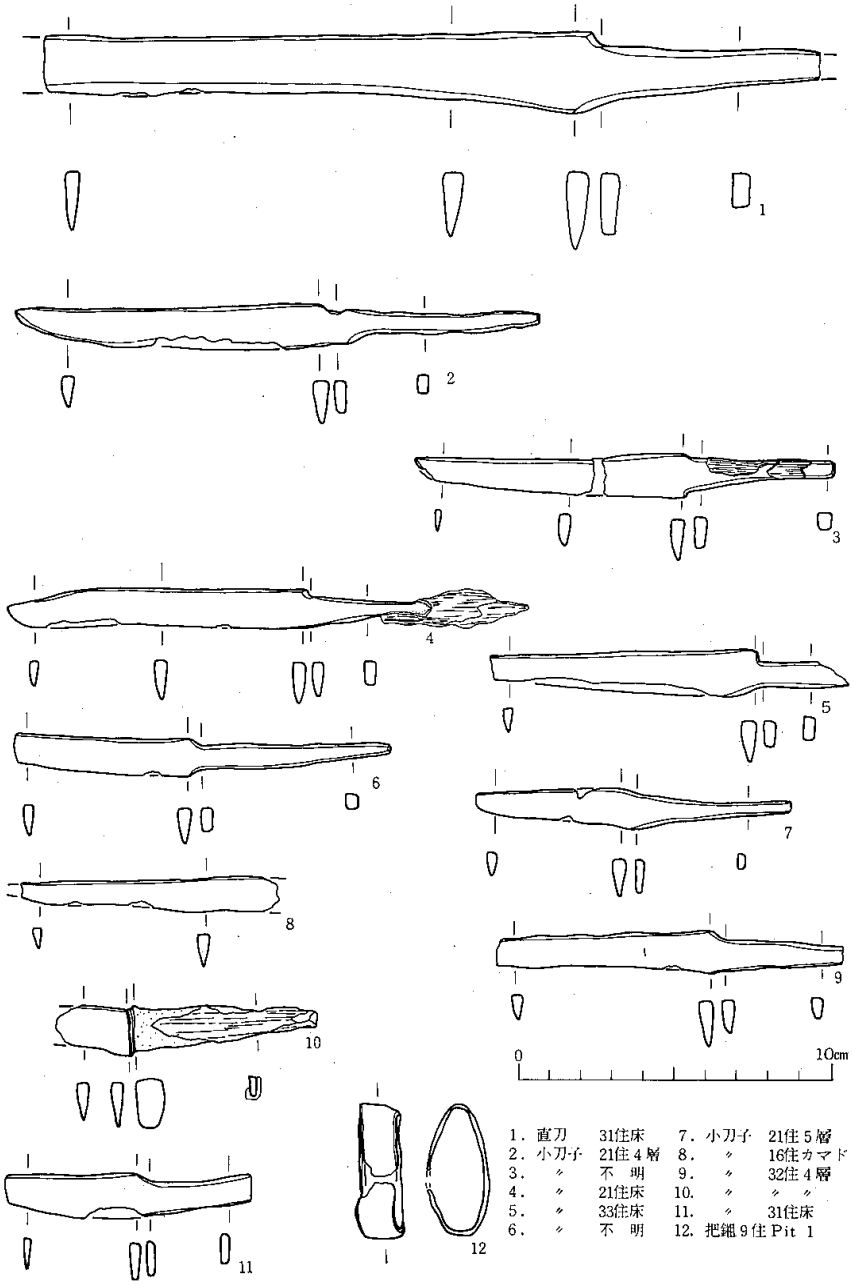
直刀、小刀子、鉄鏃、鉄斧、穂摘具様鉄器、釘、その他の鉄製品が出土している。その中で刀子の出土は多い。以下、各種類毎に記していく。

直刀（第 125 図１）第 31 号住居跡の床から１点出土している。平棟、平造りの直刀である。刀身の鋒を含めた部分と茎の尻を含めた部分が欠損している。区は刀棟の両側にある両区で、いずれも斜めに切り込まれているが、背区の方は刀区に比して直角に近く明瞭である。残存する全長は 25cm、刀長 17cm、茎長８cm、元幅 2.5cm、茎元幅２cm である。

小刀子（第 125 図２～11）10 点ある。その中で全体の形状がわかるのは２～４のみでその他は全て欠損品である。５～７、９～11 は刀身と茎の一部が欠損しているもので、８は刀身の一部のみ残存しているものである。全て、平棟平造りの小刀子である。区部が残っているものはいずれも区の切り込まれ方によっていくつかにわけられる。２、３、５、６は刀棟の両側にある両区で５以外、両区はほぼ直角に切り込まれており、いずれも明瞭である。5 の背区は直角に切り込まれているが刀区の方は背区ほど明瞭でない。４、９、11 は背区は明瞭であるが刃区の方がなだらかになり明瞭でない。特に４の背区は直角に切り込まれている。７は両区が上記したものと比して明瞭でない。10 の区の状況は不明である。また、鋒の部分が残存としているのは２～４で全てフクラ枯である。次に全体の形状がわかる２～４の測定値を記す。２の場合、全長 17.0cm、刀長 10.6cm、茎長 5.8cm、先幅 2.0cm、元幅 1.4cm、３、４、10 の茎には木質が残っている。茎元幅 0.8cm、茎先幅 0.6cm である。３の場合、全長 13.4cm、刀長 8.5cm、茎長 4.6cm、先幅 0.7cm、元幅 1.4cm、茎元幅 1.2cm、茎先幅 0.5cm、４の場合、全長 16.5cm、刀長 9.7cm、茎長７cm、先幅 0.8cm、元幅 1.2cm、茎元幅 0.9cm、茎先幅 0.5cm。

その他に単独で出土した鉄製の把鏁が１点ある。12 は幅 1.2cm、厚さ 0.2cm の薄い板状のものを環状に巻いているもので長径 4.2cm、短径 2.0cm の大きさである。これは直刀に使用されたものと推定される。

鉄鏃（第 126 図１～５）５点ある。平根式鉄鏃（５）、尖根式鉄鏃（１、２）、雁又式鉄鏃（３、



1．直刀　31住床　7．小刀子　21住5層
2．小刀子　21住4層　8．〃　16住カマド
3．〃　不明　9．〃　32住4層
4．〃　21住床　10．〃　〃〃
5．〃　33住床　11．〃　31住床
6．〃　不明　12．把鎹9住Pit 1

第125図　鉄製品(1)

４）の種類がある。

平根式鉄鏃　１点のみである。有茎平根式鉄鏃である。茎部は一部欠損している。鏃身は縦長の長方形で先端部はややひろがる。先端部は刃部になっている。鏃身と茎部の境には両区状の段がある。鏃身の長さは6.6cm、幅は先端部で２cm、元の部分で1.3cmである。茎部の幅は0.5cmあり、長さは茎尻が欠損して不明である。

尖根式鉄鏃　２点あり、有茎尖根式の鉄鏃である。１の鏃身の形状は菱形を呈し、茎に近い下２側辺は曲線を描く。茎には両区状の段がある。茎尻を欠くがほぼ完形である。大きさは全長11.5cm、鏃身長8.0cm、幅3.2cm、厚さ0.6cmである。２は鏃身が三角形で逆刺が小さいものである。茎には区状の段はなく茎の一部が欠損している。鏃身の長さは2.0cm、幅1.7cm、厚さ0.5cmである。

雁又式鉄鏃　２点ある。鏃先端の開き具合は３は直線的で４は曲線的に開いている。両者とも鏃身と茎の境は不明瞭である。３の先端は大きく開き先端部の長さは３cmある。４はあまり開かず途中ふくらみ先端部は開く。欠損部分が多く全体の長さは不明である。

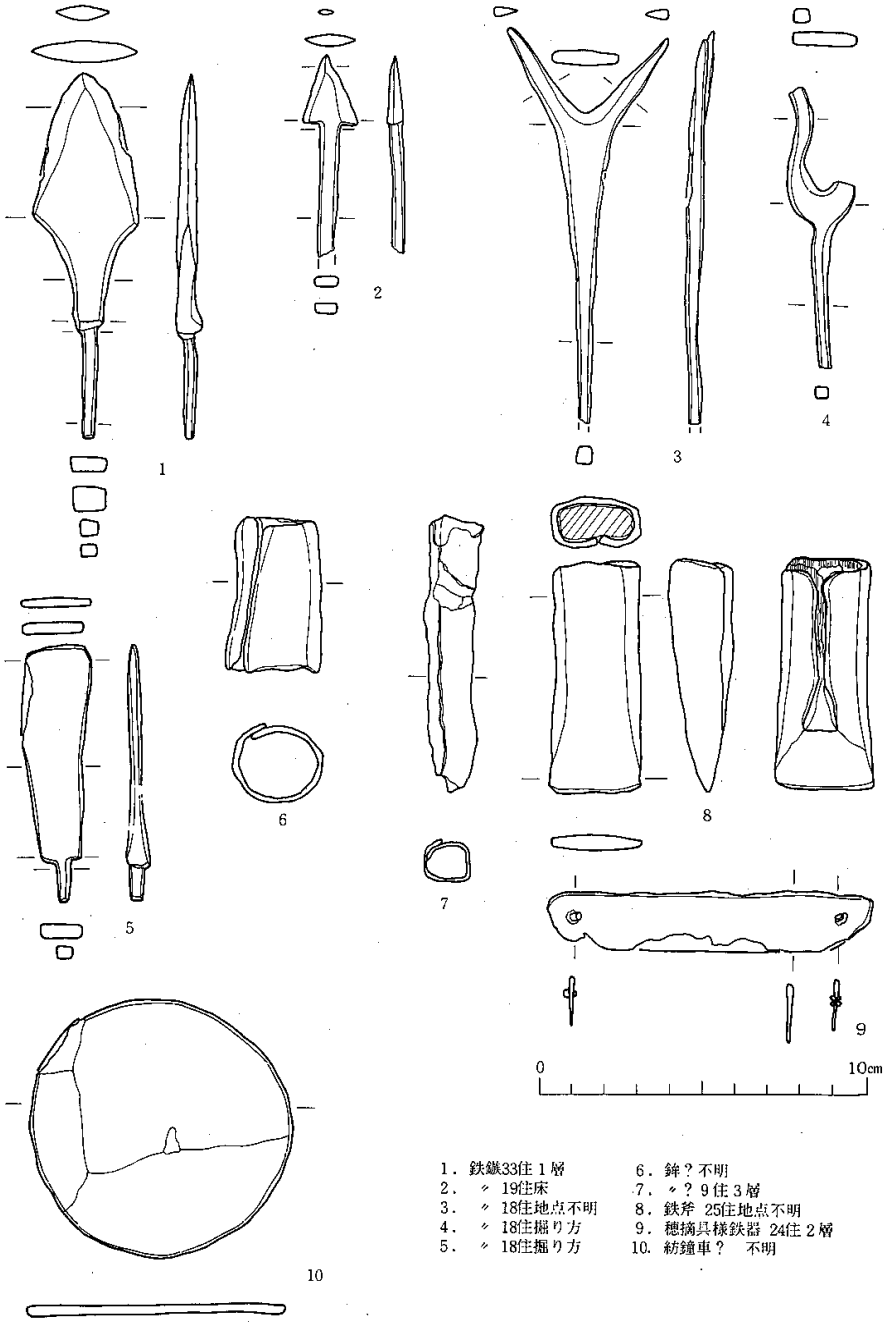
鉄斧（第126図８）１点のみである。刃部と装着部とからなる。全体の形状は長方形を呈するが刃部に向かって両側辺がやや開き気味になる。装着部は鉄板を折り曲げ袋状にしており、中には柄の木質部が若干残存している。全体の長さは7.2cm、幅は刃部で3.0cm、装着部で2.6cm、装着部の厚さは２cmである。

穂摘具様鉄製品（第126図９）１点出土している。全長は10.0cmで身幅は2.0cm、背厚は 0.2cm でほぼ完形である。刃部は外弯し、背部は直線的になっており、両端には断面、短形の釘が各１個遺存している。刃部中央部は減って凹んでいる。

釘（第127図１～４）４点ある。全て欠損品である。断面が四角形を呈する角釘である。１～３の頭部は打たれ、厚さが薄くなりやや幅広くなっている。厚さは４で約１cmと厚く、その他は0.5cm前後のものである。

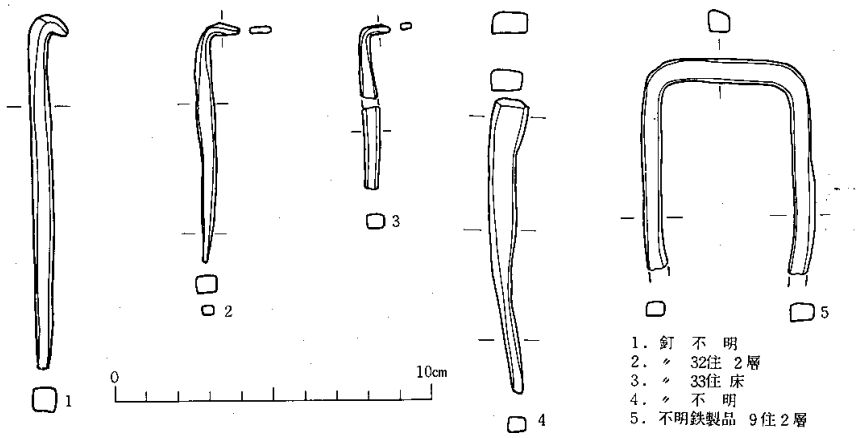
その他の鉄製品（第126図６、７、10、第127図５）鉄板を折り曲げ円筒状にしたもの（６、７）、円板状を呈するもの（10）、「冂」状のもの（５）とがある。６、７は厚さ0.1前後の鉄板を曲げて袋状にしている。いずれも欠損品である。６の幅は3.0cm、７は1.5cmと細い。両者は推定であるが鉾の装着部と考えられる。10は径８cmの円形を呈し、厚さ 0.2cm の板状のものである。紡錘車の円盤部分と考えられるが中央部に鉄の棒をさし込んだ痕跡が不明であるため断定はできない。５は断面が四角形の枠を「冂」状に曲げたものである。厚さは0.7cmある。用途は不明である。

次に、これら鉄製品の年代について検討する。大半の鉄製品は住居内から出土しており、その出土状況から、ある程度年代が推定できる。



1．鉄鏃33住１層
2．〃 19住床
3．〃 18住地点不明
4．〃 18住掘り方
5．〃 18住掘り方
6．鉾？不明
7．〃？９住３層
8．鉄斧 25住地点不明
9．穂摘具様鉄器 24住２層
10．紡錘車？ 不明

第126図 鉄製品(2)



第127図　鉄製品(3)

直刀は第Ⅱ群土器を出土する第31号住居跡の床面から出土しており、平安時代(表杉ノ入式期）のものと考えられる。小刀子は第16、21、23、31、33号住居跡から出土している。その内、第Ⅰ群土器を出土する第23号住居跡内出土のものは奈良時代のもので、その他は第Ⅱ群土器を出土する住居内出土で平安時代（表杉ノ入式期）のものと考えられる。また、把鏁は第Ⅰ群土器を出土する第9号住居跡内出土で奈良時代のものと考えられる。このように、直刀、小刀子は平安時代のものが多い。鉄鏃は先述したように平根式、尖根式、雁又式と三種類がある。平根式の鏃は第18号住居跡、尖根式の鏃は第19、33号住居跡、雁又式の鏃は第18号住居跡が出土している。これら住居からは第Ⅱ群土器が出土しており、鉄鏃は全て平安時代（表杉ノ入式期）のものと考えられる。鉄斧は第Ⅱ群土器を出土する第25号住居跡出土のもので平安時代（表杉ノ入式期）のものと考えられる。

穂摘具様鉄製品としたものは、関東地方の住居跡から出土している鉄製品と形態的に近似しているものを示した。この種の鉄製品は「半月形鉄製品」等と呼称され、穂摘具の用途が考えられている（佐々木：1975)。県内でも出土例が知られるが、その実態についての詳細は不明である。第Ⅱ群土器を出土する第24号住居跡内からの出土であり、平安時代（表杉ノ入式期）のものと考えられる。

鉄釘は第Ⅱ群土器を出土する第32、33号住居跡出土のもので、平安時代（表杉ノ入式期）のものである。その他の鉄製品の中で鉾は第Ⅰ群土器を出土する第9号住居跡出土であり、奈良時代の可能性がある。また、「冂」状の鉄製品も第9号住居跡出土である。円盤状鉄製品は不

明である。このように、住居内出土の鉄製品が多く、その大半は住居数にもよるが平安時代のものである。その中で特に直刀、小刀子が住居内から比較的多く出土したことは注目される。

Ⅵ．出土土器の検討

１．出土土器の特徴と分類

今回の調査時における出土土器には縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、赤焼土器がある。本項では出土土器の中で主体を占め、大半の住居跡から出土している土師器以下の土器について特徴を述べ、分類を試みたいと思う。

土師器

坏・高台付坏・耳皿・鉢・甕・甑の器形がある。その中で出土量の多いのは坏である。以下器形毎に記していく。

〈坏〉

製作にロクロを使用しないものと使用しているものとがある。前者はＡ類、後者はＢ類とする。出土量ではＢ類が主体を占める。また、後述するが、Ｂ類を出土する住居跡が大部分である。

Ａ類：製作過程にロクロが導入されていないグループである。器内外面には積み上げ痕がみられる。全て内面はヘラミガキ・黒色処理されている。ヘラミガキの方向は不定である。主に形態特徴に相違がみられ、いくつかに分類することは可能である。以下のようになる。

Ⅰ．器外面に段、稜等の変化をもち、口縁部が外傾もしくはやや内弯するもの。Ⅱ．器外面に段、稜等の変化をもたず、口縁部が内弯するもの。Ⅰ、Ⅱの底部形態は丸底もしくは丸底気味を呈する。Ⅲ．底部が平底を呈するもの。Ⅳ．底部が半球状のもの。

ＡⅠ類：器外面に段、稜等の変化があり、底部が丸底を呈する。口縁部の傾き具合い、外面の変化に対応する内面の変化の有無によってさらに細分される。口縁部が外傾するもの（１）とやや内弯するもの（２）があり、さらに内面の変化があるもの（ａ）、変化がないもの（ｂ）とがある。全体的に器高が小さく扁平な感はあるが、中には第 13 図１のように器高が大きく丈が高いのもある。外面の調整は段・稜から上がヨコナデ、下はヘラケズリを施すのが基本であるが、その後、ヘラミガキが加えられているのもある。ヘラミガキは全面に及ぶ。

ＡⅡ類：器内外面に段等の変化をもたないものである。底部は丸底を基本とする。器高はＡⅠ類と同様な傾向を示すが、第 18 図７のように器高が大きく椀的なものもある。外面の調整はヘラケズリの後、全面にヘラミガキが及ぶ。

AⅢ類:底部形態が平底を呈するものである。口縁･胴部の特徴により４つに細分できる。１．器内外面に稜を形成し、口縁部が内弯気味のもの。２．器外面に段を形成し、対応する内面は屈曲して口縁部が直立するもの。３．器外面に段を形成し、対応する内面は屈曲して口縁部はやや外反するもの。４．器内外面に段等の変化をもたず、口縁部がそのまま外傾するもの。

これら細分された土器の法量を比較してみるとＡⅢ２類は器高が大で丈が高く、ＡⅢ３、４は逆に器高が小さく扁平なものである。外面の調整はいずれの土器も口縁部がヨコナデ、胴から底部にかけてはヘラケズリが施されるがヘラミガキがその後及ぶ。

AⅣ類:底部が半球状に近い形態を示すもので１点のみある。器内外面に段等の変化をもたず、口縁部はそのまま外傾する。外面の調整はヘラケズリの後、ヘラミガキが施される。

B類:製作過程にロクロ技術が導入されたグループである。器外面に積み上げ痕が観察されるのも中にあるが、最終調整にロクロを使用しその痕跡がみられる点全て共通している要素をもっている。内面は全てヘラミガキ・黒色処理されている。ヘラミガキの方向は不定、横方向、斜方向と放射状のものとがある。また、ロクロからの切り離し痕が残るのは全て回転糸切りの痕跡である。主に法量、口縁、胴部の形態、調整技法からいくつかに分類できる。

ＢⅠ類:口径に対して器高が大で丈が高く、しかも底径も大で概して安定感のあるグループである。口縁部はあまり開かないのが多いが、中に開き気味のもある。口縁・胴部はやや丸味をもつのが多く、中に口縁部が外反気味のもある。器厚は全体的に厚手でしかもロクロ目はあまりシャープでない。器外面の最終調整としてケズリ、ミガキ調整が加わるのが多い。前者のケズリ調整には回転、手持ちヘラケズリがあり、主体を占め、ヘラミガキが施されるのは稀である。さらに、両者の調整が底部全域に及び切り離し痕跡が除去されているのもある。また、ケズリ調整は底部の一部及び胴部下端に施されるのが大半であるが、ミガキ調整は器外面に及んでいる。これらに対して、調整が加わらず、切り離し痕跡がそのまま残存するものもある。

ＢⅡ類:口径に対して器高が小であり、しかも底径が大きく扁平なものでＢⅠ類と同様安定感のあるグループである。口縁・胴部は丸味をもち内弯気味のものと直線的に外傾するものとがある。器厚、ロクロ目はＢⅠと同様な傾向を示す。器外面の最終調整としてケズリ調整が加るのもあり、第79図１のように縦方向の手持ちヘラケズリが口縁部付近にまで及び、その後ヘラミガキが施されるのもある。さらに、ケズリ調整が底部全域に及び切り離し痕跡が除去されているのもある。

B Ⅲ類：口径に対して底径が小さく、口縁部は大きく開く、しかも器高は全体的に大きい。ＢⅠ、ＢⅡ類に比して安定感のないグループである。口縁・胴部はやや丸みをもつものの直線的に外傾するのが大半である。ＢⅠ、ＢⅡ類に比して器厚は概して薄手でロクロ目はシャープである。器外面に最終調整としてのケズリ、ミガキ調整は加えられず、底部に回転糸切りの痕跡が残る。

〈高台付坏〉

出土量は少ない。製作にロクロを使用しないものと使用しているものとがあり、前者をＡ類後者をＢ類とする。Ａ類は１点のみである。両者とも坏部と高台部とから成り、両部の境にはいずれも接合痕が観察される。

A類：坏部は器高が大で丈が高い。口縁・胴部は丸みをもつ。特に口縁部は内弯気味で埦的である。高台部は厚く、さらに端部は外にやや外反気味に開く。また、径約５㎜の盲孔が１個穿たれている。坏部外面の調整は口縁部付近がヨコナデ、胴部はヘラケズリが施され、その後全面にヘラミガキが加えられる。内面はヘラミガキ・黒色処理されている。

B類：主に坏部の法量、形態からさらに３つに分類される。

Ⅰ．坏部の器高が小さく扁平で口縁・胴部が外に大きく開き、皿状を呈する。口縁部は外反する。

Ⅱ．坏部の器高が大きく丈が高い。口縁・胴部はあまり開かない。中には口縁部が外反するのもある。また、坏部の下端には回転ヘラケズリの調整が加わるのもある。

Ⅲ．坏部の法量はⅡとあまり変わらない。口縁・胴部は外に大きく開く。中には口縁部が外反気味のもある。坏部外面にヘラミガキの調整が加わるのもある。

〈耳皿〉

１点のみの出土である。耳の一部は破損してない。内面はヘラミガキ・黒色処理されている。

〈鉢〉

ここで鉢形土器としたのは埦、甕に近似するものも含まれている可能性はある。しかし、埦、甕とは法量、口縁、胴部の形態の特徴から区別されるものである。つまり、口径が埦に比して大形であり、甕に比して器高は小さく、口縁、胴部は外方に開き気味である。今回、こういった土器は少ない。製作過程にロクロが使用されないもの（Ａ類）、使用されているもの（Ｂ類）とがあり前者が主体を占める。

A類：底部が丸底を呈するもの（Ⅰ）と平底を呈するもの（Ⅱ）とがあるが、その他は破片で

底部欠損のため全体的な形状は知り得ないものである。

ＡⅠ類：口縁、胴部はやや丸味をもって外傾する。器外面の調整は口縁部がヨコナデ、胴部から底部はヘラケズリの後、ヘラミガキが施されている。内面にはヘラミガキが施されるが、黒色処理されたか否か不明である。

ＡⅡ類：胴部がやや丸味をもって外傾し口縁部が外反するのと、口縁部がやや内弯気味で口径に対して器高が他の土器に比して大きいものとがある。前者は大形で器外面の調整は口縁部がヨコナデ、胴部以下はヘラケズリの後、わずかのヘラミガキがみられ、内面は横方向の刷毛目の後、ヘラミガキが施される。後者の器外面の調整は、口縁から底部まで全面にヘラミガキがみられるが、それ以前に施されたと思われるヘラケズリの痕跡がわずかにみられる。内面はヘラミガキ、黒色処理されている。

また、底部の状況が不明なものには、口縁部がやや内弯気味のものと外反するものとがありさらに、前者の中には器外面にわずかの段が形成されるのもある。器外面の調整は両者とも口縁部がヨコナデ、胴部以下はヘラケズリが施され、その後全面にヘラミガキが施されている。内面はいずれもヘラミガキ、黒色処理されている。

Ｂ類：１点のみである。全体的な形態は高台付坏と同じであるが大形である。土師器高台付坏のＢⅢ類と同様、口縁、胴部は外傾し外方に大きく開いている。内面はヘラミガキ、黒色処理されている。

〈甕〉

製作にロクロを使用していないものと使用しているものの二者がある。前者をＡ類、後者をＢ類とする。両類には口縁部から底部まで残存しているのは少ない方である。

Ａ類：ロクロ不使用のグループであり、胴が長くのびる長胴形と胴が張る形態とに大別できる。出土量は前者の方が多い。前者をⅠ類、後者をⅡ類とする。

ＡⅠ類：口縁部の形態、法量の違い、頸部の特徴等からさらに細分が可能である。

１．口縁部が外傾もしくは外反するものであり、大形品が多いが中に量は少ないが小形品もある。

ａ：器高が約 25～30㎝ 前後の大形のものである。

ｉ．頸部に段が巡るもので段はそれほど顕著でない。胴部は丸味をもち、下半部にいくにしたがってすぼみ底部に至るものと、胴部上半は直線的に立ち上がり円筒状を呈するものとがある。

また、後者の口縁端部は丸くおさまらず軽い段が形成されている。両者共、口縁内・外面には横ナデ、胴部外面には縦方向のヘラケズリ、内面には横位の刷毛目が施されているが、外面にわずかに刷毛目の痕跡がみられるのもある。また、第74図１の内面にはヘラナデが施されている。さらに第36図４の外面はナデ、内面はヘラナデが施されている。

ⅱ．頸部に段等の変化のないものでⅰに比して量は多い。胴部は丸味をもち底部に至るものと、胴上半は直線的に立ち上がり下半部はやや胴張気味になり底部に至るのとある。前者には口縁部が短いのもある。口縁端部は全て丸くおさまる。各、口縁部内・外面には横ナデが施され、胴部外面には縦方向のヘラケズリが施されるのが多いが、中にはナデが施されるもの、ヘラケズリの後わずかにヘラミガキが施されるのがある。内面にはヘラナデ、刷毛目、ナデが施されている。

ｂ：ａに比して小形品のものである。

ⅰ．頸部に軽い段、又は浅い沈線が巡るもので、いずれも胴下半部は欠損して不明であるが、口縁部は比較的長く胴部は丸味をもって底部に至り、口縁部内外面には横ナデ、胴部内外面には刷毛目が施されているものと、口縁部外面横ナデ、胴部外面ヘラケズリが施され、内面はヘラミガキ、黒色処理されているものとがある。

ⅱ．頸部に段等の変化のないものである。大半はこのグループである。器高が他に比して小さく口縁部が開き気味で浅鉢土器に近い器形のものと胴部が丸味をもち底部に至るもので、底径が大きい傾向のものとがあり、中には底径が小さいのもある。また、胴部が直線的に立ち上がるのもある。口縁端部はいずれも丸くおさまる。口縁部内外面には横ナデが施され、胴部外面にはヘラケズリと刷毛目が施されるのがあり前者が多い。内面にはヘラナデと刷毛目が施されている。

２．口縁部が１に比して強く外反するものである。器高30cm前後の大形品のみである。量は少ない。胴部が丸味をもつものであるが、中に胴中央部がやや張るのもある。いずれも、口縁部内、外面には横ナデが施され、胴外面にはヘラケズリ、内面にはヘラナデのものと刷毛目のものとがある。

３．口縁部が直立気味のもので小形品に限られる。２点のみで口縁部が屈曲して直立するものとそのままやや内弯気味に直立するものとがある。両者とも口縁部外面には横ナデ、胴部外面にはヘラケズリが施されるが前者の口縁部内面には横ナデ、胴部内面にはヘラナデが施されるが、後者の場合口縁胴部にヘラナデが施されている。

４．口縁部が胴部からの延長でそのまま外傾するもので１点のみである。口縁部内面に稜を形成しやや屈曲気味である。口縁部内、外面には横ナデ、胴部外面にはヘラケズリ、内面にはヘラナデが施されている。

A Ⅱ類：口縁部は外反するものが大半であるが、中に外傾するのもある。胴部の形態、法量の違い、頸部の特徴等により細分が可能である。

１．胴部最大径の位置が中央部にあり、球形を呈するものである。大形品と小形品とがある。

ａ：器高が 27cm 前後の大形のものである。３点のみであり、いずれも口縁部は外反し、端部が丸くおさまる。頸部の特徴により２つに細分できる。

ｉ．頸部に軽い段が巡るものである。口縁部内、外面には横ナデ、胴部外面には刷毛目、内面にはヘラナデが施されている。また、胴部外面にはヘラケズリが施されているのもある。

ⅱ．頸部に変化のないものである。口縁部内、外面には横ナデ、胴部外面にヘラミガキ、内面にはヘラナデが施されている。底部でややすぼまる。

ｂ：器高が 12cm 前後の小形品である。１点のみである。口縁部は短かく外反し端部は丸くおさまる。底部ですぼまる。口縁部内、外面には横ナデ、胴部外面にはヘラケズリ、内面にはナデが施されている。

２.胴部最大径の位置が中央部より上方にあり、下半部は直線的になり底部に至る。倒卵形を呈するものである。１点のみで大形のものである。頸部に軽い段が巡る。口縁部は外反し、端部は丸くおさまる。口縁部内外面には横ナデが施され、胴部外面にはヘラケズリ、内面には刷毛目、ナデが施されている。

３．胴部最大径の位置が中央部にあるが、１より丸味をもたず楕円形を呈するものである。1 点のみで大形のものである。口縁部は短かく外反し、端部はやや下方にたれる。口縁部内・外面には横ナデ、胴部内・外面には刷毛目が施されている。

４．胴部最大径の位置が下半部にあり下脹れ状のものである。1 点のみで小形のものである。底径が大きく安定感がある。頸部に段が巡り口縁部は短かく外傾し、端部は丸くおさまる。

５．胴部最大径の位置が肩部にあるものである。１点のみで小形のものである。口縁部は外傾し、端部は丸味をもつ。口縁部内、外面には横ナデが施され、さらに外面にヘラミガキが施される。胴部外面はヘラミガキ、内面はヘラナデが施される。

B類：ロクロ使用のグループである。器高が小さく胴が短い短胴形と胴が長くのびる長胴形のものとがある。前者をⅠ類、後者をⅡ類とする。

B Ⅰ類：器高が 10cm から 20cm 前後の小形品である。全て口縁部は外反する。全体的な器形、特に口径と胴最大径との関係よりさらに細分される。

１．胴最大径より口径の方が大きいものである。胴部はやや丸味をもって立ち上がり、口縁部が開き鉢形土器に近いものである。口縁部は外反するが端部が上方に突き出ているものと丸くおさまるものとがある。ロクロ調整後、胴部下半外面にヘラケズリが施されるもの、内面全

域に回転による刷毛目が施されるもの、さらに内面がヘラミガキ、黒色処理されているのもある。

２．口径より胴最大径の方が大きいものである。胴部は丸味をもって立ち上がり、最大径が胴中央部にある。口縁部は外反するが、短いのとそうでないものとがあり、前者の端部は丸くおさまり、後者のそれはやや上方に突き出ている。また、後者の内面には回転による刷毛目が施されている。

３．口径と胴最大径の大きさがほぼ同じか、やや口径の方が大きいもので１と２の中間的なものである。胴部は丸味をもって立ち上がり、口縁部は外反し端部はやや上方に突き出ている。

ＢⅡ類:器高が30cmから40cm前後の大形品である。主に胴部形態からさらに細分される。

１．胴が張るものである。胴上半部が張り倒卵形を呈するものと、胴中央部が張り砲弾形を呈するものとがあり前者の方が多い。口縁部は外反するが、端部が上・下に突き出すものと丸くおさまるものとがある。胴部外面下半には、いずれもヘラケズリが施され、中にはロクロ調整以前の平行タタキ目の痕跡がみられるのもある。内面には回転による刷毛目、ナデ、ヘラナデが施されている。

２．胴はやや丸味をもつが、直線的に立ち上がり円筒状を呈するものである。口縁部は外反する。端部は上・下に突き出すもの、口縁部は強く外反し上方に大きく突き出すもの、丸くおさまるものとがある。胴部外面にはヘラケズリが施され、ほぼ全域に及ぶのが中にある。また、ロクロ調整以前の平行タタキ目の痕跡がみられるのもある。内面には回転による刷毛目、ナデが施されている。

須恵器

坏、高台付坏、蓋、耳皿、壺、甕の器形がある。その中で出土量の多いのは坏である。以下、器種毎にその特徴を述べ分類する。

〈坏〉

法量、形態、底部の状況等に違いがみられる。

Ａ類：口径に対して器高が占める割合が 30％以下で、底径の占める割合が 55％以上の扁平な器形のものである。口縁、胴部の形態によってさらに細分される。

Ⅰ．口径に対して底径の占める割合が 60％と大きく、胴部は直線的に外傾し、口縁部が外反するもの、底部にはヘラ切りの痕跡が残るもので、回転ヘラケズリが全域に及ぶのもある。

Ⅱ．口縁、胴部が丸味をもって外傾し、その傾き度合は小さいものである。底部にはヘラ切りの痕跡が残る。

Ⅲ．口縁、胴部が直線的に外傾し、その傾き度合は大きいものである。底部にはヘラ切りの痕

跡が残るのと回転糸切りの痕跡が残るものとある。前者が主体を占める。
B類：口径に対して器高が占める割合が 30%以上で底径の占める割合が 55%以上の丈の高く安定感のある器形である。口縁、胴部の形態によってさらに細分される。
Ⅰ．口縁、胴部が直線的に外傾し、その傾き度合いは小さいものである。底部にはヘラ切り、回転糸切りの痕跡が残る。また、下端から底部まで手持ちケズリが施されているのもある。
Ⅱ．Ⅰと同様、口縁、胴部が直線的に外傾し、傾き度がⅠより大きいものである。底部にはヘラ切り、回転糸切りの痕跡が残る。

C類：口径に対して底径の占める割合が 40%前後で、器高の占める割合が 30%以上のものである。口縁、胴部はやや丸味をもって外傾し、その傾き度合は大きい。中には口縁部が外反するのもある。底部には回転糸切りの痕跡が残る。

〈高台付坏〉
量は少なく３点のみである。三者とも各々異なった特徴を示している。
Ａ：高台部が非常に低く、坏部の底部は丸底状を呈し、回転ヘラケズリが施されている。胴部は直線的に外傾し、口縁端部付近の内面には稜を形成している（第 13 図５）。
Ｂ：坏部の器高は口径に対して大きく、口縁、胴部は直線的に外傾し、その傾き度合いは小さい。

Ｃ：Ａ、Ｂに比して大形である。坏部の口縁、胴部は丸みをもって外傾し、その傾き度合いは大きい。口縁部はやや外反する。

〈蓋〉
８点のみである。内面のカエリの有無、口縁端部の状況によっていくつかに分類される。
A類：口縁端部は変化せず、内面にカエリがある。カエリはやや内側に向かっている。天井部は傾斜し、中央部に宝珠状のツマミがあり、周辺には回転ヘラケズリが施される。器高は小さい。
B類：口縁端部が垂直に折れ曲がる。天井部は平坦でＡ類同様宝珠状のツマミが中央部にあり周辺には回転ヘラケズリが施される。器高は小さい。
C類：口縁端部がＢ類に比してやや外方に折れ曲がる。天井部は傾斜するものとやや平坦なものとがあり、前者にはリング状のツマミがあり、後者には宝珠状のツマミがある。両者ともツマミの周辺には回転ヘラケズリが施されている。全体的に器高は小さい。
D類：口縁端部が屈曲してやや内側に折れ曲がる。天井部中央には、中央部がやや凸状になる

ツマミがある。他の類に比し器高は大きい。

〈壺〉

全て長頸壺である。しかし、頸部から口縁部にかけて欠損しているのが多く、全体の器形には不明な点がある。胴部の形態から２つに分類できる。

A類：胴部最大径が上半部にあり肩部が張るものである。外面の下半には手持ち、回転ヘラケズリが施されている。また、平行タタキ目の痕跡が残るのもある。頸部以上が残るものは、頸部から口縁部にかけて外反気味に立ち上がり端部は上・下に突き出ている。

B類：胴部最大径が中央部にあるものである。頸部から口縁部にかけて外反する端部は上・下に突き出している。胴下半部外面には手持ちヘラケズリが施されている。

〈甕〉

図示したのは 10 点と量は少ない。胴部、底部の形態、法量の違い等から分類できる。頸部から口縁部にかけて外傾もしくは外反する。

A類：胴部最大径が中央部により球形を呈するものである。底部の形態、大、小の別からさらに細分できる。

１．底部が丸底を呈するものであり、第 89 図２は底部が欠損しているが傾き具合から丸底になるものと考えられる。全て、大形品であり第 89 図２の最大径は約 70㎝ある。頸部から口縁部にかけて外反し、端部は上、下に突き出ている。胴部内、外面には平行タタキ目の痕跡がみられる。

２．底部が平底を呈するものである。第89 図１は大形品であり、頸部から口縁部にかけて外反し、端部は下方にやや突き出ている。胴部外面には格子状のタタキ目の痕跡がみられ、底部付近には手持ちヘラケズリが施されている。内面にはナデが施されている。第42 図２、第83 図３は胴下半部が欠損して底部の状況が不明であるが、このグループに入れておく。両者とも最大径が約 30㎝の小形品である。頸部から口縁部にかけて外反し、端部は上下に突き出ている。第83 図３の胴部外面には手持ちヘラケズリ、内面に回転による刷毛目が施されている。

B類：胴部最大径が上方により、胴下半部が長くなるものである。底部は全て平底を呈する。大、小の別からさらに細分される。

１．器高が 50㎝ 前後、最大径が 40㎝ 前後の大形品である。頸部から口縁部にかけて外反し、端部は上・下に突き出ている。胴部外面には平行タタキ目の痕跡が残り、内面にはナデが施されている。

２．器高が 20㎝～35㎝ 前後の小形品である。頸部から口縁部にかけて外傾するものと外反するものとがあり、端部は外傾するものは平坦になり、外反するものは上・下に突き出ている。胴

部外面には平行タタキ目、格子状タタキ目、回転による刷毛目、ヘラケズリ等の痕跡がみられ、内面には青海波状のタタキ目、回転によるタタキ目がみられる。

２．出土土器の共伴関係と組み合わせ

以上のように各土器は、様々な特徴を示し分類された。これらの土器の大半は住居内出土である。その出土状況を示したのは第１表である。これをみると、各種類、器形毎に分類された土器の中には住居内で共伴関係にあり、その結果、各土器間の組み合わせが考えられるものがある。しかし、住居内出土土器の中に遺構に伴う状況で出土した土器と堆積土中出土土器とがあり、一括して取り扱うには困難を要する場合もある。ここでは、そういった出土状況に注意して明らかに共伴関係にある土器を抽出し、その組み合わせについてみていきたい。また、その場合、他の器形に比して出土量の多い土師器坏、甕、須恵器坏を中心に土器のまとまりについて検討を加えることとする。

〈土師器坏〉

前述したように土師器坏には、製作にロクロ不使用（Ａ類）のものと、ロクロ使用（Ｂ類）のものと大きく区別された。両類は住居内で遺構に伴う状況で共伴することはない。まず、Ａ類からみていく。Ａ類の坏が出土した住居跡は第６号住居跡、第８号住居跡、第９号住居跡・第 12 号住居跡、第 23 号住居跡の５軒で少ない。その内、第６号住居跡、第８号住居跡、第９号住居跡からは他の２軒に比して出土量は多い。第６号住居跡ではＡⅠia、ＡⅠib 類が、第８号住居跡ではＡⅠib、ＡⅠ2b、ＡⅡ類、第９号住居跡ではＡⅢ２、ＡⅢ３、ＡⅢ４類が出土している。さらに第 12 号住居跡ではＡⅢ１類、第 23 号住居跡ではＡⅣ類が各１個ずつ出土している。

第６号住居跡と第８号住居跡の出土土器について比較してみると両住居跡ともＡⅠ1b 類の坏が出土しているが、第８号住居跡出土のＡⅠ1b 類の坏は堆積土中出土のもので、しかも、１点のみで住居内では主体を占めていない。したがって、ＡⅠ1b 類の坏の共通性をもって両住居内出土の坏をひとつのまとまりとして取り扱うことはできない。また、第９号住居跡出土の坏も、他の住居内出土の坏とも様相を異にしているため、Ａ類の坏は厳密的にＡⅠ1a、ＡⅠ1b 類の組み合わせ（ａグループ）、ＡⅠ2b、ＡⅡ類の組み合わせ（ｂグループ）、ＡⅢ２、ＡⅢ３、ＡⅢ４類の組み合わせ（ｃグループ）にわけられる。器形的にはａグループは全て口縁部が外傾し、外面段、内・外面段の丸底の坏の組み合わせであり、ｂグループは全て口縁部が内弯し、外面段、段なしの丸底の坏の組み合わせであり、ｃグループは全て平底で、口縁部が途中屈曲して直立するものと、屈曲して外反するもの、内、外面に変化をもたず外傾するものの組み合わせである。各グループの坏の外面には最終調整としてヘラミガキが施されるのが特徴的である。

次にB類の坏についてみる。B類の坏を出土する住居跡は第５号住居跡、第 16 号住居跡、第 19 号住居跡、第 21 号住居跡、第 24 号住居跡、第 25 号住居跡、第 26 号住居跡、第 27 号住居跡、第 28 号住居跡、第 31 号住居跡、第 32 号住居跡、第 33 号住居跡、第 34 号住居跡、第 35 号住居跡、第 36 号住居跡・第 37 号住居跡でA類と比して多く主体を占めている。前述したようにB類の坏は全体的な形態的変化から３つに細分されている。細分された各類は、住居内で単独で出土する場合と共に出土する場合とがある。第 16 号住居跡、第 24 号住居跡、第 25 号住居跡、第 26 号住居跡、第 32 号住居跡からはＢＩ類のみが出土している。その内、第 24 号住居跡のそれは堆積土中のものである。また、第 32 号住居跡出土のＢＩ類の中には、ＢⅡ、ＢⅢ類と近似している形態を示すのもある。第 31 号住居跡内からは１点のみで、しかも堆積土中出土であるがＢⅡ類のみが出土している。これら単独で出土する各類の個体数はいずれも少なく確実性はうすい。

次に、異なった形態の坏が共に出土している例をみてみる。第 21 号住居跡、第 28 号住居跡、第 33 号住居跡、第 35 号住居跡内ではＢＩ類、ＢⅡ類が出土している。その内、第 33 号住居跡のＢＩ類にはＢⅢ類に近似している形態のものも含まれており、第 35 号住居跡出土のＢＩ、ＢⅡ類は全て堆積土中の出土である。第５号住居跡、第 19 号住居跡、第 36 号住居跡、第 37 号住居跡内ではＢＩ、ＢⅢ類が出土している。その内、第 36 号住居跡出土のＢⅢ類は堆積土中のものである。以上、各住居内でのＢ類坏の出土状況について記した。その結果、ＢＩ類、ＢⅢ類が各々単独で出土する場合、さらに、ＢＩ類、ＢⅡ類が共伴関係にある場合、ＢＩ類、ＢⅢ類が共伴関係にある場合とがある。ＢＩ類とＢⅡ類の共伴関係ではＢＩ類が個体数で主体を占め、また、ＢＩ類とＢⅢ類の共伴関係ではＢⅢ類が主体を占めている場合とＢＩ類が個体数で主体を占めている場合とがある。つまり、Ｂ類はＢＩ類のみのグループ、ＢＩ類＋ＢⅡ類のグループ、ＢＩ類（主体）＋ＢⅢ類のグループ、ＢＩ類＋ＢⅢ類（主体）のグループにわけることができる。

〈土師器甕〉

土師器甕は大きく坏と同様製作に際し、ロクロ不使用（A類）とロクロ使用（B類）とに区別された。ロクロ不使用のA類は分類項目が多くバラエティーに富んでいる。住居内での出土状況をみてみる。A類のみが出土する住居跡は、第６号住居跡、第７号住居跡、第８号住居跡、第９号住居跡、第 12 号住居跡、第 29 号住居跡、第 37 号住居跡である。その内、第 29 号住居跡、第 37 号住居跡の場合は１個体のみである。第６号住居跡ではＡⅡ1b 類、第７号住居跡ではＡＩ1bi 類、第８号住居跡ではＡⅡ1ai 類、第９号住居跡ではＡＩ1aⅱ類、ＡＩ1bⅱ類、ＡＩ３類、ＡＩ４類、第 12 号住居跡ではＡＩ1bⅱ類、第 29 号住居跡ではＡＩ1aⅱ類、第 37 号住居跡ではＡＩ1bⅱ類が各々出土している。第９号住居跡以外、個体数は少ない。その内、第６、７、８、９、12 号住居跡では土師器坏A類が共に出土している。第 37 号住居跡は土師器坏B類が伴に出土している。このように、A類の甕のみ出土する例は少なく、第９号住居跡でＡＩ1aⅱ類、ＡＩ３類、Ａ

Ⅰ４類、さらに台付甕１個体が出土しており共伴関係を示すにすぎない。

次に、Ａ類とＢ類とが共に出土する例についてみてみる。第 13 号住居跡ではＡⅠ２類、ＢⅡ１類、第 14 号住居跡ではＡⅠ1aⅱ類、ＢⅠ２類、第 15 号住居跡ではＡⅠ1ai、ＡⅠ1aⅱ、ＡⅠ1bⅱ、ＡⅡ1aⅱＢⅡ2、第 18 号住居跡では、ＡⅠai、ＡⅠ1aⅱ、ＡⅡ1bi、ＡⅠ1bli、ＢⅠ１、ＢⅡ、ＢⅡ２、第 19 号住居跡ではＡⅠ1bi、ＡⅡ３、ＢⅠ２、第 23 号住居跡ではＡⅠ1aⅱ、ＡⅡ２、ＢⅠ１、第 25 号住居跡ではＡⅠ1ai、ＡⅠ1aⅱ、ＢⅡ１、第 28 号住居跡では、ＡⅠ1bⅱ、ＡⅠ２、ＡⅡ４、ＢⅠ３、第 31 号住居跡ではＡⅠ1ai、ＡⅠ1aⅱ、ＢⅠ１、ＢⅡ、第 33 号住居跡ではＡⅠ1aⅱ、ＢⅠ１、ＢⅡ１、ＢⅡ２、第 34 号住居跡ではＡⅠ1bⅱ、ＢⅡ２、第 35 号住居跡ではＡⅠ３、ＡⅡ1ai、ＡⅡ５、ＢⅠ１の類が共に出土している。これらの共伴関係にある甕の出土する住居跡は最も多く、しかも、土師器坏Ｂ類が出土している住居跡のみの場合に限られる。

最後にＢ類のみが出土する例についてみてみる。第 17 号住居跡でＢⅠ１類、第 21 号住居跡でＢⅠ２類、第 22 号住居跡でＢⅡ１類、第 30 号住居跡でＢⅡ１類、第 32 号住居跡でＢⅠ１、ＢⅡ類が出土しており、Ａ類のみの場合と同様出土する住居跡は少ない。

以上のように、土師器甕の共伴関係は大きく、Ａ類のみの場合、Ａ類＋Ｂ類の場合、Ｂ類のみの場合とに区別され、組み合うことがわかる。そして、Ａ類のみの場合には土師器坏Ａ類のみが、Ａ類＋Ｂ類、Ｂ類のみの場合には土師器坏Ｂ類が共伴している。

〈須恵器坏〉

須恵器坏は形態的特徴から大きくＡ類、Ｂ類、Ｃ類と３つに分類された。Ａ類は単独で出土する場合、Ｂ類と共に出土する場合とがある。第６号住居跡では、ＡⅠ、ＡⅡ類が、第９号住居跡ではＡⅡ、ＢⅠ、ＢⅡ類が、第 12 号住居跡ではＡⅢ、ＢⅠ、ＢⅡ類が、第 14 号住居跡ではＡⅢ、ＢⅡ類が、第 17 号住居跡ではＡⅢ、ＢⅠ、ＢⅡ類が、第 18 号住居跡ではＡⅠ、ＢⅡ類が、第 23 号住居跡ではＡⅢ、ＢⅠ、ＢⅡ類が、第 25 号住居跡ではＡⅢ、ＢⅠ、ＢⅡ、さらにＣ類が、第 28 号住居跡ではＡⅢ、ＢⅠ、ＢⅡ、さらにＣ類が、第 31 号住居跡ではＡⅢ、ＢⅡ類が、第 35 号住居跡ではＡⅢ、ＢⅡ類が各々出土している。

Ｂ類は前述したようにＡ類と共に出土する場合と、単独で出土する場合、Ｃ類と共に出土する場合とがある。単独で出土する場合は、第 10 号住居跡、第 13 号住居跡、第 16 号住居跡でＢⅡ類のみが出土しているが、いずれも個体数は少ない。Ｃ類と共伴する例は、第 15 号住居跡、第 21 号住居跡でＢⅡ、Ｃ類、第 26 号住居跡でＢⅠ、ＢⅡ、Ｃ類が各々出土している。Ｃ類は他の類と共に出土する場合が多く、単独で出土するのは第 37 号住居跡のみである。

以上、各類の共伴関係についてみたが、Ａ、Ｂ、Ｃ類が共伴するのは第 25 号住居跡、第 28 号住居跡であり、いずれも主体はＢ類の坏にある。Ａ類のみは土師器坏Ａ類と、Ａ類＋Ｂ類の組み合わせは土師器坏Ａ類又はＢ類と共伴する場合がある。Ａ類＋Ｂ類＋Ｃ類の組み合わせ、Ｂ類のみ、Ｃ類のみは、いずれも土師器坏Ｂ類のみと共伴している。

これまで、土師器坏、甕、須恵器坏の共伴関係について各々別個にみてきたが、次にこれら三者の組み合わせをみていくことにする。特に土師器坏を中心に、他の種類、器形の共伴関係をも加味して検討してみる。

土師器坏は先述したように、A類の場合、３つのグループの組み合わせを抽出することができる。すなわち、(ＡⅠ1a、ＡⅠ1b 類、)(ＡⅠ1b、ＡⅡ類、)(ＡⅢ２、ＡⅢ３、ＡⅢ４類、)の各組み合わせである。ＡⅠ1a、ＡⅠ1b 類は第６号住居跡内で土師器甕ＡⅡ1b 類、須恵器坏ＡⅠ、ＡⅡ類と共伴関係を示しており、さらに土師器鉢ＡⅠ類、須恵器高台付坏Ａ類とも共伴する。ＡⅠ2b、ＡⅡ類は第８号住居跡で土師器甕ＡⅡ1ai 類のみと共伴しているにすぎない。また、ＡⅢ２、ＡⅢ３、ＡⅢ４類は第９号住居跡で土師器甕ＡⅠ1aⅱ、ＡⅠ1bⅱ、ＡⅠ３、ＡⅠ４類、台付甕、須恵器坏、ＡⅡ、ＢⅠ、ＢⅡ類と共伴関係を示し、さらに、土師器高台付坏Ａ類、土師器甑、須恵器壺Ａ類、甕Ｂ２類とも共伴している。ＡⅢ１類とＡⅣ類は単独で出土し、他の土師器坏と共伴はない。ＡⅢ１類が出土している第 12 号住居跡では土師器甕ＡⅠ1bⅱ類、須恵器坏ＡⅢ、ＢⅠ、ＢⅡ類、高台付坏Ｂ類、蓋Ｄ類が出土している。ＡⅣ類を出土する第 23 号住居跡では土師器鉢ＡⅠ類（？）甕ＡⅠ1aⅱ、ＡⅡ２類、堆積土中からＢⅠ１類が出土しており、さらに、須恵器坏ＡⅢ、ＢⅠ、ＢⅡ類、蓋Ｃ類が出土している。以上、土師器坏Ａ類を中心とした共伴関係と組み合わせをまとめると以下の表のようになる。

住居跡	土師器					須恵器				
	坏	高台付坏	鉢	甕	甑	坏	高台付坏	壺	蓋	甕
第６号住居跡	AⅠ1a、AⅠ1b		AⅠ	AⅡ1b		AⅠ、AⅡ	A			
第８号住居跡	AⅠ2b、AⅡ			AⅡ1ai						
第９号住居跡	AⅢ2、AⅢ3、AⅢ4	A		AⅠ1aⅱ、AⅠ1bⅱ、AⅠ3、AⅠ4、台付甕	○	AⅡ、BⅠ、BⅡ		A		B2
第12号住居跡	AⅢ1			AⅠ1bⅱ		AⅢ、BⅠ、BⅡ	B		D	
第23号住居跡	AⅣ		AⅠ?	AⅠ1aⅱ、AⅡ2		AⅢ、BⅠ、BⅡ全て堆積土出土			C	

このように、各グループとも、その組み合わせの様相は異っている。その中で、第８号住居跡の土師器坏には全く須恵器坏は伴わず、逆に、第９号住居跡のそれには比較的多く須恵器坏が伴っているのが興味深い。

次にＢ類についてみる。Ｂ類の坏も大きく、４つのグループに分けられた。ＢⅠ類のみ出土する住居は５軒（第 16、24、25、26、32 号住居跡）であるが、先述したようにその出土個体数はいずれも少なく堆積土中出土で住居に伴うか否か困難な出土状況にある住居もある。その中で、第 16、25、26、32 号住居跡の場合についてみてみる。第 16 号住居跡では土師器鉢Ｂ類、須恵器坏ＢⅡ類のみ共伴しているにすぎない。第 25 号住居跡では土師器甕ＡⅠ1ai、ＡⅠ1aⅱ類、ＢⅡ１類、須恵器坏ＡⅢ、ＢⅠ、ＢⅡ、Ｃ類が共伴している。第 26 号住居跡では土師器高台付坏ＢⅢ類、須恵器坏ＢⅠ、ＢⅡ、Ｃ類、高台付坏Ｃ類、甕ＡⅠ類が共伴している。第 32 号住居跡では土師器高台付坏ＢⅢ類、甕ＢⅠ１、ＢⅡ１類、甑、須恵器坏ＢⅡ類、甕Ａ２、Ｂ２類が共伴している。ＢⅠ類とＢⅡ類が共伴して出土する住居は厳密にいえば３軒（第 21、28、33 号住居跡）である。第 21 号住居跡で

第1表　住居内出土図示土器個体数

種類	土師器																																									須恵器																				赤焼土器	
器形	坏													高台付坏				耳皿	鉢			甕																			台付甕	甑	坏						高台付坏			蓋				壺		甕				その他	坏	皿
住居跡＼分類	AⅠ1a	AⅠ1b	AⅠ2b	AⅡ	AⅢ1	AⅢ2	AⅢ3	AⅢ4	AⅣ	BⅠ	BⅡ	BⅢ	その他	A	BⅠ	BⅡ	BⅢ		AⅠ	AⅡ	B	AⅠ1ai	AⅠ1aii	AⅠ1bi	AⅠ1bii	AⅠ2	AⅠ3	AⅠ4	AⅡ1ai	AⅡ1aii	AⅡ1b	AⅡ2	AⅡ3	AⅡ4	AⅡ5	BⅠ1	BⅠ2	BⅠ3	BⅡ1	BⅡ2			AⅠ	AⅡ	AⅢ	BⅠ	BⅡ	C	A	B	C	A	B	C	D	A	B	A1	A2	B1	B2			
1																																																																
4																																																																
5										4		1					1			1																																												1
6	2	2											1				1		1+②												1												1	1+②					1															
7													1											1																												1	1	2										
8		1	3	3									1																1																																		
9						2	1	1						1									1		2		1+①	1													1	1		3		1	2									1					1+①			
10																																															1															1		
11																																																																
12					1								1												1																				2	1	2			1					1	1					1			
13																										1													1 ?								1+①																	
14																							1														1								1		1								1									
15																						1	1		1					1										3							5	3																
16										2											1																										3																	
17																																				1									3	4	6							1							1+①		1	
18																						1	1	1	1											2			2	2			1				2																	
19										2		11						1							1								1				1											1																
20																																																																
21										2	1																										1										2	2																
22									1																														1																									
23																			1?				2									1				1									2	5	5							1										
24										1																																				1																		
25										1												1	2																2						1	2	6	1																
26										1							2																													1	2	2			1							1						
27												1																																																	1			
28										8	1				4										1	1								1				2							2	1	11	1								2								
29																							1																																									
30																				1																			1							1	1																	
31											1											1	2													3			1						2		3																	
32										5							2																			3			1			1					1												1		1			
33										10	2					2							1													1			1	1																	1	1	1	1			1	1
34										1															1															1																								
35										2	1																1		1						1	1									3		2																	
36										1		1																																																				
37										1		7+①				3									1																							1															1	
38																																																																

※＋○、?は分類が困難なものである。

は土師器甕ＢⅠ２類須恵器坏ＢⅡ、Ｃ類が共伴しているにすぎない。第 28 号住居跡では、土師器高台付坏ＢⅠ類、甕ＡⅠ1bi、ＡⅠ２ＡⅡ４、ＢⅠ３類、須恵器坏ＡⅢ、ＢⅠ、ＢⅡ、Ｃ類、壺Ａ類が共伴しており出土土器も豊富である。第 33 号住居跡では土師器高台付坏Ｂ、ＢⅡ類、甕ＡⅠ1aⅱ、ＢⅠ１、ＢⅡ１、ＢⅡ２類、須恵器壺Ｂ類、甕Ａ１、Ａ２、Ｂ１類、赤焼土器坏、皿が共伴している。ただし、赤焼土器皿は出土地不明である。ＢⅠ類とＢⅢ類が確実に共伴している住居跡は２軒（第 19、37 号住居跡）である。第 19 号住居跡では、土師器耳皿、甕ＡⅠ1bⅱ、ＡⅡ３、ＢⅠ２類、須恵器坏Ｃ類が共伴している。第 37 号住居跡では土師器高台付坏ＢⅡ類、甕ＡⅠ1bⅱ類、須恵器坏Ｃ類、赤焼土器坏が共伴している。ＢⅢ類のみ出土する住居は第５号住居跡１軒のみである。土師器鉢ＡⅡ類、赤焼土器皿のみが共伴しているにすぎない。

以上のことから、各グループにおける組み合わせは次のようになる。

aグループ：土師器坏ＢⅠ類、ＢⅡ類、高台付坏ＢⅠ、ＢⅡ類、甕ＡⅠ1aⅱ、ＡⅠ1bi、ＡⅠ２、ＡⅡ４、Ｂ１、ＢⅠ２、ＢⅠ３、ＢⅡ１、ＢⅡ２類、須恵器坏ＡⅢ、ＢⅠ、ＢⅡ、Ｃ類、壺Ａ、Ｂ類、甕Ａ１、Ａ２、Ｂ１類、赤焼土器坏。

bグループ：土師器坏ＢⅠ類、高台付坏ＢⅢ類、鉢Ｂ類、甕ＡⅠ1ai、ＡⅠ1aⅱ、ＢⅠ１、ＢⅡ類、須恵器坏ＡⅢ、ＢⅠ、ＢⅡ、Ｃ類、高台付坏Ｃ類、甕Ａ１、Ａ２、Ｂ２類。

cグループ：土師器坏ＢⅠ類、ＢⅢ類、（ＢⅠ類主体）土師器鉢ＡⅡ類、赤焼土器皿。

dグループ：土師器ＢⅠ類、ＢⅢ類、（ＢⅢ類主体）高台付坏ＢⅡ類、甕ＡⅠ1bⅱ、ＡⅡ３、ＢⅠ２類、須恵器坏Ｃ類、赤焼土器坏。

これまで、土師器坏を主体として、それに組み合う他の種類、器形の土器についてみてきたわけであるが、土師器坏Ａ、Ｂ類間の組み合わせには異なった様相がみられる。すなわち、土師器坏Ａ類には土師器甕Ｂ類、須恵器坏Ｃ類は組み合わない。また、土師器坏Ｂ類では、土師器甕Ａ、Ｂ両類が組み合うが須恵器坏ＡⅠ、ＡⅡ類は組み合わない等の差があることが指摘できる。

このことから、土師器坏を中心にみた場合、出土土器は２つの土器群に大別することが可能である。すなわち、第Ⅰ群は土師器坏Ａ類（ロクロ不使用）とそれに組み合う土器群であり、第Ⅱ群は土師器坏Ｂ類（ロクロ使用）とそれに組み合う土器群である。

３．出土土器の年代と問題点

前項において出土土器は大きく２つの土器群にわけられた。ここでは各群の年代について検討を加えることとする。この場合、各時代を通して形態等の変化が他の器種と比較して極めて特徴的な土師器坏を中心に検討・吟味してみたい。

第Ⅰ群土器

第Ⅰ群土器は土師器坏Ａ類（ロクロ不使用）を中心に構成される。土師器坏Ａ類は前項にお

いて各住居跡内での組み合わせの違いから３つのグループにわかれることが知られた。

すなわち、a グループは第６号住居跡出土のＡⅠ1a 類、ＡⅠ1b 類、b グループは第８号住居跡出土のＡⅠ2b 類、ＡⅡ類、c グループは第９号住居跡出土のＡⅢ２、ＡⅢ３、ＡⅢ４類の各組み合わせである。さらに住居内から単独で出土したＡⅢ１類（第 12 号住居跡）、ＡⅣ類（第 23 号住居跡）がある。これらグループには須恵器が伴うものと伴わないものとがある。特に須恵器坏についてみると、a グループには須恵器坏ＡⅠ、ＡⅡ類、c グループには須恵器坏ＡⅡ、ＢⅠ、ＢⅡ類、土師器坏ＡⅢ類には須恵器坏ＡⅢ、ＢⅠ、ＢⅡ類が各々共伴しており、b グループ、土師器坏ＡⅣ類には須恵器坏は共伴しない。このように同じ土師器坏Ａ類の中でも須恵器坏のあり方で差があることがわかる。しかも、共伴する須恵器坏の形態、調整技法にも違いがみられ、須恵器坏だけをみても年代差が想定される。つまり、a グループに伴う須恵器坏と c グループ、土師器坏ＡⅢ１類に伴う須恵器坏とでは全体の形態、底部の状況に差があり、a グループが c グループ、土師器坏ＡⅢ１類より先行するものと考えられる。b グループ、土師器坏ＡⅣ類には前述したように須恵器坏の共伴はなく、比較検討することはできない。以上、須恵器坏との共伴からある程度のグループ間における前後関係がわかる。さらに、詳しく年代的な裏付け等もするため土師器坏の特徴、さらに須恵器坏の比較検討から考察を加えていくこととする。

a グループの土師器坏ＡⅠ1a、ＡⅠ1b 類は全て底部が丸底を呈し、器外面に沈線もしくは段の変化があり、対応する内面に段が形成されているのもある。口縁部は外傾気味である。器外面の調整は口縁部は横ナデ、胴から底部にかけてはヘラケズリが基本であるが、さらにヘラミガキが加えられるものとそうでないものとがある。内面はヘラミガキ・黒色処理されている。

図示したものの中で器高が大きく丈が高いのは１点のみでその他は器高が小さく扁平な感がする。このような坏に土師器鉢ＡⅠ類、甕ＡⅡ1b 類、須恵器坏ＡⅠ、ＡⅡ類、高台付坏Ａ類が共伴している。土師器坏の特徴と近似するのは高清水町観音沢遺跡出土土師器坏（加藤・阿部：1980）志波姫町御駒堂遺跡第Ⅱ群の内黒土師器坏（小井川・小川：1982）、富谷町原前南遺跡第３号住居跡出土土師器坏（千葉：1982）、田尻町日向前横穴羨道・前庭部流入土出土土師器坏（早坂：1981）にみられる。しかし、細部の形態、器面調整あるいは共伴する他の土器に若干の違いがみられる。観音沢遺跡の場合は器外面の最終調整としてヘラミガキが加えられないのが大半であり、口縁部が内弯気味の坏も組み合っている。また、共伴する土師器甕の中に頚部に段が形成されるもの、また、口縁部に沈線が巡るのもあり、極めて特徴的な甕もある。須恵器の共伴は少なく第３号住居跡で器高が小さく扁平な感があり、底部に回転ヘラケズリの調整が加えられている須恵器坏が１個体出土しているにすぎない。これらの土器は奈良時代前半頃とされている。

御駒堂遺跡第Ⅱ群土器は内黒土師器坏は少なく、関東地方の真間式土器に酷似した土器が主体を占めている。内黒坏は器外面に段・沈線があり、それに対応する内面にも変化があり、口縁部は観音沢遺跡同様外傾もしくは外反するもの、内弯気味のものとがある。

全体的に口径が大きく低平な丸底を呈している。器外面にはヘラミガキ調整は加えられない。主に共伴する真間式土器に酷似している土器の年代から８世紀前半としている。原前南遺跡の場合は内黒土師器坏、関東地方の真間式土器に酷似する坏、須恵器坏が第３号住居跡内で共伴している。内黒坏の器外面にヘラミガキが加えられている。真間式土器、須恵器坏の年代から８世紀前半としている。日向前横穴古墳の場合は丸底で器内外面に段が形成され、口縁端部が外反気味の土師器坏と高坏、須恵器坏・蓋、高台付坏、長頸壺、提瓶（？）、甕が出土しており、須恵器の特徴から涌谷町長根窯跡Ａ地点の時期に求められている。ａグループとこれらの土器を比較すると次のような点が指摘される。1)観音沢遺跡、御駒堂遺跡第Ⅱ群土器の内黒土師器坏には口縁部が内弯気味のものも含まれている。ａグループの土師器坏は全て外傾するもので占められている。また、器外面にヘラミガキが加えられているのは両遺跡の場合、ほとんどない。2）観音沢遺跡の土師器甕は特徴的であり、ａグループにはない甕である。3)観音沢・日向前横穴古墳を除いた遺跡では関東地方の真間式土器に酷似した土器が出土している。ａグループには共伴しない（日向前横穴古墳の羨道・前庭部底面からは出土しており、しかも年代的にも若干古い段階に位置付けられているものである)。4)ａグループ同様、観音沢、原前南遺跡、日向前横穴古墳（古墳ということで他の遺跡とは性格が異なる）では須恵器坏の共伴がある。

つまり、ａグループの土器は土師器坏の特徴をみると前述した各遺跡出土の土師器坏と比較して細かな点で異なる面があるが全体としてその特徴は酷似している。また、観音沢遺跡、原前南遺跡、日向前横穴古墳出土の須恵器坏とａグループの須恵器坏とを比較してみると、胴部下端から底部のほぼ全域に回転ヘラケズリが加えられ、形態的にも底径が大きく、器高が小さい扁平なもので口縁部はやや外反気味のものであり、形態・技法的にも共通点が見い出される。特に原前南遺跡の須恵器坏は大和町鳥屋窯跡群三角田南地区出土の須恵器坏（東北学院大学考古研：1975）と酷似していることから８世紀前半頃に属すると考えられている。さらに日向前横穴古墳の須恵器坏は前述したように長根窯跡群Ａ地点の時期に求められている。以上のことから第６号住居跡出土ａグループの土器は土師器坏、須恵器坏の特徴から８世紀前半頃のものと考えられる。しかし、御駒堂遺跡第Ⅱ群土器、原前南遺跡から出土している関東地方の真間式土器に酷似した土器はａグループに全く含まれていない。このような出土土器のあり方の差はどのように理解したらよいのだろうか。ａグループの土器を出土する住居跡は第６号住居跡１軒のみでしかも全体の個体数は少なくその点について多く語ることはできず判然としないが少なくとも時期差、地域差を示しているとは考えられない。むしろ、遺跡の性格の差、集落間の構成員の差としてとらえられるのではないだろうか。

次にｂグループの土器について検討する。ｂグループの土師器坏ＡⅠ2b、ＡⅡ類はａグループの土師器坏と同様全て丸底を呈するが、平底に近い丸底の坏もある。器外面に段が形成されているものとそうでないものとが組み合っている。段はａグループの土師器坏に比して形骸化し顕著なものでない。口縁部は内弯する。器外面の最終調整に全てヘラミガキが加えられている。共伴するのは土師器甕ＡⅡ1ai 類のみである。このような特徴を示す土師器坏の組み合わせは現在のところ県内では例をみない。特に器外面に変化のない坏は全て丸底を呈するのが特徴的である。器外面に段のある坏は陸奥国分寺僧坊西建物基壇南側溝内出土の土師器坏（氏家：1961）志波姫町糠塚遺跡第Ⅰ群土器（小井川、手塚：1978）に近似しているが、両遺跡ではｂグループと同様、外面に変化のない坏も組み合っている。しかし、全て底部は平底を呈するものである。しかも、糠塚遺跡第Ⅰ群土器の土師器坏には比較的多くの須恵器坏が伴うが、ｂグループでは須恵器坏の共伴はない。以上のことから上記遺跡出土の土師器坏といっしょに扱うことはできない。陸奥国分寺、糠塚遺跡第Ⅰ群土器は東北地方南部の土師器編年で国分寺下層式の土器（氏家：1967）と考えられ、８世紀後半を中心とした年代が与えられている（小井川、小川 1982）。ｂグループの土師器坏は再々述べるように全て底部が丸底を呈すること、須恵器坏が組み合わないこと等からこれら遺跡出土土器の年代、すなわち８世紀後半より若干古い土器群と考えられる。さらに、先述したａグループの土師器坏と比較すると坏の組み合わせと形態に大きな差がある。ａグループの場合は器外面に変化のない坏は組み合わず、さらに口縁部は全て外傾する点違う面である。これに対してｂグループの場合は口縁部が内弯すること、底部が丸底であるが、平底に近い丸底のものも含まれていること、器外面の段は顕著でないこと等からａグループの土師器坏よりも新しい要素があると考えられる。したがって、ｂグループの土器の年代は８世紀前半頃のａグループの土器より新しく、８世紀後半の糠塚遺跡第Ⅰ群土器等よりは古い様相を呈していると思われる。しかし、ｂグループには須恵器坏がないため両者と比較・吟味することはできず、正確な年代の裏付けは困難である。

ｃグループの土師器坏は全て平底の土師器坏ＡⅢ２、ＡⅢ３、ＡⅢ４の組み合わせである。このような土師器坏の形態的特徴を有するものは県内で他に類例をみない。その中で特にＡⅢ２、ＡⅢ３類の土師器坏は極めて特徴的である。ＡⅢ２類は器内外面に段を形成し、口縁半が直立する。ＡⅢ３類はＡⅢ２類と同様段を形成し、口縁部がやや外反する。ＡⅢ２類は器高が大きく丈が高いのに対してＡⅢ３類は扁平なものである。また器内外面に段等の変化のないＡⅢ４類も扁平なものである。外面の器面調整の最終手法としてヘラミガキが施されている点３類とも共通している。内面はいずれもヘラミガキ・黒色処理されている。このような土師器坏に第９号住居跡内で土師器高台付Ａ類、土師器甕ＡⅠ1aⅱ、ＡⅠ1bⅱ、ＡⅠ３、ＡⅠ４類、台付甕、須恵器坏ＡⅡ、ＢⅠ、ＢⅡ類、壺ＡⅡ類、甕Ｂ２類が共伴している。

須恵器の出土が多いのが注目される。先述したように土師器坏は宮城県内において今まで出土例がないため比較する資料はない。そのため県外での出土資料との比較、共伴する須恵器坏等の特徴から年代について検討してみる。ｃグループの中で特に極めて特徴的な土師器坏ＡⅢ２類と近似するのは東北地方北部の地域に類例をみることができる。その中で馬渕川上流域の岩手県二戸市中曽根Ⅱ遺跡出土の土師器坏（関：1981）と比較してみる。ロクロ不使用の土師器坏の中で特にⅡＣ１、ⅡＣ２類がｃグループの土師器坏ＡⅢ２類と近似している。ⅡＣ１、ⅡＣ２類とも底部は平定を呈している。ⅡＣ１類の方は内外面に段を形成し、口縁部は外傾する。ⅡＣ２類は外面のみに段を形成し口縁部は直立する。ⅡＣ２類の方が器高が大きく丈が高い。両類とも外面には最終調整としてヘラミガキが施され、内面はヘラミガキ・黒色処理されている。ｃグループの土師器坏ＡⅢ２類と比較すると底部形態、器内外面の調整で基本的に共通するが、器内外面の変化という点でⅡＣ１類とさらに口縁部の傾き具合いでⅡＣ２類と共通する要素がある。しかし、ⅡＣ２類の口縁部はＡⅢ２類のそれと比較すると高い。したがって、細部の点で違う面があり、両者全く同一の個体として扱うことはできない。また、土師器坏ＡⅢ３類と近似するのはＶＣ１類である。しかし、内外面に変化があるという点で共通するがＶＣ１類のほうが器高が大きく、しかも口縁部はやや内弯気味であり、外面の調整に刷毛目が施されている点ＡⅢ３類と違う点である。さらに土師器坏ＡⅢ４類はⅢＣ３、ⅣＣ１類に内外面に変化がない点で共通点を見い出されるがＡⅢ４類は器高が小さく、大きく外傾するもので器高が大きいⅢＣ３類、口縁部が内弯気味のⅣＣ１類と比較すると異なっている。このようにＡⅢ３類、ＡⅢ４類に関してもＡⅢ２類と同様なことが言え、中曽根Ⅱ遺跡出土のこの種の土師器坏と同一の坏とは言い難い。

土師器甕について比較してみる。大形品、小形品ともｃグループの甕と形態的にほぼ共通するが、器面調整で若干異なる面がある。胴部外面は両者ともヘラケズリが施されるが、中曽根Ⅱ遺跡の場合、その後ヘラミガキが施され、また内面の調整は刷毛目が主体的であるのに対してｃグループの甕では外面はヘラケズリのみで内面はヘラナデが主体的である。次に須恵器のあり方についてみてみる。中曽根Ⅱ遺跡では須恵器の出土はない。ｃグループの土師器坏には先述したように須恵器坏、壺、甕が比較的多く共伴しており、器種の構成では差がある。このようにｃグループの土師器坏ＡⅢ２、ＡⅢ３、ＡⅢ４類は中曽根Ⅱ遺跡出土の土師器坏に近似するが、形態あるいは土師器甕の器面調整、器種の構成等の細部の点で相違している。しかし、この種の土師器坏は宮城県内はもちろん東北地方南部の地域において例をみず、むしろ東北地方北部、特に中曽根Ⅱ遺跡が所在する馬渕川上流域周辺に分布の中心をもつ土器群に強い関連性があるものと理解される。したがって、土師器坏ＡⅢ２、ＡⅢ３、ＡⅢ４類を中心に構成されるｃグループの土器群は東北地方北部の土器圏に含まれると考える。

次に年代について検討してみる。今まで比較検討した中曽根Ⅱ遺跡出土の土師器坏ⅡＣ１、ⅡＣ２、

ⅢＣ３、ⅣＣ１、ＶＣ１類は底部の状況が丸底でなく平底、もしくは平底に近い丸底である点、土師器甕の口縁部に単純化のきざしが現われる点、そして全体的へラミガキの調整が少なくなってくる点から丸底の坏を主体とする土器群よりは新しいとされている。その年代は報告書の中では明言はしていないが、中に掲載されている第 14 表（二戸市内馬渕川沿河岸段丘上の各遺跡の想定存続年代と発見住居数）をみると中曽根Ⅱ遺跡出土の土器群は８世紀代の中に含まれている。その中でｃグループに近似する土師器坏を含む土器群は８世紀後半頃の求められていると思われる。(註１) さて、ｃグループの土師器坏には先述したように須恵器坏ＡⅡ、ＢⅠ、ＢⅡ類が共伴する。各類の底部にはへラ切りの痕跡が残っており、その後の調整はない。特に２固体のＡⅡ類は他の類に比して底径が大きいものである。このような法量・形態、底部切り離し技法の特徴をもつ須恵器坏は涌谷町長根窯跡群Ｂ地点１号窯跡（岡田、佐々木、桑原：1972)、御駒堂遺跡第 22 号住居跡出土の坏に近似している。長根Ｂ地点出土の須恵器坏は主に形態、底部の状況から８世紀後半に位置づけられている。また、御駒堂第 22 号住居跡内出土の須恵器坏の内、ｃグループの須恵器坏と近似するのは２個体ある。これらの須恵器坏は住居内で国分寺下層式期の土師器坏と共伴しており、８世紀後半の年代が与えられている。以上、長根Ｂ地点、御駒堂遺跡第 22 号住居跡出土の須恵器坏の年代についてみてきたが、ｃグループの須恵器坏は両遺跡の須恵器坏と比して細部において若干異なる面があるが、大筋としてほぼ同じ特徴を示していると言える。したがって、須恵器比ＡⅡ類は８世紀後半頃のものと考えられる。さらに、須恵器坏ＡⅡ類が組み合う土師器坏ＡⅢ２、ＡⅢ３、ＡⅢ４類を主体としたｃグループの土器群にも同じ年代を与えることは可能である。

最後にａ、ｂ、ｃグループのどこにも属さず、単独で出土している土師器坏ＡⅢ１類、ＡⅣ類について検討してみる。ＡⅢ１類の土師器坏は第 12 号住居跡で１個体出土しているのみで他の土師器坏との共伴はない。しかし、多くの須恵器と組み合っている。須恵器坏ＡⅢ、ＢⅠ、ＢⅡ類、高台付坏・蓋が住居内で共伴している。土師器坏は１個体と検討するには不十分である。それに対して比較的多く出土している須恵器坏から年代を推定したい。須恵器坏には三種類の形態がある。器高が小さく扁平で口縁部が大きく外傾するもの（ＡⅢ類)、底径、器高が大きく胴･口縁部があまり開かないもの（ＢⅠ類)、と大きく開くもの（ＢⅡ類）とがある。底部の状況はＡⅢ、ＢⅠ類でへラ切り、ＢⅡ類ではへラ切りと回転糸切りがあるが、へラ切りが主体を占める。このような形態・技法上の特徴をもつ須恵器坏は糠塚遺跡第 12・16 号住居跡内出土須恵器坏の組み合わせに例が見い出される。形態的には第 12 号住居跡の場合、ＡⅢ、ＢⅡ類に近似したものが組み合い、底部の状況はへラ切り、回転糸切り、ケズリ調整が加えられ切り離し痕跡が残らないものがあり、へラ切りが主体を占める。第 16 号住居跡ではＢⅡ類に近似したもののみで底部の状況はへラ切り、回転糸切り、へラ切り＋手持ちへラケズリのがある。このように形態、技法あるいはそ

の組み合わせは土師器坏ＡⅢ１類に共伴する須恵器坏に近似した傾向を示しており、共通する要素は多分にある。糠塚遺跡の両住居跡出土のこのような須恵器坏は国分寺下層式期の土師器坏に伴っており、８世紀後半の年代が考えられている。したがって、土師器坏ＡⅢ１類は共伴する須恵器坏から８世紀後半頃のものと考えられる。しかし、土師器坏ＡⅢ１類のような形態的特徴を有する坏は糠塚遺跡において存在しないため全く同様な土器群として理解するのには困難である。

次に土師器坏ＡⅣ類について検討する。第 23 号住居跡で１個体出土しているのみで他の土師器坏との共伴はない。底部が半球形状を呈し胴・口縁部は外傾する。外面の器面調整にはヘラミガキが加えられ、内面はヘラミガキ・黒色処理されている。このような形態、調整の特徴をもつ土師器坏は御駒堂第 12、14、20 号住居跡で近似したものが出土しており、他の土器との共伴関係から８世紀初頭頃に位置付けられている。しかし土師器坏ＡⅣ類と比較すると底部の状況は御駒堂遺跡のものよりＡⅣ類の方が若干尖っており、また、口縁部は御駒堂遺跡でやや内弯するのに対してＡⅣ類は外傾する点違いがみられ、同様に扱うことはできない。しかし、ＡⅣ類の形態的特徴から８世紀代の中に入り、その中でも初頭から前半頃のものと考えたい。

以上、第Ⅰ群土器の年代について検討を加えてきた。第Ⅰ群土器は再々述べるように土師器坏Ａ類（ロクロ不使用）を中心に構成されている。その土師器坏Ａ類も住居跡単位での組み合わせの違いによりａ．ｂ．ｃの３つのグループにわかれ、また単独で出土し、しかも他の土師器坏と共伴関係のもたない土師器坏が２個体ある。これらのグループ内、あるいは単独の２個体の土師器坏には各々異なった特徴があり、年代的にも前後関係があることがわかった。まとめてみると次のようになる。

８世紀前半　　８世紀後半

ａグループ（土師器ＡⅠ1a、ＡⅠ1b類）第6住→ｂグループ（土師器坏ＡⅠ2b、ＡⅡ類）第8住→ｃグループ（ＡⅢ2、ＡⅢ3、ＡⅢ4類）第9住

ＡⅣ類第23住　　ＡⅢ1類第12住

このように第Ⅰ群土器は大きく３つの段階に区分することが可能である。つまり、８世紀前半頃のⅠａ段階、Ⅰａ段階と次のⅠｃ段階の中間であるⅠｂ段階、８世紀後半のⅠｃ段階である。そして、各段階に含まれる土師器坏の特徴、特に器外面にヘラミガキが施されるという点、東北地方北部の土器圏に含まれるものと考えられる。しかも、８世紀後半のⅠｃ段階では土師器坏の特徴が他の段階のものと比較して強い関連性がある。しかし、主に土師器のみで全体の器種構成のあり方では北部の土器と異なっている。須恵器との共伴は北部の土器にはほとんどみられず、北部の土器圏に含まれるのは土師器に限ったことである。

第Ⅰ群土器を出土する住居跡は５軒のみで、しかも各グループ１軒ずつで遺跡内での相互上比較はできない。さらに出土個体数も第Ⅱ群土器に比して極めて少ないため十分な検討はできなかった。今後、この種の土器、特にｂ、ｃグループを構成している土器の出土例に期待したい。

註１：その後、中曽根Ⅱ遺跡のこの種の土器群は岩手県北部における土器の変遷の中で８世紀後半の中に位置付けられている。関豊（1982)「馬渕川上流域を中心とした岩手県北部の古代土器の様相」岩手県考古学会討議資料　岩手県考古学会

註２：南北二土器圏の問題は小井川・小川(1982)「御駒堂遺跡」に詳しい。それによると土師器坏で口縁部外面が横なで主体は南部、ヘラミガキ主体は北部で「宮城県内の南北二地域には少なくとも８世紀前半までは系統を異にする二種類の坏（土器）が存在していたことを想定することができる」としている。しかし、本遺跡のｃグループの土器（土師器坏）の存在により８世紀後半頃まで上述した状況が続いていたことが知られる。

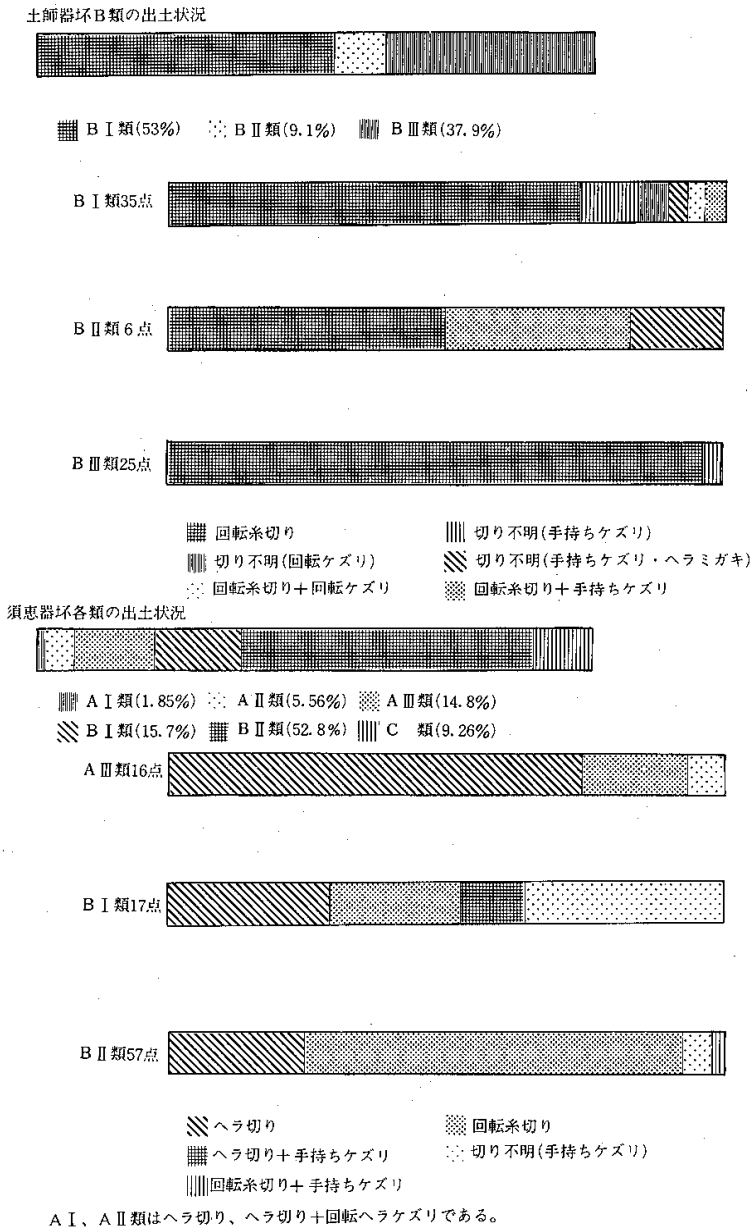
第Ⅱ群土器

第Ⅱ群土器は土師器坏Ｂ類（ロクロ使用）を中心に構成される。土師器坏Ｂ類は主に形態的特徴により大きく３つに分類された。さらに、住居跡内での各類の組み合わせにより４つのグループにわけられた。各グループは以下のようになる（第 129、130 図)。

ａグループ:土師器坏ＢⅠ類＋ＢⅡ類（ＢⅠ類が主体)、ｂグループ:土師器坏ＢⅠ類のみ、
ｃグループ：土師器坏ＢⅠ類＋ＢⅢ類（ＢⅠ類が主体）
ｄグループ：土師器坏ＢⅠ類＋ＢⅢ類（ＢⅢ類が主体）

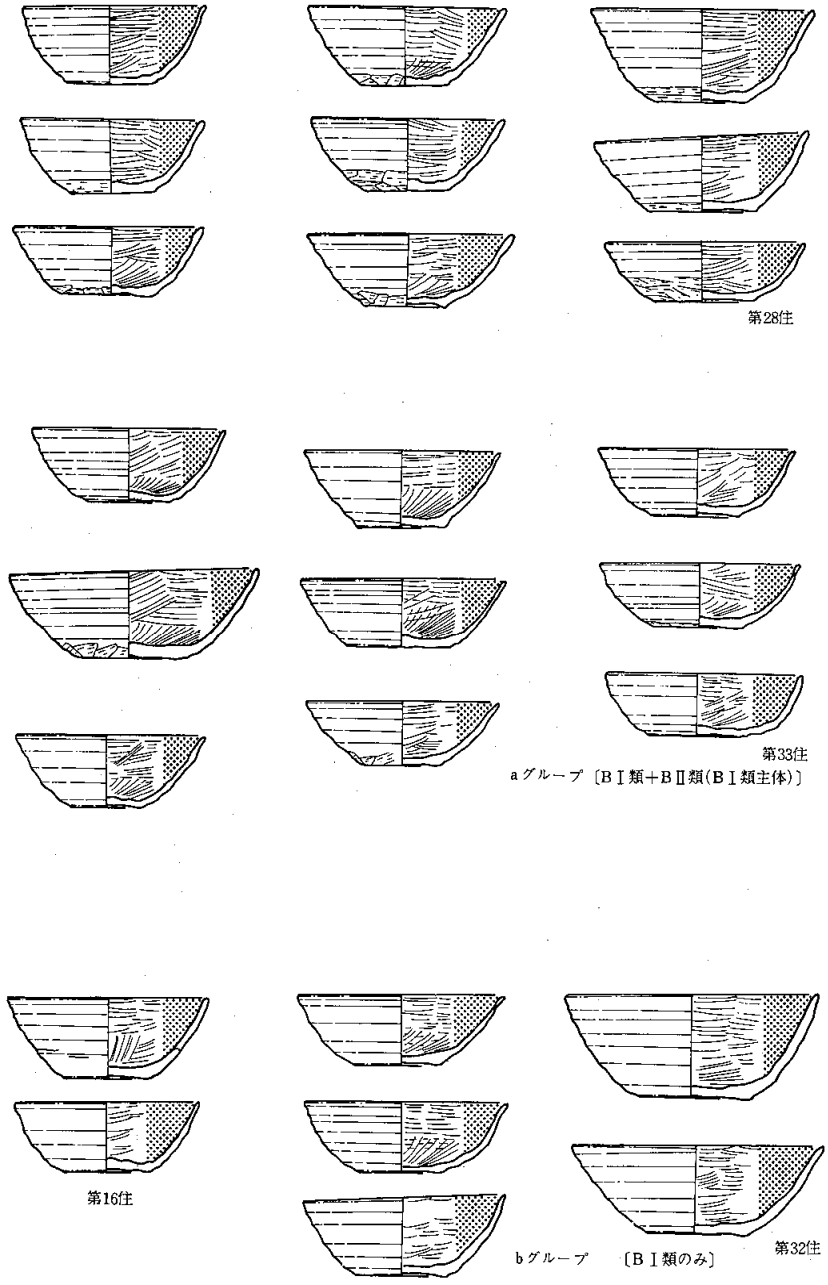
これら分類、グループ化された坏は製作にロクロを使用し、内面にヘラミガキ・黒色処理されている点共通している。このような特徴をもつ土師器坏は東北地方南部の土師器編年で表杉入式期の土器（氏家：1957）と考えられている。表杉ノ入式の土器は国分寺下層式の土器に後続する土器型式で平安時代のほぼ全般の土器群を指しているといっても過言ではないだろう。しかし、表杉ノ入式期の土器は特に、土師器坏に限ってみれば平安時代の中にあって器形、技法上の変化があり、いくつかの段階があると考えられる。今までこの表杉ノ入式期の土器は土師器坏を中心に製作技法（主に底部切り離し技法とその後の調整技法）の変化、相違等に注目され、全体の形態的特徴を問題視し、検討されることはあまりなかった。

以上のような状況の中で筆者は以前、土師器坏の形態的変化に着目し、表杉ノ入式期の中での新旧関係を若干検討した（森:1982)。その結果をまとめて要約すると次のようになる。つまり、表杉ノ入式期の土師器坏は基本的に形態上大きく３つにわかれる。Ⅰ：口径に対して底径、器高の占める割合が大で丈が高いもの、Ⅱ：Ⅰと同様、口径に対して底径の占める割合が大であるが、器高の占める割合が小で扁平な感があるもの、Ⅲ：口径に対して底径の占める割合がⅠ、Ⅱに比して小さく、胴・口縁部が大きく開き気味のものとなる。そして、これら三種類の形態的特徴を示す土師器坏の中で前型式の国分寺下層式の終末期の土師器坏の形態にⅠ、Ⅱは

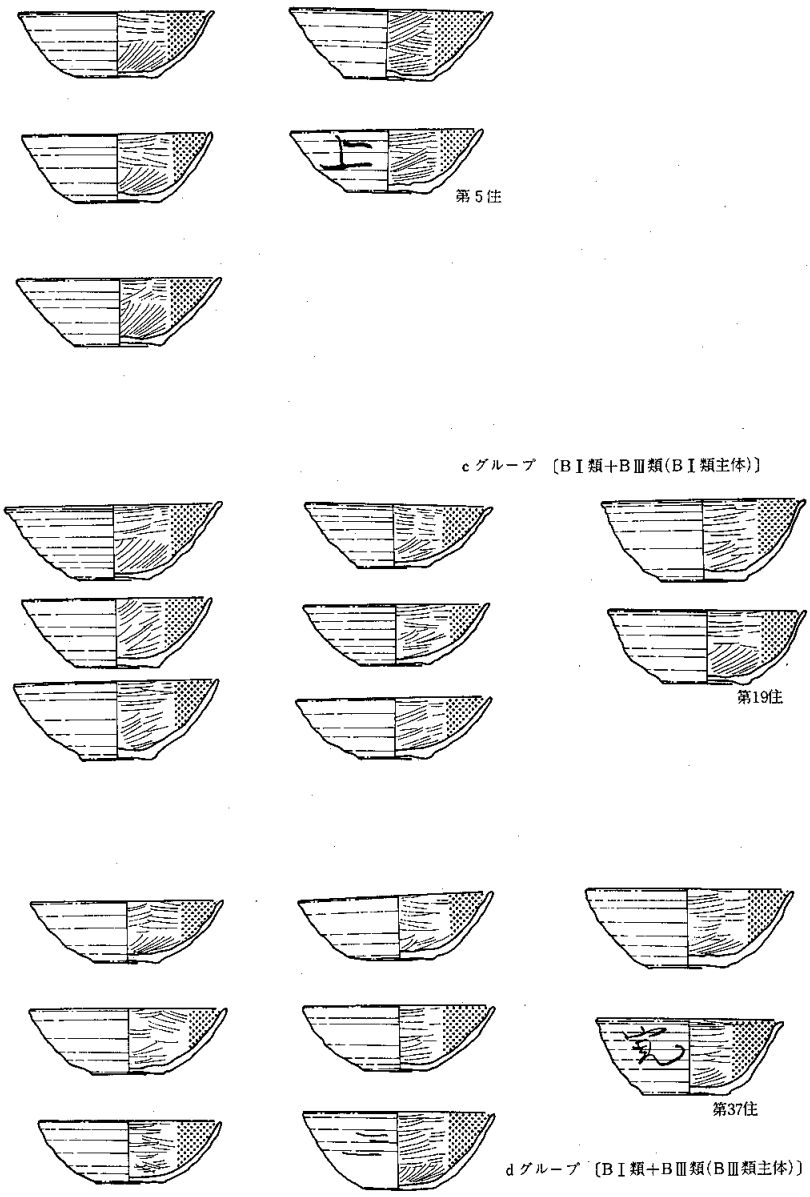


A Ⅰ、A Ⅱ類はヘラ切り、ヘラ切り＋回転ヘラケズリである。

第128図　土師器坏B類、須恵器坏の底部の状況



第129図　土師器坏B類の組み合わせ(1)



第130図　土師器坏B類の組み合わせ(2)

近似すること、Ⅲの形態はロクロ技術の進展の結果としてとらえ、Ⅰ、ⅡよりⅢの形態の方がより新しい特徴を示す土師器坏とした。さらに、器外面への調整（主にケズリ調整）はⅠ、Ⅱに多用され、Ⅲにはほとんど加えられなくなる傾向のあることも示した。

ここではこのような成果を踏まえ、前述した各グループの土師器坏が表杉ノ入式期の土器の中でどの段階に位置するかを他遺跡出土の土師器坏と比較する過程で検討してみたい。この場合、本遺跡は宮城県北部に位置しているため、同じ地域内の遺跡出土の土師器坏を取り上げ、比較検討することとする。(註1)

まず最初に各グループにおける土師器坏Ｂ類の組み合わせについてさらに吟味し、その前後関係を明らかにしたい。再々述べるように土師器坏Ｂ類は形態的な差からＢⅠ類、ＢⅡ類、ＢⅢ類に分類され、形態上、ＢⅠ、ＢⅡはＢⅢに先行する形態であるということが予想される。しかし、これはあくまで各類個別的に比較してみた場合であり、細部での特徴が様々であり、しかも各住居跡内で異なった組み合わせを示すこと等から一概にその前後関係はいえない。そこで各住居跡内の組み合わせの違いから生じたａ、ｂ、ｃ、ｄグループに属する各類の土師器坏の形態についてさらに詳しく検討する必要がある。比較検討するための主点として口径に対して底径の占める割合といった法量比（以下、法量比は口径と底径の関係を示している）を調べてみる。この方法によって全体の形態的特徴がより鮮明になると思われる。なぜなら、口径と底径の関係は器高・胴、口縁部の傾き具合い等の要素に及ぼす影響が大であると考えられるからである。

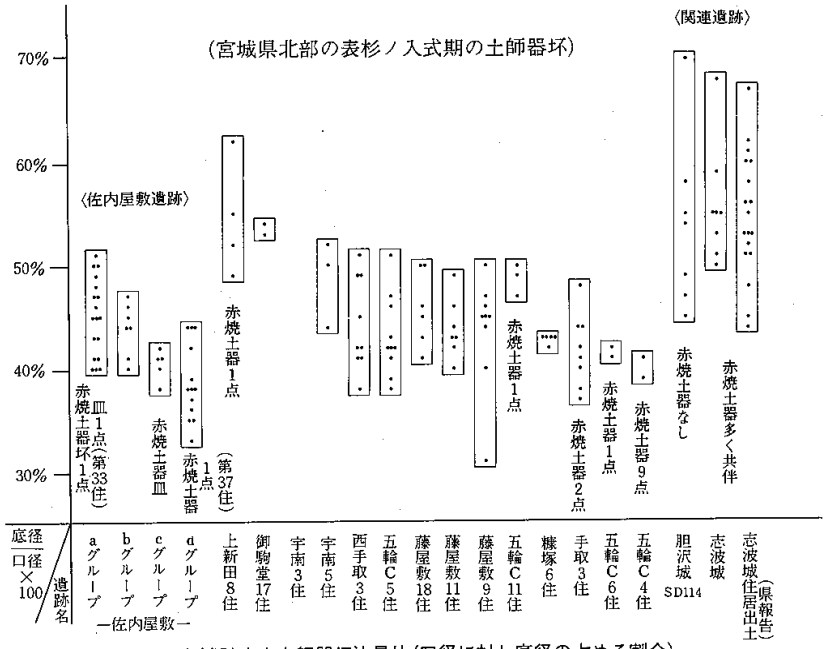
各グループ内の土師器坏の法量比をまとめて示したのは第131図である。これをみると、ａグループは40％～51％の範囲内に収まり、特に集中する所はないが、45％前後の坏が主体を占めるものと思われる。ｂグループは40％～47％の範囲の中に入り、ａグループの中に含まれる。しかし、50％前後の坏はｂグループにはなく、ａグループより法量比は一段下がる。ｃグループは38％～42％と狭範囲内のもので40％前後に集中する。ｄグループは33％～44％の範囲の中に含まれるが、30％代に集中している。

このように各グループ間において、グループを構成している土師器坏Ｂ類は異なった法量比の傾向を示しているのが判る。ａ、ｂ、ｃグループは40％前後で互いに重なり合うが、上、下への伸び、特に上方向の分布で各々異なっている。つまり、三グループの中で法量比が最大である坏が含まれているのはａグループであり、続いてｂグループ、そして、ｃグループとなる。ｄグループはこれら三グループと重複する所があるが、30％代に集中し、下方向への伸びの程度が大きく、法量比が最小である坏が含まれる。また、胴、口縁部の状況といった細部の点をみると、ｄグループの坏には胴部がやや丸味をもって立ち上がり、口縁部が外反気味のものが多いのに対して他グループの坏では顕著でない。さらに、ａ、ｂグループの坏の胴、口縁部をみると、胴下半が脹らみ、口縁部が内弯気味のものも中にある。両グループに含まれる土師器

坏ＢⅡ類は全てこの形態を示す)。そして、器外面への調整はａグループに多用され、ｂグループではわずかに加えられるが、ｃ、ｄグループには全くといってよいほど調整は加えられない。

以上、法量比に代表される形態的特徴と細部の状況、器外面への調整の有無等から土師器坏Ｂ類の住居跡内での組み合わせである各グループ間では、ａグループ→ｂグループ→ｃグループ→ｄグループの流れが考えられる。しかし、ａ、ｂグループは器外面への調整の有無で異なった様相を示すが、形態的特徴、特に法量比が両者とも 45％前後に集中する傾向があることから同じ範囲内での若干の変化としてとらえたい。つまり、土師器坏Ｂ類はａ、ｂグループの段階、ｃグループの段階、ｄグループの段階にわけることができ、その前後関係はａ、ｂの段階→ｃの段階→ｄの段階となる。

次に本遺跡と同様、宮城県北部に位置する遺跡から出土する表杉ノ入式期の土師器坏のあり方をみていきたい。そして、その中で前述した土師器坏Ｂ類における各段階を位置付けたい。現在、知られている表杉ノ入式期の土師器坏を出土する主要な遺跡として色麻町上新田遺跡(小井川：1981)、志波姫町御駒堂遺跡、同町宇南遺跡（斎藤：1979)、同町糠塚遺跡、高清水町西手取、手取遺跡（早坂、阿部：1979)、同町五輪ｃ遺跡（小野寺：1979)、古川市藤屋敷遺跡（加藤：1979）等があげられる。これら遺跡出土の土師器坏の形態的特徴、特に法量比（口径に対して底径の占める割合）を調べてみると、上新田遺跡第８号住居跡、御駒堂第 17 号住居跡、

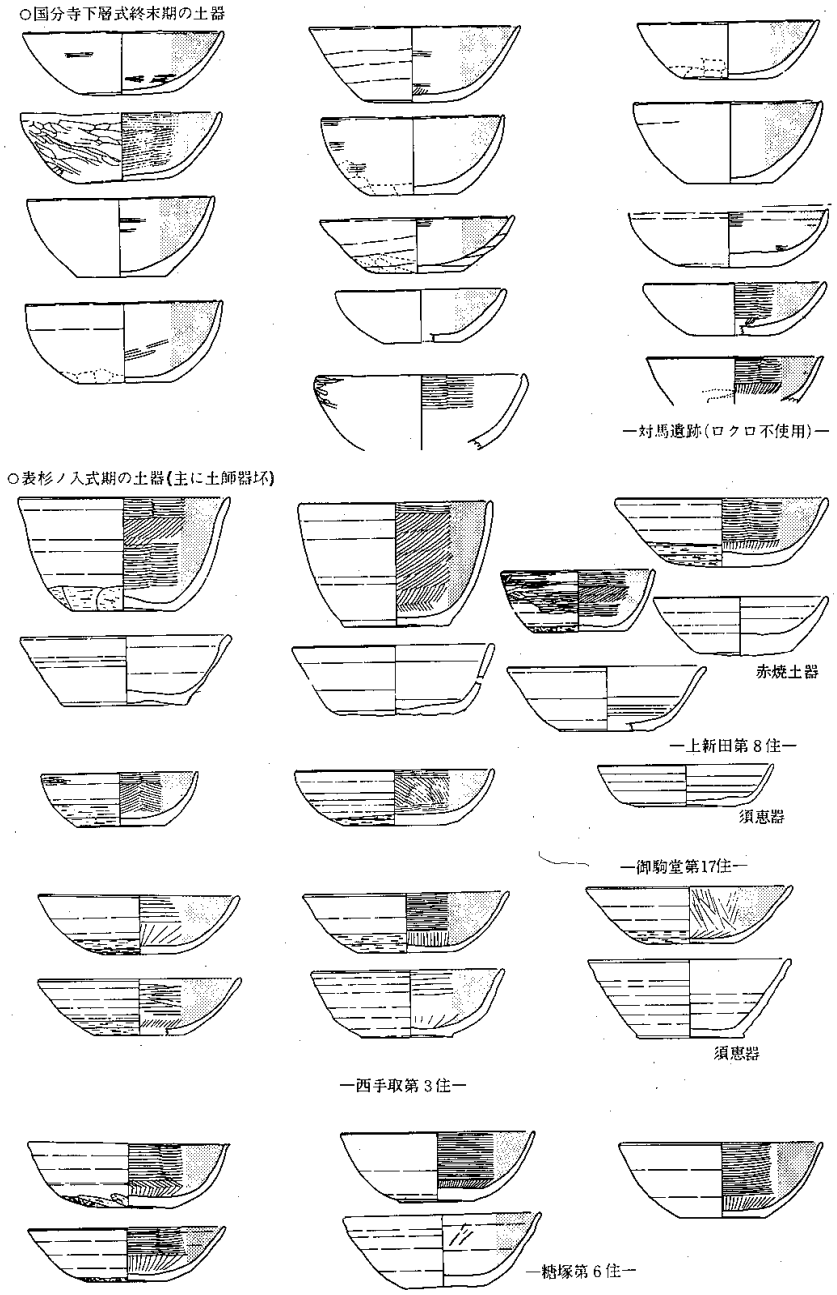


第131図　各遺跡出土土師器坏法量比(口径に対し底径の占める割合)

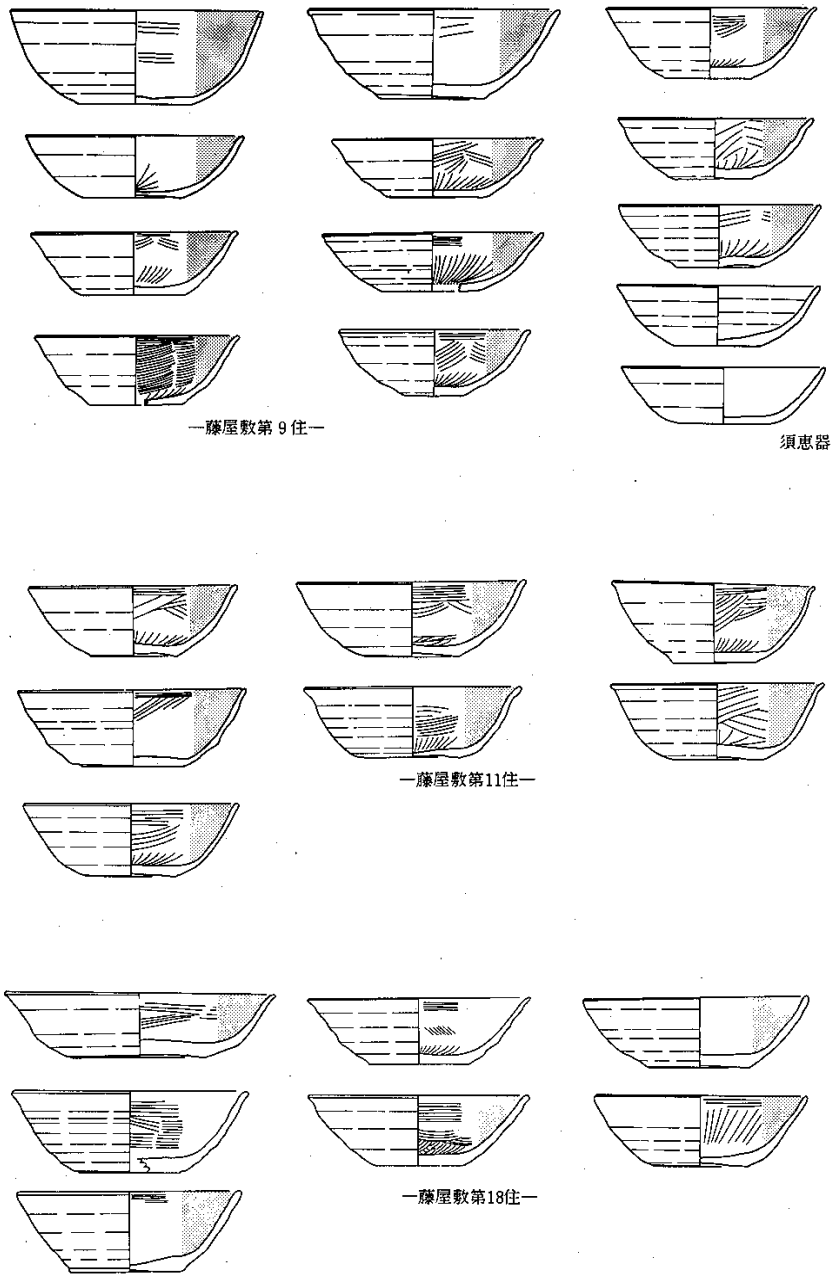
宇南遺跡第３号住居跡（計測可能なものは１点のみである）出土の土師器坏は 50％以上示すのに対してほかの遺跡では 40％前後から 50％前後の範囲内に収まり、巨視的にみた場合、大きな変化はない。しかし、その中で上、下方向への伸び具合い、集中する箇所に若干の違いがみられる。西手取遺跡第３号住居跡、五輪Ｃ遺跡第５号住居跡、藤屋敷遺跡第 11、18 号住居跡、第 19 号住居跡（30％前後の坏が１点あるが、主体は上記住居跡と同じ傾向にある）、個体数は少ないが宇南遺跡第５号住居跡、五輪Ｃ遺跡第 11 号住居跡出土の土師器坏の法量比はほぼ同一の範囲内に含まれる。また、糠塚遺跡第６号住居跡出土土師器坏は 42、43％の所に他の遺跡に比して極端に集中し、その前後の法量比を示す坏は全くなく、手取遺跡第３号住居跡出土土師器坏は 37～48％と幅があるが、40％前後に集中する傾向がある。さらに、個体数は少ないが、五輪Ｃ遺跡第４、６号住居跡出土土師器坏は共に 40％前後の所にある。このように宮城県北部における表杉ノ入式期土師器坏における法量比には大きく、50％を超える第１グループと 40％前後～50％前後の範囲内にほぼ含まれる第２グループがあることが知られる。しかも、第２グループ内でも 40％前後のみのもの、あるいは 40％前後、それ以下に集中するものがある。

さらに、細部の形態的特徴、器外面の調整の状況についてみる。第１グループの中には器高が大きく、埦又は鉢形土器に近似したもの、器高が小さく扁平な感のあるものが含まれている。前者の胴、口縁部はあまり外方に開かない。後者の坏では胴、口縁部が開き気味のものと内弯気味のものとがある。器外面には回転、手持ちヘラケズリ調整が多用される（回転ヘラケズリが多い）。底部にまでケズリ調整が及ばないものにはヘラ切りの痕跡が残っている。また、胴部外面にヘラミガキが加わるのもある。特に、胴部下半の器厚は概して厚くなっている。第２グループにおいては第１グループに存在した器高が極めて大きく埦又は鉢形土器に近似した特徴をもつ坏はない。器高が小さく扁平な感のある坏の口縁部は大半開き気味のもので胴、口縁部が内弯気味のものはない。また、このような扁平な坏に比して器高が大きい坏の胴、口縁部は外に開き気味になっている。このことは口径と底径の関係に影響されている。つまり、第２グループでは前にみたように法量比が第１グループより小さくなってきているからである。

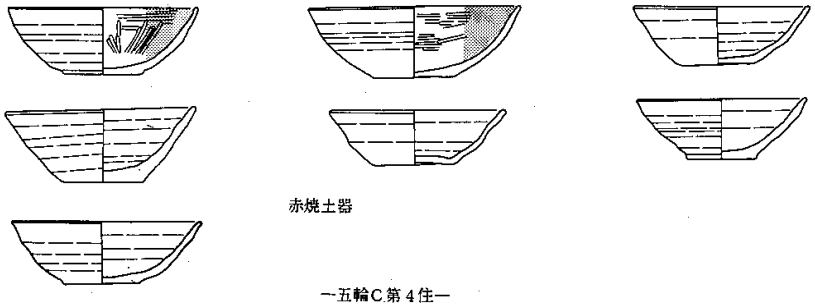
したがって、形態上、第１グループにある扁平な感の坏は第２グループにも存続するが、器厚は薄手になっている。また、第２グループには第１グループにあった埦又は鉢形土器に近似した形態の坏はなく、確かではないが、その中から生じ、発展したと思われる形態である胴、口縁部が開き気味で特に、口縁部が外反する独特の形態の坏が存在するようになる。さらに、この口縁部が外反する形態は前述した第２グループ内で法量比が 40％前後から以下に集中する坏に多くみられる特徴である。器外面への調整の状況は第１グループと比較すると、著しく様相を異にしている。第１グループでは器外面へのケズリ調整が多用され、特に回転ヘラケズリ調整が多いのに対して第２グループにおいては総じてケズリ調整は加えられなくなる傾向にあ



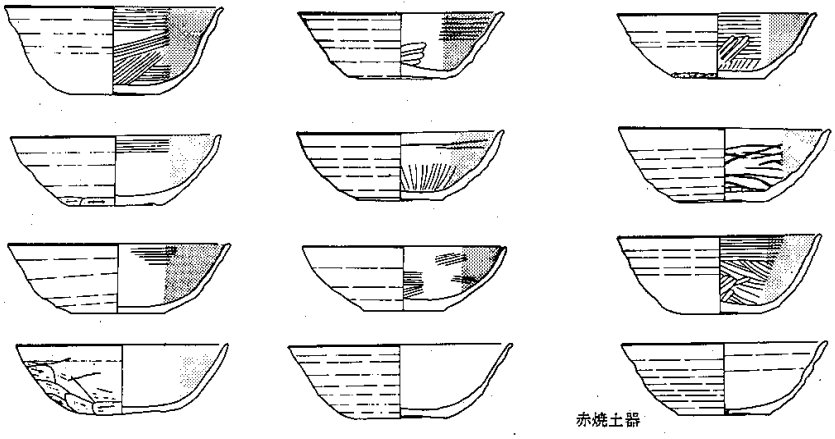
第132図　各遺跡の土器(1)



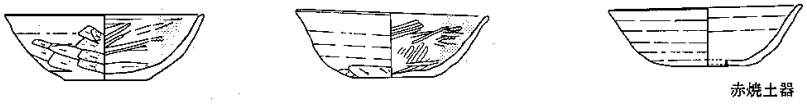
第133図　各遺跡の土器(2)



—五輪C第4住—

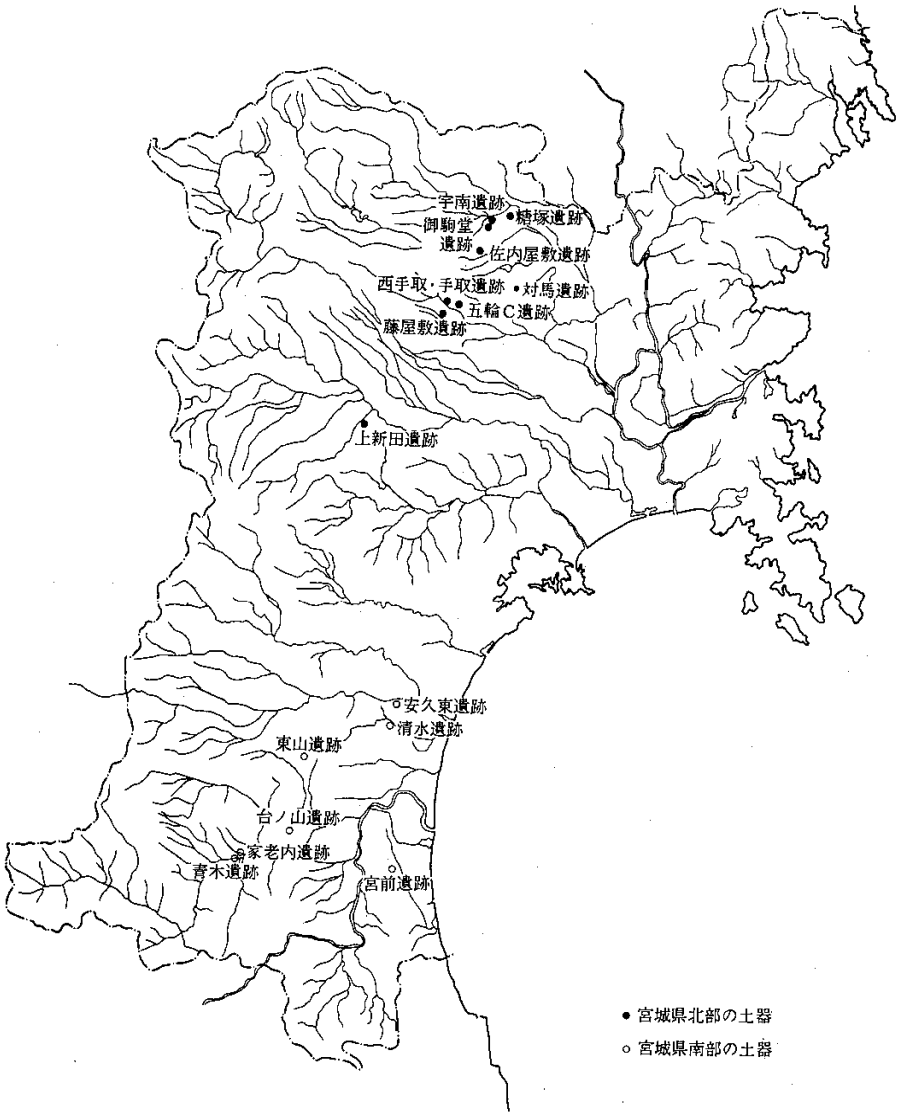


—五輪C第5住—



—五輪C第6住—

第134図　各遺跡の土器(3)



第135図　第Ⅱ群土器関連遺跡

り、底部には回転糸切りのみの痕跡が残るのが大半である。その中で西手取遺跡第３号住居跡出土の扁平な坏には全て回転ヘラケズリ調整が加えられているのは注目される。

以上、宮城県北部における主要遺跡出土の表杉ノ入式期土師器坏を形態、調整技法からみてきた。その結果、第１グループ→第２グループという大きな流れが考えられる。第２グループ内においては再々述べるように法量比で若干異なった様相を呈している。40％前後～50％前後の範囲内に収まる集団（第 2a グループ）と 40％前後以下に集中する傾向を示す集団（第 2b グループ）とがあり、さらに、第 2a グループ→第 2b グループの流れが明確ではないが考えられる。(註 2) したがって、３つの段階があるのがわかる。第１段階：第１グループの土師器坏（上新田遺跡第８住、御駒堂遺跡第 17 住、宇南遺跡第３住）、第２段階：第 2a グループの土師器坏（西手取第３住、五輪Ｃ遺跡第５、11 住、藤屋敷遺跡９、11、18 住、宇南遺跡第５住）、第３段階：第 2b グループの土師器坏（五輪Ｃ遺跡第４、６住、糠塚遺跡第６住、手取遺跡第３住）となり、各段階には前後関係がある。すなわち、第１段階→第２段階→第３段階となる。

そこで、前に検討した土師器坏Ｂ類における段階は宮城県北部における流れの中でどの段階に位置するか若干検討する。前述したように土師器坏Ｂ類は形態的特徴、調整技法からａ・ｂグループの段階→ｃグループの段階→ｄグループの段階というように前後関係がある。この前後関係と宮城県北部における各段階とを対比させるとａ、ｂ段階は第２段階、ｃ段階は第３段階に各々類似性が認められるが、ｄ段階と同様な傾向を示す土器群は現在、宮城県北部では知られていないため比較することはできない。しかし、ｄ段階の土師器坏の法量比は 30％代に集中すること、口縁部が外反気味になる坏が含まれること、器外面へのケズリ調整は全く加えられないこと等の新しい要素を示しているため、第３段階に後続する土器群と考えられる。

このように本遺跡の土師器坏Ｂ類を含めた宮城県北部における表杉ノ入式期の土師器坏には形態的、調整技法の特徴の違いから４つの段階があることがわかる。その関係は次のようになる。(註 3)

第１段階→第２段階→第３段階→第４段階（ｄ段階）
　　↓　　↓
　　ａ、ｂ段階　ｃ段階

また、赤焼土器についてみると第１段階から第４段階まで少量ずつ伴っているが、第３段階では他の段階と較べて多く伴っている。特に、五輪Ｃ遺跡第４号住居跡では坏において赤焼土器が主体を占めている。このように各段階毎に異なった様相を呈するものと予想されるが、赤焼土器の量が少なく、全体の傾向はつかめない。

最後にこれら４段階の年代的位置付けについて検討してみる。その場合、ある程度時間的幅が限定される水沢市胆沢城ＳＤ114 溝跡（伊藤、新田：1977）、盛岡市志波城跡（八木他：1981、吉田、八重樫他：1982）出土の土師器坏と比較検討する。胆沢城、志波城は共に古代城柵のひとつで前者は延暦二十一（802）年、後者は延暦二十二（803）年に各々建置され、特に志波

城の存続期間は約 10 年間とされている（板橋：1981）。つまり、両遺跡出土の土師器坏は９世紀代の所産と理解される。胆沢城ＳＤ114 溝跡は南外郭線造営期のＡ1 期に入り、９世紀初～中葉の年代が与えられている（伊藤、新田：1979）。出土した土師器坏の法量比をみると大きく 50％代のものと 40％代のものとにわかれ、形態的に若干異なった坏があることがわかる。しかも、50％代の坏には 40％代の坏より細別の形態、器外面への調整技法から若干古い様相があることから遺構の年代幅と同様に９世紀初～中葉のものと考えられる。志波城跡出土土師器坏の法量比は 40％代が若干あるが 50％代に集中する。大半の坏の器外面にはケズリ調整が加えられ、しかも底部にヘラ切りの痕跡が残るのもある。これらの土師器坏は遺構の存続期間等から９世紀初～前葉頃のものと考えられる。

次に各段階の土師器坏とこれら二遺跡出土の土師器坏を比較してみる。胆沢城、志波城跡出土の土師器坏は宮城県北部において主流を占めている第２、３段階の土師器坏より形態的、器外面の調整技法の特徴から古い様相を示している。したがって、第２、３段階以降の土器群は少なくとも９世紀中葉以降の年代が与えられる。また、第１段階の土師器坏と比較すると、若干、異なった様相を示している。特に、上新田遺跡第８号住居跡出土の土師器坏の組み合わせとは異なっている。上新田遺跡の土師器坏の法量比は前述したように 50％代のみであり、形態的には国分寺下層式の終末期と考えられている迫町対馬遺跡（小井川、高橋：1977）出土の土師器坏に特徴が酷似しており、密接な関係が考えられる。しかし、胆沢城、志波城跡出土の土師器坏の中には若干新しい特徴をもった坏も含まれていること、前に述べたようにある程度の時間幅が考えられることから、形態的特徴、組み合わせ等で上新田遺跡第８号住居跡出土の土師器坏は９世紀初頭という年代に限定できるものと考えられる。したがって、第１段階は９世紀初頭の年代が与えられる。

以上、まとめると次のようになる。

国分寺下層式終末 →←　　表杉ノ入式　　→

〈８ｃ末〉　〈９ｃ初頭〉〈９ｃ前葉〉　〈９ｃ中葉以降〉

対馬遺跡出土土師器坏 →第１段階　→第２段階 →第３段階　→第４段階

↑　↑　(a、b)　(c)　(d)

志波姫跡出土土師器坏

↑　↑

胆沢城ＳＤ114 溝出土土師器坏

（ＡＩ期）

註１：宮城県南部の状況については丹羽茂（1983）：「宮前遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第 96 集、宮城県教育委員会に詳述されている。

註２：五輪Ｃ遺跡第４、11 号住居跡間には重複関係があり、4 号住居跡が 11 号住居跡を切っており、4 号住居跡の方が新しいとされている。4 号住居跡出土土師器坏は第 2b グループに入り、11 号住居跡は第 2a グループに入ることからもその前後関係は明らかである。

註３：第２段階の中の西手取遺跡第３号住居跡出土の土師器坏の法量比は他の土師器坏と同じ範囲内に含まれるが、器外面に回転ヘラケズリの調整が加えられているのが大半であること等から第２段階の中でも若干、古い様相を呈しているものと思われる。しかし、このような特徴をもった資料が他にないため可能性だけ提示しておきたい。

Ⅶ. 遺構の検討

ここでは各遺構、特に竪穴住居跡、埋甕を伴う遺構についてその年代・構造等を中心に検討を加えることとする。

竪 穴 住 居 跡

竪穴住居跡は全部で 38 軒発見された。その内２軒は縄文時代の住居跡であり、その他は土師器、須恵器等を出土する住居跡で土師器の特徴から奈良、平安時代にわたるものである。したがって、住居跡の主体は奈良、平安時代である。特に平安時代に所属する住居跡が大半を占めている。各時代の住居跡の配置状況についてみると、２軒の縄文時代の住居跡は調査区の南端近くにあり、南端斜面の堆積層出土の縄文土器と時期的に密接な関係を示していることが考えられる。奈良、平安時代の住居跡は出土土器の特徴から第Ⅰ群土器段階（奈良時代）、第Ⅱ群土器段階（平安時代）にわかれる。前者の住居跡は調査区の南側に集中し、調査区全域に分布していないが、後者の住居跡はほぼ全域に分布している。

○縄文時代の竪穴住居跡

第２、３号住居跡の２軒ある。両住居跡とも円形を呈するが、第２号住居跡は削平により、半分程消失している。柱穴は第３号住居跡で７個確認されている。炉等の施設には不明な点が多い。時期は両住居跡から大木 8a 式期の土器が出土している。これらは全て堆積土中出土で住居に伴う状況で出土しているわけではないため正確な時期を提示することはできない。しかし、第２号住居跡は大木 8a 式期の縄文土器を含む調査南区の堆積土第Ⅲ層を掘り込んでつくられており、また、この堆積層に両住居跡が近接していることからこの堆積層が形成された時期に近いものと考えられる。したがって、両住居跡の時期は大木 8a 式期周辺に求められ、ほぼ同時に

存続していたものと思われる。

○第Ⅰ群、Ⅱ群土器段階の竪穴住居跡

前述したように大半の住居跡から土師器、須恵器等が出土している。縄文時代の２軒の住居跡を除いた 36 軒が該当する。しかし、出土土器の中で土師器坏の有無により帰属土器群が明らかなものとそうでないものがある。前者の住居跡は 21 軒ある。最初に後者の状況にある住居跡の所属年代について検討する。15 軒（第１、４、７、10、11、13～15、17、18、20、22、29、30、38 住）ある。これらの住居跡は各土器群を主体的に構成する土師器坏が出土していないため正確な年代を提示することができないものである。しかし、土師器坏との共伴関係から、特に土師器甕の中でＢ類（ロクロ使用）は第Ⅱ群土器に含まれることはすでに判っている。したがって、ある程度の年代が判明する住居跡も中にはある。土師器甕Ｂ類は第13～15、17、18、22、30 号住居跡で出土していることからこれらの住居跡は第Ⅱ群土器段階に所属するものと考えられる。また、第７号住居跡内からは土師器甕Ａ類と須恵器蓋Ａ、Ｂ、Ｃ類が出土している。この中には土師器甕Ｂ類がないこと、須恵器蓋の特徴から第Ⅰ群土器段階に属するものと考えられる。その他の住居跡内からは年代を決定するような土器は出土していないため所属時期は限定できない。以上、各住居跡の所属年代をまとめると次のようになる。

第Ⅰ群土器段階	第６～９、12、23号住居跡
第Ⅱ群土器段階	第５、13～19、21、22、24～28、30～37号住居跡
所属年代不明	第１、４、10、11、20、29、38号住居跡

第Ⅰ群土器段階

住居跡は６軒ある。第 23 号住居跡を除いて調査区南側にまとまって存在する。平面形は方形を基調とするが、規模には大小の違いがある。第６、23 号住居跡で５～６ｍと大きく、他は 3.5m前後である。床面の状況は全域、地山をそのまま床としているもの（第８住）、掘り方埋土上面を床としているもの（第９、23 住）、貼り床上面を床としているもの（第 12 住）、掘り方埋土上面と地山を床としているもの（第６、７住）と違った構築方法を示している。柱穴は第７、９号住居跡で不明であるが、他の住居跡では４個認められる。これら４個の柱穴を結んだ線は、いずれも住居平面形に相似し、しかも、住居中央部に配されている。カマド、特に燃焼部の構築方法にも違いがみられる。第８号住居跡の場合は地山削り出しで他は粘土積み上げによって構築されている。特に第９号住居跡には土師器甕がオサエとして利用されている。底面には支脚痕が残っているのもある（第６、７住）。第６号住居跡では粘土で高まりをつくり、その上に

土師器坏をのせたのに対して第７号住居跡では地山をそのまま削り出して高まりをつくっている。また、第９号住居跡内には炭化材が散在しており、火災に遭ったものと考えられる。しかも、炭化材の中には住居周壁に沿うように板材が分布していることから壁板の存在が想定される。このように住居の全体的な構造では近似しているが、細部の点で若干異なった様相を呈しているのが判る。しかし、第Ⅰ群土器にはａ、ｂ、ｃの段階があり、時間的に前後関係があることはすでに知られていることである。住居の構造では細部の点で異なっているが、このような段階毎の変化は顕著でない。このような状況の中でａ、ｂ、ｃ段階の土器を各々出土した第６号住居跡、第８号住居跡、第９号住居跡は近接して位置しており、しかも、住居の方向が第７号住居跡を除いて真北への指向性が強いことは興味深いことである。その内、Ⅰｂ段階の第８号住居跡とⅠｃ段階の第９号住居跡はほぼ真北方向に住居の軸線がのっている。

第Ⅱ群土器段階

住居跡は 23 軒ある。調査区全域に分布するが、やや東側に集中するようである。住居の方向をみると、ほぼ真北方向に向く住居跡は６軒（第 13、19、26、28、34、36 住）のみで大半の住居跡は真北から東、西に偏っており、様々な方向を示すのに対してカマド方向は東向きになっているのが多い傾向にある。このような住居配置は如何なる要因からなのか判然としない面がある。もっとも遺跡全域の調査でないため全体の様相はつかめないが、社会的要因よりも自然的要因が強く作用していたものと推定される。特に、カマド方向にある程度の共通性が見い出されることは自然的要因の中でも立地条件（平坦地に立地している）等から少なくとも地形的な制約からのものではないだろう。その他の制約として例えば、気象条件（特に風向き）に左右されていたものと推定される。

次に住居構造についてみる。平面形は方形を示すが、規模では大小の違いがある。住居の大半は重複関係がなく単独であるが、第 34 号住居跡と第 38 号住居跡は重複しており、第 38 住の方が古い。また、第 18、22、31 号住居跡では増改築が認められ、床面積を若干広くしている。いずれも住居壁を外方に拡張しており、部分的に拡張されているもの（第 18、22 住）とほぼ全域が拡張されるもの（第 31 住）とがある。第Ⅰ群土器段階の住居跡と同様、各住居跡の構造は近似している。しかし、細部の点で異なっている面がある。床面の状況では異なった方法で床面をつくり出している。その内、掘り方埋土上面を床としているもの（第５、17、21、25、28、31～35 住）、地山をそのまま床としている部分と掘り方埋土上面を床としているもの（第 13～15、24、26、36、37 住）が主流で地山をそのまま床としているのは２軒（第 19、27 住）のみであり、貼り床は第 16、30 号住居跡にみられるのにすぎない。床面はいずれも平坦であるが、第 26、28、33、37 号住居跡の床面では一段高くなった空間がつくり出されている。第 37 号住居跡の場合は

カマドを中心に住居両隅にあるのに対して他はいずれもカマドが付設されている所と反対の位置にあり、カマドから離れた場所につくり出されている。これは住居内での間仕切りとも関連し、場の使用において異なった空間が存在していたことが想定される。

柱穴は確認された住居跡では全て４個である。その配置は住居平面形に相似するが、住居中央部に収まるものと南側に偏っているもの（第 15、19、30、31、35 住）とがある。また、第 18、21、31 号住居跡には壁柱穴が認められる。柱穴配置が一方の住居壁に近くなっている住居は中央部に配置される住居とは上屋構造の形態が違うということが想定される。このような配置を示す住居は長野県平出遺跡で復原的考察されたＣ類建築址（大場他：1955）に類似している。Ｃ類建築址は４個の柱穴の内、２個が東壁に接し、カマドはいずれも東北隅に付設されているのが特徴であり、屋根は片切妻隅丸寄棟造、片入母屋造と考えられており、しかも、構造上、入口部は東側に設けられるとされている。つまり、柱穴が偏って接している側に入口部が設けられるわけである。したがって、先述した南寄りの柱穴配置を示す住居は明らかでないが平出遺跡Ｃ類建築址と同様な上屋構造を示し、構造上、入口部は南側であるということが推定される。住居中央部に柱穴が配置される住居とは異なった構造を示しているといえる。なお、このことについてはさらに検討を要する。ここでは可能性だけを述べた。

カマド、特に燃焼部の構築方法の大半は粘土積み上げによっている。地山削り出しによる方法は第 26 号住居跡のみである。前者の場合、石を芯にして粘土を積み上げていったもの（第 19、20 住）、側壁の先端に土師器甕を置きオサエにしているもの（第 15、25 住）、石でオサエにしているもの（第 37 住）とがある。また、底面に支脚痕が残るのがある。地山を削り出してつくるもの（第 16、25 住）と第 37 号住居跡のように石を掘り込んで設置し、その上に土師器坏を置いて支脚としたものとがある。このように細部での違いは第Ⅱ群土器内での各段階を反映している構造的な差であるということはいえない。

以上、第Ⅰ、Ⅱ群土器段階に所属する住居跡の構造等についてみてきたが、構造上、基本的には両者は近似しているが、第Ⅱ群土器段階の住居跡では細部の構造でバラエティーがある。また、住居の配置状況を比較すると、第Ⅰ群土器段階では１箇所にまとまり、限られた地域に住居跡は存在するが、第Ⅱ群土器段階の住居跡は軒数も多くなり、その分布も広範囲に亘る。また、住居の方向は第Ⅰ群土器段階ではある程度、真北への指向性があるが、第Ⅱ群土器段階になると、真北から東西に偏る住居が多くなり、前者ほど指向性がない。

埋甕を伴う遺構

調査区中央部の西端で１基発見されている。位置的には住居跡が分布する地域より若干離れ

た地点にある。土壙を伴うものでその中に胴が短かく鉢形土器に近い土師器甕と長胴形の甕が口縁部を互いに合せて横位に置かれている。

２個体の土師器甕はいずれも製作にロクロを使用し、土師器甕Ｂ類に所属する。土師器甕Ｂ類は第Ⅱ群土器に含まれ、表杉ノ入式期（平安時代）の年代が与えられていることからこの遺構は同じ年代のものと考えられる。しかし、表杉ノ入式期土器のどの段階に位置するかは甕のみで不明な点が多い。

これは土師器甕の配置等から埋葬施設のひとつで土師器合口甕棺とされている（沼山：1981）該種遺構は県内において手取遺跡で１基、仙台市安久東遺跡（岩渕、田中：1976）で２基検出されている。いずれも平安時代のものであり、住居が分布する地域より若干離れた地点に位置し、南北方向に置かれている。しかし、埋甕の構成で違う面がある。本遺跡と安久東遺跡の２基の埋甕は２個体の甕で構成されているのに対して手取遺跡の場合、４個体使用している点違い、さらに手取遺跡には土師器坏１個体が甕と共伴している。

このように三遺跡の例を比較すると年代、集落内での位置、埋甕の方向で共通点があるが、構造上違う点が指摘される。この違いは極論ではあるが、意識形態の差と推定される。

Ⅷ．ま と め

１．遺跡は宮城県北部の栗原郡築館町萩沢字佐内屋敷に所在し、丘陵の頂部平坦地に立地している。

２．発見された遺構として竪穴住居跡 38 軒、土壙、合口甕棺、鍛冶遺構がある。38 軒の竪穴住居跡の中には縄文時代の住居跡２軒が含まれている。これら住居跡は調査南区に近接して存在している。また、周辺には縄文土器を含む堆積層が形成されており、これらは密接な関係があるものと考えられ、丘陵の南側を中心に縄文時代（特に大木 8a 式期周辺）の集落が構成されていたものと思われる。その他の竪穴住居跡内からは今回の調査時の出土土器の中で主体を占める土師器、須恵器が出土している。これらの土器は後述するが、製作技法等の特徴から奈良時代と平安時代のものとがあり、後者の住居跡が主体を占める。住居構造についてみると各時代では大差はない。しかし、奈良時代の住居跡は５軒と少ないが、平安時代のそれと比較して限られた地域に存在するようである。すなわち、調査区内からの判断ではあるが、その分布についてみると奈良時代の住居跡は丘陵の南半に占地の中心をもつものと考えられ、それに対して平安地代の住居跡は丘陵頂部の平坦地ほぼ全域に分布していたものと推定される。しかも、住居跡の方向は奈良時代ではある程度の規則性が窺われるが、平安時代の住居跡の場合ではない。

しかし、カマド方向が東向きの住居跡が多い。このことは奈良時代の住居跡における規則性とは異なり、主に自然的要因が多分に作用していたものと推定される。したがって、住居跡の

分布状況からみた遺跡の構成は縄文時代、奈良時代では一地域に集中するのに対して平安時代になると住居の分布は拡散し、平坦地のほぼ全域が生活の場となったものと考えられる。その場の中には合口甕棺もあり、墓域の存在も推定される。合口甕棺は調査区間で住居の分布が他の地域と比して希薄になる地点に位置していることも興味深い。

３．出土遺物には縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、赤焼土器の土器類、木器、土錘、鉄製品、石器、砥石がある。中でも土師器、須恵器の出土が主体を占める。これらの土器は土師器坏の特徴から大きく２つの土器群にわけられた。第Ⅰ群土器は製作時にロクロ不使用のもので器形等の違いから３段階に亘る土器群で８世紀前半から８世紀後半までの年代が考えられた。その中で８世紀後半段階の土器群は土師器坏の器形、器面調整の特徴から岩手県北部馬渕川流域に中心がある土器群に近似していることは注目される。同地域と何らかの関連があったものと考えられるが、出土する住居跡は１軒のみで具体的な論を提示することは現段階ではできない。第Ⅱ群土器はロクロ使用のものであり、土師器坏の器形、特に法量比口径に対して底径の占める割合から４段階にわけられた。そして、各段階の年代は９世紀中葉以降のものである。したがって前述した縄文時代の住居跡以外の住居跡は８世紀前半から後半、そして、９世紀中葉以降の年代が考えられ、途中、途切れ、断続的に遺跡は形成されていったものと考えられる。

引用・参考文献（五十音順）

阿部・遊佐（1978）:「長者原貝塚」『南方町文化財調査報告書』第１集　南方町教育委員会

阿 部 博 志（1980）:「原田遺跡―東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ―」『宮城県文化財調査報告書』第 63 集　宮城県教育委員会

板　橋　源（1981）:「志波城をめぐる文献的考察」『志波城跡』Ⅰ　盛岡市教育委員会

伊藤・新田（1977）:『胆沢城跡―昭和 51 年度発掘調査概報―』岩手県水沢市教育委員会

伊藤・新田（1979）:『胆沢城跡―昭和 53 年度発掘調査概要―』岩手県水沢市教育委員会

岩渕・田中（1976）:「安久東遺跡発掘調査概報」『仙台市文化財調査報告書』第 10 集　仙台市教育委員会

氏 家 和 典（1957）:「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第８輯　東北史学会

氏 家 和 典（1961）:「土器」『陸奥国分寺跡発掘調査報告書』宮城県教育委員会

氏 家 和 典（1967）:「陸奥国分跡出土の丸底坏をめぐって」『柏倉亮吉教授還暦記念論文集』

大場磐雄他（1955）:『平出』

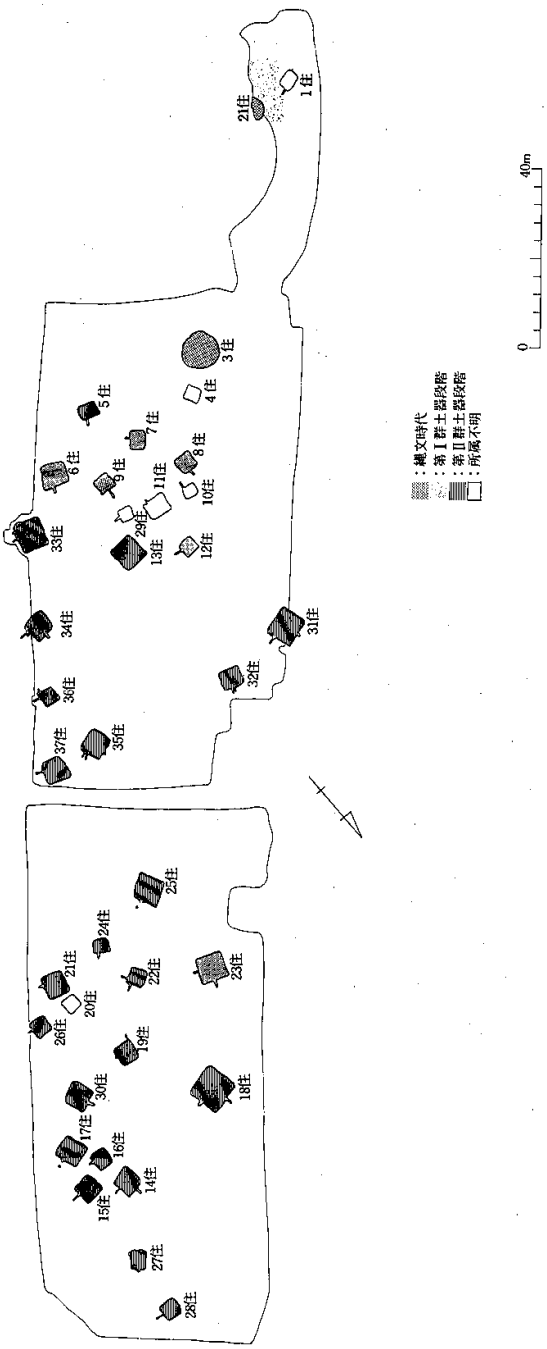
岡田・佐々木・桑原（1972）:『長根窯跡群』Ⅱ　涌谷町教育委員会

小野寺祥一郎（1979）:「五輪Ｃ遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第 61 集　宮城県教育委員会

加藤・後藤他（1975）:「宮城県登米郡南方町青島貝塚発掘調査報告書」『南方町史資料編』

加 藤 道 男（1979）:「藤屋敷遺跡―東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ―」『宮城県文化財調査報告書』第 63 集　宮城県教育委員会

加藤・阿部（1980）:「観音沢遺跡―東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ―」『宮城県文化財調査報告書』第 62 集　宮城県教育委員会
小井川・高橋（1977）:「宮城県対馬遺跡出土の土器」『宮城史学』第５号
小井川・手塚（1978）:「糠塚遺跡―宮城県文化財調査略報―」『宮城県文化財調査報告書』第 53 集　宮城県教育委員会
小井川和夫（1981）:「上新田遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第 78 集　宮城県教育委員会
小井川・小川（1982）:「御駒堂遺跡―東北自動車道遺跡調査報告書Ⅵ―」『宮城県文化財調査報告書』第 83 集　宮城県教育委員会
斉藤吉弘（1979）:「宇南遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第 59 集　宮城県教育委員会
佐々木和博（1975）:「半月形鉄製品について」『史館』８
佐藤信行（1973）:『築館町嘉倉貝塚調査概報』
関　　豊（1981）:『中曽根Ⅱ遺跡発掘調査報告書』二戸市教育委員会
千葉宗久（1982）:「原前南遺跡―東北自動車道遺跡調査報告書Ⅵ―」『宮城県文化財調査報告書』第 83 集　宮城県教育委員会
手　塚　均（1980）:「山ノ上遺跡―東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ―」『宮城県文化財調査報告書』第 69 集　宮城県教育委員会
東北学院大学考古学研究部（1975）:「鳥屋窯跡群三角田南地区発掘調査報告」『温故』第９号
丹　羽　茂（1981）:「大木式土器―縄文土器Ⅱ―」『縄文文化の研究』４　雄山閣
丹羽・阿部・小野寺（1982）:「勝負沢遺跡―東北自動車道遺跡調査報告書Ⅵ―」『宮城県文化財調査報告書』第 83 集　宮城県教育委員会
丹　羽　茂（1983）:「宮前遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第 96 集　宮城県教育委員会
沼山源喜治（1981）:「土師器合口甕棺葬について」『考古学雑誌』66－４
早坂・阿部（1979）:「西手取・手取遺跡―東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ―」『宮城県文化財調査報告書』第 63 集　宮城県教育委員会
早坂春一（1981）:「日向前横穴古墳―東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ―」『宮城県文化財調査報告書』第 77 集　宮城県教育委員会
宮城県教育委員会（1975）:「鰻沢遺跡―宮城県文化財調査略報―」『宮城県文化財調査報告書』第 40 集
森　貢　喜（1980）:「木戸遺跡―東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ―」『宮城県文化財調査報告書』第 69 集　宮城県教育委員会
森　貢　喜（1982）:「水入遺跡発掘調査報告書」『宮城県文化財調査報告書』第 84 集　宮城県教育委員会
八木光則他（1981）:『志波塚跡Ⅰ―太田方八丁遺跡範囲確認調査報告―』盛岡市教育委員会
遊佐五郎（1980）:「宇南遺跡―東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ―」『宮城県文化財調査報告書』第 69 集　宮城県教育委員会
吉田・八重樫他（1982）:「太田方八丁遺跡（志波城跡）―東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書ⅩⅢ―」『岩手県文化財調査報告書』第 68 集　岩手県教育委員会



第136図　各土群段階における住居の分布状況